
魔力の兄と術式の弟

ドブに落ちたリンゴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔力の兄と術式の弟

【Nコード】

N2831R

【作者名】

ドブに落ちたリンゴ

【あらすじ】

英雄の双子の息子、兄ネギ・スプリングフィールドは魔力の才に秀でていた。対して弟アリナ・スプリングフィールドは術式の才に優れていた。異なる才能、異なる過去を持ち歩んでいく双子の兄弟は転機ともなる地、麻帆良学園にたどりつく。

そこで兄弟は多くの人と出会い、大切なものを得ることことになる。笑って、泣いて、怒って。戦って、恋して、愛して、各々大切なものを胸に秘めていく。

そして、やがて兄弟は、大切な人たちを連れて運命の地へと足を踏

み入れる。そこで兄弟は何を為すのか、どんな答えに行き着くのか（注、この作品は原作前の話が結構長く、シリアスです！ それを乗り越えると、チートです！ ラブコメです！ ハーレムです！ それらの要素がお嫌いな方は……… まあとりあえず原作前の話だけでも読んでやってください！ 処女作ですので至らない点あると思いますがよろしくお願いします。感想評価もらえたら嬉しいですよ！！）

子供（前書き）

初投稿です。 よろしくお願いします！

原作前は割りとシリアスです。

原作前は全十二話を予定しています。

子供

「危ないよ、兄さん。こんなことやめよ？」

僕は兄さんの袖を引っ張ってささやかな制止を試みる。

しかし、兄さんは僕の言葉に余計に意地になったようで腕を軽く振って拒んだ。

もともと大した力も込めてなかった僕の手は簡単に振り払われる。

「危ないよお」

「大丈夫だよ！ 危なかったら父さんが助けてくれるはずだもん！」

諭そうとしているのは僕の方なのにそこまで強く言われてしまえば、逆に僕の方が間違ってるように思えてしまう。

逆に諭されているような気分。なんか理不尽だ。

そうこうしているうちに兄さんは覚悟を決めたのかキツと前に視線をやる。おかしい、なんかおかしい。

「兄さん！」

「みてて!!」

最後の制止の声も虚しく兄さんはそのまま走り去っていった。

僕の伸ばした手が行きどころを失ってやがて力を無くした。

それと同時にバツシャーン、と派手に水に落ちる音。

空気は凍るように寒く僕の溜め息が白く吐き出された。

そのまま僕は背を向け、かじかむ手を慰めるように袖を指で寄せ走り出した。

一応義務的にあたりを見回し誰も来ないことを確認すると僕は人を呼びに行った。

「全くあの馬鹿は！！真冬の池に飛び込むなどどうかしておる！」

あの後兄さんは僕が知らせた村の大人に引き上げられ、案の定と言っべきか、翌日風邪をひいた。

「スタンおじさん、なんで兄さんはあんなことするの？」

僕はスタンおじさんの横であったかいココアで両手を暖めながら聞いた。

それは純粹な疑問だ。池に飛び込んだり派手に転んだりすることがとても楽しいことだとは思えない。

僕自身最初兄さんが派手に転びはじめたとき、さぞ楽しいんだろうなあ、と思って真似てみた経験からだ。

あれは泣いた、痛かった。

あんな痛いことを繰り返すなんてよくわかんない。

そんなことをするたび兄さんは父さんが助けてくれるんだ！
とか言ってるけど遠いお空にいる父さんがどう助けてくれるって言うんだろっか。

「むう、そうじゃなあ……」

スタンおじさんもことなく説明しづらそうに言葉を詰まらせている。

ということはやっぱり……

「スタンおじさん」

「ん、なんじゃ？」

真剣な顔をしていたからだろうか、視線を軽く流してから改まってこちらに顔を向けてくる。

「兄さんは痛いのが楽しい人なんだね？」

「……………は？」

さしもスタンおじさんもこの発想には頭が追いつかなかったようだ。わかる、僕もそう言われたときは何を言われたかわからなかった。

「俗に言う、マゾ、通称Mってやつなんだよね。痛いのがかいらくで鞭で叩かれると悦んじゃうっていうとくしゅせいへきっていう…」

……」

「待てアリナ、それを誰から聞いた」

たどたどしく聞いた話を思い出しながら話す僕にスタンおじさんがいつになく冷徹な顔で話を遮る。

その表情に僕はキョトンとしながら答えた。

「えっとサランさんだよ？ なんでも死んだ旦那さんが兄さんと同じだったって」

「あの天然ババア、子供になんてこと教える！！」

「スタンさん、口調。アリナが怯えてますよ」

急に椅子を倒しながらいきり立ったスタンおじさんをマスターが諫める。

正直いきなり鬼のように怒ったスタンおじさんは怖かった。

「ツツ！ すまん、アリナ。だがアリナ、人前でMだとかマゾだとかいってはいけないぞ。それは悪い知識だからな」

「そうなの？」

「ああそうじゃ！ そんな知識忘れてしまいなさい！」

あまりに強い剣幕で言うので僕もそういうものなんだ、と納得した。

あれだ、こういうのはきつと、そう、“きんき”の知識って言うんだ。

なんとなく頭がよくなった気がした。

「ライ、代金はここに置いとく。わしはあの天然に一言言わなければ気がすまん！！　アリナのこと頼む」

「あのはあさんに何言っても無駄だと思いますけど。まあアリナのこと任してください」

「ああ。それじゃあなアリナ」

「あ、バイバイスタンおじさん」

スタンおじさんが足早に去っていくのを見届けた僕はちょうどいくらいに冷めたココアに口をつける。

「？　そういえば結局兄さんはなんであんなことしてるの？」

「まあやんちゃしたい年なんだろうさ。お前たちの父親のサウザントマスターもちっちゃいころはそんな感じだったらしいぜ？」

それは僕も聞いたことがある。　というか父親の話は飽きるほど聞いた。

でもやんちゃと自分の体を痛めつけるのは違うとおもっただけど。

まさかやんちゃの最終目的はとくしゅせいへきのかいらくを得ることなのか！？

「父さんもマゾだったの！？」

「いやいや！！　そういうことじゃない！！　　っていうかマゾって言葉あんま使わないでくれ！！」

後でわかったことだけど、四歳児の口から飛び出すマゾという単語は耐えかねるものだったらしい。
悲鳴のような声を聞いて僕もしたり顔でうなずいた。

「そうだよね、“きんき”の知識だもんね」

「禁忌って……まあ禁忌ついや禁忌だけどな」

妙な納得をした僕にマスターは苦笑いじみた表情を張り付けながら首肯した。

「にしても禁忌なんて難しい言い回しよく知ってるなあ」

そう言って撫でってくれるマスターに僕も嬉しくなって笑って答えた。

「うん！！ 本で覚えたんだ！」

そう言うよりいつそう力を込めて撫でってくれる。ちょっと力が入りすぎかなあ、って思ったけど、その感触が心地よかったので黙ってされるがままに撫でられた。

「しかし俺がアリナくらいの頃なんて本になんて全く興味なかったのになあ、うん、偉いなあアリナは」

「うん！！ 本は好きだよ！ 最近はスタンおじさんから魔法の本借りて読んでるんだあ」

「ひゅう、マジかよ……さすがはサウザントマスターの子供ってところか？ すごいな、おい」

心底感心したような声で手放して僕を褒めてくれる。やっぱりスツゴク嬉しい。僕には父さんも母さんもないけど村のみんなが優しくしてくれるから何の不満もなかった。

その点兄さんは父さんにこだわっているようだけど。

確かに村のみんなに英雄と呼ばれる父さんはすごいと思う。

でも村のみんなみたいに近くにいるわけでもないし、父さんのことを聞くのはいつも誰かの口越しだ。

あまりにも遠過ぎる。

そんなのは物語で読む英雄と何も変わらないようなものだ。

その人が僕の父親だと言われて近くにいるわけでもなしにかえって戸惑ってしまふ。

そりゃあ優しい村の人が口々に言うんだからすごいんだろうけど、そんな遠い英雄の父さんよりも村の人に甘えたいと思うのは間違っているんだろうか。

僕にはむしろ話だけであそこまで父さんにこだわる兄さんのほうがおかしいと思った。

「おっと。遅くなってきたけど時間大丈夫か？」

言われて時計をみればもう午後の7時過ぎだった。

窓越しに外を見ても真っ暗闇。結構怖い。

「ねえマスター、ご飯ここで食べてっちゃだめ？」

小首をかしげてお願いしてみる。ちょうどご飯の時間だし、ココロウアさんの家でお世話されてるけど、お外でご飯を食べるのも初めてのことじゃない。

みんな優しいので、「ご飯食べていきなさい、とか泊まっていけ、とかよく言われるのだ。」

「うぐつ。あ、あいかわらずお前はかわいいな、ほんとに。男にしておくのがもつたないくらい」

女みたいな顔をしている、というのはよく言われることだ。

兄さんは父さん似みたいだけど、どうやらこの金髪碧眼の可愛らしい容姿は母親譲りらしい。性別違うんだからそこまで似て欲しくなかった。

僕もれっきとした男なので、可愛いとか女っぽいと言われるのは

嫌だ。僕のコンプレックスである。

ぶう、と頬をふくらませて抗議すると、悪戯っぽく笑いながら手を合わせて謝ってきた。

「ワリイ、ワリイ。飯は食わせてやつからよ。機嫌直せ、可愛い顔が台無しだ」

「もう!」

全く悪びれる様子のないマスターに機嫌を悪くしてそっぽを向いた。椅子の上で足をパタパタさせながら怒りを解消する。

マスターはニヤニヤ笑いながら奥の厨房に引っ込んでいった。

「お前の好きなオムライス作ってやるからなあ、あ、でも泊まりは勘弁な。布団ないから。」

大人しく待ってるよ、という言葉に思わず、ハーンと答えてしまう。

オムライスは大好きなのだ。

現金な返事に笑いながらマスターは引っ込んでいく。

その反応に思わず引っ掛けられたとぶうたれるが、大好きなオムライスが食べられるので長くは保たなかった。

僕は普段ココロウアさんの家にあまり寄りつかない。

だからこうして外で食べること、泊まることすらあまり珍しいことではなかった。

最初は小さな反発だ。

ココロウアさんの家には問題児の兄さんがいて、結構手がかかる子だった。

すると問題児の兄さんにはかり世話がいつて僕が自然と疎かにされる形になったのだ。

そういうときはネカネ姉さんが面倒を見てくれたが、ネカネ姉さんもネカネ姉さんで兄さんの方が気になるようで。

他の子供に比べて結構聞き分けがよかったことと、兄さんが周りに心配をかけていたのもわかっていてなおかつ弟である僕も心配だったので（子供の割には）我慢していた。

しかしそれができなくなったのは、夜遅くまで村の人の家で本を読んではまって泊まっていきなさい、と言われたときだ。

正直夜暗くなつてから帰るのは気が引けたので素直に泊まっていったのだがそのときかなり歓迎してくれてびっくりした。

シャワーも一緒に入ってくれたし添い寝もしてくれたのだ。

別にココロウアさんの家でシャワーと一緒に入ってくれないというわけでも添い寝してくれないという訳でもなかったが、シャワーに入るときは兄さんの普段が普段なだけ兄さんに目がいきがちだし、気を使つて自分でやれば僕の方は面倒見てくれなくなった。

褒められなくて自分でやってみただけだった。

しかし最初のうちは、それなりに一人できるという喜びでやってはいたが、やはり寂しかったし、何故か僕が一人でやると兄さんも一人でやりたがり、結果他に迷惑をかけている様子を見て言いような感情が渦巻いたのも事実だ。

だから面倒をみてもらえることが嬉しかった。兄さんもないので素直に甘えられた。

ここまでくれば僕がココロウアさんの家に寄りつかず、甘えられる他の村の人の家に入り浸るようになるのは、時間の問題だった。

今日もスタンおじさんの家に泊めてもらう予定だったのに置いてかれてしまったので、食事だけでもマスターにあまえたかいがあった。

なにせ、オムライスだ。あのオムライスだ。泊まらないのは残念だがオムライスだ！

ふっふふう、とご機嫌でマスターを待っていると、チリン、チリンとドアベルの鳴る音がした。

こんな時間帯に珍しいなあ、と思う。基本あまり大きくはない村なので夕食どきのこの時間はみんな家にいる。この喫茶店だってみんなの憩いの場であっても商売の場という印象は薄い。趣味同然の店で営利目的の店ではないのだ。だからこそ特定の時間帯以外客が来ることは珍しい。

興味が湧き振り返ると、会いたくもない人物がそこにいた。

思わず眉をひそめ、プイツ、と顔を背けてしまった。

「ア、アリナ？　こんなところにいたのね？」

どことなく白々しさを感じる言葉を吐いたのは、僕らの世話をしてくれているネカネ姉さんだった。

しかも隣には渋い顔したアーニヤまでいる。

僕はムクムクと鬱陶しい感情が沸き立ってくるのを感じながら、テーブルに向き直った。

無視。完全無視である。

せつかくのオムライス気分^に水を刺された感じだ。ご機嫌でオムライスしてたっていうのに！！

「はい、オムライスお待ちどおさん。ってネカネちゃんにアーニヤちゃん？」

「あ、マスター。こんばんは」

「こんばんは、マスター」

ネカネ姉さんが丁寧に、アーニャが気の抜けた感じで僕の背後挨拶する。

正直早く帰って欲しい。

「マスター！ オムライス！」

「お、おお、あいよ」

そんな微妙な僕たちの緊張感に気づいたのかマスターも戸惑ったように僕の前にオムライスを置く。

「いただきます」

全く会話を始めないままオムライスを食べ始める。うまい。さいこーにオムライスしてる。

「あー！ー！！ アリナだけズルい！ マスターあたしにも！」

多少の緊張感があってもアーニヤは食い気が勝ったのか僕の隣の席に飛びつき、手を上げながらマスターにねだる。

「おお、別に構わねえが、お前らアリナ迎えに来たんじゃなかったのか？」

「違うわよ。お母さんがネギの看病に忙しいからネカネ姉さんと、マスターとここで食べてきなさいって」

ジトツとした目でこちら見ながらそんなことを言った。

どうもアーニヤは母親のココロウアさんに心配かけている僕が気に入らないらしい。

そんな因縁つけられてもこっちもム力つくだけだ。

「あの、そういうことなんで、お願いしてもいいですか？」

「おう。そういうことなら任せときな」

申しわけなさそうに僕の隣の椅子に手をかけながら、マスターに言う
とマスターは頼もしくうなずき厨房に引っ込んでいった。

自然残される僕たち三人だが、かなり居心地が悪い。

僕はただ黙々と食べ続ける。

「ね、ねえ、アリナ？ 今日帰ってくるわよね」

「さあ？」

「さあってもう3日も帰ってきてないそうじゃない」

「は！？ あんた3日も家に帰ってないの！？」

アーニヤはその事実を知らなかったらしくびっくり目を見開いて問いかけてくる。

そりゃ僕も最初は抵抗あったけど今ではもうこっちの方がデフォルトだ。

「だってあの家居心地悪いもん」

僕は素直にアーニヤの驚きとネカネ姉さんの問いかけに答える。

その正直な答えが一番ネカネ姉さんの胸に突き刺さったようだった。

どこか泣きそうな顔でそれでもネカネ姉さんは言った。

「で、でもあんまり他の人に迷惑かけるのはよくないよ」

カツン、と。

オムライスを掬いそこねたスプーンが皿にあたり、硬質な音を鳴らした。

「……………じゃない」

「え？」

「あーい、アーニヤの好きなスパゲティお待ちどおさ……」

「迷惑なんかじゃない!!!!!!」

パンツ、と思いつきりカウンターを叩いて、僕はネカネ姉さんに睨みつける。その際わずかに視界が霞んだが気にしなかった。

どうしても我慢できなかった。

「迷惑なんかかけてない！　少なくとも兄さんなんかよりはずっと!!!!!!　僕はいい子だ！」

溜まり溜まりきっていた感情が吐き出された。

僕は間違ってなんかない僕は間違ってなんかない僕は間違ってなんかない僕は間違ってなんかない僕は間違ってなんかない僕は間違っ
てなんかない僕は間違ってなんかない!!!!!!

気がつけば目の前のオムライスは、僕がカウンターを叩いて際に皿からこぼれてしまっていた。

「あ……………」

こぼれてしまったオムライスを見て無性に悲しくなった。

ポタポタ、と涙がカウンターの上に垂れた。

「う、ごめんなさい、ごめんなさい……………」

ネカネ姉さんとなりでうわごのように呟いている。

そっか、ごめんなさい、か。

「ごめんなさい、オムライス、こぼしてごめんなさい」

鼻をすすりながら、目をこすりながら、そんなことを僕は謝った。

「……………気にすんなよ、また新しいの作ってやつからよ」

僕の頭に少し汗ばんだ暖かい手が乗せられた。

後になって思う。

ネカネ姉さんは子供を理解するには幼すぎ、僕もまた幼かった

家族と幸せと

その日は結局マスターの家に泊まることになった。

ネカネ姉さんもかなり動揺していたし、僕自身もそうしてくれたほうがありがたかった。

マスターは特に何も言わず、一緒のお布団で寝てくれた。

翌朝、僕は何事もなかったようにマスターのつくる朝食を食べ、何事もなかったように振舞った。

そんな僕にマスターも合わせてくれたが、時折何か言いたげな表情で見っていた。僕はただ苦々しく思うしかない。ネカネ姉さんのことに関しては僕も後味の悪い気持ちを持っていたが、僕が常々我慢していたものを吐いた。我慢が効かなかったことに罪悪感はあるが、なんで僕ばかりが、と反発する気持ちのほうに余程大きかった。

あれは僕が悪いんじゃない。僕に構ってくれないネカネ姉さんが悪いんだ。

もともと僕はネカネ姉さんのことをよく思っていない。むしろネカネ姉さんを“敵”と思うことで精神的自律を保っていた面も否めない。ネカネ姉さんもふたりの子供の面倒を見るという負担を、“僕が一人でもできる子”と思いこむことで精神的な自律を図っていたようだが、そんなもんくそくらえだ。僕だって甘えたいし、僕だって兄さんみたいにちやほやされたい。

結果僕が甘えられる村の人の家に入り浸って、ネカネ姉さんは自分が僕の面倒を見切れていない、という心的な負担を背負うことになったが、そんなの真実から目を背けてきた罰だ。ネカネ姉さんが悪い。

そんな反発が顔に出ていたのか、マスターはカウンターで苦笑いを浮かべていた。

お店の準備をしていた手を休めて僕の髪をくしゃくしゃする。

「まあ、お前も大変だよなあ、まったく」

何が大変なのか、まったく具体的ではなかったが、少なくともマスターは僕の心情をわかっているようだった。大人の男って感じがする。かつこいい。

「お前も中途半端に頭がいいもんだから、中途半端に自己完結しち

まう。そういうことは吐き出したほうがいいぜ？」

中途半端、という言葉に若干の反発を覚えたが、なるほど、マスターが昨日の件に触れてこなかったのは、マスターなりの気遣いだっただろう。大方、僕が話すものだと思っていたのだろう。ならば、と素直に自分の心情を吐き出した。

「ネカネ姉さんが悪い」

ブスッ、とそう言うと、マスターはからから、と喉を鳴らして笑った。余計に僕はブスッとなる。

「なんで笑うの？」

「いや、まあ、お前のその不貞腐れた顔が面白くってなあ」

何を言つかと思えば、この人失礼だ！！！！

「でも、まあそうだよなあ、お前にネカネちゃんの気持ち判れっというのも酷な話だよなあ」

……………別にわからないでもない。けど僕にとってこの線は最大

限の我慢した結果なんだ。単純に我慢しなければ、僕は昨日のようにひどい言葉をさんざんぶつけていたと思う。でも兄さんが迷惑かけていたこともわかってたし、そんな兄さんの面倒を見ているネカネ姉さんに自分の不満をぶつけるには、抵抗があった。ただでさえ兄さんの扱いに苦心しているネカネ姉さんにそんな言葉を吐くには、ネカネ姉さんは脆すぎる。

だから僕は我慢した。でも我慢だつて限度がある。そんなときに知ったのが村の人の温かさだったのだ。僕が今まで我慢してたもの全てを、村の人は包んでくれた。僕は村の人のもとに入り浸ったけど、ネカネ姉さんはそこで僕に触れてこなければよかったのだ。

兄さんの面倒だけを見ていればよかった。そうすればきっと何の問題も起こらなかったと思う。

だけどネカネ姉さんは触れてきた。僕の引いた線を勝手に踏み越えてきた。村の人の温かみに触れた分、ネカネ姉さんの“勝手さ”に怒る僕は無理ない、とそれを肯定する。

やっぱり僕は間違つてなくて、ネカネ姉さんが悪い。

僕はそう結論付けて、うなずいた。

「ネカネ姉さんが悪い」

再度そう言う僕にマスターは何ともいえない複雑の表情をした。

「まあ、そうかもしれないけど………うん、ネカネちゃんが悪いと思うのもいい。でも……ネカネちゃんがお前のことも心配だって気持ちもわかってやってくれないかな？」

「それはただ“勝手”なだけだよ」

僕は食後の紅茶を一気に飲み干すと、喫茶店を出た。

僕は喫茶店を出ると、空気が軋むような寒さにブルツと体を震わせた。ふと、兄さんの風邪はよくなったのか、という疑問が僕の頭をかすめたが、どうでもいいことか、と疑問を頭から追い出した。

朝靄がかかる早い時間だったが、村の朝は早い。辺鄙なところだからか、それとも魔法使いが多いという性格柄からだろうか、はた

またその両方だからか、この村には若い人が少ない。

同年代の子供だってアーニヤと兄さんぐらいしか知らない。

アーニヤにしたって去年から魔法学校に行ってるらしい。そうやって若い人はこの村から離れていくのだろ。この村に住む老人からしたら寂しい限りだろう。僕が可愛がってもらえるのもそこらへんに理由があるのかもしれない。そんなことを考えながら道行く人たちに挨拶を返していく。

「朝からアリナくんは元気ねえ」

「今日もご本読みに行くのかい？」

「今日のお昼はウチでどう」

声をかけてくれる人の表情は柔らかい。時々そういう人以外からなにと妙な視線を向けられていることを知っていたが、理由が特に思い浮かばなかったために気にしないようにしていた。

袖を指で寄せむき出しの手を庇いながら、僕はとことこ走る。

そして着いたのはスタンおじさんの家だ。

コンコン、と形ばかりのノックをしてから返事を待つことなく、勝

手知ったる様で、家の中に入る。
そしてある部屋の扉に一直線に向かった。

「スタンおじさん！ おはようございます　！！」

部屋ではスタンおじさんがソファで新聞を広げ、片手に紅茶を持ちくつろいでいるところだった。

「ん、おはよう」

いつもならここで口端をわずかに上げ、笑みながら歓迎してくれるのだが、今日のスタンおじさんは少し表情が堅い気がした。

「また本を読みに来たのか？」

「うん、そうだよ」

ハア、と仕方の無さそうな顔でため息をついた。

「アリナぐらいの年ならば、普通外で遊ぶんじゃがのう」

「だって遊ぶ子いないもん」

結局はそれが問題だと思う。そもそも僕が本を読み始めるきっかけになったのだって同年代の子供がいなくて暇をもてあましたせいだし。兄さんやアーニヤがいるけど、兄さんだとかの前みたいないことになるし、アーニヤは普通に仲が悪いし、そもそも男じゃない。遊びも合わないだろう。

となると僕の友達の本しかなくなるわけで。

「それもそうじゃな……………」

少し考えこむように顎に手を当て、

「アリナもメルディアナに行かせるべきか」

そんな呟きが漏れた。

「ええ！？ この村から出るの！？」

「あ、いやいやまだ決めたわけじゃない。ただ同年代の友達もいたほうがいいし、アリナは魔法にも興味があるんだろ？」

宥めるように言うスタンおじさんに僕も言葉に詰まった。

確かに魔法にはスッゴク興味がある。今までは魔法の本を読み漁るだけで実践したことはなかったけど、本を通して魔法を知るだけでも相当奥の深い世界だとわかる。特にスタンおじさんの家に置いてあった本の傾向で魔法を発動する術式についての見識を深めることができ、それでもまだまだ底の知らない魔法の世界に非常に興味をそそられた。

どちらかというと、アリナは魔法を学問として捉えているわけだが、その魔法が帯びる神秘性に誘引されたというのもまた事実で、学問的に卸された知識が魔法という神秘の形に結実する瞬間をこの目で見てみたかった。

だが、そうするには魔法学院に入らなくてはならない。

いずれは、と思っていたものの、いきなり言われ、昨日の一件で少なからず動揺していた僕は心揺さぶられた。

僕は詰まった言葉を焦りながら必死に吐き出した。

「い、嫌だよ！！ 村から出るなんてまだ無理だよ！！ みんなと別れるなんて嫌だ！！」

僕の言葉が届いたのか、スタンおじさんも慌てたように取り繕う。

「そ、そうじゃな。アリナにはまだ早すぎるよな。すまん、すまん」

「……………うん」

スタンおじさんの困った顔を見ると、自分が情けなくなったが、それよりも安堵し、笑みがこぼれた。

その笑みを見てスタンおじさんは何とも言えなくなった。

「じゃ、じゃあ僕本読んでくるね!!」

スタンおじさんの言ったことを頭ごなしに否定してしまったことで少し気まずさを感じた僕は空元気でそう言い、無理やり話を打ち切って部屋を出て書斎に足を向けた。

スタン side

わしは悩んでおった。悩みの種はナギの馬鹿が預けていったネギとアリナであつた。あの馬鹿は自分の子供をろくに育てもせず、村に無理やり預けていったと思つたらまもなくしてナギは死んだ。

産まれてまもない自分の子供を預けると聞いた時はかなり憤慨したものだつたが、今思えばあの馬鹿はあのとき、何か危険なことに首を突っ込んでいて、その危険からネギやアリナを守るために預けていったのだと思う。あのとき、あいつの様子に気をかけてやれば、と悔やみきれぬ思いがあるが、こんな幼い子供と老いぼれを残して先に逝くなどそれでも英雄か、と怒鳴りたくもある。

だが、過ぎたことは、どうしようもなかった。酒が入るといついあの馬鹿のことを考えてしまうが、今はそんなことを考えている場合ではなかった。

頭に残る酔いを醒まそうと目の前の冷や水を一気飲みする。

今考えるべきは目の前でわしに悩みを打ち明けてくれているネカネとスプリングフィールド兄弟のことだ。

頭の痛い話だった。

最近とみに行動が馬鹿親に似てきたネギ。周りを顧みないところなどホントそっくりじゃ。自分がどれだけ他人に迷惑をかけておるか考えてもないのだろう。まあまだ四歳なのだから当然なのかもしれないが、度が過ぎておる。

英雄である父に憧れを感じるのはわからいでもないが、さんざん怪我しまくってやめない、痛みをもっとしておらんそれは、異常なことでもある。

周りが注意しないこともそれを加速させておる。

わしが早い段階で気づいておればこうはならなかったかもしれないが………

しかし、今はネギのことではなく、アリナのことじゃ。

父親似の馬鹿な兄の弟であるせいか、兄よりも大人しく可愛い子に育った。

だがそのことが今は問題じゃ。

もとからネカネやココロウアよりもわしや他のジジババに懷いてはいたが、兄が馬鹿なことを始めてからずいぶんそれがひどくなつた。

端的に言えばネカネやココロウアを避けわしらに寄りつくようになつてしまつた。

わしがネギの馬鹿な行いに気づくのが遅れたのも、アリナに構つていたからでもある。

わしが気づいたときには事態は手遅れじゃつた。

村の連中はネギがナギの馬鹿と似たような行動をすることを好ましく思っているようじゃつたので誰もネギに齒止めをかけようとはしなかつたのだ。

本当に馬鹿げたことじゃ。ネギの魔力量からしてネギにナギと同じように英雄になるよう期待をかけるのはわかる。

しかしナギと行動が似ているから叱らんとは、意味がわからん。そもそもナギと同じような英雄にする意味もわからん。英雄といつても様々。ナギと全く同じ英雄になることに期待してどうするのじゃ。

叱らず馬鹿な行動を許容していたら育つのはろくでもない人間だというに！

そして、さらにその影響があの子に似ていない……おそらく母親似であろう……よい子の見本アリナにまできているから冗談じゃない。

性格からしてため込みやすいあの子に負担がかかっておる。確かにネギが馬鹿げたことを始めて、ある程度大人なあの子に手が回らなくなるのは仕方がなかった。

だがあの子はまだ四歳、まだまだ甘えたい盛りじゃというのに放って置かれてしまった。しかもあの子は年の割に聡かった。おそらく兄の様子を見てそうなる理由も理解していたのだろう。

だがそれが一番いけなかった。中途半端な知恵だった。

どんなに聴くてもあの子はまだ四歳児なのだ。普通の子なら構ってもらえず、寂しかったのなら、泣くなり喚くなりしてSOSを送るじやろう。それが子供には正しく、そうやって親は気づき、子供を顧みる。

じゃがアリナにはそれを正しくすることができなかった。アリナはそうすべきだったのに、いやこれは言い訳か。わしらはそんなア

リナを理解して気づくべきじゃった。

しかし遅かった。すべてが遅かった。

ネギの行動に気づくこともアリナの様子に気づくことも。

少なくともネカネには遅かった。

気がつけばアリナはネカネやココロウアの下を離れ寢床も食事もほとんどわしや村のジジババに頼るようになってしまった。

しかも以前よりも遥かに楽しそうに笑い、健やかに日々を過ごし始めていた。

ネカネやココロウアの受けた衝撃は想像に難くなかった。

すべて遅かったのか、いや、ここで遅かった、と諦めるのは早すぎるじゃろう。少なくともネカネはわしに相談することでそれを諦めていない。

ネカネは優しいすぎた。ネカネは自分がアリナに構ってやれなかったことを理解し、なおその咎を受け入れ関係を改善しようとしておる。

優しすぎるがゆえにアリナのことを放りネギだけに構うことをよしとしなかった。

ならばわしはその優しさに最大限の誠意を持って答えねばなるまい。

まずは本人たち同士で話し合わねばどうにもなるまい。

わしはネカネにそう勧め、それとなくわしもその機会に協力した。

しかし、結果はひどいものじゃった。

あのあとしばらくして、ネカネは泣きながらわしの家に駆け込んできた。事情は大体のところ後を追ってきたアーニヤから聞いた。

予想以上にアリナのほうもキているようじゃった。

アーニヤはネカネを泣かしたアリナに怒っていた。弁護しようにもネカネの前でそれは傷口に塩を塗るようなものじゃろう。遠回しにアリナを擁護したが伝わったかどうかは怪しい。

わしは何もできなかった。それどころかアーニヤにアリナに対しての敵意すら植え付けてしまったかもしれん。ただでさえ子供の少ないこの村でこのことはアリナの環境に響くかもしれん。

わしはホントにどうしようもない。

わしはアリナにネカネと和解して欲しかった、それゆえの話の場だった。

しかしそれはアリナにしてみれば酷なことではないだろうか。アリナにネカネの優しさを理解してやれと押し付けるようなものじゃなかろうか。ネカネの優しさを理解すれば、聡いあの子は自分のことをよりいっそう追い詰め、子供らしからぬ、より聡い行動を取らせてしまう。

それは四歳の子供にとってどれほどのダメージだろうか。

人の感情に常に理解を求められ遠慮と配慮を重ね、我慢に強いられ、縛られる生活。

わしはあの子のことをどれほど思っていただろうか。

わしは優しすぎるがゆえに傷ついたネカネに言う気にはなれなかつ

た。

だがあの子のためを思うのならネカネを“敵”として恨ませ村のジババに甘えさせるほうがあの子にはよっぽど楽なのだ。

わしは何もアドバイスを送ることをせずにネカネとアーニヤを家までおくった。

そしてそのままココロウアにわしの思ったことを伝えた。

ココロウアはその話にショックを受けたようだったが理解してくれた。

このまま何もはっきりさせないままの環境は双方に悪影響しか与えない。

ネカネにはネギに専念してもらうことにして、アリナは改めてわしが預かることにした。

ネカネはこのこと罪悪感を覚えるだろうが、このままジリ貧の状態を続けるよりかはいいだろう。

そして翌朝、アリナが何事なかったようにわしの家に訪れた。わしがアリナを正式に養育することはネカネにはコロナウアからアリナにはわしが伝えることになっておる。それを思うとわずかに表情が堅くなっただが、無邪気に挨拶する様を見ているときっとこの子は喜んでくれるだろう、と思った。それが嬉しくもあり、悲しくもあった。

アリナの一保護者として、同年代の友達がいなかったことをいえないことを思いメルディアナ魔法学院のことを漏らしたが、あまりの拒絶感にびっくりした。

しかし、それで確信した。

この子は聡くあったとしてもまだまだ子供だと。

二の轍を踏まぬようそこらへんもきちんと気にかけてやらねばなるまい。

さて、頃合いを見計らって、養育の件をアリナに話に行こう。まずはそれからだ。

スタン side out

僕は術式の知識の詰まった辞典のような太い本を広げていた。

術式とは魔力を外に放出するとともに魔力をコントロールし、望み通りの現象を起こすために展開する回路のようなものだ。

この術式の精緻さによって魔力の運用効率や威力が変わってくるという。

通常呪文の詠唱とともに術式は展開される。だが詠唱は術式のおおまかなアウトラインを型どり展開した術式を整える程度にすることで術式の展開がしっかりとできる魔法使いならば、無詠唱で魔法を使うことができるようだ。

ただ中級、上級の魔法となると術式も自然複雑化してくるため、無詠唱の魔法発動は難しいらしい。

肝心の魔法の術式とその発動はいかにうまくイメージを魔力に乗せることができるにかかっている。

なんとも曖昧な話したが、イメージといっても初級は簡単なもので、

中級上級になってくると、学術的な確固たる術式の構成と、現象としてどういうことが起こるのか、ということのを頭に念頭に置いておけば大丈夫らしい。

まあこれは実際やってみないとわからないだろう。

今読んでいるのは、中級魔法の術式構成だ。これらの術式は細かく意味が別れ、それらの意味と効果が掛け合わされた結果が魔法につながる。要するに木がもとを辿れば細かい原子で構成されているのと同じことだ。細かい術式構成の内訳はおおざっぱでも魔法として発動するようだが、全ての意味を把握しておいた方がやはり魔力の運用効率や威力に差が出るらしい。

それにこういう術式構成の内容は掛け合わされた結果や意味こそ違うものの、構成されている因子は共通していることが多いので覚えておくに越したことはない。

この魔法を作った人にとってみれば構成因子など、1、2といった数字と同じもの、覚えて当然のもののはず。むしろ構成因子が掛け合わされた結果の方が大切なはずだ。

深みにはまればはまるほど、奥の深さが見えてくる。この魔法という形にしたって何百もの因子が掛け合わされた結果なのだ。

僕は術式というものに一種の“美”を感じていた。精緻さといい神秘さといい芸術品としか言いようがない。素晴らしいものだ。

二時間かけて中級魔法の術式構成因子を 読み取った僕は惚れ惚れと辞典の大半を占めている術式を見直した。

この辞典は割と親切なものらしく、細かい構成因子掛け合わせの結果まで載っている。さすがにページ前半で載っていたものまでは振り返るようなことはないが、その辺はきっちり覚えていたので問題なかった。

ふう、と息をついて天井を仰ぎ見る。

こうして本を読んでいると、ますます魔法をやってみたくなる。魔法学院に行くのは嫌だけど、スタンおじさんに学ぶ程度ならいいかもしれない。

そんなことを考えていると、不意に書斎の扉がノックされた。

誰かなど考えるまでもない。

「スタンおじさん？ なーに？」

扉の向こうにいるであろうスタンおじさんに声をかけると、スタンおじさんはどことなく強張った表情で書斎に入ってきた。どうしたんだろっ、と気になったが、スタンおじさんは、そのまま僕のいるテーブルを通り過ぎ、僕の背後の本棚を物色し始めた。

単純にこの書斎に用があっただけなのか、しかしだったらノックする必要はあったのか、と悩みながら、僕も自然な風を装い次のページを開いた。僕の目はその瞬間から、そのページを占める魔法術式の構成に引き寄せられていく。

「のっ、アリナ」

背後からスタンおじさんに呼びかけられて僕は冷や水を浴びせられたような気分になった。ほのかな知的興奮が抜けていく。冷や水は、スタンおじさんに呼びかけられたことではない。僕自身がどれほどこの魔法に関して惹きつけられているか知ったからだ。確かに魔法の本を読み込んでいると、周りが見えなくなっただけではいたが、スタンおじさんの声が鬱陶しく感じるほどに集中していたとは思ってもよらなかったのだ。

「アリナ？」

びっくりしていたせいか、反応が遅れた僕にスタンおじさんが再度声をかけてくる。僕も目が覚めたように一拍遅れて反応した。

「あ、なに？ スタンおじさん？」

「……………ネカネとはどうかね？」

「……………別に」

僕は一気にムツツリとした態度に移行した。その話題か。なるほど、言いづらそうにするわけだ。僕は反感を持って、背後のスタンおじさんに目をやる。しかし、スタンおじさん自身、あまりその態度に動揺した様子はなかった。

「うまくいってないか」

「うまくいくと思う？」

声質を感じさせない無感動な声に僕はさらなる反発を含ませ、問い返すが本棚を眺めるスタンおじさんの表情は小揺るぎもなかった。

「そうか、それじゃあ仕方ないな」

その言葉に正直拍子抜けした。てつきりマスターみたいに、ネカネ姉さんに歩み寄ってやれ、とでも言われるのかと思っていた。しかし、スタンおじさんのあっさりとした態度に説得するような気配は見られない。動揺も見当たらな。まるで確認するだけのようだった。

「……………何も言わないの？」

「何か言って欲しいのか？ 例えば仲直りするんじゃない、とか」

仲直り、と言うとき、少しだけスタンおじさんの希望が垣間見えた。しかし、どちらかといえば、諦めの色が濃。せいぜいそうであつたらいいのになあ、くらいの声音だった。

「……………言って欲しくない」

僕はそう答えた。もうこれ以上ネカネ姉さんには関わりたくない。僕自身ネカネ姉さんに何故こんなにも敵意を持っているのかわからなくなってきたが、とにかくあの家には行きたくなかった。

「そうか」

短い言葉にはほんの少し哀愁のアクセントが効いていた。それが漂ったのはほんの一瞬でスタンおじさんはすぐに別の言葉を吐いた。

「じゃあわしの息子になるか」

「……………え？」

「息子、というには若干ちっこすぎるな。せいぜい孫がいいところか」

最初、言葉の意味がうまく噛み砕けなかった。しかし、その意味を咀嚼していくうちに、段々とそれに伴う感情が沸きあがってくる。

こみ上げてくるのは、喜び、嬉しさ、寂しさ、悲しさ。

さまざまな感情が去来する胸に耐えかねて、僕はその感情の形として、目から一筋の雫が頬を伝った。うまく表現できない感情を表わすのは涙だった。それがいったい何の感情からくるものなのかはわからない。何でこんなにもこっちゃんな感情が入り混じっているのかもわからない。

ただ、僕は振り返って、その大きな背中に抱きつくことで僕のすべての感情の言うがままを表現した。

鼻をすする音が書齋にただひとつの音として存在する中、その背中
は遅しく、温かかった。

僕はこのとき思いもしなかったんだ。

この生活が三日ともたず、ぶち壊されるなんて。

悪魔襲撃

その日は珍しく雪の降る朝だった。しんと降り続き、景觀を白く彩り、ただその存在残すことなく、地面に吸い込まれていく雪は美しくも儚い。視界にちらつく白を意識しながら、僕は今日も今日とて読書に励む。

スタンおじさんはいつもの朝と同じように紅茶を片手に新聞を読む。その隣で僕がココアをちびちび飲みながら、本を開くのが、ここ数日の僕の日課だった。

どうということのない日常が僕にはとてつもなく、幸せなものに思える。

今までの放浪（？）生活も悪いものではなかった。しかし決しているものであったとは言えない。先行きが見えない根無し草のような生活が居心地がいいはずがなかった。

村の人にも諫められることが少なくなってきた近頃、漠然とした不安が僕の明日を曇らせていた。

だけど、僕は手に入れた。
安心して眠れる寢床を。
確かな温もりを。

明るい明日を。

僕は当たり前のようにそれが存在している日常に浸れる今日このときが大好きだった。

さて、そんな一時を過ごして、僕は暖かい“家”を出て最近めきめき冷え込みが増してきた天気のほか、早足で大通りを歩いていた。

スタンおじさんの家に住み始めてから、この2日間家でずっとスタンおじさんに付きつきりでいたせいか、外がなおさら寒く感じられる。まあ、家にずっといたせいで、わしにばつかひつついてるんじゃない、と怒られ、渋々外に出てきたわけだが。

行き先はスタンおばさんのところだ。スタンおじさんの家と同じくらしい蔵書量があるので、読む本には困らない。

スタンおばさんの家に向かう道中、声をかけてくれる人に元気よく挨拶していく。

そのやりとりが久しく感じるのは、2日間家を出なかったせいか、きちんとした居場所が定まったからかわからなかったけど、以前よりも気持ちよく挨拶できた。前までは多少なりとも打算的な挨拶だった。愛想、という程に気を遣ったものではなかったが、よくしてもらえるように、かけてくれた声ひとつひとつに返事をしていた。

声をかける側として微笑ましかっただろう。声をかける度に立ち止まって返事を返すのだ。律儀なことこの上ない。

ただ今の僕は笑顔を振りまきながら手を振り返すだけだ。今までと違う返事をするに多少抵抗があったが、これが僕の“自然”だった。

僕はふと立ち止まって、思い立ち、道から外れていく。

僕が向かったのは少し村が立地しているところより高い丘だった。

村が一望できるというほどには高くない。しかし見ようとすれば村の連なる家々の屋根を視界内におさめることができ、やがてそれらは、地平線に紛れていく。

何の変哲もない光景だ。人が集まり人が別れていく。家が連なり、軒並みと営みをなしていく。

前にここに登ったときも、僕自身毎日前を見ることに必死でそれほど感慨深いものは、感じなかった。

しかし、今は違う。

この光景を見ることで、穏やかになれる。家を出ても、何か言い表せぬ、強迫観念のようなものに圧されていた。

だけど、今はそれが無い。清々しい気分。解放されたような気分だった。

深く息を吸い込み、大きく息を吐く。
そうやって今見えるこの光景に満面の笑みを浮かべた。

嬉しくてたまらなかった。

そして。

次の瞬間、轟音が響き渡った。

目を疑った。何が起こったのかまったくわからなかった。

静かで空気が綺麗な村は一瞬にして、静かで空気が綺麗だった村になった。

火の塊が次々と村に飛来してくる。先の豪炎は出会い頭の一発でしかなかったようで、攻撃が止むことはない。

ゆっくりと視線を空に移せばそこには、黒き化け物どもの狂宴。空を埋め尽くすように黒点が跋扈する。

やがて先頭から化け物どもが高度を下げ、村に降り立つ。

悲鳴、怒声、喚声、様々な感情が含まれているであろう声の群れはここからでは、不気味な歪み合いのようにしか聞こえない。

先程まであった穏やかな光景など、どこにも、ない。

僕は呆然とそれらを丘から見ていた。

突然の変遷に頭がついていかなかった。

何？　これはなに？

夢？　夢なのかなら頬をつねればいい痛いなら夢だああ痛いじゃあ夢かそうだ目を閉じよう目を閉じて開ければ元通りだああ元通り化

け物がいっぱい襲って元通り赤がいっぱい黒がいっぱい白がいっぱい光ってこっちにむかって――

轟音とともに僕は小高い丘から転げ落ちた。僕の体は地面に投げ出され、勢い止まらず体は地面を擦り、皮膚を削っていく。地面と空を交互に映しだした僕の目は僕が回っていること教えてくれる。

丘に登る坂道をそのまま辿るように転がり落ち、路地に放り出された僕は顔を起こした。

狭い脇道からは、せわしなく走る人の姿が見えた。

痛い、イタい。

右腕は焼き爛れるような熱を持ち、ドロリと溶けた皮膚が腕を伝い、空気に触れた部分が突き刺すような冷えた痛みを伝えてくる。

さらに擦り切れ、摩擦したような熱とジンジンする痛みが全身を苛む。

あまりの痛さに考えることを放棄した。

泣き叫んだ。

体裁も羞恥もなく、ただ涙を流し、喚き散らした。

考えるより足を動かすよりある意味この場において一番ふさわしい行動。

それは、喧々囂々とした村の騒ぎに紛れ、地獄絵図の一つと化した。

「あああああああー――――」

唾を吐きちらし、鼻水を垂れ流し、涙を振り撒きながら、狂態に徹した。

まるでそれが正しいことかのように天に吠える。痛みが、恐怖が、身体という入り口から浸食して体という出口に何倍にもしてその捌け口を求める。

「あああああああー――――」

喉が割れるような叫びを声を掠らせながらにあげる。

「アリナちゃん!!」

誰かが呼びかける声がしても、僕はただひたすらに頑なに叫んだ。

誰かが身体を動かそうとしても、僕の身体は一向にそれに協力しなかった。

泣き叫び続けた。

不意に泣き叫び涙を流す瞼の間から光が差し込み、痛いほどの光が僕の目を灼いた。

その光を皮切りに僕を包むほのかな温もり。

それに僕はつかの間幻想を見た。

天使が光とともに僕をお迎えにきた、と。

それを希望に僕は目を開けた。

「・・・・・・・・・サラン、おばさん？」

そこには、顔の皺を緩ませながら穏やかに微笑むサランおばさんが

「アリナちゃん、ダメねえ、こんなに泣いちゃあ、男の子でしょう」

いつものように穏やかに笑うサランおばさんがいた。

「アリナちゃん、ほら男の子がそんなみつともない顔しちゃあ、女の子にもてないわよ？」

僕の目を袖で拭う。そのあまりにもいつも通りなズレた様子に僕は正気を取り戻した。

そう、いつも通り。抜けたサランおばさんに僕がツツコミを入れるのだ。それ、ちょっと違うよって苦笑いしながら。

「サランおばさん・・・・・・・・」

正気を取り戻した僕にサランおばさんは、僕を包み込みながら穏やかに微笑むのみ。その様子に僕は呆然と呟き、頭が現状を把握し、慌てはじめる。

愚かなことだが、抜けたサランおばさんの代わりに、僕がしっかりしなきゃ、とかいつも通りなことを思いながら。

「サランおばさん、足！！ 足が！！ 石になってるよ！！」

ようやく現状を把握した僕にやっぱりサランおばさんは穏やかなま。

「あらあら、ホント。困ったわねえ、これじゃあ、アリナちゃん守れないわ」

のんきに杖を頬に当て、ポンポンしながら、困った顔をした。

そんなこと言っている間にも足元から迫ってくる石化の魔法は、腰元まで、魔の手を伸ばしてくる。

「あ、あ！ ど、どうしよう！？ あ、あれサランおばさん、解呪！ それからレジスト！」

「うーん、レジストは必死でやってるんだけどねえ、全然効かないわ、この分だと解呪も難しいかもねえ」

「そんなのんきなこと言っている場合じゃないよ！」

「そうねえ、このままじゃアリナちゃんが危ないわ」

じわじわと腰のあたりから石化の魔法が広がっていつていうのに、いまだにサランおばさんは人のことを心配している。

「危ないのは、サランおばさんだよ！？」

「違うわあ。だって石化しても、解呪すれば大丈夫だし、生きてるもの。だからむしろ石化してないアリナちゃんの方が危ない？」

確かにサランおばさんの指摘は的を射ていた。でもこの状況でまだ人のこと心配するなんてツツッ！

「でも大丈夫か。アリナちゃんだもん」

ポン、と手を叩き、微笑む。

「レジストとか解呪とか知ってるアリナちゃんなら」

すでに心配事がなくなったようなすっかり安心しきった顔。意味を解することができない僕にサランお婆さんは、すつ、と僕の手に自分の持っていた杖を握らせた。

「ぼ、僕魔法なんて使えないよ!？」

その意味に気づいた僕にサランお婆さんは少しだけ寂しそうにして、名残惜しそうに、杖を握らせた手を上から、ギュツとすると、手を離した。

「大丈夫。アリナちゃんならできるわよ」

反論しようとする僕だったが、その時間はもうない。石化の魔法は首にまでその猛威を奮っていた。

「大丈夫。魔法で、

……………大事なの、はイメージ、よ」

その反発を封じ込めるように、サランお婆さんは穏やかだった。

「がん、ば……………て」

最後にそう言い残し、サランおばさんは、作られた石像のように穏やかに微笑んだまま石化した。

「サランおばさん……………」

だが、僕には目の前の光景の余韻に浸る隙すら用意してもらえなかった。

「ナンダ、マダイキノコリガイタノカ」

人間というには、あまりにも拙い喋り方。まるで音と音を寄り合わせるようにして声を作り、言葉を紡いだような不協和音。

僕は咄嗟にサランおばさんの石像から飛び退いた。

石像の影になって見えなかったそれは、後ろに下がることで確認できた。

近くで見る化け物とは同じ生物とは思えない異形な姿をしていた。

全体のフォルムとしては人型。しかし、それは形だけのことで細部はまるで違う。体表面はボコボコとブドウのように突出してるし、かと思えば腕は蛇のように細く、足は不格好な丸太のようだ。なまじ人間の形におさめているだけ醜悪だった。わかりやすく言うのであれば、人の影の中身を均整を考えず好き勝手に落書きしたような感じだ。

怖気の立つようなその醜悪さに、僕は一步下がってしまっ。

「ガキカ、マイキテンナラブチコロスダケダ」

殺気も殺意もないただの作業とみなしている化け物に僕は反射的に杖を上げた。

それでも構うことなく、化け物は一步一步近づいてくる。

僕も一步一步下がっていく。

後ろ足で徐々に下がっていく僕は、躓き尻餅をついて、絶望的な思いで化け物を見つめる。
一切気に留めた様子のない化け物の背後わずかにサランおばさんの石像が見えた。

そうだ、こんなときに魔法を使わなくてどうするッ！

僕はある魔法の術式を思い浮かべる。日課のように何度も繰り返した作業。そのせいか感情に囚われることなく機械的半自動的に頭の中にインプットされた術式が思い浮かぶ。

だが問題はイメージだった。正直言って全く魔法の成功するイメージが思い浮かばない。その魔法がどのように発動するか、それは予備知識もあってイメージできるが、それがこのそこらへんに落ちている枝よりか細い杖から、ましてや素人の自分がその魔法に成功するイメージなんて全く湧かない。

化け物は刻一刻と迫っている。

ええい、儘よと思うがまま杖をかざした。

「魔法の射手！！
サギタ・マガカ 連弾・光の九矢！！
セリエス ルーキス」

しかし、無情にも杖はうんともすんとも言わず、魔法の放たれる気配はない。

「ケケケ、マホウツカイノマネゴトカ？」

化け物は足を止め、嘲笑うように体を上下に揺らした。

失敗したことへ対する動揺はなく、やはりか、という諦念にも似た思い。ある意味当然の結果だ。さっきの魔法には全く成功するイメージを抱けなかったのだから。

魔法とは、今の僕に言わせれば現実の否定だ。いくら、魔法使いの隠れ里に住み、頻繁とは言えないものの、魔法を間近にしてきたと言えど、自分に使えないそれは、非日常的な縁遠いものであった。普通人と比べれば、魔法の知識を蓄えている僕と魔法の垣根は低いんだろうけど、しかし、それは今まで魔法の使えなかった現実を否定し、魔法を使う非現実を許容することだ。本来であるのなら、訓練を通じ、徐々にその垣根を低く、低くしていくんだろうが、今求められているのは、高い垣根を高跳びにそのまま飛び越えろ、という無茶なものだ。成功のイメージなど抱けるはずもない。

嘲笑いながら歩を進めてくる化け物に、僕は再びパニックに陥りそうになる。さっきと違うのは僕の中でかろうじて自制を促す声があること。しかし、それは逆に相乗効果で僕の恐怖心を煽っていく。

化け物の地を引き摺る足の音が終わりを告げる鐘のようにも聞こえた。

『アリナちゃんならできるわよ』

唐突に僕の耳に響いた柔らかな声音。神の福音のような天使の鈴鳴りのような清涼な響き。

それはサランおばさんがいつも繰り返していた言葉だった。

『アリナちゃんならできるわよ』

耳にこだまする声に僕は杖を握り直した。汗ばむ手の平に力を入れ、目の前を凝視する。

そして、何もない虚空に僕は脳を通じ、術式をイメージしていく。細部の意味から辿り形成される大きな意味。

成功のイメージなんてできない、できるはずがない。

だからそんなものはない。

僕にとって魔法とはなんだ？

本ばかり読んできた僕にとっての魔法は決して神秘などではない。ピンチになったからといって窮地を救ってくれる奇跡でもない。

僕にとってそれはただの学問だ。

僕が夢見ていたのは、学問によって成される魔法という形そのものだ。いくら文字列・数字を重ねても辿り着けそうもない魔法という形。僕はいつの間にか学問である魔法と神秘である魔法を分離してしまっていた。本という文字列に親しみ慣れている僕にとってはそれがとても不可分なものに思えたから。

だが、違う。だったら僕の学んできた魔法とは何だ？ サランおばさんが何を根拠にそんな僕を大丈夫だと肯定したのか！！。

魔法に幻想を見るな！！

それはただの現象。 必要ないロジックを辿れば、誰もが辿り着ける現実！

「サギタ・マギカ魔法の射手！！
セリエス連弾・ルキス光の九矢！！」

詠唱に伴い、魔法媒体である杖から、術式が展開、同時体の底にわずかに揺らいだ力を無理やりに引っ張り上げ、放出。術式と魔力が

外に出ると、大氣中に漂う精霊が共鳴し、術式に組み込まれていく。

精霊とは有り体に言えばお願いを聞いてくれる存在だ。お願いを術式に形を変え、魔力を報酬として与えることで、術式に変換されたお願いを現象として具現化してくれる。

術式、魔力、精霊、この三大要素こそが魔法の基本！

杖から放たれるは、現象としての魔法。光を纏った魔法矢、攻撃魔法の基礎の基礎。

九連の魔法矢が近距離で化け物に炸裂する。

近すぎたせいか、九の魔法矢すべてが化け物に命中する。その余波が僕にまで襲いかかり、痺れが全身に軽度の麻痺を起こさせる。

意識の外にあった余波に驚く僕に、ベチャツ、としたものが顔にへばりついた。

魔法の軽い閃光が晴れると、そこには無惨な化け物の姿があった。

魔法矢の影響か、身体中が抉れ、緑色の粘液が血のように辺りに飛

び散っている。抉れた痕は攻撃箇所を貫くに留まらず、周囲にもひび割れるように緑滲む傷が走っている。そんなのが、九つもあるのだ。直視するには、あまりにもグロすぎた。

「グ、キ、サマ……」

その物体から声がしたとき、僕はヒツと短く声を漏らした。

僕は恐れたのだ。魔法が自分が恐怖していた化け物をこんなにしてしまうほどの威力があることに。

そしてそんな攻撃を受けた化け物が生きていること。

「キザマ、ユドウ、ザ……ン」

しかし、その化け物は倒れた。あれだけの攻撃を受けてさしもの化け物もひとたまりもなかったようだっただ。

「あ、……………」

僕は自分を縛っていた緊張の糸が解けるのを感じた。

安らぎにも似た気持ちに包まれるのを感じ僕は必死につかんでいた意識を放した。

意識が闇に呑み込まれる寸前、強烈な光とともに凄まじい音が響き渡った。

破壊されしもの

曖昧混迷とした意識が明確なものへと浮上していく。わずかに開いた瞼の隙間から漏れる光に、思わず瞼をきつく閉じてから、ゆっくりと光に目を慣らすように瞼を瞬かせた。

ぼんやりとした蛍光灯の輪郭がぼんやりしてくる。

意識がぼんやりしてくるにつれ、僕はあのときのことをぼんやりと思い出し始めた。

燃える家々、跋扈する化け物と村の魔法使いたちとの破壊の弾幕。そして、石化する人たち。

サランおばさんは無事石化を解除できたのか、他の人たち、マスターやスタンおじさんはどうなったのか。疑問が急浮上してくる。

体を起こして周りを見ると、どうやらここは病院の一室のようだった。

白く簡素な病室は清潔感を感じる一方で、どこか味気なく感じた。

そうやって状況確認をしていると、ふと、あるとき、自分が負ったはずの傷とその痛みがないことに気づいた。全身の擦り傷は綺麗に消えてるし、右腕は包帯は巻いてあるものの、痛みはない。

疑問に思うのも一瞬で、ああ、これが魔法か、とすぐに考えが至った。

寝起きの頭になんとはなしに首を振ると、僕は視界の片隅に、あるものが見つけた。それが何なのかじわじわと理解が及びそれに手を伸ばす。

今僕の手の中にあるのは、一本の杖だった。細い枝のような杖は所々塗装が剥がれ、かなりボロボロだった。

しかし、それは、間違いなく。

「サランおばさん……………」

サランおばさんの最後の姿が脳裏に蘇る。

ギュッと、サランおばさんの杖を握りしめ、こらえた。

『男の子なら泣いちゃだめよ』

脳裏によぎったのは、そんな言葉だった。

僕はサランおばさん杖を抱えるようにして、ひっそりと嗚咽をこらえた。

その姿はひどく哀れだった。

目が覚めてからめぐるしく状況が動いた。

まずは看護師が僕が覚醒したところを発見、すぐに医者が飛んできてたらい回しにされるように検査検査。

それが終わったかと思えば、今度は村の悪魔襲撃事件の調査に来たと言う男がその場で僕に対して取調べを開始した。あの化け物はどうやら悪魔というものらしい。逆に僕が男に、悪魔だというなら誰が使役したのか、他の村の人はどうなったのか、サランおばさんの

石化は解けたのか、と質問責めにしたが、男は首を振るだけで何も答えない。

そのまま一方的な取調べだ。

機嫌を損ねた僕に男は情報を聞き出すのに苦労することになるが、知ったことではない。というか、そうやってしていれば、向こうも情報を出すのではないか、としたたかなことを考えていたのだが、向こうは押しても引いても答えないためにしばらく“押し問答”が繰り返されたのだが、結局は僕が折れるしかなかった。ここまで頑なに情報を秘匿するとなると、碌な想像に辿りつかなかった。

取調べは、魔法を使用した、と言う点について疑われたが、実演してみせると、男は黙った。その後の取調べはこれといったこともなく済んだ。

男が帰った後、僕の心境は当然暗かった。あれだけ粘ったのに何も聞けなかったのだ。それは職業柄という領分を越えた何かがある、と感じていた。幼いから聞かせられないような惨状なのか。僕が倒したあの悪魔の惨状を見た身としては、それなりに予想のつくことだ。魔法素人の僕が使ってあれなのだ。あの悪魔はそれなりに弱い部類に入る力しか持っていなかったと思われる。しかし、もっと高位の悪魔、ないしは熟達したスタンおじさんのような魔法使いが戦闘を繰り返したら、どうなるか。それは一種戦争のようなものではないのか。

最悪の予想が僕の脳裏をよぎる。

もしかして生き残りは僕ひとりだけじゃないのか。

それを考えると鳥肌がたつた。生き残ったことに喜ぶより、取り残されることにおそれた。

しかし、それは良くも悪くも裏切られる形になる。

取調べの男がいなくなつて、しばらくしてから村の生き残りが僕の病室をたずねてきたのだ。

僕の兄さんであるネギと、近年もつとも関係が悪化しているネカネ姉さん。

僕はネギ兄さんやネカネ姉さんの生存を喜ぶより先、ネカネ姉さんに他に生き残りはいないのか、と問い詰めた。ネカネ姉さんに僕の怪我に心配する隙すら与えず、顔を見合わせた途端そんなことを聞いたのだ。ネカネ姉さんの当惑は理解できるが、そんなことより、と答えを急いだ。

その答えは否定。首を振る形でネカネ姉さんはそれを表現した。そ

の内実は、知らない、という意味であつたのかもしれないし、本当に絶望的な結果を表わしていたのかもしれないが、どちらであろうと僕を襲つた虚脱感は抜けることはなかった。

しばらく呆然としてから、改めて来訪者に目をやる。

正直何のやる気も起こらなかったが、ネギ兄さんが持っている見慣れない杖にわずかばかりの興味をそそられて、力なくネギ兄さんの持っている杖を指差し、それが何なのか、聞いた。

それを待つていたとばかりに、意気込んでネギ兄さんは事の顛末を話し始める。そんなネギ兄さんの、聞いて！ 聞いて！ とばかりに杖を前面に押し出してくる態度にも押された興味だったが、話を聞けば聞くほど、段々と不快になってきた。

僕が丘から吹つ飛んで、泣いている間、偉大なる英雄のお父様は悪魔をぶつとばし、ネギ兄さんのほうを助けに行つていたらしい。

そりゃネギ兄さんからすれば、もうあからさまなヒーローだろう。ピンチになったところに颯爽と英雄登場！ 随分なご都合主義だこと。そんな空気読んだかのように来るくらいなら、こんなこと起こる前に止めてほしかった。

むくむく、といけない心が首をもたげてくる。それでもネギ兄さん

の話は続く。ネギ兄さんにはそこが一番重要だったらしく、憧れのお父様から杖をもらうくだりを、僕が！ 僕が！ と強調しながら自慢してくる様はもはやむかつくなんていう範疇では済まされない。

掛け布団の下、杖を握り締めた僕は決して悪くない。

ああ、むかつく、ぶつとばしたい、ネギ兄さんに対してそんなビジョンを見、プルプルと震えている僕を見てネカネ姉さんは何を思ったのか、おろおろしている。まさかただ“話”をしているだけネギ兄さんを諫めることは出来ないし、かといって僕の怒りをおさめる方法もない。ただでさえ、あんなことがあつてそう日にちも経っていないのである。ネカネ姉さんの葛藤は窺い知れるというものだ。

さすがにネギ兄さんも怒る僕に気付いたのか、気まずげに開こうとしていた口を閉じる。

ネギ兄さんは、英雄である父さんに憧れていた。
窮地を救ってもらった。

父親愛用の杖までもらった。

対して僕はどうか？

僕は英雄であり死んでしまったはずの父さんを遠く感じていた。
自分の常々の苦境は自分もしくは村の人に救ってもらった。

泣いている僕に父親は気付きもしなかった。

結論。ふざけるな。

父親に対して今まで憎いだとか憧れだとかいう気持ちは特別なかった。というかとうに死んでいるはずの人だったのだ。世話人には文句があつたが、むしろこんな温かい村に預けてくれたことを感謝していいそいた。

だが実際生きていたのだ。

そして父親が果たすべき義務はすべて村の人がやった。さらには窮地でさえネギさんのように救ってもらえなかった。

このとき、僕は決定的なまでの家族・血縁への不信、溝をつくった。

どうもこうも、僕があんな環境にいたのも、すべて家族のせいじゃないか。

冷めた。徹底的に。血縁の家族なんてくそ喰らえ。むしろ僕の家族といえるのは村の人じゃないか！

結局その後、ネギ兄さんやネカネ姉さんと話さなかった。二人も僕の不機嫌を感じたのか、しばらく沈黙した後、ネカネ姉さんが、今日は疲れてるだろうから、帰るね、と半ば無理矢理その場を断ち切って帰っていった。

去り際、また来るね、と言った時は、もうくんな、という言葉が喉まで出かかったが、ネカネ姉さんは素早く退出していった。その返事を聞くのを拒むようにドアの閉まる音がした。

僕は壁に背を預けながらため息をついた。ドツと疲れた。

しかし、ネカネ姉さんやネギ兄さんがいなくなると同時に、強烈な虚脱感が蘇ってきた。

もう、村の人には頼れない。どういう状況であるにせよ、絶望的であろう。そう思うと、徐々に体から力が抜けていった。視線が見るべきものを定められず、虚空をさまよい、やがて下へと急速に落下する。

がつくりと力なく首を落とした僕には涙を流す気力すらなかった。

さらにそこにノックの音が響いた。

またか、なんなんだ、いったい。僕は倦怠感も露わにドアを睨む。
今日——というかもうとつくに日にち感覚がなくなっているの
だが——は病室の出入りが激しすぎる。このまま何も思うこと
なく、闇に沈んでいきたいという気分すら邪魔される。ノックの音
を邪険にしまえばいいだけの話だが、このまま停滞したままと
いうのもどうか、と思う気持ちもあつてそうできない。

第一村の人の安否の真実だってわからないのだし。そう考えるのは
希望的観測であるが。

しかし希望は捨てられない。

しかし、このままその希望を残したまま何も考えずにいたいという
思いもある。

結果相反する思いに、僕自身中途半端な答えしか出せない。

そんなことだうだ考えているうちに、なんだか面倒くさく馬鹿ら
しくなり、どうぞお、と力なく声を発した。

入ってきたのは、老人だ。スタンおじさんよりかは年上だろう。髭
を蓄えそこはかとなく威厳も漂っている。

ただ、僕のほうに視線を向けると、威厳は立ち消え好々爺めいた柔らかな雰囲気を漂わせ、僕の座るベッドの端に寄ってきた。

「うむ、久しぶり、かの。アリナ・スプリングフィールド君」

「はあ。どうもお久しぶりです」

僕が気の抜けた返事をする、おじいさんはそれも無理ないといった様子で表情をゆがめた。反射的に久しぶり、という言葉に答えたが覚えていない。なんとなく記憶にひっかかってはいるが。

「うむ、覚えておらんかの？ ほれ、メルディアナの魔法学校の校長をしとる」

その言葉で思い出した。そういえば、あまり会ったことはないが、僕の祖父にあたる人はメルディアナの魔法学校の校長をしているんだったつけ。祖父と言うにはあまりに薄い関係だったので僕は“他人”という認識を持って居住まいを正した。

「いや、そう固くならんでええよ。仮にもおじいちゃんじゃし、それにそこまで長く話すつもりもないしの」

僕を気遣った様子から見ても悪い人物ではなさそうだ。しかし、今

まであまり会ったことのないおじいちゃん、というのは不審人物ぐらい怪しいと思う。ただ少なくとも今日来たお客さんの中では一番好印象だが。今日来たお客さんの好感度が極端に低いと言うこともあるが、年齢が今まで僕の接してきた人たちと近いというのも、僕の警戒心を薄くさせている理由のひとつなのかもしれない。

そこで、僕は思いついた。この人なら悪魔襲撃事件、そしてその後の村の顛末を教えてくれるのではないかと。普通に考えれば、この祖父と名乗る老人も洩る。確実に洩る。しかし、態度から見ても、この祖父は僕と近い距離で接したいと考えているようなのだ。まあ、これからお世話になることを考えれば、わからないでもないが。怪しいところだが孫という関係性もあるしあの頑なな取調べの男よりは地位も高く、秘密遵守の意識も低いと考えていい。

ならば、そこを揺さぶる。

「あの、いきなりで申し訳ないんですけど」

「ほ？ なんじゃね？」

「村の人はあの後どうなったか知りませんか？」

その言葉におじいちゃんは顔をひきつらせ、その話題に対して警戒心を強めた。

「ふむ。わしは悪魔襲撃事件については聞いたばかりだな。正味な話、あの村から君の兄と君が難を逃れてきたということしか知らないのじゃ」

やっぱりしらを切るか。

僕はここで慎重にカマをかけた。

「そうですか。石化を逃れたのは幸運でしたけど、石化がかけられた“村の人”は村に放りっぱなしなんですか」

純粹な心配として放たれた僕の言葉におじいちゃんも露骨に動揺した。

「……………知っておるのか」

そして口にしてしまった。おそらく学院長が僕にそのことを口にしなかったのは、幼い僕への配慮という面が大きかったはずだ。だから、もしそれをすでに僕が知ってしまったのなら、その配慮は意味がなくなる。当人からしてみれば、知っていることをわざわざごまかされて、その状態がずっと続くようであれば、相手に不信を抱くは当然。おそらく、この件に関しては、年齢が落ち着くまでは

配慮しようと大人たちの間で口裏あわせが行われたのだろう。

が、予想外、僕はすでに知ってしまっている、と思ってしまった。そしてそれを口にしてしまった。後で顛末を話せば、しらをきろうとしたことを隠しておけただろうに。存外腹芸が苦手なのか。まあ子供相手に腹芸の心積もりがあったとは思えないし、純粋にこちらのことを思慮してのことなのだろう。不満はない。

石化がかけられた、と言ったが僕が言ったのは、サランおばさんだけに關してのことだ。カマかけというのは、あからさまにするものではなく、ごく普通の会話として、表現をあいまいにして相手の反応をうかがうものだ。この場合、まずは自分の知っていることから言葉を濁して反応をうかがった。結果一発正解。

おじいちゃんの発言と、僕の言ったことを鑑みるに。

「石化魔法は村全体にかけられたのですか」

つまりは、そういうことだ。そもそも僕自身はサランおばさんにかばわれ、その石化の瞬間を見なかった。僕に倒されるほど弱い部類に入る悪魔が解呪が無理とサランおばさんに言わしめるほど強力な石化魔法を放つとは考えにくい。さらにネカネ姉さんは事実として途中まで石化し、偉大なお父様に治療してもらっている。石化という共通項、さらには村の人の安否不明、そこから出される結論はひとつだけだった。

僕の呟きに己の愚に気づいたのか、メルディアナ魔法学院長は苦い顔になった。

「気づいておらんだか」

「僕を庇ってくれた人が石化したのは見ました。そこから少しカマをかけただけです。まあ最悪村全滅を予想していたんですが」

村人たちの石化。全滅という形よりかは大分ましだろう。そもそも僕が探るべき答えは少なかった。ネカネ姉さんやネギ兄さん以外に生き残りがいるというのなら、隠す必要はないし、僕たちと少なからず関わりがある人に会うなど言うのは無理な話でその人たちから村の顛末が伝わるのは防げない。

いくら幼い子供に害のある情報でも、だ。

だからこそ、村のその後を隠すということは、口封じするべき人がいない状況他ならない。

それはつまり村の全滅ないし、再起不能。

だから、僕が探るのは、村の人たちのその後の形だ。死であるか否か。死以外形の一つとして有力なものをカマとしてかけただけだった。

「石化は解けないんですか？」

辿り着いた真実から次の答えに至るのは、簡単だった。

おじいちゃんもこれ以上隠し立てするのは、得策ではない、と悟ったのか、口を開いた。

「…………… 本国より優秀な治療魔法使いがきたのじゃがな。悪魔が使用した術式は特殊かつ強力なものでな。今も取り組んでおるが、おそらく難しいじやろう、と」

思っていた通りの言葉聞いて、目の前が真っ暗になる。

「…………… 兄さんはこのこと聞いたの？」

停滞的な無気力感からわずかにこぼれた興味。むかつく兄の顔を思い出しそんなことを聞いた。あの兄はこのことをどう思っているのだろう。多くはなくとも同じような立場が何を思ったのか知りたかった。

「いや、ネギは、一言誤魔化したら、何も聞いてこなんだ」

それは村が全滅したと結果として受け止めているからか。

いや、あの様子を見る限り、村の人のことをそこまで重要視していると思えない。偉大なお父様に夢中で他のことを見えていないようだった。ネギ兄さんにとってはそんなもんなのかもしれない。僕と違ってそこまで村の人たちと親しくしていたわけではない。とりあえずお世話してくれたネカネ姉さんと親しいアーニヤ、後勘定に含まれているかわからないが、弟の僕も無事だ。ひとまず近い人が無事だったからか、偉大なお父様の背中を追うに支障が出るほどの精神的なダメージはなかったのか。むしろ偉大なお父様が現れたことで、その背中が明確なものとなり、悪魔襲撃事件自体が偉大なお父様の“英雄”視への舞台装置のようにネギ兄さんに働きかけられた。

と、考えるのは穿ちすぎだろうか。

まあ。

どうでもいいな。

力の入らない身体に引きずられるようにして、思考も鈍化していく。ズルズル、と背をかけていた壁から頭をずり落とし、枕に頭がつくまで身体をスライド。足元でシーツが皺になったが、どうでもいい。掛け布団をひっぱって、頭から被って丸まった。サランおばさんの杖を胸に抱いて、なるべくに身体を小さくするように膝を抱えて首を折った。

「アリナ……………」

メルディアナ魔法学院長のくぐもった声が聞こえたが知ったことか。もう何も考えたくない。これ以上何か考えたら頭がおかしくなる胸が苦しくなる死にたくなるいや何も考えるな村の人が石化したからなんだ何も関係ないいや考えるな心を真っ暗にしる明かりを消せ――

「アリナ、まだ石化が解けぬ、と決まったわけでない」

やめる明かりを希望を僕に与えるな！

「アリナ」

「やめて……………！ 言わないで……………！ そんなの絶望的だってこ

とぐらい僕もわかってる！！！！」

わめき散らすように布団の中で怒声を放つ。ぎしぎしと、ベッドが軋んだ。

「……………アリナ、落ち着くんじゃ」

「うるさい！！」

「落ち着け！！！！」

おじいちゃんのしわがれた一喝に僕は、一瞬の溜めとともに、布団を払って目の前のおじいちゃんを睨んだ。

「大体なんなの！？ 父さんもおじいちゃんも、ろくに今まで僕と関わりもしなかったくせに！！ こんなときだけ事後処理みたいに、当然のような顔して、ずけずけと！！ あんたらどんだけ恥知らずなら気が済むわけ！？」

「……………むっ」

「ほら何も言えない。血がつながってるからって何でそんな偉そう

なの？ 父さんもおじいちゃんも顔見知りほどの付き合いもないのに、一体どの面下げてここに來たの？ ねえ、教えてみてよ？ ねえ、言い訳してみてよ？」

おじいちゃん、と名乗る老人は口をきつく結んで、僕の罵倒に耐えている。むかつく。僕は目の前の祖父面するこの老人を八つ裂きにしたい心の底からそう思った。実際はそんなことできない。だから徹底的に口汚く、正論でおじいちゃんの心を八つ裂きにしてやる。

「ほら、何か言つてよ？ “おじいちゃん”？ ねえ、“おじいちゃん”？ 何もいえないの？ だったら今更おじいちゃん面するなよ！！؟؟ 僕が村で！！ どんだけ寂しかったか知りもしないくせに！！ そんな僕を村の人が面倒見てくれたことも知らないくせ！！ わかったような口で、落ち着け、とか言つなよ！！ 何も知らないくせに！！ 何も知らないくせに！！」

気がつけば、僕は息を切らして、目の前の老人を睨みつけていた。肩が上下し、動悸が激しい。

対して、老人は、後悔の色を深く滲ませてそこに佇んでいた。止まり場のない鳥のように、所在なさに、うつむいていた。

「……………すまんのだ。わしは……………そうじゃな。厚かましかったの、自分が……………恥ずかしいわ」

「……………もういいから出てっよ。おじいちゃんも父さんも、本当に家族だとは思えないから……………」

そう言っつて、跳ね飛ばした布団を引っ張り上げ、再びその中にこもる。

しばらくそうやっていても、おじいちゃんが立ち去る気配はない。ただ何も言わず、こちらを見ているようだった。そうした微妙な緊迫感のなかだからか、僕も何も考えず、シーツの皺を眺めていた。

「ナギは……………お前さんの父親は、たぶんどうしようもなくなつて村にお前たち二人をあずけたのじゃと思う」

身勝手な言い様に、また怒りが沸騰しかけるが、すぐにおじいちゃんが続けた。

「じゃが、お前さんにそんなことを言っても無駄じゃろ。確かにお前の父さんは身勝手で、わしも身勝手じゃった。あの村に預けたのなら、コロナウアやスタン、ネカネが面倒を見てくれるじゃろ、と安心し、おじいちゃんとしての役目を忙しさを理由に放棄しておつた。安心も忙しさもお前にとってみれば、理由にならんというのにな。後悔しておる……………全く軽い言葉じゃな……………そんなお前の親代わりであつた村の人の石化に落ち着けと言うには酷じゃし、その権利もわしにはない」

慙愧の念が滲んだ独白に、僕は、そんなことはない、と頭の片隅で思った。聞くのを、探るのを選択したのは、僕自身だ。そしてそれをおじいちゃんは隠そうとした。隠し切れなかったが、隠そうとしたことはおじいちゃんとしては間違ってなかったのだ。聞くことを恐れていた僕もいたし、真実、おじいちゃんが隠そうとした意図の通り、僕は動揺した。

その点では間違っていない。だからといっておじいちゃんへの恨み言がなくなる理由にはならないが。

「わしもナギも父親や祖父足り得ないのじゃろう。たといかなる理由があろうと。それに理解を求めることはできん」

理解、嫌な言葉だ。そして、それを僕はしてはいけない。理解すれば耐えられない。理解すれば父や祖父を恨む心の自己否定につながり、僕の小さい心は壊れてしまう。そんなことすらわかってしまえるほどに僕は賢かった。そして理解できてしまうのだ。困ったことに、この賢すぎる脳は。大人なら大丈夫かもしれない、頑張れるかもしれない。でも僕は頑張れない。そうするには、僕は人間として小さすぎた。

「じゃがの、そんなナギがお前の父親としてひとつだけ残したものがあるんじゃない」

残したもの？ 僕はわずかに布団の中で身じろぎした。何を残してくれたというんだろう？ あてはめるべき答えとして命ぐらいしか思い浮かばないが。

「それはの。才能じゃ」

「才……………能？」

思わず声に出した。おじいちゃんが何を言おうとしているのか気になつて。

「そう。お前の父親は英雄と呼ばれた。千の呪文を扱う男、サウザントマスターとして名を残すほどに。その才能は絶大なものじゃった。物語の英雄がそのまま現実に飛び出てきた、それぐらいの才能があつた。そしてその才能は息子であるお前さんにも受け継がれておる」

「……………」

「聞けば、お前さんは悪魔と交戦し魔法を使った、と言つたの。しかも初めてで。攻撃魔法を。普通はの、そんなことありえん。いくら知識があつたとしても、魔力の感覚を掴むことは難しいことじゃ。それを成功させあまつさえ悪魔を打ち倒す。それだけのことができ

たのは、お前の中にあるサウザントマスターの血と才能が受け継がれているからに他ならないのじゃ」

「……………それは」

「絶大な才能じゃ。誰もうらやむほどの。そしてその才能は他を寄せ付けない。そんな才能を持った魔法使いが、アリナお前が、悪魔の石化を解く、その可能性を持っていると言ったらのどつじゃ」

「……………ッッ」

「お前は英雄の息子じゃ。頭は四歳と思えぬほど賢い。魔法の実力も折り紙つき。そしてその可能性は父である英雄であるナギがお前に遺した唯一のものじゃ。父親としては最悪かもしれん。だが、そのことだけはよく覚えていて欲しい」

「それ、は、僕が努力したら勉強したら村の人を救えるかも知れないってこと？」

「英雄の息子であるのなら、それもまた可能じゃろう」

その断言は希望だった。確かに唯一、遠かった父親が遺したものだ。った。

だがそれは同時に、一筋の光だ。一筋しかささない光なのだ。

僕は現実主義者だ。いかに英雄の息子、莫大な才能を有していたとしても、プロで何十年と修行している治療魔法使いに、おいそれと追いつけるほどに希望は見出していない。それこそ死ぬほどの努力が長い年月が必要だ。

それはいつたいどれだけ先のことなのか。そんなこともわからず努力を続けられるのか。

そしてもし、そんなことをはじめると決めたのなら、僕に停滞は許されない。僕を包む無気力感、虚脱感その闇を振り払い、その闇を見つめなければならぬ。一筋の光を見て目指すということは、周りの闇を認識するということでもある。

先の見えない戦いのなか、僕はそんな闇を直視し続けることが出来るのか。

嗚呼、きっとそれは無理だ。

絶対に、壊れる。

僕は賢く、あまりに脆い、そのことを強く認識している。

だったらいいじゃないか。

僕が父から残された唯一のものがその賢さと才能だとするならば。

いいだろう。やってやろう。才能を使わぬことは罪であり咎である。その才能を生かし、周囲に理不尽を、恩恵をふりまくことが才能の罪悪で祝福だ。

なら僕はせいぜいそれを使って恩恵と理不尽をふりまこう。僕の才能は村の人たちだけに向けられるものでその他諸々有無無像のことなど知ったことではない。

その過程幼い僕が壊れようと関係ない。この願いはもはや妄執であり在りし日への執着だ。

壊れるなら――

——壊してしまえ。

そんな言葉が脳内吐き出され、今日この日僕は“僕”を壊した。

メルディアナ魔法学校にて

僕はメルディアナ魔法学校に入学した。

もちろん目的など一つしかない。

村の人たちの石化魔法の解呪だ。

おじいちゃんには、地下室に安置されていた村の人たちの石像を見せてもらった。ある石像は苦しみに満ちた顔で。ある石像は悲嘆に暮れた顔で。ある石像は怒り狂った顔で。時を止めたそれらは、自分たちの現状を訴えかけるように此方を見ていた。

「……………大丈夫かの？」

「……………大丈夫です。僕は……………英雄の息子ですから」

英雄の息子。

あれ以来それは僕の心を誤魔化す魔法の言葉だった。暗示のように何度も何度も心に染み込ませた。

死ぬ気で努力する、僕はそう決めた。

英雄の息子、という肩書きは僕にとって決意を促したものであり、僕の確定的な未来を表わしたものだ。それ故今までは聞き流していた自分の父親の英雄譚も調べるようになった。聞いた功績は確かに、物語から飛び出してきたような英雄だった。

敗退寸前の連合。そこに現れる紅き翼を名乗る実力者集団。紅き翼は連敗続きだった連合に勝利を与えた。彼らは決して軍団を指揮したわけでも、政争で覇権を握ったわけでもない。彼らは蹂躪した。“戦争”という単位に個人戦力で勝利を収めてしまったのだ。そのことが当時連合と戦争していた帝国にどれほどの衝撃を与えたのか想像もつかない。そして極めつけはグレートブリッジ奪還作戦。これが紅き翼の名を衆目の目に曝しめた有名な戦いであり、ナギスプリングフィールド、僕たちの父親は連合から「千の呪文の男」と称えられた。その後、指名手配された経緯もあったようなのだが、最終的には世界を滅ぼそうとする『完全なる世界』を打倒し、帝国・連合、アリアドネー混成軍を率い、墓守り人の宮殿にて決戦し、見事勝利し、その功績は魔法世界において『英雄』とまで呼ばれるようになった。

これらを調べ上げた僕の最初の感想は、これだ。

なんて、破滅的な英雄ッ！

というか、戦争相手に個人戦力で打倒するって、一体どれだけ規格外なんだろうか、そもそも人間なんだろうか。『千の呪文の男』とナギィスプリングフィールドは広域殲滅魔法を得意としていたようだが、それにしたってひどすぎる。周りの村の人たちや魔法学校の人も褒めていたけど、彼らが一貫して行っていることは結局は破壊だけではないか。

まあ、僕自身、英雄に幻想を抱いていたわけではないが、歴史上ここまでの“戦争上の英雄”もないだろう。詳しい彼らの生活だとか実態はわからなかったが、調べる限り、“華々しい戦績”しかわかってこなかった。その華々しさが、血で紅く染められていたことは言うまでもない。紅き翼の紅って血の色なんじゃないだろうか。

もうちょっと、なんだろうか。せめて紅き翼の中にこう物語的に言っと『癒しの巫女』的な感じの人もいてほしかった。そしたら、こう、アフターケアもばっちりですよみたいな期待もできたんだけど、それにいまだ名前すらわからない母親。紅き翼の中に女の人でもいて、それが癒しの巫女的な人だったら、もっと素直に喜べたと思うんだけど、現実ってうまくいかない。

しかし、周りの人たちは、息子の僕が言うのも何だが英雄に幻想を抱きすぎだと思う。僕自身、この“才能”は規格外の英雄のもの、として納得、さらに石化魔法解呪への希望としてみているけど、周りは、なんか、不自然なぐらい英雄を英雄視している。

人を一人殺せば人殺しであるが、数千人殺せば英雄である。

なんとなくパラパラ見た本に載ってたなんか英国教会の牧師だかの人の言葉だ。割りと有名というか自国の人の言葉なのに、この世界を“旧世界”と呼ぶ割にそんなことにも気付かないのだろうか。英雄はただの大量殺人者だ、と。

まあ、それほどまでに父たち紅き翼は非常識だった、と理解しておこう。故にこそ彼らの英雄性に感化され、自分たちの中にある英雄に不都合なものには自然目を瞑るようになってしまったのだろう。風が吹けば反射的に目を瞑るのと同じようなレベルで。しかも、メルディアナ魔法学校の生徒は『立派な魔法使い』になるんだ、と口々に言うし、教師たちは、生徒に“正義の魔法使い”がどうのと助長させるように言う。

ネギ兄さんが常々おかしい、と思っていた僕にとってそこは完全にアウエーだった。むしろネギ兄さんが正しい、と世論はネギ兄さんの今までの父親への憧憬を肯定した。僕はあまり口に出して、そういうことを言ったことがなかった、だからと言って、別に誰にどう言われることはなかったが、そうでなくても、僕は英雄の息子、今までの生活を壊されるように、僕はその風当たりに曝された。

初めにわかったことだけど、僕は英雄の息子、と銘打つほどの魔力量は多くなかった。かと言って少なくもなく、ここの教師陣の平均の二倍ほどはあるようだった。充分、将来成長すれば高位の魔法使いになれるレベルだった。しかし、ネギ兄さんが異常だった。僕の

魔力量の軽く五倍六倍はいく。その異常な魔力量は、僕と違って、英雄の息子と銘打つにふさわしく、対して僕は英雄の息子というには足りず、かといって侮るほど少なくともない。

周りの反応は、ちやほやされるネギ兄さんと違って微妙だった。

教師陣も自分たちより多い魔力量、しかし素直に英雄の息子と認め称えるには圧倒的ではなく反発があった。他の生徒も、僕が、近寄るな、オーラを出しているためか近寄りがたい。それに名門であるメルディアナ魔法学校には僕ぐらいの魔力量だったら他にも、二、三人いた。しかし、相手は英雄の息子、近づきたい、でもどうしろと。結果遠くからなんとはなしに眺めるようなこれまた微妙な反応になった。

僕も最初、兄さんより魔力量がない、と聞いたときは、何が英雄の才能だ、と思ったものだが、それは初めての授業のときに解消された。

低いのだ、レベルが。

授業前から、それなりの予習はしていたが、皆、『プラクテ・ビギナル“火よ灯れ”』で喜んでいるレベルだとは思わなかった。余談だが、この授業には、ネギ兄さんもいて、灯れ、どころか燃え盛らせていた。魔力のコントロールができていない証拠だが、何故か教師にはさすが英雄の息子と褒められていた。おかしい、何かがおか

しい。

名門の魔法学校に対し失望も露わに授業をこなしてから、段々と僕は図書館に引きこもるようになっていった。知識の集積にはここほど、いい場所はなかった。ただ魔法学校に入学して一週間で授業をふけるようになった僕に、物凄く必死な様子でおじいちゃんが説得しに来てやむなく最低限授業に出るようにした。

そこで出てきたのが、あからさまに僕に反発する教師陣だった。授業に出てきた初っ端授業でネギ兄さんに向けるような接待問題ではなくとても初心者に向けるような問題ではないものをふっかけてくる。

出された問題は『プラクテ・ビギ・ナル“火よ灯れ”』のような低級なものではなく、それなりに難しい問題だった。自分が出ない内にここまで授業が進んでいたのか、最後に出席したときの授業進度から考えて、かなりの早足。メルディアナ魔法学校の名門という金看板は授業進度の追い上げにあるのか、と自分の浅慮さに少し恥じた。そうは言っても、頬杖付いて授業を聞いていた僕の片眉を上げる程度の反応しか示さなかった。

しかし、これは少し建設的な授業が聞けるかもしれない、と思い直した僕はすらすら答えを並べ、質問した。その中級魔法の術式構成因子は大別して、サイロン構成グループ、イスエイラン構成グループ、N-582構成グループ他複数の構成グループで形成されますが、イスエイラン構成グループを最近の風潮ではS-12構成グル

ープで代替するケースが増えています、前者の利点と後者の利点について諸説あります云々……………と。

結果としてその教師は答えることが出来なかった。名門の魔法学校といえど、せいぜい十二歳までしか魔法を教えないような、世俗的に言うなら小学校の先生だ。生温い教育に浸り、正義と自らを驕り高ぶり日々の努力、邁進を忘れた教師にいきなりの冷や水とも言える学術的な疑問の提示。教師も面目の矜持からそれらしいことは言っていたが、結局は論拠が破綻し、それを指摘すると、ならば自分はわかるのか、と逆ギレする始末。わからないから聞いているんじゃないが、と至極真つ当な意見を言ってやりたくもあつたけど、さっきの意見は所詮目の前の授業が自分に有用か否かを測るためのものでしかなかったので、すぐさま、切り返した。

教師の面目は丸つぶれした。

難しい問題のふっかけは、その教師にとどまらなかった。ただ単純に恥をかかせてやるう、というものだけでなく、純粹に授業に出てないとわからなくなるよ、という、授業の有用価値を示すための問題もあつた。それらを出す教師は大抵勤勉で、僕が出す学術的疑問の提示にも戸惑いながらも答えてくれ、議論を交わすこともでき有意義な時間だった。他の生徒はまるつきり置いてけぼりだったという問題を除けば。

後でそれら一部の良識ある教師に聞いたことだけど、普通術式の構成因子なんて、魔法具を作る“職人”かアリアドネーの研究者ぐら

いしか覚えないらしい。感覚的なものと、構成グループの掛け合わせぐらい知っていれば事足りると。もっとも従来の解呪方法が成り立たない悪魔の石化魔法については新たに術式を組まなくてはいけないので、僕にとっては必須知識だ。

この一件から、僕への反応は二つに分かれた。

生徒たちの反応は、ああやっぱり英雄の息子なんだなあ、と兄の圧倒的な魔力量同様、僕の頭の良さに、次元の違うものを感じたらしい。一部僕と同じくらいの魔力量を持つ人間とその取り巻きは気に入らなく思っているらしいが。

教師陣は大きく分かれた。一方はもちろん自分たちの面目をつぶした僕へ恨みを持つ連中。意地から余計に英雄の息子と認めることができず、露骨に僕に嫌がらせしてくる。もう一方は僕の“才能”を認めてくれる優秀な人たち。こちらは素直にさすが英雄の息子だと言ってくれ、彼らの中では、他と合わせる授業では、僕に対して有用価値を示すことが出来ず、個人授業、もしくは学術都市リアドネーに留学させてみては、と提案する人間もいたらしい。

僕は、露骨に嫌がらせをしてくる教師の授業は図書館でふけり、僕を認めてくれる優秀な教師の授業のみに出席した。その態度が、そいつらの反感を買っているらしいけど、正直どうでもいい。僕にとって重要なのは、授業が為になるか否かだけだ。石化魔法解呪への道のりは長いのだから時間を無駄にしている余裕はない。それでも優秀な教師の授業でも周りに合わせなくちゃいけないから、為にな

っているとはいいがたい。それでも空気は読んでいる。主にそういった教師を抑えるおじいちゃんの苦勞と、魔法学校の退学だけは避けるために。

ただ、図書館にふけるようになってから一年ぐらいが過ぎ、図書館の本では満足がいなくなっていた。多くの本を読めば読むほど、どれもこれも同じようなことが書いてあるだけだった。このとき僕は図書館の魔法関連の蔵書のおよそ半分を読破していた。ここまでくれば、後はもう言い回しと扱う魔法が違っただけのようにしか読めない。魔法書というのは、知識と理解の二つが得られて初めて水準を超えるものだと思っている。知識だけしか得られないものにあまり意味はなく、得られる理解は他の魔法書と共通してたりする。

うだうだとこんなもの読んでいても意味がない、と判断した僕は僕を認めてくれている教師を通じ、おじいちゃんに禁書庫に入れてもらえるよう頼み込んだ。そこでおじいちゃんの問題に答えられたら、という賭けに乗らせ、ことごとくを回答し、最終的には教師ですら知らないような問題まで推測的ながらに持論を述べ、おじいちゃんを追い込み、やがておじいちゃんも観念した。

禁書と呼ばれるものを――しかし、他教師に反感を買わないため、警備を誤魔化し夜だけ――読み始め、さらに僕は知識の集積を貪欲なまでに追求した。それは単に石化魔法の解呪のためという理由だけでなく、心の底からそれを臨み、欲求とした。

ただいかんせん本当に価値のあるという禁書は数が少なかった。少

なくとも、このメルディアナには。アリアドネーにはそういった貴重な魔法書がたくさん集められているらしいが、そこに赴くことは叶わない。村の人たちの石像から目を離したくない、というのもあるし、何よりおじいちゃんから強く釘を刺されたのであきらめた。

しかし、そうなる僕には困ってくる。実際今の段階でも石化魔法解呪の術式の試作はいくつかできていたが、どれも軒並み効果はないもつと高度な術式が必要となってくるが、あまり膨大な量を込めすぎると、密度が濃くなり、石像が耐えられないかもしれない。いや、石像の時点では耐えられるかもしれないが、解呪した後後遺症が残る可能性がある。かといって密度を薄くすれば魔力の通りも薄くなるし、何より面積的にきつい。いっそ通常の攻撃魔法行使のように空気に術式を展開し、一種の儀式場を築くという手もないではないが、その手の儀式場を築くには知識も足りず、また村の人全員を治すようなものとなれば、魔力の使用量が半端ではないし、イギリスの魔力溜まりを使うという案もあるが、そんなもの使用許可がでるはずもない。そもそも試験的に個人に試した儀式魔法もどこか一歩詰まっている感じがして、成功しないのだ。せめてそういった実績があれば、許可も出るかもしれないが、それもないために不可能。

まだまだ足りないのだ、知識が。

それにそろそろ、おじいちゃんも僕の研究を諫めることが多くなってきた。

僕は知識は並外れてある。しかし、その一方でその知識に見合うだ

けの実技ができないのが現状なのだ。それでも優に一般の生徒どころか教師すらも超える術式展開の速度且つ精密さを誇っているのだが、知識と吊りあってない、さらに僕も魔法学校の生徒なのだからその一員として実技にも励みなさい、とおじいちゃんは言う。ただでさえ、最近はずますます個人授業と称した、教師への実地的な質問に充て、授業とその単位を免除してもらっている身なので、事実なだけに、あまり真つ当な反論は用意できず、石化魔法の研究と英雄の息子という肩書きをゴリ押しにしていた。

しかし、そろそろ限界だ。

術式の構成力には自信があるし、今の知識を最大限使い、最善の術式を構築できている、という自信もある。

知識だ、知識が足りない。

足りないのは知識。有する知識が増えれば増えるほど手数は増え、術式構成の幅も広がる。

貪欲な知識欲が僕を駆り立てる。

どうすれば知識が手に入るのか、僕は悩み考えた。

そこで考え付いたのが、メルディアナ魔法学校にないなら、どこかに求めればいい、という結論だ。しかし場所も知らないアリアドネーにその知識を求めるわけにもいかない。ならば民間だ。メルディアナ魔法学校は場所が場所だけに、強力な魔法を有する禁書はあるものの、悪書、すなわち、あまりにも非人道的な魔法の為に禁書になった、と呼ばれる類の悪書がない。

そういったものは、民間に流れているのではないだろうか。もしくは流出しないようどこか一箇所に封印されているか。

手段を説いている場合ではない。僕の貪欲な知識欲、さらに石化魔法解呪のためと言う体のいい免罪符が僕を後押しする。そもそも、悪魔のかけた石化魔法だって通常の術式とはかなり異なる、いわば悪書に収監されているようなものはずだ。それが通常の癒しの術で治せると言うのか、甚だ疑問符が残る。悪魔がかかるような禁術のことを僕はよく知らない。それを悪用する気など毛頭ないが、それらを構成する術式構成因子とその掛け合わせ、またその結果、それらの知識が欲しい。

それらの知識を得るには悪書と呼ばれる禁書ないしはそれがかかれた呪物が必要だ。

民間、しかも相当深いところまで潜り込まねば、手に入らないだろう。

それに金も必要だ。

現状、僕の生活は寮頼りだ。もちろんネカネ姉さんに面倒を見てもらうことは初めから拒否した。そのため寮母さんに面倒を見てもらう形になっているが、そんな生活の中で自由に出来るお金はない。欲しいものがあれば、おじいちゃんにねだれば、買ってもらえた。といっても魔法品の類しかねだったことのない、おじいちゃんからすれば可愛げのない子だっただろうが。

呪物、悪書が欲しいです、とまもなく六歳の子にねだられたら、おじいちゃんはどう思うか。

そんなの決まってる、即効拒否だ。

ならば……………

ならば……………どうするか。

僕はお金と、呪物、悪書を買う方法を考え始めた。

祖父と孫たちと

メルディアナ魔法学校長 side

正直、最初にアリナに会ったときの印象は“異常”の一言じゃったと思う。

あまりにもアリナは賢すぎた。わし自身、悪魔襲撃事件以前は、魔法学校の校長という本職もあって、アリナが物心ついてからは、2、3回会ったぐらいじゃったが、そのときは大人しい子じゃ、と思っただぐらいじゃった。

しかし、実際出会って早々、カマかけるわ、そこから真相に辿りついてしまうわ、で向こうに主導権を握られっぱなしじゃった。しかも向こうはまだ四歳の子供。愛くるしい容姿で考え込む姿は、背伸びしている印象しか受けなんだが実際はあの子の頭の中では大人同然の考えがめぐらされていたのじゃろう。そのことにわしは、ふと薄気味悪いという感情が頭の片隅をよぎった。まもなくそのことにわしは後悔と自己嫌悪に見舞われた。

目の前で布団の中にこもり、丸まる姿はまさしく“子供”のものだった。

その小さな膨らみはわずかに震えており、わしは自己嫌悪に頭を壁

にぶつてなくなつた。何を馬鹿な事考えとるんじゃ、わしは。この目の前の子供は、確かに賢い。だがそれだけじゃ。賢いだけで精神は未熟な子供のままじゃ、それに対していたわることもせず嫌悪を覚えるとは一体なにごとじゃ、と。

その小さな膨らみに励ましの言葉をかけた。じゃが、それはアリナの激昂を引き起こした。その拒絶は感情だけの否定ではない、とわしに思わせた。さらに癩癩に触発されるように怒涛のごとく吐き散らかされるわしやナギへの恨み節。

それはどうしようもなく正しかった。誰がどう見ても客観的にそれは正しかった。理路整然とし、何かが壊れたような表情でわしに皮肉を浴びせてくる。わしはただそれに耐えるしかなかった。自己嫌悪がわしを押しつぶしそうじゃった。

そうじゃ、何が祖父じゃ、誰が祖父じゃ、何が父親じゃ、誰が父親じゃ……………わしらは孫に子供に何もしてあげられていなかった。ナギは仕方のない事情があつたのかもしれないが、わしのはただの怠慢。ナギがいらないのならわしが気にかけてやるべきじゃつたのだ。わしには言い訳することすら許されていなかった。

ふと、アリナの吐露の中に混じつた言葉にわしは考えさせられた。

この子はあまりに聡過ぎる、それ故に苦しんだじゃなからうか。

今すら言い訳する気はないが、ネギの父をあこがれる様子を見て、わしはアリナに接することに大した緊張はなかった。じゃがアリナの話を聞かされた今思うと、ネギの憧れが、正当なものであったかと問われれば、首を振りそうになる。

ネギやアリナはそもそも実の父親の姿すら見てはいないではないか。すると、ネギの憧れは他の人から伝え聞いた話を自ら想像し、ナギの姿を偶像化した上で出来たものに過ぎない。それは他の子供が父にあこがれる姿とは異なるものじゃ。

そういう父への憧れの過程は、父の厳しさを知り、やさしさを知り、父の在り方を知った上でその背を追いかけていくものじゃなからうか。

ネギのそれは物語に登場する英雄に憧れるようなもので、決して一般に言われる父への憧れではない。父の姿すら見たことのないのだからそれは確かじゃ。なまじその英雄が父という身近な単位であったから、そのことがネギの苛烈な憧れへとつなげたのじゃろう。

じゃが、そのことにわしは首を振りそうになるもネギの憧れを否定までは出来ない。

確かにそれを一般の父への憧憬と首肯するにはいささか歪んでおるし愚かでもある。

じゃが、その愚かしさ肯定されるが、ある意味子供の特権じゃなからうか。子供に理を説き、正しさを求めるにはいささか厳しすぎる。むしろ愚かしさを肯定し、育てゆくが親の常であり、子供の常じゃろう。

しかし、アリナはそれが許されなかった。理を説かれるまでもなく理を悟り、行動に正しさを求めた。愚かこそが子供に与えられた役目じゃというに、天がこの子に与えた才は無常であり、それゆえアリナは自身の精神的な習熟度とのギャップに苦しんだんじゃないかなうか。

全ては想像でしかない。しかし目の前のアリナを見る限りわたしにはそれが正しいように思えた。

このままでは壊れる。わたしはそう思った。この子は弱く脆い。なればこそこの子は自身の精神的な支柱を他に求め、依存することで自らの理性と現実との苦しみに耐えてきた。その精神的支柱がなくなつた今、どうしようもなく聡すぎるこの子の頭脳が理性的な行動を求め始める。もしかすれば、この子は精神的な安息すら理性に追われ、終始実益的な行動を自らの頭脳に求められているんじゃないかなうか。この子が加減を知らぬ子供ゆえに理性は行き過ぎた行動を求めるんじゃないかなうか。

わたしは声を発した。

罪深きことを言った。

この子が聡すぎるのなら、あらかじめ誘導してやればいい。アリナの理性にも希望を見せるように、“英雄の息子”としての自覚を持たせ、それとなくわしが制御しやすい方向に誘導していく。

このまま壊れるよりか、希望を見せ、それに努力させるほうがましじゃ。ましてや魔法学校に入学させれば、周囲の環境も変わり、この子価値観自体にも影響を及ぼせるかもしれない。一人であることと、友人がいることはあまりにも違う。

願わくば、そうした“普通の生活”の中でアリナにとって価値のあるものを見つけてくれればいい、わしはそう望んだ。

魔法学校に入学して。

わしの望んだこととは逆方向に因果は回り始めた。

“英雄の息子”としての自覚を持たせたのはあくまで希望を持たせる手段でしかなかった。彼の賢さは確かに“英雄の息子”として遜色ないものじゃったが、潜在的な魔力量はせいぜい高位の魔法使いくらいで、兄であるネギの圧倒的な魔力量に比べてしまえば“英雄

の息子”としては物足りんものじゃった。

予想通り、というべきかネギの方は隔絶した才能からか、幼馴染のアーニヤ以外は生徒は誰も寄り付かんかった。それはそれで問題じやが、これはもう仕方のないことじゃ。諦めるしかない。

わしが希望をかけていたのは、アリナのほうじゃった。アリナには“英雄の息子”のブランドこそあるものの、隔絶した才能とはいいがたい。逆に“英雄の息子”というブランドに対して不十分なそれは、関係をつくることの気安さを醸せるものじゃとわしは思っている。英雄の息子ならば周囲の子からも憧れの的じゃろう。あからさまな特別待遇で近づきたいネギよりアリナのほうがとっつきやすいと周りの子も思うはずじゃ。それをきっかけにして友好的になってもらいたい。アリナも良くも悪くも理性的なので、周囲から浮くようなことはすまい、とわしは見誤っておった。

わしは遠見の魔法でアリナの様子をうかがっておった。じやが、その様子は陰悪に尽きる。もうあからさまに近寄るなオーラを発しておった。

さらに最初の授業中も形ばかりの意欲は見せていたが『プラクテ・ビギ・ナル“火よ灯れ”』の魔法の入り口にあたる基礎魔法を皆が得意げにやっている様子を見て、驚きの表情を見せた後、薄くじやが軽蔑するような色を表情の端に浮かべた。大きな火を着けたネギにも冷たい視線を送るばかり。

その後も授業は続いていったが、もう日を増すごとに、アリナの不機嫌さが増していった。

そして、ついに一週間が経つと、魔法学校の図書館で授業をボイコットし始めた。

わしは頭を抱えた。まずい、あの子が授業内容に不満を持っていることはもはや疑いようのない事実じゃ。聡すぎる、聡すぎる、と思っではおったが、まさかこういう点で周囲と隔絶するとはいささか浅慮にすぎた。図書館で読んでいる魔法書から見ても、とても今の授業の進度に合っているものじゃない。というか、来年再来年にならないとわからんような本を読んじよる。しかも魔法書から書き写しておるのは、どう見ても、術式構成グループとかの単位じゃなく術式構成因子のほうじゃ。そんなもん来年再来年どころか学校卒業したって使うかどうか判らんような知識。辞書で魔法書に載っている知識と照らし合わせながら、術式構成因子を調べちよる………いたい何処の学者じゃ。

あの子が、この魔法学校に来る前から魔法の勉強をしておったことは知っておったが、まさか術式構成因子について入学前から見識があったとは恐れ入った。せいぜいネギが練習用の杖で魔法を練習しておるのに少し魔法の知識がある程度じゃと予想していた。そもそも魔法矢の攻撃ができた時点で気付くべきじゃったが誰が術式構成因子まで手をつっ込んでいると思うじやろうか、しかも四歳の子供が。

本気じゃ、あの子は本気で悪魔のかけた石化魔法の解呪のための術式を組み立てようとしている。確かに従来にない悪魔の魔法の術式を解くために新しく魔法の術式を組み立てねばならん。実を言えば、その組み立てが非常に面倒であるからあの石化魔法は解けないのだ。あれだけ強力なのじゃと、研究しながらでも、術式を組み立てるのに数年、もしくはそれ以上かかるかもしれん。いくら“正義の魔法使い”と自称する奴らでもそこまではやってられん、と研究を買って出る者はいなかった。最近の魔法使いの風潮には思うことがあるが、目に見える実益的な正義だけに飛びつく奴らが多すぎるような気がする、まったくもって正義とは名ばかりじゃ。

しかし、アリナが本気なら本気で困ったことになった。別に研究することを止めるつもりはないが、授業をボイコットされるのは困るし、周りと溝をつくるのも、わしの予定とは大きく外れる。

しかも、あの様子を見ていると思い出すんじゃ。全く重ならんが十歳で魔法学校を中退したバカ息子を。バカ息子は魔法学校の窮屈さに耐えかねてじゃったが、アリナの場合魔法学校のレベルが低すぎて、という正反対の理由。何にせよ英雄のバカ息子に続いてその息子まで中退というのははやメルディアナ魔法学校の恥じゃ。過去のことも思い出しながらわしは図書館にこもるアリナに授業に出るように懇願した。

その翌日、アリナが出席したことではっとしたのも束の間、出た授業を担当する教師の半分以上の面目をつぶした。

何しとるんじゃ、わしをそんなに困らせたいんかの……………まあ、
困らされても強く文句の言えないのがわしの立場じゃが。

この一件をきっかけにアリナは周囲に“英雄の息子”として溝をつくり、また教師陣も高評価と、毛嫌いする者の二つに分けた。毛嫌いする人間が全体教師の三分の二もいて、なんというか授業の様子を見聞きしていたわしから見れば、優劣をばつさり二つに分けられた拳句、アリナに自らの学校の恥を突きつけられたような気分じゃった。まこと情けない。今すぐと言うわけじゃないが、将来的には学校人事も考え直さんとな……………

そして、アリナ擁護派を得たおかげというか、アリナの個人授業を許可することにした。あの子をこの学校に留まらせるためには仕方ないじゃろ、どうも後手にばかり回っておって、反応を受動的にせざるを得ないが、もう諦めるしかなかった。もちろんアリナを毛嫌いする教師は猛烈に反対したが、じゃったらアリナのわからないところを教えてきてやってくれ、と皮肉で返したら黙ってしまった。まあ、同情する価値もないが。

そうして一年と半分が過ぎたあたりで、アリナが教師とともに校長室に殴りこみに来た。

禁書庫を開けろ、と。

どうにか最近は状況が落ち着き始めた折、一体なんと無茶なことを言うのか、と思ったものだが、そろそろ来るんじゃないかと言う予感もあった。ときどきアリナの様子を遠見の魔法で見ておったが、まあその読破スピードが早いこと早いこと。初めのほうはじっくりと読んでいたのに、冊数を重ねるにつれ、どんどんつまらなそうな顔を隠そうとはしなくなってきたのじゃ。あ、なんか授業のときと似ているな、とおもった矢先にこれじゃからわしも参った。

曰く石化魔法の解説にはまだまだ知識が足りない。しかも教師まで連れてきたあたり用意周到といふかなんというか。かといってわたしには味方もおらん。まさかあの能無しの教師どもを味方につけるわけにはいかんし。そして良識的な教師も教師で、アリナ擁護派の内輪で解放してもいいんじゃないか、と結論が出ている始末。結局アリナの、問題に答えられたら、という賭けにのる羽目になったのじゃが、すらすら答えるアリナに最後のほうはとことん意地悪な、答えのない問題をぶつけた。がそれすらも持論をもってはつきり答え、否定することも出来たがさすがにそれはできなかった。まあよくもここまで賢くなったもんじゃ、とわしも素直に認めるしかなかった。

ここまでくれば、もう周りの友好がどうだの言うつもりはない。おそらくこの子は遠くない将来石化魔法の解説に成功するじやろう。それに火をつけたのはわしじゃ。本当ならば同年代の人間と仲良くしてもらいたかったのじゃが、村の人を治してそれを誇りに思うのもまたひとつの結末じやろう。わし自身も積極的に応援しようと決めた。

じゃが、その一方でわしにはもうひとつ頭の痛い問題があった。

アリナの兄、ネギのことじゃ。このふたりの兄弟は、ほんにわしを困らせたらしい。この兄弟が入学してから二年、わしの気が休まらんのは、この二人が交互に問題を起こしてくれるからじゃ。この一年半落ち着く暇がなかった。

特にネギは、アリナと違って、四六時中危うい。アリナはたまに問題を起こす程度じゃが、ネギは目を離すことが出来なかった。ネカネのおかげでだいふ助かっておるが、こっちもこっちで、取り憑かれたように朝から夜まで魔法の勉強をしておる。アリナは自制と言うものを知っておるから、誰が何を言わなくても規則正しい生活をおくっておるが、ネギは放っておくと、自制を失って魔法に励む。その執着ぶりや、ネカネがいなければとつくのとうに倒れていたじやろう勢いじゃ。

しかも、初めての魔法の座学のテストで、全てのトップにアリナが躍り出た、と知ったときのネギはひどかった。おそらく兄の自負もあつたのじやろう。ネカネやアーニヤの言うことも聞かず、ひたすら机に向かい、杖を片手に魔法に励んだ。その危ういひたむきさに、わしもネカネに対応を迫られ、ネギの食事に睡眠薬まで入れねばならなかった。アリナの全テストオール百点なんて成績を授業中暴露した教師が恨めしい。その教師も純粋に“英雄の息子”の才能を生徒に披露し、生徒を刺激したかっただけのようじゃったが、そんな全部百点なんちゅう次元違いの成績を開示したところで、一般の生徒など辟易するだけじやろうに。結果刺激したのは同じ“英雄の息子”のネギだけじゃったし。いい迷惑じゃった、ネギの周りの人間

の。

というか、座学でアリナに勝とうというのがまず間違いじゃと思う。ネギも天才と言ってもいいほどの理解力はあるが、アリナは常軌を逸しておる。それこそ“英雄の息子”という言葉でしか表現し得ない才能だった。じゃが、ネギもネギで潜在的な魔力量は常軌を逸しておる。そこがネギの“英雄の息子”としての才能じゃ。わしはそのことをネギに懇々と説いた。やはり座学は手が届く範囲にあると思っているのか、納得した様子はなかったが、無茶な勉強をするとはなくなった。その態度を見て、一度アリナに頼んで差を見せ付けてもらおうかとも思ったが、ただでさえ二人とも多感な時期じゃ。いくらネギのほうに潜在的な魔力量というアドバンテージがあるとはいえ、兄としての自尊心がその差にどう反応するかわからなかったので、自重しておいた。

しかし、アリナには実技が苦手という事実があった。

あるとき、アリナを快く思わない教師が、珍しく顔を見せたアリナとネギを横に並べてその差を他の生徒にひけらかすという辱めを行った。全く教師にあるまじき行為にわしも怒りを抑えきれなかった。じゃが、競争させること自体は悪いことではない、という名分の下にそんなことをやったのでわしにも処罰でしなかったし、そもそもアリナ自身が全くに気にしておらん。

その理由を聞き、わしはなるほど、納得するしかなかった。

そのときの授業というのは、いかに早く正確に魔法を発動させるか、という内容じゃったらしい。そしてネギは無詠唱ですぐさま展開したのに比べ、アリナは無詠唱でこそあったが、時間は普通に詠唱するのと同じくらいじゃったらしい。そのことを教師はあからさまに罵ったそうじゃ。しかしここで疑問点があった。何故無詠唱なのに普通に詠唱するのと同じくらい時間がかかったのかじゃ。この子は実技を苦手としておるがいくらなんでもそこまで苦手ではないじゃろう。それがアリナが落ち着いている理由じゃった。どうもアリナは普通の授業程度で魔力をむだにしたくなかったために、大量の補助術式を織り込んで魔法を発動させたらしい。その量は、普通に使う魔力量の三分の一じゃと言う。

この子はきつと表面上の事象にしか目を向けん教師を嘲笑っておったのじゃろうな。その場でそれを目にしてもそれに気づけなかった教師の低能さに呆れていたのかも知れん。

問題だ、と騒いでいたアリナ擁護派にアリナ自身がそのことを説くことで一気にその騒ぎは収まった。代わりに出てきたのはそんなことも見抜けず、またしたり顔で罵った教師への侮蔑だった。その教師はやめていきおった。嘘じゃとかなんとか吼えていたが結局プライドの高い教師は日増しに冷たくなる自分への冷たい視線に耐え切れなかった。自業自得じゃ、まったく。

じゃが、裏のことはどうあれ、そのことがネギの自信につながったようじゃ。前回から引きずっていた座学への極端な傾倒もなくなっただようじゃし。とはいえ、次のテストでまたオール百点を取り、成

績トップを奪られたのは悔しかったようじゃが。

この二人の兄弟は、あの悪魔襲撃事件から良くも悪くも変わった、変わってしまった。

兄であるネギは『立派な魔法使い』になるため、父の背中を追うために。

弟のアリナは、村人たちにかけられた石化魔法を解呪するために。

二人が二人とも大きく……………歪んでしまった、わしは少なくともそう思っておる。

いつか、いつか来るじやろうか。

二人が普通の子供のように笑える日が。

多くの人間に囲まれ、笑い合える日常が。

幸せを、掴むことができるじやろうか。

二人の目的は遠く、気高く、道のりは長い。

それを思うとわしは切なくなる。

じゃが、わしは願おう。

願うくらいしか能のないわしは、あの子達の幸せを祈ることしかできん。

いつか——あの子達が幸せになれますように。

どんなに汚くとも

僕は石化魔法の研究のため、一番信頼できそうな教師に頼み、教室を貸してもらいそこで石化魔法の研究をしていた。いわゆる研究所みたいなものだ。狭い寮の中で研究するわけにもいかなかった。そして必然的に僕の研究成果はその教室にまとめられていたのだ。

そして、某日。

その研究成果をまとめてある教室に管理していた——貸してもらった際に頼んだ——教師が、僕の研究成果のことごとくが切り刻まれているのを発見。

すぐに僕に連絡が飛び、駆けつけた僕の目の前にあったのは、研究資料や魔法具の無残な姿。

僕はそれに怒り狂い、「こんなことをやったのは誰だ!!!」と叫びながら壁に拳を打ちつけ、暴れまわった。すぐに連絡をくれた教師が、落ち着くよう促しながらも、僕を取り押さえた。それでも怒り収まらない様子の僕は支離滅裂なことを叫び散らした。

その騒動から、他の教師も駆けつけ、その光景を目の当たりにする。

早朝だったために、事態はそのまま職員会議へと持ち込まれた。

警備の人間に確認をとったところ、昨夜不審な人物、物等はなく、外の監視カメラにも特に不審な点はない。魔法による偽装がないわけではないが、その可能性は極めて少ないだろう。この事態が発覚したときに初めに確認を取ったのがメルディアナ魔法学校に保存されている魔法具や魔法書の物的損失の確認だったからだ。被害はなし。つまり、この事態において被害を受けたのはアリナの研究資料のみ。その嫌がらせの為にわざわざ外部から魔法による偽装までして来る理由がないのだ。

職員室に漂う嫌な空気を読まずにアリナを毛嫌いしている教師が、
「たかが子供の研究資料ごときどうでもいいじゃないか」との旨の発言がその口から飛び出した。「お前たちがやったんじゃないのか！！？」激昂したのは若い教師だった。アリナに近い教師陣はアリナが村人の石化の研究を行っていることを知っている。その健気な姿を知る身として、それを軽んじるような発言は看過しがたいものだった。校長の諫めもすでに遅い。

「何の証拠があるんだ！？」

「お前たち以外の誰がやるって言うんだ！！！」

「言いがかりをつけるな！！！」

一瞬にして職員会議は、罵詈雑言の嵐。もはや会議の体すらなくなしておらず、ただただ口汚く相手を罵りあう泥沼状態にまで陥った。日

ごろから常に水面下にあったアリナ擁護派とアリナ倦厭派の亀裂がここにきて表面化した。

それぞれが譲れない自らが正義と信じるものがあるからこそ、その罵りあいには激しかった。その正義は虚飾と矜持に塗れた汚いものだ。英雄の息子だのなんだの言うことこそ、正義の一要素である平等と公平に欠けていることすら理解していない。まあそれでもアリナ擁護派の教師のほうに認めるものを認めている分まじだろうが、アリナに過剰な期待をかけている分、“正義の魔法使い”と名乗るにはいささか問題がある気がする。

「やめんか！！！！！！！」

ビリビリッ、と空気を震わすような校長の一喝でそのくだらない罵りあいに終止符が打たれた。

校長が強引に場をまとめ、この件について、魔法で調査することでその場は終わった。

しかし、アリナの研究室はもちろん、その周辺からもこれといった証拠は出ず、魔法具で調べ上げようとした残留思念でさえアリナが前日研究していたものしか残っていない。何の進展も見ぬままに一週間が過ぎた。

その経過を遠見の魔法から見守っていた僕は、校長室に向かう。その表情に怒りを貼り付けながら

「……………犯人は誰かわかりましたか？」

剣呑な表情で校長室に入室した僕におじいちゃんは疲れたような表情で出迎えた。

「いや、目下調査中じゃな」

極めて事務的に言う。

「何、大丈夫じゃよ。すぐに——」「これといった証拠もなく、残留思念を読み取る魔法具すら使って調べたと言っのにこれ以上進展があるというのですか——」——知っておったのか」

「はい、僕の今までの成果をすべて壊してくれた奴が知リたかったですからね……………！」

僕は憎悪とすらとれるような、険のこもった声で吐き捨てる。

「やったのは、僕を疎む教師の誰かでしょう？ 僕の研究資料以外、これといって被害は出ていないようですし、嫌がらせ以外の何者でもないですよ、これって」

「いや、そうとは——いや、そうじゃの。その可能性が現状一番高い」

苦虫を噛み潰したような顔で、校長も憤りを抑えられない様子だ。いつもの好々爺のような雰囲気はなく、声も不自然に平淡なものになっている。

そしてその感情を振り切るように首を振り、次に張り付いていたのは心底申し訳なさそうな感情だった。

「すまんの、わしの管理責任じゃ」

頭を下げる校長に僕は眉ひとつ動かさなかった。硬直する表情をほぐすようにひとつ息を吐いた。

「……………研究資料がなくなった。これはもう過去のことです、それよりもこれからどうするのか、僕はそれを話に來ました」

ただ厳しい表情は変えぬまま言い切る僕におじいちゃんは怪訝な色を浮かべた。

「これから、じゃと？」

「はい。一つ言わしてもらうなら、ただでさえ低かった信頼は今回の件でほとんどなくなりました。このまま、ここに再び研究所を構えて、再び荒らされる、ということがないとは限りません。あなたは厳密に管理するというのかもしれませんが、そんなこといわれたところで、信頼などできるはずがない」

おじいちゃんは何もいわず口惜しげに皺の彫りを深めた。

「具体的な要求としては、新しい研究所を学校外への設置。さらには今回僕が被った被害の賠償として管理責任のあるあなたに金銭を求めます。と言っても小僧ごときの研究資料にどれくらいの価値を認めるかはあなたに任せます。研究所の設置についてはあなたの職務から外れますが、保護者を自称するのならそれぐらいはやって当然のことだと判断します」

わずかに葛藤のようなものが、能面じみた表情に浮いたが、すぐに

それを消した。それは子供を遠くに離すことへの葛藤なのか、しかしどちらにせよおじいちゃんへの信頼の損失を自覚しているからかそれに納得せざるを得ない。

この人は基本的に善人なのだ。その善良さ今はせいぜい利用させてもらおう。

僕の目的は一つ、そのためならどんな手段もいとわない。

あの日誓ったではないか。

壊れるのなら、壊してしまえ、と。

壊れた自分に罪悪感など必要ない。だからそれを感じる自分はどうでもいいものなのだ、否どうでもよくなければならない。

だから僕はどんな酷なことでも言える、言ってみせる――

――！

「ああ、それと研究所についてですが、これは研究所にかかるであろう費用を金銭でお願いします」

「なん……………じゃと?」

「つまりですね。あなたが用意した研究所だと監視とかあるいは僕をよく思っていない教師に伝わるかもしれないじゃないですか。二の舞はごめんなんです。そちらは金銭を用意するだけ。研究所の準備は僕が行います。正直場所知られたくないので「待て、待つのだよ!」……………なんですか?」

「つまり、お前さんはわしも信用できんと言うのか? わしがお前を快く思わない人間にその場所をもらすかも知れん、とそう言いたいのか?」

「何を聞いてたんですか、あなたは。信頼できないって最初から言ってるじゃないですか。耳が遠くなりましたか」

おじいちゃんは啞然としていた。信頼できない、その言葉は最初から聞こえていただろう。その驚きはやはり徹底した不信による行動だろう。言葉ほどにはその不信を信じていなかったのかもわからない。実際行動として示されると改めて驚かされる、そういうことか。

「だ、大体、研究所の手配など子供にできると思っておるのか!？」

「ああ、年齢詐称薬でも飲めば一発でしょう。身分証明も認識魔法を操ればいいかと」

見苦しい言い訳ににべもなく返す僕におじいちゃんは口をあんぐりと開けていた。

「ああ。此方の要求はそれくらいです。なるべく早くお願いします」

そう言っ僕はおじいちゃんに背を向けた。

「待て！！ わしがそんな無茶な要求呑むと思つておるのか？」

「損害の賠償は額は小さくても、職務上の義務。研究所の準備は保護者の義務。ちなみに一般にあるような保護者と子供間の信頼はなに等しいので面倒は見ないでください。保護者は生活に必要なお金を子供あげ、子供はそれを使う。そういう事務的な関係が一番でしょう、僕たちは」

そう言つて今度こそ僕は校長室を出ようとする。

その手前、一つだけ言うことにした。

「あなたが、それでも僕を思ふのなら、僕の好きにさせてください。僕が“幸せ”になるにはそれしかないんです」

漏れた言葉は、本音の吐露だった。

今回の一件は全て僕が“仕組んだ”自作自演の喜劇だった。

感情に色塗られた僕の行動など全ては後付け、物語の脚本でしかない。そして僕は決められた台本に沿い忠実にそれをなぞり、演技を終えた。この台本での僕の主目的は言わずもがな、悪書、呪物を買うための費用の調達。

魔法具を作って売ることも考えたが、術式を刻むのも、魔力を込めるのも、研究の片手間にやるには面倒が大きすぎる。その割には原材料費などもかかって旨みも少なすぎる。

まとまったお金を手に入れるためには、やはりおじいちゃんに強請るしかなかった。

バカ正直に言ってもくれっこないので、悪辣な搦め手を使った。アリナ擁護派とかアリナ倦厭派とか勝手に割れていてくれたのが、上手く利用できた。僕のことを悪く思う人間ばかりでは、こんなにうまくは事は運べなかっただろう。その一点は僕を擁護してくれる人間に感謝してもいい。

僕の狙いはほぼ達成できた。自分の研究資料を切り刻むなんて考える奴はいないだろうし、疑わしい奴なんてたくさんいる。うまいこと疑いを被せて、僕を擁護してくれる教師の皆さんとの対立を煽り、僕を完全な被害者に仕立て上げる。資料を切り刻んだときも多数の偽装をしたから物的にばれることもない。

そして、証拠も見つからず、その怒りが管理責任のあるおじいちゃんに向かってもなんら不思議はないだろう。研究資料の賠償と学校外へ研究所を設置するための名目、それに伴う資金の引き出し。要求だけでなく最後に僕の本音も漏らしたし、おそらく大丈夫だろう。ふと、自分のやっていることの悪辣さに、罪悪感を感じることもある。

だけど、僕は立ち止まらない。

この胸を蝕む感情など無視する。

僕を形骸するものなど全て捨てて壊してやる。

子供ゆえの愚行。

騙された相手への理解なんてしてやるものか。

ゆえにこそ、この胸の痛みは、悪辣な行為をする自分への怒り、憤り。

しかし、止まる意志も理由もない。

どんな悪辣なことだってやってやる。

手段は問わない、善悪も問わない、僕は自分の中の常識を壊している。
こつ。

そうして得られるものがある、と僕は信じているから。

この目が見るものは、この手で掴むものは

「つつつ！　くそ！！！！！」

僕は“研究所”の奥で悪態をつき、苛立ち紛れに拳を振り下ろした。

拳は赤く擦り切れ、しもやけに血が滲む。熱くなった頭に手を押し当てると、ひんやりとした感覚が額を伝わり、煮詰まった思考がわずかに明瞭になった。いき詰まりをほぐすように、吐く息は白く、僕はそのことに首を振った。

集中していたせいか、体を包む冷気を今更ながらに認識し、体をブルツ、と震わせた。

なかなか成功の兆しの見えない現状に、僕は段々と焦りを感じ始めている。長丁場は予想していたことだ、問題ない、と割り切ろうとしてもうまくできない。

焦燥感が身をはやらせる度、僕は限界を痛感する。

わかってはいるのだ。僕の心がどうしようもなく悲鳴をあげはじめている事に。

僕は周りを見渡す。

薄暗い暗闇の中、灯る魔法具のほのかな明かり。洞窟の壁の端に積み重ねられた紙束の山。呪物・悪書がまとめられている箱型の戸棚。そして、ネズミを象った石像の数々。

狂ってる、僕は改めてそう思う。僕が居を構えているこの場所は、到底研究所と呼べる環境じゃない。資料の数で言えばそう言えるが、この研究以外の生活観を度外視したこの環境は悪の魔法使いの根城としか言いようがない。ネズミの石像だってそうだ。あれらは、悪魔のかけた魔法の術式を逆算するために使用した哀れな実験動物たちだ。

具体的には悪魔のかけた術式を探り探りに石化魔法として動物にかけ、いくつか開発した、治療用魔法の反応を見て村の人たちの石像との反応を比べ、広義的一致点から、徐々に狭義的一致点へとしばっていき、正確な悪魔の術式について調べ上げるというものだ。

事実、ここまでは成功し、悪魔のかけた術式については構成因子まで密に判明している。

そして、その上の段に並べられたネズミの像は、僕が逆算した悪魔のかけた石化魔法と同じ術式で石化したものだ。あれらは、今僕が

逆算した悪魔の石化魔法の解呪のための実験台となっている。

だが、そこで僕の研究は行き詰っていた。

そして環境の劣悪さと失敗が相俟って僕は苛立っている。

研究所用の準備資金はすべて呪物・悪書につぎ込んだ。そもそもまともな研究所など用意するつもりはなかったのだ。ただでさえ悪書・呪物なんていう犯罪級のを保管するというのに、校長や教師にばれるような場所に研究所を敷いて、しょっ引かれるのはごめんだった。

そこで僕が選んだのは、魔法学校の近くの山奥の洞窟だった。この山は霊地としてもそこそこ使える土地だ。その霊地特有の空気に被せるように洞窟近辺に認識障害魔法を展開、その場所だけ張っていたら、魔法使いにばれるかもしれないので、薄く霊地全体に術式を漂わせ、認識障害魔法の知覚を阻害する認識障害魔法をかけ、細工した。さらに研究所の入り口には侵入防止用結界を張り、完璧な防御体勢を敷いた。

もはや、魔法使い見習いの所業ではない。まさかそんなことまでできとは思わないおじいちゃんや教師陣にはいまだこの場所はばれていない。

しかし、如何せん洞穴だ。冬は物凄く寒いし、一応明かりを灯す魔法具と連動させて、内部の空気温度を上げてはいるものの、所詮明かりを灯す魔法具の効果を副次的に作用させているに過ぎず、焼け石に水もいいところだった。かといってそれ専用に魔法を使えば、認識障害魔法と、侵入防止用結界に加えてさらに魔力の消費量が跳ね上がる。そうなれば本末転倒だ。

はあ、とため息をつく。

呪物の購入費用は、それほどでもなかった。そういった呪物は副作用として、悪影響があるためにあまり好まれていないのだ。その代わり悪書の値段は高い。足元見たような値段ばかりで、研究に役立ちそうなものを見繕ったところ、ほとんど資金を使い果たしていた。まあ、得られた知識が価値あるものだったので、不満はないが。あまったなけなしのお金は半永続的に明かりを灯す魔法具を買うのに使った。

そして出来上がったのがこの環境だ。

正直言って、もうすぐ七歳を迎える僕にとってはきつすぎる環境だ。しかし、ここ以外で研究することは出来ない。研究は実験動物を使用するという、あまり人道的ではない手法に突入し、悪書の魔法、呪物を解析して手に入れた術式なども正統なものと貴賤なく併用している。資料を眺め、術式の構成案を練るくらいなら学校でもできるが、それ以外の実質的な実験などはここで行うしかない。

しかも。目の前の光景は普通の人間が見たら、気色悪くなるようなものだ。

机の上には、ピンク色の脳漿ぶちまけ、臓器が飛び出たなんとも気味の悪いモノがあった。

石化解呪に失敗したネズミの死体だった。

それを僕は慣れた様子で、手で鷲づかみ、机脇のゴミ箱に捨てる。机にこびりついた残骸は水で流し落とした。すでに机はそれらのこびりついた後で汚れきっている。僕も最初は僕が起こしたことに、思わず胃の中ものを戻したものだ、今では何の感慨もなかった。

狂ってる、客観的に僕と僕のやっていることを見る僕が、空ろに僕の心の中で繰り返しつつやく。

僕は壊してきた、いろんなものを。

壊れきっている今の僕は、はたして本当に僕が望んだことなのだろうか。そう自問するが答えはどこからも帰ってこなかった。

はあ、と再びため息をつく。

最近録に眠れていない。壊れかけた僕の寿命はそろそろ尽きかけているのかもしれない。僕の貌に明かりに浮かび上がる影のように不気味な自嘲の笑みがかたどられた。

不意に、僕の耳元で、電子音が響いた。

魔法による念話だ。電子精霊を介しマホネットにつなぎ、さらにそこから電子精霊につなぎ、魔法術式を通して行う念話だ。これならこの場所が逆算されることはない。最近は音信不通になりがちの僕におじいちゃんが携帯を持たせようとしていたけど、GPSつきのもんを持たされこの場所を探られても困るので、自分で息抜きがてら構築した念話方法だ。もちろん、僕はマホネットを持っていないので、受信専用の魔法術式端末しか持っていないが。

「……………もしもし」

そして、そんな特別な念話方法を使って僕に連絡してくる人間は一人しかいない。僕は不機嫌になりながらも、術式を起動して応答した。

「もしもし、わしじゃ」

「……………用件は？ 今冬休み中ですし、出席日数どうたちの連絡ではないはずです」

愛想のない返事におじいちゃんは何を思ったかしばらく黙り込んでから、返事を返した。

「……………うむ。会ってほしい人がいての」

「……………誰ですか、それ？ くだらない人ならお断りですよ。こっちは忙しいので」

僕は胡散臭げに、暗にお断りだ、という意を含めると、すぐにおじいちゃんは返してきた。

「いや、お前もきつと興味をもつ人間じゃぞ？」

「誰ですか？」

「アリナの父、ナギの所属していた紅き翼のメンバーじゃ。ぜひナギの息子に会いたい、とこちらに来ていてな」

「へえ。紅き翼の誰ですか？」

これには僕も少しばかり興味を持った。その人物は聞いておきたいことがある。

「うむ。高畑・Ｔ・タカミチ、という今現在も悠久の風の中でＮＧの活動をしておる人間じゃ」

「……………へえ」

妙に空いた沈黙をおじいちゃんはどう思ったのか、言葉を継ぎ足してくる。

「いや、お前さんの言いたいことはわかる。お前さんがナギのことを父親と思っていないこともわかっておるよ。じゃが、それでもお前の父には変わりないのじゃ。高畑君、ナギのことをよく知る人物の一人。今まで触れることはなかったかもしれないが、お前の父のナギの性格や人柄に少しは触れてみてもいいのではないかの？ ナギが何を思い、どう行動したのか、知っておいて損はないと思うんじゃないが」

なるほど、理詰めで押さえ込みにきたか。まあ確かにこう言われた、それぐらいに時間を割いても惜しくはない、と思ってしまう。あちらはわざわざ僕たちに会いに、このイギリスの田舎まで来てるわけだし。

「いいですよ。どこに行けば？」

「そうか、来てくれるか。今高畑君は、わしの部屋、校長室におる。とりあえずはそこに来てくれるか」

「わかりました」

しかし、子供らしく振舞うつもりはない。せいぜい、僕の欲しい情報をついてもらおう。

タカミチ side

僕は悠久の風としての活動、さらに麻帆良学園での教師としての仕事の多忙な毎日の合間をぬって、ようやくまとまった休みをとることができ、ナギさんの双子の息子が住むメルディアナ魔法学校に来

た。

ネギ君のほうには幼馴染アーニヤちゃんと一緒に遊んでいたときに会うことができ、今は教えを請われ、軽い護身術程度の戦闘の指南をやっている。そうする傍ら弟のアリナ君との接触を図っていたけど、いつ寮に会いに行ってもアリナ君はいない。

ネギ君、アリナ君兄弟の祖父のメルディアナの魔法学校長に聞いたところによると、研究所を構えてたぶんそこにいるだろうとのことだった。何故まだ七歳にもならない子が研究所を？ と疑問に思うと、その経緯について校長は教えてくれた。

何でもアリナ君が研究（というよりか勉強だと思うけど）していた資料が切り刻まれるという事件が起きて以来、アリナ君は周りに対して不信を強めているらしい。そのことがきっかけで学校の外に研究所を立て、放課後の専らはそこにいるそうだ。とはいっても食事の際は寮に戻っているはずなので、時間帯を狙っていつてみるんだけど、この数日空回りっぱなしだ。かといってネギ君は僕に懐いてくれていて、それを放り出すわけにもいかずに、今までは学校外の研究所に行くのには躊躇があつたけど、会わずに帰るなんてありえないから、校長に再度尋ねに行った。

するとアリナ君はこういった長期休みは寮に帰らなくなることが多々あるらしい事を聞いた。それで寮のほうにはいなかったのだろう。と。ならば食事は？ と聞くと校長がお小遣いをあげ、それでやりくりしているのでは、との話だった。それって保護責任問題じゃない

いだろうか。もしかしたら校長もそのことを隠しておきたかったのかもしれない。というより、七歳で一人暮らしって無謀じゃないだろうか。

僕も心配になり研究所の場所を聞くと、驚いたことに知らない、と言う。

さすがにこれはないだろう、と僕が若干きつい口調になるのを自覚しながら詰問すると、校長はすべて話してくれた。

アリナ君が、父親のナギさん、そして祖父である校長を毛嫌いしていること。

対して村の人に懐いていて、悪魔襲撃事件以来、石化した村の人の解呪のため研究に励んでいること。

さらに、アリナ君が七歳とは思えないほど賢く、学校の成績、特にテストは百点以外とったことがなく、メルディアナ魔法学校始まって以来の天才だということを。

ほかにも校長の祖父としての感情、アリナ君のことをたくさん聞いた。

アリナ君についての話は驚きの連続だった。

そのことについて、校長は、アリナは賢すぎて苦しんでいるのだ、と涙ながらに話してくれた。

僕はそれらの話を聞いて、なんとしてもアリナ君に会わなければ、と思った。正直ネギ君に会った後だったから、アリナ君の苦境は予想の外にあった。だけどアリナ君だってネギ君と同じで年相応の子供のはずなんだ。

賢さという仮面で年相応の子供の自らを偽っている、校長はそう言った。そしてその仮面がもはやかぎりなく本当の顔に近くなっていることも。そこまでになっていても、何もしなかった自分を校長は責めているようだった。しかし、その一方でそれを許容している自分もいると。それはアリナの気持ちを理解しているとともに自分に何が言えるのだ、と咎から結局何も言えず見守ることしかできなかった、と複雑な顔で語った。

だけど、僕ならそんなアリナ君にも何かできることがあるはずなんだ。

紅き翼にいたとき、僕はナギさんにたくさんお世話になった。だからこそ今、僕はナギさんへの恩返しとともにナギさんの子供を救えるはずだ。

そんな僕に校長は言った。あの子は賢すぎるから、理性的に話さなければすぐに丸め込められると。ナギさんが村に預けたという行為だつて遺産も住居も愛情もないそれはどこまでいったつて捨てたという行為でしかなく、どんな事情があつたとしてもアリナの中のそれは変わらない。ただ僕ならその理詰めの事実も少しは解きほぐせるかもしれない。決してナギさんには何か事情があつた、とか真つ向から擁護することはいけない、と色々注意された。ナギさんのことを擁護すれば、ナギさんを憎むアリナ君を否定することになり、警戒されてしまう。

そういうことじゃなくて、アリナ君には何の含みもなく接し、少し話の端にナギさんのことを話してやるだけにしてくれ、と頼まれた。やけに注意が多いけど、それほどまでにアリナ君は賢いと言う。

校長が望んだのは、アリナ君の理性と言う仮面の端を少しめくる程度のことだ。

でもそれだけじゃなくて、少しでもアリナ君のナギさんへの思いも解きほぐせれば、とも分不相応に思った。これまでのアリナ君のことを聞いているから、出しゃばりすぎだとも思ったけど、ナギさんと実際に過ごした僕の我がままとしてそう思うことは許されるだろう。

アリナ君が来た。

しかし、驚いたのはその容姿だ。

似てる、彼の母親である、アリカ姫と。

若干癖毛つぽく刎ねているけど艶やかな金髪、前髪から覗くオツドアイ。ずいぶん女の子つぽい容姿だ。事前に男の子だと聞いてなければ、女の子と間違えてしまうくらいに。よくよく見れば、男の子つぽい凛々しさはあるけど、この子の歳ではそれがまだ前面に出てきていないために一見すれば少し男の子つぽい女の子にしか見えない。むしろその凛々しさがアリカ姫を彷彿とさせた。

ネギ君がナギさんに似た分、アリナ君はアリカ姫に似たのか。

それだけじゃない。

この子、すつごく不健康そうだった。深くはないけど、うつすらと隈がついている。顔色も悪い。それを見て校長が痛ましげに顔をゆがめて言った。

「……………アリナ、ちゃんとご飯は食べているのか。ちゃんと寝ているのか」

「あなたにそれ関係あります？」

髪の毛をくしゃくしゃ、と弄りながら、冷たくアリナ君は言う。実の祖父に対する口調とは思えないほど冷たいけど、これでアリナ君の周りへの不信ははつきりした。

「うむ……………ちゃんと寝て食べるんじゃぞ」

校長はアリナ君の冷たい言葉を半ば無視するようにそう言った。

そのやりとりを見ていられなくなった僕は、校長室の右端にある応接席から立ってアリナ君を誘う。

「はじめまして、アリナ君。僕は高畑・Ｔ・タカミチ。タカミチ、と呼んでくれて構わないよ」

僕は慎重に自己紹介した。この子の目にはアリカ姫を彷彿とさせるような理知的な目の光がある。子供とはとても思えないし、校長に事前に言われていたこともあったので、ナギさんに触れないように、かつフレンドリーな態度を心がけた。

すると、アリナ君は僕の誘いに応じて、わずかに口元を綻ばせ、僕の対面の席に座った。意外に友好的な態度に僕も驚く。

「うむ、じゃあわしは用があるからの」

校長は空気を読んだのか、適当な言い訳をして校長室から出て行った。事前に校長は自分がいては、アリナ君の緊張を招くと言って出て行くと言っていた。なんとも悲しい自己認識だ。その関係をほぐすために僕はこうしてアリナ君と話そうとしている。

「はじめまして、タカミチさん。アリナ・スプリングフィールドです」

席についてから、礼儀正しくお辞儀をする。校長に対するような冷たさを感じないけど、やはり一線引いている感じはある。知らない仲間だから当たり前だけど、その遠くもなければ近くもない線引きの仕方は子供のものではない。子供ならネギ君のように懐くか人見知りするかのどっちなんだけど。

「タカミチさんと言えば、僕の父さんが組織した紅き翼のメンバーですよ？ 父さんとは親しかったんですか」

「え、あ、うん、そうだね。よく面倒見てもらっていたよ」

僕は心構えしていたものと違う態度にどもりながらも話した。向こうからいやな顔一つせず父親の話題に触れてくる。校長の認識は間違っていたのか？ 父親を嫌っていると言っていたけどそうでもないのかな？

「そうですか」

アリナ君の笑みが大きくなる。

僕は少し気を抜いた。なんだ、校長が言っていたほど難しい問題ではないのかも。校長とアリナ君の仲が悪いだけで、ナギさんに対してはあまり含むものがないのかもしれない。確かにアリナ君は大人っぽいけど、これなら、少しは歳相応な態度を引き出すこともできるかも、と。

「じゃあ、そんなタカミチさんに聞きたいんですけど、僕の母親って誰ですか？」

そう思った矢先、とんでもない爆弾を落とされた。

s i d e o u t

「じゃあ、そんなタカミチさんに聞きたいんですけど、僕の母親って誰ですか？」

僕は笑みを深め、会って早々馴れ馴れしい態度をとったタカミチさんの表情に目を光らせた。

案の定と言つべきか、タカミチさんは露骨に動揺した。

「え、あ、あ、ああ。は、母親かい？　母親、あ、えつとあいにくだけど僕は知らないな」

知っている、間違いなくこの人は、僕の母親が誰か知っている。

だとしたら、隠そうとする理由は、そう多くはないな。個人名まで断定することはできないけど、きっと後ろ暗い事情のある人物が僕の母親なんだろう。正直あんまり興味はないけど、知っておいて、損はない。そうだよな、おじいちゃん？

「へえ、知らない人間の反応とは思えませんね。それに息子にも言

えないような母親ってどんな人なんですかね？」

「い、いや僕は本当に知らないんだ」

「そうですね。まあ、僕は捨てられるような子供ですからね。余程不都合な子供なんでしょう。どこかで行きずりの女と間違っても起こして、押し付けられた子供みたいな感じですかね？ いわゆる不貞の子みたいなの？」

目の前のタカミチさんはとても七歳児から出てくるような言葉じゃない暴言に啞然としていたようだ。しかし、僕の挑発するような言葉は、ナギ「スプリングフィールド」を知る人物には耐えがたかったようで、

「ナギさんはそんな人じゃない！！！」

まるで感情だけで言い返してきた。ダメだな、この人。七歳児と思わせないような発言に錯覚したか。先ほどまでの子供を見るような冷静な態度を捨て、こちらと同じ立場、目線で言い返してきた。この程度か、それほどナギ・スプリングフィールドへの暴言は琴線に触れたか？ しかし、こちらの思う壺だ。

「じゃあ、何で捨てたんでしょうね？ 何で明らかに母親を知っているあなたは、母親の名前も教えてくれないんでしょうね？ もし

かして僕の母親は犯罪者とか？ それなら不都合ですよ、だって父は英雄なんですから」

そうカマをかけた途端、タカミチさんは何かを噛みしめるような、そんな表情をした。それは怒りか、苦痛か。いずれにせよ複雑な事情がありそうだ。

つい、偽悪的な態度を捨て真顔でそんなタカミチさんを見てしまう。

僕の母親はどんな人だったんだろうか？

何を思って父と結ばれたのか、何を思って僕を産んだのか。

僕を捨てた父さんに興味はないけど、母親には興味がある。このタカミチさんの態度は何を示している？ 英雄と結ばれた犯罪者について忌々しく思っているのか？ それとも母親にも何か事情があったのか？ 犯罪を起こさなくちゃいけないような？ それとも冤罪にでもなっただけのことを憤っているのか？ 母はもしかして僕たちが犯罪者の子供になるのを恐れて英雄である父のレッテルだけを遺すように僕たちを捨てたのか？ それならまだ理解できる――父ももしかしたらそんな母を守るために

「ツツツツツ！」

思わず舌を噛み切りそうになった。

……… 一体、何を僕は考えている？

啞然とした。なんだ、今の夢物語は。ふざけているのか、現実を何だと思っている。

そしてそんなことをなぜ考えたのか思い至り、拳を震わせるほどに握り締めた。

甘えだ、僕が無意識にあげた悲鳴を、痛みを、逃がそうとして僕は今“母親”という幻想に甘えようとした。

全く論理的ではない。確かにそんな可能性もあるかもしれない。しかし理性は限りなくその可能性を低く見積もる。それを検討に入ってしまったのは、僕の甘えだ。さっきの妄想にも似た希望的観測をうちだしたのは、ただの現実逃避。今更何をふざけたことをしようとしていたのか、僕は。

「アリナ君……… 君は………」

目の前のタカミチさんがそんな僕の様子を見ていたようで、さっき

までの怒りを消し、少し困惑したようにこちらを見つめていた。

少ししてから、何かを恐れるようにしながらも、意を決したように言葉を紡いだ。

「アリナ君、僕は一つだけ君に言っておきたい」

「……………」

「名前を言うことはできない。それをおかしいことだ、と思うのは当然だし、一向に疑ってくれても構わない。けど、君の母親は……！
確かに……！ 誇り高い立派な人だった」

「……………ッ」

やめて、やめてくれ。

そんな優しい甘美な言葉を紡ぐのは。

「君は、確かにそんな立派な人とナギさんが愛し合って生まれた大切な大切な子供なんだ」

「……………う……く」

「僕がこんなことを言うのは卑怯かもしれない。でも言わせて欲しい」

「君をおいていったのは、どうしようもない事情があつてのことだ。ナギさんもあの人も、近くにいないとも君を——愛している」

広がったのは沈黙だった。

夢は甘美にて耽美。どこまでもその距離は縮まることなく、常に一定の距離を保ち、それを追う人間を惑わすようにからかうようにゆらりゆらりと不定形にその存在をちらつかせる。届くにはいつも腕一つ分足りず、それは僕らを嘲笑う。

笑いが漏れた。

なんだ、それだけのことじゃないか。

「父は英雄かもしれない」

「……………」

「僕を捨てたのかもしれない。置いていったのかもしれない。どうしようもない事情があったのかもしれない」

そう、いつもそれらは希望と絶望を生む。

「母は誇り高い人だったかもしれない。母は僕を愛してくれていたのかもしれない」

でも決してそれは、幸せを生みはしない。

前を向くために、希望は、後ろを向くために、絶望は、必要なかもしれない。

けれど、僕は決めたじゃないか、全てを壊してやろう、と。粉々に砕いて、唯一つの、確かな残ったその光だけを目指して行こうと。

だから、

「僕に“かもしれない”はいらない」

そっけいのはもうやめよう。

希望も絶望もいらない。

ただ、僕は、

「ただ僕は、近くで愛して欲しい」

幸せが欲しい。

たった、それだけのことだ。

タカミチさんは、その言葉に、衝撃を受けたようだった。

僕は、今どんな顔をしているんだろう？

けど、吹っ切れたような気がする。ちらつく可能性全てを壊して、僕はただ一つの光を目指して、そこにある確かなものを手にする、してみせる。

「父さんも、母さんも僕を愛してくれるというなら、僕の前に来て言っただけいい、愛してるって。でもそうでないから僕は父さんを恨みます。母さんを恨みます。ただそれだけのことです。ただそれだけのこと……でした」

僕はタカミチさんに頭を下げた。

「ありがとうございます。全部吹っ切れました。僕は村の人の解呪に励みます。善悪は問いません。手段は選びません。ただ僕のことを近くで愛してくれた人に僕は全力を尽くします。見も知らぬ父、母への希望はいりません、壊します」

思えば、母への疑問だってそうだ。僕の心は限界を迎えていた、それはけ口を母に求めた、それだけのことだった。

けど、もう吹っ切れた。壊せた。どこまで可能性しかない、確かなものがない答えに価値はない。抛り所もない。そんなどうしようもないことに悟れなかった。タカミチさんの綺麗過ぎる物言いによろしく、やがて悟ることが出来た。それはある種の理解で、ある種の崩壊だった。

「僕は迷いません。もう迷いません。だから、ありがとうございました」

もう一度頭を下げ、もう二度と振り向くことなく僕はタカミチさんに背中を向けた。

タカミチさんは、何も言わなかった。

研究所に戻る道の途中。

足に迷いなく、胸を張り、肩で風を切っていくその姿はどこまでも誇らしく、彼の周りの風景は、寂しくて。

その姿にかけられる一つの声。

「茶番劇にしては面白かったぞ、英雄の息子よ」

早すぎる邂逅。

運命は予期せぬ方向に捻じ曲がっていく。

訪れる転機、冷たい決意

「……ッッ誰!!??」

前方から気配を感じさせることなく、突然声をかけられて、僕は咄嗟に身を引き、首をめぐらし、声の方向を探る。しかし、唯一人が隠れられそうな前方の茂みに気配はない。

「何処を見ている？　こちらだ」

再びする声につられて視線を上に向けると、枝の幹の上にその声の持ち主はいた。

そして思った。

なんだ、この変態は。

目だけくりぬいた特徴のないのっぺらとした仮面。そして全身一体型のマント。

正体を隠したいだけにしても、この変装はないのではないだろうか。

装飾性をなくした仮面も、逆に不気味だ。しかも、そんな怪しさ一辺倒の人物が頭上の木の枝に足をかけ、幹に気取って寄りかかっているのである。もはや不審者以外の何者でもない。

平時であれば、この変態め、と心の中で吐き捨てるだけでこんな不審人物スルーするのだが、そうはできない理由がある。この場所は研究所からそう離れていないのだ。不審者だからといって浮浪しているわけではないだろう。こんな山奥に何の用もなく立ち入ってくるならそれは真正正銘の不審者だ。

しかし、その可能性が低いだけに僕はよりいつそう警戒心を強める。

「ほお。存外可愛い顔をしているではないか。あの男の息子とは思えんな」

睨みつける僕に気にした様子もなく、仮面男はあごをなでながら、余裕綽々の態度でこちらを眺めてくる。あの男、と言った仮面男に僕は少しだけ眉をひそめたが、表情は動かさなかった。油断してはいけない、こいつがただの変態でなければ、こいつは……………

「しかし、酔狂さでは変わらん。あの洞穴の研究……………見たぞ」

嘲笑うような響きを持った声音に、僕はこいつがただの変態ではないことを確信した。こいつ、まさか霊地の認識阻害結界に気付いた

のか。その点は偶然かわからないが、洞穴には侵入者防止結界を張っていった。研究を見たと言うことは、結界がやぶられたことは確定的な事実だ。

僕はひそかに腰元の杖に手を伸ばす。侵入者防止結界を破ったことが戯れかこちらに敵意を持つてのことなのか判断がつかないが、いずれにせよ、あの犯罪級の禁書、呪物はすでに見られてしまっている。それを公にされれば、僕はオコジョ刑に処されてしまうだろう。

この人物の始末を視野に入れるべきか、僕は迷う。うまく捕まえることができれば、記憶改竄魔法で誤魔化してしまえばいい。しかし相手は僕の渾身の防御結界を破るほどの魔法使いだ。上手く捕まえられるかも判らないし、記憶改竄魔法もレジストされてしまうかもしれない。レジストされずとも、この魔法使いの潜在的な魔法対抗力が高ければ時間がたつにつれ、魔法の効果が薄れることは十分にある。

安全を考えるなら、こいつは今ここで始末するべきだ。

人を殺すのは、初めてである。ネズミで散々やってきたことを人間の枠に入れるだけ。ためらいは……………ない。

手段を選ぶつもりも、善悪を問うつもりもない。

邪魔なら消す、それだけだ。

「ほお。ガキにしては、肝の据わったいい殺気を放つな。お前、何歳だ？」

「……………七歳」

お返し、とばかりに放たれた殺気に気圧され、僕は反射的に仮面男の問いに答えてしまった。精神的アドバンテージはとられているな。あの仮面男、僕なんかよりもずっと強い。この威圧感を鑑みる限り、勝てる気がしない。そう、分析できているあたり、まだ僕は冷静なのだろう。

「……………ビビッてはいるが、物怖じはせぬか。これはなかなかだ。さすが英雄の息子、と言ったところか」

やはり面白がるようにこちらを見続ける仮面男に僕は口を開く余裕などない。ただできることは相手を精一杯睨み返すことだった。

「しかも、この認識阻害結界も七歳にできる魔法ではない。あのタカミチ相手に出し抜いたのもまた……………」

「……………見てたのか」

僕は苦々しく、独り言のようにつぶやく仮面男に水を向けるが、当の仮面男は、何かを考え込むようにわずかに視線を下に向けたままだ。今、ここで攻撃を仕掛けるのもありか、と判断しあぐね、その機会も逃してしまふ。それが絶好であつたかわからなかったから。

そうしているうちに、仮面男は考え事をやめ、少し首を掲げ、腕を僕のほうに向けてきた。

「かかってこい」

「……………何言つてんの？」

「攻撃してこい、と言っている」

最初言葉の意図を図りかねたが、再度紡がれた攻撃的な言葉に僕は杖を抜き身構えた。攻撃を望んでいる、つまり事実上の宣戦布告か。しかし、何故そんなことをする。そもそもこの男何が目的だ？　タカミチとの会話を盗聴したりして、この男は何がしたい？　ただ単純に僕を陥れたいだけなら、研究所にあつたものを持ち出して、学校に提出すればいい。そうまでせずとも、研究所の所在を明らかにするだけでも僕の立場は危ういだろう。いくら緻密な認識阻害結果を張っていても、入念に調べられてしまえば調査の手を交わせるとは思えない。さらにこの霊地も一応は学校の私有地だ。そこを勝手に

に使用したこと、さらには研究所の資金までちゃんと用意されているにもかかわらずここに研究所を構えたことで、僕は弾劾されてもおかしくない。

ならば、この男の目的は？ 僕を悪の魔法使いだとして、正義の魔法使い気取りで僕を倒したいのか？ それならもっともらしい口上を述べるだろうし、もうちょっと正義の魔法使いっぽい格好もあるだろう。

「来ないのか？」

「……………何がしたい？ あんたと戦う理由もないんだけど」

「かかってこめなら、こちらからいく。お前が負ければお前が困るようなことをしてやる。ほら、これでお前も戦わざるを得なくなつた」

どうにも腑に落ちない。しかし、そう考えている場合でもないか、と僕は思考を打ち切った。いざ攻撃するとなるとためらいがあるが、

予備動作なしで、僕は雷の魔法矢17矢を解き放った。杖を振ることも口を動かすこともしない無拍子の攻撃。相手を包囲するように魔法矢を展開。一矢一矢が必殺の威力を持った魔法矢が仮面男に殺到する。

しかし、次の瞬間、仮面男の後ろで影が伸び、影が仮面男を呑み込む。注視する先にその姿はなく、魔法矢は周囲に着弾するも無意味。影の転移魔法か、と思いつくのもすぐに、視線をめぐらせると、僕の正面にその姿が在った。

仮面男は特にあわてる様子もなく、どこから出したのか手には僕と同じくらいの大きさの黒い人形。

それを掴んでこちらを見ると、にやりと笑う気配がしたのは気のせいかな。

「安心しろ。本気でやるとは言わんし、私自らやっては相手にならない。お前にはその人形の相手をしてもらう」

件の人形を地面に放って仮面男は言う。

「なに。それは本格的な戦闘用のものではなく、私が戯れ程度にくったものだ。ちょうどいいくらいだろう」

完全にこちらを侮る発言だったが、こちらもそう余裕があるわけではない。

あの人形からはどこか禍々しい気配がする。戯れ程度、というがなんとなく雰囲気的には今まで僕が触れてきた呪物に近いものがあった。しかし、それら呪物とはどこか一線画している。あれは危険なものだ、と僕は本能と理性から判断を下した。

地面に這いつくばっていた人形がのっそりと四肢を地面について起き上がる。

その隙に僕は先ほどと同じ無詠唱魔法矢を放った。人形が相手なのだ、今度は避けようがない。

しかし、その期待を裏切って、人形はその小さな軀を巧みに動かし、難なく包囲の隙間を縫ってよけていく。

「私が操っているのだ。そうそうの攻撃ではあたらない」

そして、その勢いのまま、僕のほうへ突っ込んできた。小さな体とはいっても、それは仮面男と比べてのことで、僕と同じくらいの大きさなのだ。それが突っ込んできたことに僕は反射的に、風の魔法の術式を組み立て、突っ込んでくる人形との間に杖を滑り込ませる。そのまま体とともに押し切られそうになる杖から一瞬遅れて、風の弾が形成され、その衝撃に人形が軽く吹っ飛ぶ。

「……ふむ」

仮面男が僕の魔法を観察するような態度示すが人形は止まらない。小さな風の弾で吹っ飛んだだけで、人形にはノーダメージだったからだ。すぐさま起き上がって、再度こちらに仕掛けてくる。

しかも、今度は懷から、魔法で出来たものだろうか、なにやら黒く鋭利な刃のようなものをその手に持っている。

僕に戦闘経験はない。しかしだからといって戦闘ができないわけではないのだ。経験はない。ならば、僕がするのはその戦闘ロジックをただひたすら思考することだけ。

条件、力量、相手の能力から戦闘方法を絞る。接近戦を仕掛けてくる以上、詠唱を必要とする中級以上の魔法の行使は難しく、自らの体を用いた近接戦闘は論外。中級以上でも無詠唱の魔法行使は可能であるが、無詠唱、低級の魔法行使と比べるとタイムラグは存在する。よってそれらの選択肢は除外。したがって僕が選択できる戦闘方法は無詠唱の低級魔法による近接戦闘への牽制、および中距離からの多角攻撃が望ましい。しかし、従来の低級魔法では先ほどの魔法矢のように回避される可能性が高く、こと接近戦では使い勝手が悪い。

ならば簡単。その場でオリジナルの低級魔法を創り出せ。

頭はいたって冷静だ。そして僕はその選択を自らの能力と比較し、可能だと判断している。

簡単なことではない。しかし難しいことだと思わなかった。術式構築が求められているのは、威力の高い低級魔法。術式因子がみつちり頭に入っている僕なら造作ない。数式で例えるのなら、64という答えを出すのにどのような過程を経ればいいのか、それを逆算するだけだ。僕は実験のため魔力を節約するきらいがあり、同様の例えを用いるなら、64の答えを出すのに 8×8 するのではなく、 $8 \times 2 \times 4$ などといった回りくどいやり方をしている。直接その答えを出すのと、補助術式を間に入れ答えを出すのでは魔力の消費量が違うのだ。そして普段からそういった回りくどいやり方で頭を捻り、思考を研ぎ澄ましている僕からすれば、術式をその場で作り出すことも難しいことではない。要は64という答えの出し方を知っている人間は8がいくつ含まれているか知っているし、8の中に2がいくつ含まれているのかも知っているということだ。まあ魔法の場合話はそう簡単ではないが。

僕は、思考を加速させ、中級の雷魔法の術式を解体、それを縮小する形で新たに術式を再構築させ、そのまま杖を振るう。この作業は簡単そうに見えてかなりの荒業だ。下手すれば魔力が術式から逃れ暴発するし、実質未だ僕自身詠唱を必要とする中級魔法の術式なのだ。それを格を下げたとしても無詠唱で行使する。ある意味ぶつとんだことだ。

しかし、僕は忠実にその魔法を発動させた。

現出するは、槍の形を模す雷の投擲。その縮小バージョン。威力は本家に比べれば見劣りするが、低級魔法としては充分すぎる。

雷の投擲はそのまま、人形の振るう刃と接触した。集束された雷の投擲がわずかに綻び、光を散らす。それ以上は押さえきれず、刃は融解し、そのまま人形の肩を抉った。

人形は、その攻撃を一顧だにせず、向かってきた。今度は距離が近い！ 攻撃手段はないと思われたが、すぐに手から爪のような刃を生やし、それを振りかざして突っ込んでくる。

戦法はいたって単純だが、それを簡単に払えるほどの戦闘能力を僕は有していない。その単純な戦法に対して、僕は愚直なまでに風の魔法で対抗、迎撃するしかなかった。

我ながらあまりよい戦闘手段だとは思えない。

しかし、どうすればいいのか。

僕は新たに縮小された白き雷を放ち牽制しながら唇を噛む。正直言っ、て、どうしたらいいのか、それがわからなかった。大きな魔法一つ使えば、それで済むとは思っただが、目の前の敵がそれを許さず、

しつこくこちらに接近を繰り返している。そういう手法をとられたときの対処方法が僕にはわからない。有り体に言えば、戦闘経験が少なすぎて、どうやっても、その手法までのロジックがたどりつかないのだ。

そもそも僕は魔法使いと言っても、学者的な、研究一筋の魔法使いだ。そういったお門違いなことを考えろ、といわれても、数字を理解せず、数式をとけといわれている様な物だ。捕縛魔法で動きを封じるか、それとも炎系の魔法で人形自体を燃やすか。思考は幾多の方法を思案すれど、術式を組みながら思考しているせいで、どうにもまともに判断できない。手数はあるが、その手数についての理解が浅すぎるのだ。

しかも、僕が戦闘しているその向こう、仮面の男は人形を操るために、何かを手繰っているように見えるが、それも無造作に見える。それは熟達したゆえの錯覚なのか、それとも片手間の戦闘だからか、まあ両方だと思う。一足飛びに向こうの男に攻撃する手段もあるが、簡単に防御されそうだ。しかし、それならどうする、いつそ思い切って攻撃力の高い魔法を――

そんな思考が戦闘の妨げだったのか。僕は目の前の戦闘を疎かにしながら思考することができるようになるほど器用じゃなかったのだ。紅き焰を放ち、一息入れたそのとき僕は気を緩めてしまった。

広がる小規模爆炎の中から、ヌツ、と黒い人形の頭が姿を現す。その全身は炎が燃え移っていたが、止まらなかった。完全に気を抜い

ていた僕はその対処に遅れてしまう。そしてそれを待つほどに相手は甘くない。

炎を纏った腕で線と化した一撃が胸を突く。

「があ、はあ!!」

胸を強打する一撃が肺から空気を押し出し、ボツカリ、と胸が空いたような圧迫感が僕を襲う。胸全体が何か違うものに支配されるような感覚と、遅れてその衝撃で僕は背中を地面に打ち付けた。

「は、は、うあああ……………!!」

まともに声すら出せなかった。もんどりうつこともできず、胸に震える両手を当て必死に耐え忍ぶ。それは今まで味わってきた単純な痛みではなかった。ずっしりと重石を胸に突っ込まれたような言い知れぬ苦しさにただ耐えることのみを許される苦行。中途半端に曲げた足で地面を何度も叩き、意識を保つ。半ば狂乱の体で耐え忍び、少しずつ潮引く圧迫感。しかし代わりそれに取り残されるように痛みと皮膚表面を焼く熱が僕を蝕んでいく。

「ああっつ、うぐあ」

絞りだすように掠れた声が漏れる。何かを考える余裕などない。ただそこにあるのは侵食される痛み。苦しみ。

「少しやりすぎたか？」

そこにかかる声も僕の耳には入ってこない。音として認識してはいるが、頭が痛みという感情に支配され、それが言葉として理解する過程を正しくこなすことができないのだ。

そんな状態の僕に冷たい液体が振りかけられる。すると、僕を襲っていた痛みが嘘のように消えた。途端押し殺されていた呼吸が、空気を求めその運動を開始する。

はっはっはっ、と浅い息を繰り返し、落ち着いた頃、僕はようやく、自分に魔法薬が使われたことに思い至り、体を起こし目の前で立ちすくむ仮面男を睨みつける。

「はあ、はあ……………何のつもり？」

「健闘を称えて、だ。なかなか素晴らしかったぞ？ 戦闘経験などろくにありそうもないが、あの魔法接近戦闘術はなかなか洗練されている。ミニ・マジック・スタイル “小さな魔法の装い” とでも評そうか。純粋な魔法同士の戦いでなら、接近戦ではあの魔法戦闘術にかなうものはあるまい」

ま、扱いきれしていないものに意味はないが、と最後に憎まれ口を叩く。

「意味がわからない……はあはあ……一体何が目的なの？」

「目的か？ まあ、これは一種試験のようなものだ」

「試験？」

「そうだ。私の従者の、な」

無感動な口調でそんなことを言うものだから、僕も顔をしかめた。

「従者？ ふざけてるの？ なんで僕があなたの従者にならなくちゃいけないの？」

「理由？ お前が将来有望であの男の息子だからだ」

「何？ 僕の父親が英雄だからなんであなたの従者にならなくちゃいけないの？ それに周りが将来有望で英雄の息子である僕を従者にするなんてこと許さないと思うけど」

従者。それは魔法使いにとって詠唱の合間前衛を務め、マスターである魔法使いを守る役目を持つ人間。それらは形式的な名称ではなく、きちんとした簡易儀式魔法によって、主従関係を決定する魔法だ。お試しの仮契約とそれらを固定する契約とで分かれるが、契約の特徴的な利点として従者側へのアーティファクトの出現や秘密念話などがある。とは言うものの最近ではめっきりそれらの魔法は形骸化し、恋人探しの口実なんかにされているという話も聞いたことがあったのだが。主従関係の絶対化の魔法としてはある意味最適なのもかもしれない。利用しなかったら契約による特殊召還で言うことを聞かせればいいのだから。

つまるところ、この仮面男は将来有望で英雄の息子の僕を利用したい、とそういう魂胆だろう。しかし僕が言ったようにそれを周りが許すとは思えないが。

「お前の周りが許すか許さないかなど、私には関係ない。ただ私はお前の才能を欲し、お前を従者としたい。まあ、あの男への意趣返しを含んでいないといったら嘘になるかな」

「意趣返し？」

「ああ。ひとつ言っておくがあの男と私は敵でな。そういう意味でもお前とはやっていけると思うが」

敵？ 一瞬疑問に思ったが、まああれだけぶっ殺しまくってれば、敵もたくさん作るだろう、と問いただすまでもなく納得してしまうあたり、僕はとんでもない人の息子に生まれてしまったもんだと嘆きたくなる。息子である僕がすんなり納得できるあたりなかなか悲しいことだ。

「うまくやっていけるかどうかじゃなくて、そもそもあなたの従者になる気なんかない」

「まあ、そうだろうな。だから交渉したい」

その言葉に僕はいよいよ訝しさを隠せなくなってきた。

「……………あんたは何がしたいの？ そもそもここに来たのはなんで？ 僕とタカミチの話を盗聴していた理由は？ なんでよりもよっっているんな意味で厄介な僕を従者にしたいの？」

「ここに来たのは偶然だ。霊地から妙な感じがしたから、気になって来た。お前とタカミチの会話を盗聴した理由は、この霊地から出てきたお前を見つけて、お前の向かう先にタカミチがいたからお前のことを探るためにやった。従者のことは本当に従者であることを求めているわけではない。一種、お前と友好関係を形づけるためのものであると同時に、お前の将来性を買ってのことだ。お前の才能は“英雄の息子”というリスクを抱え込んでなおお釣りがくるもの

だと考える」

一息に仮面男は語り、こちらを試すようにじっと見つめてきた。その目に何か映っているようには見えない。彫像のように無感情に屹立するその姿はどこか不気味だった。

「僕にメリットがない」

「お前の研究に協力してやれるぞ」

「———— ツツツツ!？」

「あれは悪魔の石化魔法を解くための研究だろう？ 禁書、呪物の類があつたが私と仮契約してくれるというのなら、その類のものを大量に提供する用意がある。さらにサンプルとして強力な石化魔法薬、何なら魔法世界で名高いイリクシールも数本やろう」

イリクシール……………！ 噂に聞いたことがある強力な魔法薬。確か富裕層に買い占められて今じゃほとんど市場に出回っていないはずだ。ひとたび市場にできれば、常識外の値段で取引される、あのイリクシールを気軽に用意しようと言うこの男、一体何者だ。いや、何者かはこの際置いておくとしても、イリクシールが手に入れるかどうかというのは大きい。さらに禁書や呪物の類があれば、より多くの知識を手に入れることが出来る。

どうする？　ここにきて僕は本格的にこの男との交渉を天秤に架け検討し始める。

仮契約を結ぶということは、向こうが条件を僕に提示するのに対して、等価とは限らない。いや、むしろ不利か？　仮契約を結べばこちら側が主だ。仮面男は即物的に僕の研究に役立つものを提供すればいいが、こちらはその代わり、相手に主導権を引き渡すことになるのだ。仮面男の都合でこちらを特殊召還することができのだから。召還されようと、あちらの願いを聞かないという選択肢もあることにはあるが、あるだけだ。僕の利益を考えるなら、余程無茶なお願いでもない限り、相手の願いを聞くことになるだろう。下手に拒否して特殊召還を繰り返されてはたまらないからだ。あくまで選択肢があるのは、向こうの約束の履行を裏付けるための余地ではない。僕が意固地になることもできるから、相手も約束は違わ^{たが}ない。両者にとって不毛で不利益なことにはならないからだ。

ならば、此方との間に全くの信頼関係のない仮面男とでも取引は可能と判断すべきか。仮契約に加えて、強力な誓約魔法を行使し、条件を追加すれば取引にしては問題がなくなる。

しかし、話を呑むか呑まないかは別として聞いておかなければならないことがある。

「あんたは本当に従者としてあることは求めない、と言った。なら

僕に求めることは何？」

「そんなもの知ったことか」

従者になれ、と求めてきておいて即座に冷たく斬って捨てた。

「現時点でお前に何がやれるかわかりもしないのに、具体的な要求などできるわけがない。ただあの研究とこの結界の精密さ、さっきの戦闘、現時点で私に有用なものではない。当たり前だ、まだお前は子供だからな。だが、将来その才能のどれか一つでも伸ばしていけば、お前が私の役に立つことは間違いない。言っただけだ、お前の将来性を買っていると。お前の実力を買っているわけではない」

「……………論点が少しずれてるけど。じゃああなたは僕をどういった趣旨のことに役立てるつもりなの？」

「私の組織に有益なることに使う。組織とは、まあ、NGO団体でも思っておけ。戦闘力が増せば、戦闘で。魔法研究を主とするのなら、魔法具でも作ってこちらに寄越してくればそれでいい」

悪くはない、か。こんな変態的な仮面男が所属するNGO団体などきな臭いことこの上ないが、最悪魔法具作って提供すればいいだけの話だ。間にいくつかクッションを入れておけば、万が一向こうで何かあってもしらを切れる。仮契約自体結ぶことも危険だが、ある

程度のリスクは必要か。

「そう、じゃあいいよ。仮契約結んでも」

僕はためらいもなく了承した。どちらにせよ、この仮面男、禁書や呪物を用意するといっているあたりから真つ当な魔法使いではない。しかし真つ当な魔法使いでないのは、僕も同じだ。

それにどのみち、仮面男が真実そのような支援をしてくれるなら、行き詰った石化魔法研究も進む可能性が高い。

方法・手段、善悪を問わないだけの覚悟は持っているのだから、ためらいはなかった。

「ほう、それでは」

「後日、証拠としてイリクシールと呪物、禁書もつてきて。後さっき言った協力条件は誓約儀式魔法で、きちんと確定させる。仮契約はそのときにまた改めて、ということだ」

「……………抜け目ないな」

「当たり前でしょ？ それじゃ」

汚れた尻を叩き、胸の辺りが破れた服に顔をしかめながら、座り込んでいた地面から立ち上がり、研究所に足を向け、ふと立ち止まる。

「そういや、あんた、名前は？」

「……………デユナミス、だ」

「そ。それじゃ、また今度」

このとき、僕はまだ知らなかった。

まさかこの仮契約が大きな転機になろうとは……………

仮契約

「これが、約束のものだ」

それから数日して、約束どおり仮面男あらためデュナミスが僕の研究所を訪れてきた。その手にはイリクシール、そして禍々しい魔力を内蔵した禁書、呪物が携えられている。信じていなかったわけはないが、短期間でこれほどの物を用意してきたにはさすがに舌を巻いた。同時にデュミナスの言う件のNGO団体のきな臭さが表立ってくる。まあNGO団体なんてのが方便だつてことぐらい、僕もデュナミスもお互いの暗黙の了解となっていたために取り沙汰したりはしなかった。

「……………確かに」

このやりとりだけ見れば、完璧悪の魔法使い同士の後ろめたい取引だが、僕にとつてはわざわざ気にするようなことでもなかった。平易に取引の物品の真贋を見極めるための魔法を行使し、イリクシールはともかくとして、禁書、呪物の方は確かなものだ、と確認する。イリクシールも本物かどうかは現時点ではわからないが、かなりの効果を及ぼすものだとは判断することはできた。

「じゃあ、一分間魔力込めて。術式が体のほうに移るから。条件としては要請された魔法具・魔法知識の提供、両人同意下での協力行動の確定。優位権をデュナミスに設定、不同意の場合デュナミスに

対する影響はなく、僕の場合は一定の能力負荷を一ヶ月間、再度同じ要請が出された場合の能力負荷はなし。さらに仮契約による特殊召還は同意なく行わない。行った場合はデュナミスに能力負荷がかかる。なお石化研究を阻害することはしてはならない。そしてこの誓約は十年を期限とする。これが誓約魔法の条件だけど異論は？」

デュナミスは、差し出された紙に目を落とす。この誓約魔法は一種の儀式魔法でもあるので、紙にまとめられたものは、その儀式魔法の内実に過ぎず、儀式陣はその周りに展開されている。当然それを見抜いているデュナミスは、懷からモノクルを取り出し、それを通して周りを覗き込み展開された術式を精査していく。

しばらくし、モノクルを外してうなずいた。

「間違いはないようだ。見事な術式、正直お前の实力を見誤っていたかも知れん」

「そ。問題ないなら、そこに立って、魔力を術式に流すよ」

あらかじめ敷かれていた二つの円状の魔方陣に二人は対面に位置するようにして立ち、わずかにうなずきあうと魔力を術式に流し始める。お互いに一定量の魔力を術式に満たすと、一際まばゆく発光し、術式が弾け、雪のごとき燐光を散らす。さらに魔方陣が廻りながら円周が狭め、それが二人の足元まで達すると円が解け、複数の線となり、体の上を這い上った。

体に一瞬、異物感が押し込まれるが、それもすぐに感じなくなり、パツ、と体から光を発することで誓約の完了を告げる。

「問題はないみたいだね」

「問題などあつては困るがな……………では次は仮契約だ」

僕は眉をひそめて、形ばかりに反感を示した。

「ねえ、仮契約って本当に必要ある？ 誓約魔法結んだからいいんじゃない？」

「無理だな。いかに精緻な誓約魔法と言っても、解けないことはない。私にしたってそれなりにやれば解けるし、お前もそれは同じことだろう。しかし、契約は歴史とともに受け継がれた権威のある魔法。それが脈々と受け継がれてきたのは、ある程度の絶対性があったからだ。仮契約ともなれば、それほどまでもないが、逆に契約期間を決定してしまえば、一方的に解くことは余程のことでもしない限り難しい」

「まあ、そうなのかもしれないけどね……………」

「言った筈だ。私とお前との友好関係を形付けるために仮契約を行う、と。それはそれだけの価値が仮契約にはあるということを示している。これ以上は是非もない。ヤルぞ」

「わかった。」

すると仮契約については、向こうで用意していたのか、何の予備動作もなく無造作に仮契約の簡易術式が展開される。そのことに僕は驚くも、デュナミスは大した反応を見せなかった。

仮契約は基本唇同士の接触、すなわちキスだ。仮契約に際してのキスという行為は、この仮契約という儀式魔法の象徴だ。仮契約は術式を組んで、精霊にお願いする形をとらない例外的な魔法である。もちろん術式は組むが、それらは精霊の注意を引きつけるものでしかなく、仮契約の象徴たる接吻を行わなければ、精霊は魔法として現出してくれない。そして今回の仮契約の象徴である接吻はこの魔法の起動キーというわけだ。

この象徴魔法とも言うべき魔法は、えてして効力が強い。むろん接吻を代替することもできるが、それだと効力が薄れてしまう。

そうなる今回にそぐわない、デュナミスはそう判断したのか、その意思表示として今まで被っていた仮面をはずした。

意外と美形だった。褐色の肌に黒髪の。

しかし、準備はもう整っているのだ。あまり待たせるのもどうかと思ったので、従者側である僕のほうから歩み寄り。

僕は決定的な事実に気付いた。

「……………しゃがめ」

背が、届かなかった。

若干屈辱的だった。

デュナミスは無言でそれに応じ、そして僕はしゃがみこみざまに、その唇を奪った。

仮契約陣が一際強く輝き、仮契約のオリジナルカードがデュナミスの手の内に現れる。

「……………く、くく……………ふ」

「？」

「はははははははははははッ！　クハハハハハハハッ！　ハッ、ハッハハッ！」

突然こらえきれぬといった様子で哄笑の声をあげるデュナミスに、僕は訝しげに首をかしげた。罨にでもかけられたかと思つたが、事前に目を走らせた仮契約陣には何の仕掛けもなかった。それはない。

「……なに？ どうした？」

「いや、何！ お前こそ我がパートナーにふさわしいと思って交渉を持ちかけてから、今に至るまでお前には何ら迷いも見当たらなかった。あまつさえ私が世間で言う悪の魔法使いだと見抜いてなおだ！ お前はまるでガキ臭くない。そこらへんにいる魔法使いのほうがつよっぽどガキ臭いぞ」

「それがなに？」

「私が自らのパートナーに納得し、喜んでいる、それだけの話だ。初めは打算に塗れた仮契約であったが、いいだろう。お前のことを本当の私のパートナーとして認めよう」

「あ、そう。あなたがそうでも、僕にとっては打算に塗れた仮契約で、あなたは偽りのパートナーにすぎないけどね」

「それもよい。ならば、お前の主人たるよう振る舞い、認めさせてやるだけだ」

不敵に微笑みながら、仮契約カードのコピーカードをこちらに差し出してくるデュナミス。今まで仮面で表情を覆い隠し、言葉も無機質な声音をつくり感情の色を極力隠していたため、箍が外れたように平素に振舞うデュナミスに僕も若干戸惑いながら、コピーカードを受け取った。

向こうがこちらをパートナーと認めたところでこちらが態度を変えることはないだろう。迷いがないのだって、これが利害関係上のものでしかなく、僕の倫理観に善悪という概念が消え失せているからだ。

こういうと語弊があるかもしれないが、僕にとって見れば、店で商品を買うことと一緒になのだ。自分は金を出す。相手は商品を渡す。立派な利害上の関係でそのことに疑問を抱くものはいないだろう。それと同じ。僕は将来的に相手に益のあることをする。相手は僕の研究に力を貸す。それだけのことだ。

善悪についてだって、レジやってる店員が前科持ちの人間だろうが

なんだろうが関係ないだろう。まあ、これについては極論だが、少なくとも僕にとってはその程度のことではない。不確定要素だって極力誓約魔法で排除しているのだから。

「さて、アーティファクトを確認してみたらどうだ？」

「……………まあ、いいけどね」

僕は受け取った仮契約カードを見て、眉を顰めた。そこには僕の姿が写っている。あからさまに気取ったような格好に、肩に金の装飾がついた黒いマントを纏っている。どうでもいいけど、この絵は一体何を表わしているんだろうか。どうでもいいから深くは考えないけど。

「アデアット」

絵のことは放っておき、アーティファクトを呼び出す。

現出したのは、ナイフ、いやショートソード程の長さの奇妙な造形をした刃だった。一応柄に当たる部分には荒く布が巻きつけられているが、剣ともナイフとも言えない。

その刃は黒紫色でわずかに反りをもたせながら五十センチ程度に刀

身を伸ばしている。それだけだったらまだショートソードに画した用途を持つものなのだろう、と理解できる。しかし、刀身からは棘のような鋭利な刃を生やし、刃先に向かって鋭角的に反れている。長さは刃の横幅程度だ。

これでは、刃物としては使えないだろう。刺すにしても棘が邪魔で深く刺さらないし、斬るにしても、この棘で斬れるのか疑問だ。

「ふむ。これは刃物としては使えない。ならば他の用途があるのだろうか、このアーティファクトの名は……………」

「？無限術式刃”か」

「大した名だな。察するに術式に係るものなのだろう」

「？無限術式刃」、確かに大層な名だ。しかしこのアーティファクトが名前負けしていないのであれば、僕の研究に役に立つものかもしれない。今回の仮契約はそれに対する信用性に主眼を置いていたせいで、副次的な恩恵であるアーティファクトについてはあまり考えていなかったが、これはこれで期待できるかもしれない。

名前から推測するに、術式関連のアーティファクトだろう。

一番可能性として高いのは魔法発動媒体か。

ならば、さっそく効果を試してみよう、と魔法を選別し無意識の内にその術式を思い浮かべ、無限術式刃に向けて魔力とともに術式を構築しようとする。

「……………うえ？」

しかし、それは困惑の声とともに中断された。

なぜなら、眼前にすでに、自分が使用していた魔法の術式が展開されていたからだ。そのくせ——術式は完成しているにもかかわらず——魔法としては発現しようとしないう。儀式魔法でもない単なる低級魔法の術式なのに、だ。

僕はそれに戸惑うしかない。いや、そもそも僕は術式も魔力もまだ込めていないはずだ。それなのにどうしてすでに術式は完成しているんだ？ どうして魔法は発動しないんだ？

「ん、どうした？」

デユナミスがそんな僕の様子を見て、声をかけてくる。

僕はデュナミスにそれを説明すると、デュナミスもモノクルを取り出し、それを確認し、あごに手をあて黙考した。

アーティファクトはこういうところ融通がきかない。使用効果や用途は例外を除いては自分で探るしかないからだ。アーティファクトのほとんどは形に添う用途のことが多いので、そういった点での苦労はあまりないと思うが、僕のアーティファクトの場合その限りではない。それだけに厄介なのだ。

デュナミスばかりに考えさせ、厄介さに頭を抱えていても仕方がないので、僕自身考えてみる。僕が使用しようとしたのは単なる簡単な低級魔法だ、そして無限術式刃に術式を込めようとしたら、いつのまにか術式が展開していた……………

「は？」

僕は再び驚きの声をあげた。ただ、さっきと同じ術式がもう一つ展開されている。そのくせ、またしても魔法として発現しない。

何の不良品だ、と思ったところでようやく得心がいった。

いや、なんでこんな簡単なことに気付かなかったのか、気付いた今では自分でも疑問だ。しかし、その答えは発想の埒外にあった。

この術式、まだ魔力が込められていないじゃないか。

通常、術式というのは魔力の放出と同時に構築するものだ。術式は魔力を模《かたど》る外殻であり、魔力を形作る回路だ。魔力なしには術式を語ることはできず、術式なくては魔力を語ることができない両者不可分の関係にあるのだ。儀式魔法陣などの例外はあるが、少なくとも簡単な低級魔法ではそれはありえない。だからこそ無意識的にその発想を除外していた。

だとするのなら、この無限術式刃は、魔力なしで術式を成立させる異端のアーティファクトだ。と言っても、だからどうした、という話でもあるが。

もう一つ腑に落ちないことがある。

僕は術式を展開しようとは思っていなかった、なのに術式が展開された。しかし、この疑問はわりかし簡単に解決した。

このアーティファクト、魔法の術式を思考するだけで、術式が展開されるのだ。僕の場合、普通の魔法使いよりか、学者寄りの考え方をしているから、魔法を使おうという意思を持った際、無意識の内に術式を思い浮かべてしまう。だからこそ術式を展開する意思を持たずとも、魔法を使おうという意思を持つだけで術式が展開されて

しまつのだ。それほどまでに僕の脳には術式がこびりついているらしい。

もしかしたら、この魔力なしでの術式展開は、思考による術式展開を助成するものでしかないのかもしれない。術式が展開した自身に視認できることもその傍証になる。

だって、そうだとするなら。

このアーティファクトがあれば、無詠唱での中級魔法の行使も、いや、こと頭の出来がいい僕なら上級魔法すらも無詠唱で行使できてしまう。

通常魔法の行使の精度を決めるものとして二つの要素がある。

一つは僕の得手である学術による確固たる魔法の確立。理論、術式構成の正確さなどが試されるものだ。

そして、もう一つ、それは魔法的感覚の鋭敏さだ。直感、とでも言うのだろうか。魔力の掴み方、魔法によるイメージ、それらが問われるものだと言われる。

というのも、これについてはどこまでいっても、個人の感覚の問題

でありそれぞれ捉え方が違うのだから仕方がない。僕にはそちらの才についてはあまりないので僕個人としてはよくわからないのだ。

しかし、これに特化する人間は、魔法の学がなくても魔法を行使できてしまうらしい。原初の魔法使い、魔法の存在の発見とは、これに値するものが為した事だと言われている。

逆に僕は学の特化しているのだが、学の特化していても、魔法的感覚についてはある程度慣らしていかなければならず、それだけで魔法が使えるわけではない。その魔法的感覚は存外僕は鈍いものらしく、それによって術式の出力も振り回されては悩んでいたし、同じような人間は五万というだろう。

しかし、このアーティファクトはその魔法的感覚に頼らずにして、術式を構成してしまうのだ。

脅威的なアーティファクトだ。しかし頭脳系の魔法使いである僕にはふさわしい。これで実技に関しても悩むことがなくなる、それどころか並みの魔法使いなら相手にすらならないだろう。

それにこのアーティファクト、魔法発動媒体としても、かなりのものだ。実際展開されている術式に魔力を流して、魔法を発動させてみて実感する。僕が使っていたサランおばさんの杖、今まではその性能に対して不満を持ったことはなかったけど、これを使ってみるとその差がわかる。

これには淀みがない。術式の展開も洗練されており、魔法の発動もスムーズ。魔力運用効率もいい。

素晴らしいの一言に尽きた。これは魔法発動媒体としておそらく比肩するものがないアーティファクトだ。ネギ兄さんの父の杖も相当なものだと聞いているが、それですらこれに及ばないことが判る。

これは想像以上の収穫だった、とほくそ笑んでいると、すっかり空気がたったデュナミスから声がかかった。

僕は興奮気味に自分の気付いたアーティファクトの性能を並べ立てると、デュナミスはどことなく面白そうにうなずいた。

「確かにそれは素晴らしいな。間違いなく魔法使いの相棒と呼べるアーティファクトだろう。……………しかし、お前にも歳相応なところがあったのだな」

からかうように放たれた言葉に、僕は顔を赤らめ、自分が興奮していたことを自覚した。らしくない、取引相手にこんな醜態をさらすなんて。

本質的な部分でやはり自分は魔法バカなのか、と自嘲するように天

を仰いだ。

「ふむ。性能はわかったが、そのアーティファクトが刃の形をしているのは何故だろうな？」

その上、相手に試される始末だ。もう少し冷静になろう。

確かにデュナミスの指摘はもつともだ。ただ魔法発動媒体としての機能を求めるのなら、杖なり指輪なりの形をするはずだ。さすがに意味もなく刃を持っているとは考えにくい。

……………刃は基本的に刺すものだ。もしくは斬りつけるもの——
—— ツツツツツツ！

「……………まさか、もしかしたら、！」

僕は今とんでもない考えに至った。

衝撃が思考をかき乱し、体を突き上げるような興奮が体を熱くしていく。

もし、このアーティファクトの機能が、僕の考えているようなもの

ならば！

石化研究が、いや、石化魔法の解呪ができるかもしれない！

早く、たしかめなきゃ！ 僕は、はやる気持ちから、首を無駄にキョロキョロ、と動かし、地面横に置かれた呪物を視界におさめると、地面に飛びつくように膝から滑り込み、目の前の呪物に無限術式刃を突き刺した。

膝を擦ったのだろう、ひりひりと痛むが、僕はそれどころじゃなかった。

「……………は、は。……………ハッハハハハハハハハハハッ！
！！」

僕は狂ったように笑いを炸裂させる。

やはり、やはりそうだ！ 僕の推測は正しかった！

無限術式刃に突き刺された呪物が破裂するように散り散りになったが、それすら僕には愉快でならない。

今、僕の頭の中には呪物の術式構成が流れ込んできていた。

く、ふはははっ！ 何が思考するだけで術式が組める、だ！ このアーティファクトの本懐はそんなもんじゃない！ このアーティファクトは僕の体と同化しているのだ！ このアーティファクトは僕の脳の思考の出口になっている！ そして同時に出口は入り口足りえるのだ！

このアーティファクトを何らかの魔法具もしくは魔法自体に刺せば、術式構成が僕の脳に流れ込んでくる。

さらに、その入り口は出口でもあるのだ！ 理路整然と組まれた術式に全く違う術式を押し込むように流すことも出来た。そしてそんなことをすれば術式の破綻、ひいては今目の前で起きたように術式が込められた物自体も破壊せしめることができる。

「ハハハハッ！ どれだけ強力なアーティファクトなんだ！」

このアーティファクトは僕の為に用意されていたようなものだ。

これがあれば、これさえあれば！ 石化魔法の解呪など容易い！

今まで僕がやろうとしてきた解呪の方法は外から術式を展開し、雁

字揃めになっている術式に被せるようにして網をかけ、そこからかけられた術式をほぐし、打ち消していくというものだ。対消滅、と言うにはまた違っただろうけど、意味的には似ている。

しかしそのやり方を試行錯誤してきたが、術式をどれだけ精緻に組み立て、どれだけ儀式場を丁寧に組み立てても、石化魔法対象者がもたない。解呪だけなら、今考案している術式でいくらでもできる。ただ保たない。これは、副作用のある悪性の因子を取り入れたりしている反動だと思われるが、その副作用も色々な作用を掛け合わせることで可能な限り打ち消している。そのことが返って災いしているのだ。これは確定的な予測ではないが、おそらくそれらの重作用が対象者に負担をかけているものと思われる。しかし、そうでなければ、あんな強力な石化魔法の解呪などできない。その重作用の負担を軽くしようとすれば、今度は打ち消せない悪性が出てきたり、解呪自体ができなくなったりする。

それ故に僕は今まで行き詰っていたのだ。

だが、それは同時にやり方の一つでしかなかったことに僕は今気が付かされた。

術式の内部干渉だ。このアーティファクトがなければ考えつかない。ただだろう、だけど僕にそれができるアーティファクトがある。

今考え付いている術式の内部干渉とは、読んで字のごとく、術式を

内部から、かけられた術式を網の目をかいくぐるようにして展開し、かけた術式自体の効力を弱め、意味を変換し、消失させていくというものだ。

強制的に別の術式を押し込めば、さっきの呪物のように破裂するだろう。だけど、針の穴に糸を通すように術式の穴をくぐり、別の術式を侵入させ、その術式を崩壊させることができたのなら。

いける、やれる、解呪できる！

今までやってきた解呪の方法に比べたら、はるかに成功確率が高いのは確かだ。

前者の解き方が、絡まった糸をぶった切るようなものなら、後者は絡まった糸の玉をほぐしていくようなものだ。当然後者のほうが難しいと思うだろう。しかし僕にはそれを可能とする頭と道具がある。それ以外に何が要ると言うのだ！ いや、必要ない！

「ふははははっ はははははは！！！！っ」

狂ったように笑う、
嗤う、
晒う。

ついに長年の苦勞が報われるのだ、これほど愉快なことがあるもの

か。

喉仏をさらすように天に向かって嗤い、ひとしきり嗤い尽すと、喉をひくつかせ、それでもとどまらぬ、と示すように腹を抱え、目から涙を流しながら、大口を開けて笑みをつくる。

その笑みだけはまさしく子供のものであり、そのことが逆に悪魔のように感じさせた。

舞台上の道化

ちゅ、ちゅ、ちゅ、目の前で鳴き、足を動かすネズミを見て、僕は快心の笑みを浮かべた。

ネズミはそのまま机を駆け下り、暗闇の中へと姿を消していく。

ついに。

ついに。

ついに！

完成したのだ！

僕は震える手でアーティファクトを握りなおす。この喜びをどこに発散すればいいのか、僕にはわからず、ただただアーティファクトを握り締めて、笑みを噛みしめる。

石化魔法の内部干渉による術式は完成した。それこそ他の魔法使いにはもはや解読不可能なほどに入り組んだ術式だ。当然と言えば当

然。この術式は、あの悪魔のかけた石化魔法にかけて初めて意味を成すものなのだから。

それを可能にしたのが、このアーティファクト。

純然たる思考による術式構築。刺突対象への術式解析。それらの効果を持つアーティファクト？無限術式刃”は僕の主、デユナミスによって与えられたものだった。

主とは認めなかった相手から与えられたアーティファクトが石化魔法解呪への突破口となった。ある意味皮肉な話だろう。これではデユナミスを主と認めないわけにはいくまい。相手は広き度量をもつて僕のことを従者と認めているのだから。

僕は愉快げに嗤う。楽しくて楽しくて仕方がない。

ふと、目に入った呪物でもある鏡に写った僕の顔は歳相応の子供の笑みを浮かべていた。その鏡に僕は愛おしげに触れる。この笑みこそが、僕の望むもの。僕が望んだものを見る僕の貌。

「ははっ、ははっ」

踵を返し、ステップを踏み、笑い声を零しながら、僕は往く。

僕の望んだものをこの手におさめるために。

放課後の斜陽に包まれた魔法学校の廊下を跳ねるように、僕は歩く。貌には笑みをぶら下げ、踏むステップは不規律に。一步一步気分のままにテンポを変えるように。こみあげる胸中は目的の場所が近づくにつれ、激しい熱をあげていく。

喚きたい、叫びたい、狂いたい。

この熱を、僕が今から行う偉業を、声を大にして誇り、叫び、喚き、どこまでもその熱を立ち上らせ、^{のほ}狂気の域にまで達したい。

その境地にて得られる悦楽を想像するだけで、僕はどうしようもなくなる。

抑えきれなくなつた熱が噴き出し、それは笑みに形を変え、零れだしていく。

舞うように足を捌き、笑みを浮かべながら、そこにある悦樂を謳うその姿は、赤く染まつた夕暮れの教室を背景にどれだけ幻想的に見えただろうか。

それは隠されてきた僕の本来の姿。

ゆえに今このときも、その幻想を誰に知られることもなく、しかし誰に憚ることもなく。其処に在る光景は秘密の花園となりて幻想を奏でていた。

僕はそうして生きてきた。

そうやって僕は希望と言う名の想像を、幻想を追いかけてきた。亀のように、頑丈な甲羅の中に寒さを感じる手を、現実を踏みしめる足を、幻想を拒絶する頭を隠し、歩いてきた。

それは目標地点との距離を考えれば、ひどく鈍重で、遅々とした早さで。けど、それが亀には分相応な速さだった。精一杯精一杯諦めることなく、進んだ。頑張った。自らを守る甲羅の中で、ただひたすら希望に満ちた世界を描き続けた。その希望ですら僕の頭は許し

てくれず、それでも慰めに僕は想い焦がれた。

虚しくなったこともあった。悲しくなったこともあった。それでも僕は何もかもから目を閉ざすことで、現実も幻想もないぬるい温度で体温を保ち続けた。いつそ死んだほうが楽なのではないか、それほどに微妙な温度だった。

希望も絶望も、僕の周りで燻らし、惑わした。

じれったくもそれから解放されることはなく、ただ体をちぢこめるだけだった。

でも、そんな日常から僕は解放された。

僕は隠してきた頭手足を出し、歩み始めた。そして初めに飛び込んできた光景が救いだった。

僕の背中に羽が生えた。

そして今、僕はそれをはためかせ、ここにいる。

描いてきた幻想を現実で奏で、ここにいる、ここにいるんだ。

あのと時から、何度も足繁く通ったこの場所。これだけが僕に現実を叩き込む唯一の光景だった。そしてそれ以外を欲することもなかった。

地下への階段を、コツン、コツン、と足音を立てて、降りる。その音はまさしく終わりを告げるカウントダウンの鐘の声。

足音を鳴らした階段は消え、そこで僕は深く息を吸う。

ギギギイ、と硬質な音をたてて、扉が開かれる。

飛び込んでくる光景は、いつに見ても慣れない、苦悶の群れだった。けど今の僕は以前通ったときとは別の気持ちで眺めることが出来た。そしてそのことに僕は深い充足感を覚える。

「待ってて、みんな……………今すぐ、みんなを笑顔にしてみせるから」

アデアット、唱えられた文言は地下室に響き渡った。

ネギ side

僕は図書館からの帰り、一人放課後の校舎を歩いていた。

いつもならもう少し遅い時間まで勉強するんだけど、今日はどこか調子が悪い。うゝん風邪でも引いたかなあ。ネカネ姉さんに心配にかけるのも嫌だから僕は早めに勉強をやめた。僕はアリナと違って、ネカネ姉さんには心配かけない。

最近のアリナ、っていうかずっと昔からアリナは変だ。村にいたころは、家に寄りつかないで村の人の家々押しかけて迷惑かけてた。そのことにネカネ姉さんはすっごく心配してた。でもアリナはそれをやめようとしなくて、どうしてそんなことをするのか不思議でなかった。

あんなにやさしいネカネ姉さん振り切つてまで、他の人に迷惑をか

けるなんてアリナはどうにかしてると思う。

こっちに来てからは、アリナは本格的におかしくなった。

まず、笑わなくなった。それから怒らなくなった、泣かなくなった。アリナの顔は他人を見下すように冷たくて、時折僕に向ける視線すらどこか冷たかった。仲がいい兄弟っていうわけじゃなかったと思うけど、悪くはなかったと思ってる。

でもあれ以来、僕とアリナはほとんどしゃべらなくなった。僕が魔法に夢中だったってこともあるけど、アリナも僕に興味はなさそうだった。前までは会ったら話してたのに、こっちに来てからはすれ違っても、視線すら振らない。そもそもアリナが他の生徒や人としてやべってるのを見たことがなかった。たまに先生としゃべっているのみるぐらいだ。

心配な気持ちじゃなかったわけじゃないけど、あまりに僕も気にしてなかった。

アリナを明確に意識したのは、初めてのテストがあったときだ。

自信はあった。すつごく勉強したから。けどその自信はことごとくアリナに粉碎された。

全筆記科目100点。ありえない、僕はそう思った。けど、めんどくさそうにアリナから百点答案を渡されては、僕も黙り込むしかなかった。

次の日から猛勉強を始めた。そしてその日からアリナは授業に出席しなくなった。

拍子抜けしたけど、一週間後再び授業に出てきたアリナに対し向けられた質問の答えに僕は絶句した。何一つ理解できなかったんだ、教師の言ってることもアリナの言ってることも。周りの生徒もわかってなかったけど、先生自身わかっていなかったみたいだ。

その圧倒的な差に、僕は自信をなくし、食事後倒れるように眠った。

学園長に僕の潜在的な魔力量とアリナの差について説かれてからは若干持ち直したけど、根本的にはアリナとの差について懐疑的だった。

でも、あくる日、先生の前で二人並んで実習したとき、僕が一瞬でできた魔法をアリナは時間をかけてやった。

そのことが僕の自信を取り戻させたのだ。先生もすっごく褒めてくれたし、ようやくあのときから、僕にのしかかっていた重圧から解

放された。

テストでは全く叶わず、これで僕はアリナの兄をやれてるんだろうかって今までは悩んでた。悔しさもいっぱいあった。そのせいでかなり無理をしてネカネ姉さんに泣かれた。でもこれで僕はアリナのお兄ちゃんなんだって自覚が持てた。さすがに座学じゃ叶わないけど、実技では僕のほうが上だ。そのおかげでそのことも素直に認められた。

これからは不節制な弟にも気にかけていこうって思ったんだけど、そのころからアリナはよく行方知らずになった。今までは図書館にこもってたのに、姿すら最近じゃみかけない。

僕もなんとかアリナに声かけようって思っただけど、あんまり見つからないし、僕にも魔法の勉強があつたので、なかなか話すことが出来なかった。姿が見えない分、次のアリナはもっと実力あげてるんじゃないかっていう危機感もあって、アリナへの気遣いは疎かになっていっそう魔法に励むようになった。

きつとどこかでアリナはもっと魔法の勉強してるって勝手に信じて。

常にアリナの兄うえであるように頑張った。

けどあまり度がいきすぎると、ネカネ姉さんに心配かける。ただで

さえアリナのことを心配してるから、兄である僕まで心配かけちゃう元も子もない。いずれ、アリナとネカネ姉さんの仲も取り持とうと考えている僕としては、ネカネ姉さんのこともしっかり見なきゃいけないんだ。

だからこうやって僕はテクテク、廊下を歩いていた。

前に風邪引いたときはひどかったしね……

そうやって帰路に急いでいると、不意に誰かの笑い声が耳に届いた。

ビクッと、僕の肩が震える。

そういえば、アーニヤがメルディアナ魔法学校には夜な夜な本物の幽霊が現れるとか何とか言ってたけど、あれって本当のことだったの！？

いや、でもこの笑い声からして、幽霊とは思えない。幽霊つてもつとこう、おどろおどろしい声してると思う。この声は弾むように軽やかで、妖精の笑い声だと言って聞かされたら、信じてしまうほど綺麗な声だ。

……………この笑い声からして結構近い。僕は誘われるようにして声

がする方向に小走りで急いだ。

声の音源に近づくにつれ、僕は自然気配を殺すようにゆっくりと、足音を鳴らさないようにして進んだ。

ちょうど曲がり角。曲がった先にその人はいる。なのになぜだろう、僕は足が後ろに引けるのを感じた。

何か犯しがたい神聖なものがそこにある気がして。

だけど、僕はその一歩踏み出した。体を角に隠し、おそるおそる目を覗かせた。

「……………え？」

思わず声が漏れ、僕は咄嗟に口に手を当てた。

声を漏らしてはいけない、と思った、思わせた光景が目の前にあった。

絹糸のような金の髪をたなびかせ、舞うように足を躍らせ、光るオッドアイはまるで宝石のような輝きを持っていた。しかしそれらは

少女を飾る装飾。真に僕が感じ入ったのは、その少女が嫣然と微笑む姿だった。

まるで別次元にいるようなそんな神秘的な微笑み。漏れる笑い声に僕は陶然とした気分で遠ざかっていく目の前の少女を追いかけていた。

少女が立ち止まる。

そのとき、僕はようやく、勝手に進んでいた足に気付き、あわてて物陰にかくれた。

笑みをおさめ、立ち止まった少女の横顔に、僕の頭の端にわずかに何かがかすめ、その少女の顔に重なった。

「（アリナ……………？）」

内の驚嘆を僕は信じきれず、まじまじとその横顔を見つめた。

長い金髪に隠れた顔つき、そして特徴的なオッドアイ。

あれがホントにアリナなの？ 髪がずいぶん伸びてるし、前から女

の子っぱかったからそれに拍車がかかっている。でもよくよく見てみてもやっぱりアリナだ。髪とか切りっぱなしなのか、結構荒れる。あの不健康そうな感じがやっぱりアリナだ。

僕が確信を持つところ、アリナがスッと微笑んだ。

それだ、その微笑み。それがアリナのすべてを覆い隠す。

アリナの笑顔を見たのは久しぶりだった。それだけに動揺した。

なんでアリナは何もないところで一人笑っているんだろう、何がアリナを笑わせているんだろう。

疑問符が浮かんでは消え、浮かんでは消え。僕が戸惑っていると、アリナはスッと影へと消えた。

「あー！」

アリナの姿を一瞬で見失い、僕は急いで後を追う。何か用があったわけじゃないけどなんとなく気になった。

「あ……………え？」

その勢いもアリナが消えた先に困惑する。

アリナが降りてった階段は地下へとつながる場所だ。屋上につながる階段同様、立ち入り禁止になっている。アーニヤの言うところでは『開かずの間』なのだそうだ。

前にここに立ち入った生徒がいたらしいけど、すつごく怒られたってアーニヤが言ってた。おじいちゃんも絶対入っちゃダメだって朝礼で何回も言ってたぐらいだ。絶対入っちゃいけない場所なんだろう。

そんなところに入ってしまったアリナを止めるべきか僕は判断に迷った。

迷っている間、アリナは地下の扉を開け金属音を立てて行ってしまった。

どうしよう。アリナを止めるんだったら僕も地下に入んなくちゃいけない。止めるためって理由はあるけど、ばれたら先生怒られちゃうかも……。それはいやだなあ。それに止めたら止めたでアリナはどう思っただろう、仲がいいって言えないし。告げ口するんじゃないかって思われちゃうかも。でも止めなかったら止めなかったで、まずいんじゃないかな。

「うううう、僕はどうしたら……?」

地下に続く階段の前で僕は頭を抱えて悩む。

よし、行こう。

そう思って足を踏み出す。

いや、でも立ち入り禁止だし……………

そう思って勇みかけた足を引っ込ませる。

いやでもだからこそ、僕は兄としてアリナを止めなきゃいけない!

そう思って足を階段に下ろす。

でも嫌われたちゃったら、どうしよう……………

再び足を戻す。

「むうう~~~~」

僕にとって切実な問題だった。立ち入り禁止なんだから入っちゃダメ、ならアリナを連れ戻さない、と思う。でも、立ち入り禁止なんだから入っちゃいけない、生徒としてそう思う。なら先生を呼んでくるか、と思ってもこれじゃアリナに告げ口したと思われて嫌われちゃう、と思つてできない。ならバレない内に急いでアリナを連れ戻そう、そう思つても生徒としてばれなきやいい的な考えはどうか、と勇み足を鈍らせ、またあんなに楽しそうにしてるアリナを無理やりにも連れ戻せるのか、とも思う。

思考が渦を巻いて、混濁する。

足を伸ばしては引つ込める。そんなことを何度繰り返したかわからなくなってきた。どこまでも優柔不断というか、自分自身でもあきれてしまうが、本当にどうしていいかわからなかった。

思考が何度も行ったり来たりしていたせいで、頭が知恵熱のような熱に見舞われたくらいである。

それぐらい悩んでしまつていて、日が沈んで校舎が暗くなってようやく時間の経過に気付いた。

なんか頭が朦朧としてきた。熱のせいか、ホントに風邪でも引いちやったのかな……。もうこのままこの問題を放り投げて帰ってしまおうか、そう思った矢先、突然階下から爆発的な笑い声が響き渡った。

笑いにともなって声が漏れたというレベルじゃない。声で笑いを表現しているような、そんなやかましい笑い声だった。

「（……………どうしたんだろ？ 何か面白いことでもあったのかな）」

壁に手を着き、熱くなってきた額に冷たくなった手を当て、冷やしている、バンツ、という激しい音とともに、階段を駆け上がったくる音がした。

「（……………こ、こっち来ちゃう……………隠れ）」

「ハハハハハハハハハハッ！！」

笑い声をその場に残しアリナはそのまま僕に気付くことなく走り去っていった。早い、もう背中しか見えない。

僕は考えるでもなくその背中を追おう、としたが、ふと地下の階段へと目がいった。

あんなに楽しそうに笑うアリナ、初めて見たな……………なんか、ホントに楽しいものがあつたのか、気になる……………

風邪ツピきで魔がさしたのか、今まで迷っていたのが嘘のように僕は、微笑んでこの階段を下りていったアリナの影につられるように階段を降りていく。

一步一步歩いていくと、足音が僕を追ってくる。それがどこか不吉に聞こえ、その足音に追われるようにして、僕は歩くスピードを速めた。目指す、開け放たれた扉からは、わずかに光が漏れ出していた。どこことなく幻想的なにおいがする其処に誘われている、僕はそう感じた。

そして僕は開いた扉に手をかけ、それを見てしまった。

在りし日、僕の周りを温かく囲んでくれた、村の人たち。いつも微笑み、僕を安心させてくれたその人たちが、苦悶に表情をゆがめていた。

「あ、あ、あああ」

それは憧れの父に会った日だった。

あの日以来、僕の胸にはある想いがある。

僕は危機ピンチになれば父さんが助けてくれる、そう思っていた。

いっぱい無茶なことやって、いっぱいネカネ姉さんに心配をかけた。そんなある日、あの事件が起こった。

なんであんなことが起きたのか、どうしてそんなことになったのか、何度も疑問は渦を巻いた。

そんなとき、僕の心に、フツと囁かれた、

危機ピンチを望んだのはお前だろう？

僕が望んだとおり、危機ピンチになった、僕の望んだとおり、父さんは駆けつけてくれた。

ほら、何の文句がある？

嘲笑つかのようなその言葉は僕の心に響いた。

必死に否定しようとした。

でも結局。

僕の罪深い望みは叶ったこと、それは事実だった。

そして今ここに、

「あああああああああああああああああああああああああああああああ
あああ！！！！！」

僕の罪の証が在った。

どうして！　なんで！　そんな言葉が意味もなく僕の心を苛んでいく。

錯乱する僕の視界に入ってきたのは、かつて僕を命がけで守ってくれたスタンおじさんの姿。

「が、あああああああああああああああああ！！！」

何故なのか。

どうして優しいこの人たちがこんな目に遭わなきゃいけなかったのか。

喉を裂くような叫びが発され、それに答えるように僕の身体の奥底からかつてないほどの熱が満たされてゆく。

熱と強大な力に犯され、視界が曇り、徐々に意識が遠のいていった。

散り散りになった心が、取り留めのない願いを吐き出す。

誰か。

誰でもいいから、と。

悪いのは全部僕だから、と。

この人たちを救ってください!!!

薄れゆく意識の最中、最後に見たものは、石像から発せられるまばゆい光だった。

ネギsideout

アリス i d e

僕は笑った。

最初は、少しのおかしみを含んだ笑み。それからじわじわと達成感
がこみあげてきて、やがて大口開けて笑い始める。喉がおかしくな
るほどの笑い声があたりに広がり、その声が自身の耳に届いて相乗
的に僕をさらなる喜びへと突き上げていく。

そんな笑い声の中、僕は少し滑稽さを感じていた。

僕は未だ石化の解呪に成功したわけではない。単純に魔力が足りず、
解呪までこぎつかなかったのだ。しかし、目の前のその経過を見る
だけで、僕は解呪の成功を確信していた。

なんととも間の抜けたことだ、と思いながら、僕は酔いしれた。

もう、すぐそこまである僕の夢の成就に。

それと思うと、僕は一秒たりとも、身体を静止させることができなかった。

魔力、魔力が必要だ。

この分なら、誰か適当な魔法使いの人に注ぎ込んでもらうだけで解呪することができる。なら誰がいいだろうか、僕を懇意にしてくれている先生でもいいけど、やはり万全を期しておじいちゃんに頼もう。おじいちゃんは魔力量も兄さんには及ばないまでもかなり大きいし、どうせ村の人は全員石化から解放される。うん、おじいちゃんと仲が悪いなんて聞いたら心配するだろうし、この機会に仲直りしておくのもいいよね。

そんなことを想像してるだけで楽しかった。

僕は笑いながらひた走る。

目の前に校長室の扉が見えてきて、僕はノックもなしに部屋に飛び込んだ。

「おじいちゃん！ おじいちゃん！」

その顔に笑顔をひつつけて、おじいちゃんの姿を求めて右へ左へ視線を振り回す。だけどその姿はどこにも見当たらない。

「なんだよ、いないのか」

ちよつとつまらなくなってきた、若干拗ね気味に地面を蹴るが、気を取り直して、僕は職員室にその足を向けようとする。どちらにせよ、魔力は必要だし、早く解呪したい、という焦りもあった。

むしろ、何の封もせず、地下室をほったらかしにしたことに不安も覚えていた。まあパツと見、何が起こっているかわからないだろうし、あそこに立ち入るような人間がいるとも思えないから、杞憂に過ぎないだろう。

そうやって無理矢理焦りと不安とその先に待つ喜びに逸^{やは}らぬよう、心を落ち着けていると、不意にちりちりと髪の毛あたりが逆立つような感覚がした。その違和感にいったん足を止め、首をかしげていると、直後、身体全体がゾツとするような爆発的な魔力の高なりを察知した。

「な、なにこれ……………」

凶悪的なまでの暴力にも等しき理不尽な魔力放出量。僕ではどんなに努力したところで出せない魔力量、そのあまりの差に僕は寒気に

囚われた。

これは一体何なのか、少なくとも人間が放つ量の魔力ではない。いや、一人だけいる。僕と異なる方向の才能にて隔絶した差を見せ付ける僕の兄。

生まれてから才に不足したことはない。何不自由なく、卒なく僕は人生をこなせてきていた。そんな僕に唯一、立ち^{あに}はだかる“敵”

請わずとも周りを囲んでくれる人がいて、魔法においても絶対に勝てないものを見せ付けてくる。

そんな兄に僕は心のどこかで恐れていた。それを隠そうと僕は兄に負けないものを盾に誤魔化してきた。

だけど、これは。

盾すら通じず、体感する、この絶望的な差。

怖い。怖い。怖い。

こんな魔力を持つ人間、おかしい。

こんな魔力を扱おうとする人間はおかしい。

そもそもこんな魔力を使って何をやるうとしているのか。世界滅亡でも企んでいるのか、そんな益体のない考えですら否定できないほどに僕は当惑しきっていた。

そんなとき、ふと思った。

こんな魔力があれば、容易く石化魔法の解呪ができるんじゃないかって。

ポロリ、と恐怖からこぼれた考えだった。兄の才能は僕が今までやってきた努力すら容易く否定してしまうのではないかという、僕の今まで生きてきた中での至高の目標の否定が、今僕が感じている最大限の恐怖から転じた、それだけのことだった。

だが、それは僕の恐怖を異常に煽り立てた。

感情だけじゃなかった。もし、これだけの魔力が術式にぶつけられれば。術式はあつという間にその役目をまっとうし、解呪を果たすだろう。もとより外部から内部へと道を作り、魔力を注ごうとしていたのだ。こんな膨大な魔力が暴れれば、そうなったとしても不思議

議じゃない。

まさか、まさか。

僕は表情を半笑いに引き攣らせ、必死に否定しようとした。

だけど、どうしても留めおけず、僕は足をもつらせながら、すぐさま取って返す。

僕が地下への階段に近づくと、魔力の濃度が上がっていく。あまりの濃さに、眩暈がした。

「なんで！　なんで、こっちのほうから！」

そこに向かうにつれて、無形の魔力が僕の身体を冒す。

それでも向かうことをやめなかった。

足をもつらせながら、息を上げながら、僕は行く。

きつと嘘だ。

違う。

絶対違う。

なのにどうして。

どうして！

こっちのほうから大勢の人の声がするの……………？

自衛意識が働いたのか、魔力酔いしたのか。

僕の意識はそこでぶつつりと途切れた。

「くふ、フフッ」

僕は嗤う。

嗚呼。

結局、亀はウサギに追い抜かれる運命なんだ、と。

舞台上の道化（後書き）

……うん、言いたいことはわかります。

ただここは僕自身言いたいこと含めて、抑え、次の話に行きましよう。

舞台裏の闇

それは、僕が望んだ光景だったはずだ。

村の人たちの石化が解呪され、喜び合うその姿は僕が夢見た光景だったはずだ。

その偉業を称えられ、笑顔を浮かべる。

その姿を何度も幻想したはずだ。

なのに、何故。

その中心に僕がない。

理解が不能だった。起きたら、村の人が自由に動き回り笑っている、それは別にいい。その周りに集う人たちも別に不思議ではない。なのに何故、その人たちが僕ではなく、兄さんを褒めているのか。

熱狂と言ってもいいその雰囲気はあの恐怖の悪魔襲撃から生還したことへの喜びから起因するものなのだろう。彼らは石化して最後、時の経過を認識していない。石化したことさえ自覚していないのか

もしれない。最後の記憶である悪魔への恐怖、彼らからすれば、その直後にその呪縛から救われたのである。状況が説明され、その呪縛を解き放ったのが、英雄の息子であり、村で可愛がっていた息子だと言われれば、そのときの喜びのまま、この熱狂へと移行したとして不思議ではない。

言うなれば、勝利の後の宴。それが今まさにこの光景なのだろう。

そこまでは理解できる。

だから、何で。何で、その宴の英雄が兄さんなんだ……………

もはや、呆然とするしかなかった。

先ほどまで胸のなかを占めていた喜びも不安も焦りも、ぼつかりと穴が開いたように虚ろなものになっていた。

ちょうど起きたした兄さんを囲んで周りの人間が口々に兄さんのことを誉めそやす。それは村の人だったり、魔法学校の教師だったり、で。生徒の姿もあったが、事情が呑みこめず、それを遠巻きに眺めているだけだった。しかし、そのうち事情がわかってきたのだろう。周囲の雰囲気につられ、生徒も兄さんのことを称えはじめた。兄さんも、村の人を見てその喜びの輪に加わる。

さすがは、英雄の子だ、まさか誰にも解けなかった 石化魔法を解呪するとは、口々に話題にのぼる兄さんの功績

「なに、これ……………」

僕はよろよろと立ち上がり、ふらふらとそこに向かい始める。

どうして、僕がここにいる。倒れた場所から一寸の狂いもなく、投げ出されたように倒れている僕を何故誰も見てくれない？ 何故そろってネギ兄さんのほうばかり見るんだ？

努力したのは僕だ。

解呪したのは僕だ。

いつも独りなのは僕だ。

なのにどうして、僕がここにいる。

前を見ずに歩いていたら、誰かにぶつかった。その誰かにすがりつくように、僕は目の前の服を掴む。

「あ、なんだよ？」

「僕が解呪した」

「は？」

「僕が解呪したんだ。ネギ兄さんは何もしてない。僕がやったんだ。僕が努力したんだ。僕が、僕が」

「はあ？ 何行ってたんだよ？ お前じゃなくて兄貴のほうが解呪したんだろうが」

どことなく忌々しそうに、唾を吐く目の前の人。僕の手を振り払おうとするけど、僕は強く掴んで、さらに言い募る。

「僕が解呪したんだ。兄さんなんて何もしてない、何もしてないんだ」

「離せつつつのー！」

無理矢理腕ごと振り払おうとする人に僕はすがりつく。

「違う、それは違う、僕は」

「いい加減にしろよ！――！」

頬に走る衝撃。視界が飛び、受身もろくにとれず地面に叩きつけられた。

「おい、何してんだよ？」

「あ？ ああ。こいつが、なんかよ、石化解呪したのは自分だって言うんだよ」

「はあ？ 石化解呪したのは兄のほうだろ？ まさかあれか？ 優秀な兄の手柄を奪おうとか言う感じのやつか？」

「妬みとかキモいし、それで俺に絡んでくるんだぜ？ マジむかつく」

「……………ああ、そりゃむかつくな。ただでさえ授業とかろくすっぽ出てこない不良なのに、その上兄の手柄まで奪おうとしてなんだよ、こいつ――！」

コホコホッ、と咳きする僕の眼に足が写ったときには遅く、容赦な

い蹴りが叩き込まれた。

「おい、ここじゃ先生に怒られるぞ」

「大丈夫だろ。先生もこいつのこと嫌いだし。みんな、兄のほうみてるから大丈夫だって」

「でも一応場所は移そうぜ。いくら正義とはいえ、人目につくとまずい」

「そうだな」

襟を掴まれ、僕は問答無用で引きずられていく。

正義とは片腹痛いな、ただ僕のことを気に入らないだけで、正義その免罪符にしているだけだろ……………教師の言う正義も、もう少しそれらしいぞ？ いや、違うな。こいつらの言う正義は今は幼稚なだけで、それが拡大発展すると、この学校の教師みたいに、らしくなるわけか。

殴られ幾分冷静になった頭がそんなことを考える。

そして笑みを浮かべた。

壊れた人形のような、不気味な笑み。

その面に拳が振るわれる。

続いて胸を蹴り上げ、擦る足底。踏みつけられる太もも。ドガドガ、振るわれる蹴りの嵐に僕は息継ぎすることすら許されず、全身を圧される。叫ぼうにも息ができず、嗚咽が喉にせりあがる結果となり、泣こうとしても、目が開かない。必死に空気を求め、口を開ければ肺を強打され、オエ、オエツ、とえずく。

途切れることなく続く暴力。

泣くこともできず、喚くこともできないから、僕は笑みを表情で形作る。

「何、笑って、んだよ！」

一際強い一撃が僕の顔に食い込んだ。笑みを浮かべる口元が痛い。ただ僕は変わらず壊れたように微笑む。

あゝあ、なんて理不尽なんだろうな。

変わらず振るわれる暴力がどこか遠く感じられた。心の中で嘯く言
葉はそのせいかひどく暢気なものだった。

やがて暴力も止み、放り出された暗闇の中、僕は嗤う。

瞼から流れ落ちる涙がひどくしみる。全身が痛くて死にそうだ。

だけど、僕は嗤う。

殺してやる、と。

ふらふらと、戻った洞窟の闇の中、僕は痛みを耐え切れずにうずく
まった。

……お似合いじゃないか。明かりのない闇の中でうずくまるこの姿。なんて哀れなんだろう。栄光も賞賛もない、冷えた闇の片隅で居座り続けたこの僕は今に始まったことじゃない。墮とされたわけではないのだ。ずっとここにいたんだ、僕は。それを哀れとも思えず、分不相応な光を目指して。なんて滑稽な姿だったんだろうな。

ふたたび嗤いがこみあげてくる。

「ははは。はははははははっ！！」

大爆笑だ、おかしくてたまらない。涙交じりに、バンバンと地面を叩いて笑う。舞台上踊る道化、結果のわかった物語を紡ぐ演者。観客が腹抱えて笑うだろ、笑うためにあるとしか思えない！

ひとしきり楽しく笑うと、にんまり、と狂気に染まった笑みを浮かべる。

「殺してやるよ、兄さん。僕の努力を奪ったんだからしょうがないよ、ねえ？」

笑みに口を広げると、傷が痛む。

「痛いな、この体。こんなんじゃああ殺せるものも殺せないよ」

アデアット、と唱え、手の中にアーティファクトが現れる。

そして、そのアーティファクトを、ブスリと膝の奥深くに刺した。

「ぎゃアあああああああああつはつはつははあああああ
ああはつはあああああああああ！」

グチヨグチヨと、棘に邪魔されながらも、肉を掻き分け、奥底まで
刃は抉っていく。そこから術式を放り込み、刻まれていく痛みと合
わせて僕は耳が痛くなるほどの声で叫び散らした。

さながら水揚げされた魚が地面でピチピチのたくるように、僕は体
を投げ出しジタバタと地面をのた打ち回る。それでも思考すること
はやめない。絶えず術式を流し続けた。自らの体改造されていく痛
みに僕は悲鳴と狂笑を混ぜ、狂態を呈していく。

術式を流し終えると、右膝から刃を抜き、同じことを左膝、右腕、
左腕、腹に繰り返して行く。

そのたび、僕は狂い叫び、闇を震わせる。

終わる頃には大きな穴が五つ、体に空いており、抉られた濃淡それぞれある赤に染まる肉が覗いていた。

このまま放っておけば間違いなく死ぬが、痛みは感じていない。痛覚はこの身に不要なものだ、と排除した。刻まれたのは戦闘にもつとも役に立つであろう魔法の術式。それは本来身体に仕込むようなものではない。しかし現実それは成功している。正直よく成功したものだ、と思った。普通なら成功しない。設計図もなく即興で構築していく術式を破綻させることなく成立させるなど奇跡に近い。

「兄さんを殺せっていう導きかなあ？」

クスリ、と血で染め上げたその身体で笑う。

周りを見渡すと、僕が抉り取った肉が散乱し、血が撒き散らされていた。それを指先で掴みあげながら、嫌そうな顔をしてポイツと捨てる。そしてデユナミスにもらい、全く用を成していなかった呪物の中からイリクシールを取り出し、乱雑にかけて治療を施す。痛みは感じていないから、今の僕はひどく怪我に対しての危機感がない。放っておけば死ぬだろうなあ、ぐらいである。死ぬなら死ぬでもいい、ただあるものは使っておこうという程度のレベルだった。

しかし、身体は限界だったのか。

唐突に身体の自由が効かなくなり、パタン、と糸が切れた人形のよう
に倒れこんだ。

どれだけ動こうとしても、身体が動かない。まばたき一つせず見つ
めることになるのは、真っ暗闇。ふと、このまま身体が動くことな
く朽ち果てるのではないだろうか、という予感にとらわれた。そも
そも術式が成功したなんて保証はないのだ。実は何らかの不具合を
起こしていて、もうこの身体が動くことがなかったとしても何ら不
思議ではない。

「（まあ、それも、いいか……………）」

このままここで死んだとしても、その程度だった。

闇に紛れ込んだ子供は、そのまま闇に吞まれて死ぬ。

思うことがあるとすれば、ろくでもない人生だったなあ、という感
想ぐらいである。

「（ホント、何のために頑張ってきたんだか……………）」

走馬灯のように今まで歩んできた人生が脳裏に駆け巡る。

村での生活のこと。兄さんに構ってばかりのネカネ姉さんに構ってもらえなくて拗ねていた自分。少しだけ苦味を帯びた笑みとともに。村に飛来した悪魔襲撃という災厄。大切な人が目の前で石化していく様子に何もすることができなかった自分。無力感を揺り起こされて。

魔法学校でのこと。ひたすら周りを見無視して、躍起になって日々石化解呪に励んだ自分。憐憫と自己嫌悪に苛まれて。

そして、ついさっきのこと。憎悪が沸き立って。

それだけだった。走馬灯を呼び起こすにはまだ少し早く、短すぎる人生だった。

本当に目の前で奪われてばかりの人生だ。欲しいものはすぐ目の前にあったのに、僕はそれに手を伸ばさずして、腕を伸ばした。すぐ近くにあった手とすれちがって、僕は掴むことのできない光を掴もうとした。

ふつつつと怒りが沸いてくる。何故そんなことを僕はしようとした

のか、と。同時に何故僕がこんな目に遭わなきゃいけないのか、と。矛盾を孕んだ怒りで胸が蝕まれていく。

僕は何故安易な道を選ばなかった！ どうせこうなるのだったら僕が何をしようと変わらなかつたじゃないか！

支離滅裂な怒りが僕の胸の中で渦巻き、倦怠感のこもった自分を押しつけようと氣勢をあげる。

しかし、倦怠感は根強かった。どちらにせよ身体が動かないという文字通り動かしたがい事実が目の前に横たわっているのだ。いくら氣勢をあげようと、その事実の前では虚しいだけ。

ゆっくりと瞼が落ちる。

意識が混沌としてきた。自分の横たわる地面が自分の立ち位置がひどく揺らいでいる気がした。

僕はその揺らぎにそのまま身を任せた。

どうせなるようにしかならないのだ、そう思っ

あれからどれくらいのが経ったのか。

僕はじんわりと汗ばむ身体に気持ち悪さを覚えながら手を額にやり、うつすらと瞼を開ける。霞がかった視界が、瞬きを繰り返すたび徐々に明瞭なものへと変わっていく。

ゆっくりと身を起こし、ぼんやりとした意識であたりを見回した。瞬間、蘇ってくる感情、理性、思考。その目まぐるしさに、酔いのようなものを僕は覚えたが、はつきりとした心根が、統一されない心のなかに一本通る。やがてそれらは形を変え、ある程度まとまったものとして肉付けされていく。

ゆらりと幽鬼のように立ち上がり嗤った。

殺す。

言ってしまえば訳ない話だ。だけど、もう考えたところで何も変わらないのだ。目指してきた光は失われ、それについて考えることは意味ない、詮無い話だ。

だからもう何も僕はいらない、欲していない。唯一欲しかったものはもう存在してないんだから。

ただこの胸の中に燦る感情を、八つ当たりでも何でもいいから吐き出す。

それだけでいいんだ。

僕は再び光の中に身を晒す。照りつける太陽に目を細めながら、僕は歩いていく。

魔法学校につくと、僕はアーティファクトを呼び出し、強い認識障害魔法をかけた上で、身を潜めた。今迂闊に近づき、殺そうとすれば最悪目的を果たすことなく、周りの人間に抑えられる。この身に刻んだ術式であれば、一瞬で殺すこともできるかもしれないが、万が一というものがある。それに一瞬で殺したところで、この胸を満たすほどの達成感が得られるとは思えない。じわじわと嬲り殺したところでのこの胸を埋められるとは思えないが、あっさり殺してしまつたらそれはそれでつまらないと思つた。

兄さんの部屋がある寮まで移動し、その部屋の窓の外の近くにある茂みに隠れながら、僕は遠見の魔法で兄さんの様子をうかがう。ちよとど起きだしたところか。どことなく疲れた様子を見せているが、それでいてしまらない笑みを浮かべている、どうしようもなくむかついた。

ネカネ姉さんがやってきて、アーニヤがやってきて食事を一緒にとる。みんなの表情は明るい。会話までは聞き取れないが、楽しそうだった。僕がいない食卓に何の疑問もないんだな、そんなことを考えてしまった僕に反吐が出た。

食事を終えると、出かける準備をして、三人そろってどこかへ出かけていく。遠見の魔法とリンクしながら、僕はその後を追った。

着いたのは、大きな病院だった。見たところ普通の病院のように見えるが、三人は裏手に回って病院の中へと入っていく。そこにいたのは懐かしい村の人たちだった。皆ネギ兄さんに笑顔で声をかけている。

なるほど一般の外来も受け付けているが、裏では魔法関係の治療も行っている、そういうことか。これだけ大きな病院だと隠蔽は難しいし、それならいっそのこと一般の治療も請け負ってそのように偽装しよう、というわけか。となると、ここは魔法関係では最大手の病院かもしれない。小さな病院であれば、隠蔽すればいいだけ、そ

れでも間に合わないから偽装しているのだ。

ネギ兄さんに声をかけている村の人の中に、サランおばさんの姿を見かけた、その近くには喫茶店のマスターもいた。ズキン、と胸が痛む。本来ならああやってみんなから笑顔で声をかけてもらっていたのは僕であるはずなのだ。それなのに……………

そうこうしているうちに、景色は移り変わる。

目に映ったのは、深刻そうな顔をして話す、スタンおじさんとメルディアナ魔法学校校長だった。二人の姿に僕の感情は半ば強制的に切り替えられる。

何を話しているんだろうか、皆喜ぶばかりだったけど、もしかしたらこの二人は、あの石化解呪に疑問を持っているのかもしれない。だって不自然が過ぎるのだ。解呪を研究していたのは僕でさらに兄さんは治療への特性はなかったはずだ。それなのに、解呪したのは兄さんになっている。冷静に考えれば誰だっておかしいと気付くはずだ。

ただ、と僕は陰惨な笑みを浮かべる。もう、あそこまで噂が浸透しているのだ、事実として。今更どうこう言ったところで、止まるものではない。だから僕はその方面での思考を諦めているのだ。それにそうやって僕の名誉を取り戻すことは僕にとってまた光に手を伸ばすことと同義に思えた。そこまでして手柄を横取りしたいのかと

誹られることになるだろうし、それらを払拭することができのかどうかさえ石化解呪と同様に怪しい。そんな気力はとっくのとうに打ち砕かれているのだ。

兄さんたちが二人に近づいていくと、二人はとりあえず笑顔を見せた。スタンおじさんが兄さんの頭を乱暴になでる。

僕は唇を噛みしめて、その光景から目を逸らした。直視し続けるには厳しいものがあつた。

時間を置き、遠見の魔法を見直すと、スタンおじさんも校長の姿もなく、兄さんたち三人が石化解呪の影響がないか、検査している村の人たちと団欒していた。本当に楽しそうに笑いながら。

兄さんたちの周りに、暖かそうな雰囲気漂っているのは錯覚か。

僕はとうとう見ていられなくなって、遠見の魔法を打ち切った。そして、今までそうしてきたように、誰も見ることもない影の中、独りひっそりと四肢を丸めてうずくまった。

それからしばらく、そうやって時間を過ごした。

遠見の魔法で再び兄さんの監視追跡を再開するとちょうど、兄さん

たちが村の人たちに囲まれて食事をしているところだった。宴もたけなわだったのか、まもなくして食事を終え、兄さんたちはみんなに惜しまれながら病院を出て行く。

再び追跡すると次にたどりついたのは、メルディアナ魔法学校だった。何をしにきたのかと思えば、やっていることといったら生徒に囲まれ、照れているだけだ。目的があつたのかもしれないが、生徒どころか教師にまで囲まれ、授業のチャイムがなろうとも解散することなく、なし崩し的に休講となっていた。

兄さんは戸惑いながら、ネカネ姉さんは困ったような顔をしながら、アーニヤは誇らしげに、それぞれ反応している。

そのまま、食堂にまでその騒ぎはもつれこみ、結局ドンちゃん騒ぎになった。皆の表情に占めるのはただ純粹に未来の英雄を称えるものだ。今同じ魔法学校にいることを誇らしく思っているようだった。

夜までそれは続き、途中から村の人まで合流し、宴を楽しんでいた。

そして、残ったのはいつのまにか酒まで入っていたのか酔い倒れた村の人たちの身体と大量のごみだった。

それについていけないのか兄さんが苦笑い気味にそれを眺めている。

三人は食堂のおばちゃんに礼を言い後片付けを任せると、寮に帰っていった。

途中アーニヤと別れ、ネカネ姉さんと兄さんは手をつないで部屋に帰っていく。

ネカネ姉さんは兄さんの面倒見ているんだっけっか。となると兄さんから離れるのは寝るときぐらいしかない。

……………今しかないだろう。

僕はある程度時間を置いてから、その手にアーティファクトを携え、気配を消して兄さんの部屋に潜入する。

ベッドは二つ置いてあった。たぶん、片方にネカネ姉さんが寝ているんだろう。

これだけ近距離だとさすがに気付かれる可能性がある。認識阻害魔法はかけているが、魔法的感覚の優れた人間なら魔力の端緒くらいは感じ取れるかもしれない。必要以上に物音を立てないほうがいいな、と判断して、僕はなるたけ静かにひっそりと片方のベッドに近寄る。

そしてベッドを覗き込み、僕はついに手に握られたアーティファクトを落としてしまった。

カラン、と床とぶつかり乾いた音を立てるが、起きる気配はない。

「はは、何してんだよ、もう」

それは誰に向けての言葉であつたか。

どうしようもなく小刻みに震える手で、アーティファクトを掴みなおす。力を入れて握るが、余計に震えが止まらなかった。それでも懸命に心を誤魔化しながら、僕は切っ先を向け、その先にあるものを再び見てしまう。

安心しきった顔で眠る兄さん。そしてそれを抱え込むようにして、抱きしめているネカネ姉さん。

僕の心のどこかに罅が入った。

嫌だ、嫌だ、嫌だ。

僕はすべてを拒絶しようと切っ先を勢いよく下ろす。しかしそれは振るわれない。寸前どころか、空中でその刃は止まってしまふ。何度も、何度も繰り返し返すが、その動作は小刻みに手を振っているようにしか見えなかった。

腕が硬直したように動かない。

違う、きっと体内に仕込んだ術式に不具合が発生したんだ、そうに違いない、絶対そうだ、それ以外に何がある、っていうんだよ！？

気がつけば目から涙があふれていた。身体が震えていた。残酷なその光景から逃れるように、部屋から離脱していた。

そのまま前も見ずに駆け抜ける。涙をこぼしながらただ闇雲に走った。足に何かがひっかかるうともただ前に進んだ。身体がぶつかるうとも気にしなかった。それができるのだ、この身体は。痛みも空腹感も熱さも寒さも感じないのだから

勢いをつけてきた足に何かがひっかかり、僕の体は宙に投げ出され

る。地面になげだされ、僕は全身を地面に擦り付ける。

それでも僕は止まらず、頭を地面に打ち付けた。そして何かを祈るように額を地面に擦り合わせ、涙を流す。腕で震える自らの体を抱きしめこらえようとする。

それでも漏れてしまう、

「さむい、さむいよお」

心の奥底からの声。

………できるはずがなかったのだ。

だって兄さんは悪くない。

何ひとつ悪くないんだから。

兄さんは巻き込まれたただけだろう、おおよそ、あの石化の光景を見て魔力が暴走したか。それで、僕の術式にそれが流れ込んで。石化解呪したのが兄さんってことになった。どうせ、僕のことを嫌っている教師がある程度の矛盾を許容しても兄さんの優秀さを証明して

僕を蹴落とそうとしたんだろう。悪いとすればそういう流れを作った教師だろうに。

僕の理性は感情での行動を許してくれなかった。そんなささいな子供の八つ当たりすら協力してくれなかった。

兄さん悪くないのだ。そんなことわかっている、誤魔化そうとしてきたけど、薄々気付いてた。

でも、それでも、そのことによって、利益を賞賛を温もりを享受したのは他ならない兄さんじゃないか。

僕からそれを奪い取っていったのは兄さんじゃないか。

そうやってどうにか感情を繋ぎとめて、殺そうとした。

でも僕は、気付いてしまった。

僕は何で、村の人の石化を解呪しようとしたんだ？

賞賛を浴びたかったからか？

村の人の温もりが欲しかったからか？

違うんだ、賞賛も浴びたかったし、僕を暖めてくれる温もりも欲しかった。

でも、僕は、それよりも。

ああやってみんなに笑って欲しかったんだ。

僕の周りにあつた当たり前の光景。皆笑って、暮らしてた、僕を囲むのどかな風景。それはとっても素晴らしいもので、僕はそのおかげで笑っていられた。暖かい気持ちになれた。

だからもう一回、そんな光景が見てみたかったんだ。

あの日壊された、あの光景を。

かつて僕が夢見た光景。もし願うことが望むことが許されるんだったら、もう一度見てみたいって。

そんな光景が、今日僕の目の前にずっと存在していたんだ。

何を不満に思うことがあるのか。手を伸ばせばあの光景の一部として入っていったはずだ。解説したのが誰かなんて関係ないはずだったのだ。

なのに、僕はできなかった。賞賛を浴びたかった。みんなに愛して欲しかった。そうでなければ我慢でなくなるまで壊れてしまった。それが僕には恐ろしかった。あの頃の純朴な想いなくして、あの光景に馴染めるはずもない、そう思った。

手を伸ばすんじゃないやなくて僕は腕を伸ばした。手をとるんじゃないやなくて手をとってほしかった。

そんな僕が、至高とし、夢見て、幻想してきて、実現したあの光景に僕のような泥を塗りつけることは出来なかった。

ましてや壊せるわけがなかった。

「あ、あああつあああ」

何かを憎むことも出来ず、壊すこともできず。

袋小路に追い込まれた拳句、止めをさされることも、捕まえられないこともない。ただそこにいることを因縁づけられた。

そして、

「アアアああーアアアアアアアアああああッ！」

ついに壊れた。

何もかもが壊れ、僕が取った行動はただただこの痛みから解放されることだった。

アーティファクトを手にし、手首に振り下ろした。

ただ現実残酷なのか。

それと同時にすさまじい衝撃が僕を襲った。

デユナミス side

私は、足元でうずくまる英雄の息子を見下しながら、再びこのような愚行に及ばぬよう、アーティファクトを明後日の方向へ蹴り飛ばす。

やれやれ、参ったものだ。まさか自ら命を絶とうとするとはな。いくら大人びていようと所詮は子供ということか。石化解呪の報を聞いたときは早すぎる、と思ったものだが、拳句、その手柄を兄に奪われるとは。最後の最後でぬかったか。

「まあ、それだけではないのだが………」

かすかに震える体を足蹴にしながら、前方に視線を向ける。

「おい。いつまでそうしているつもりだ。さっさと出て来い」

ザザッ、と音がして、一人の老害が姿を現す。

「これはこれは。メルディアナ魔法学校長、このような夜更けに散歩かな？」

「……………お前さんは誰じゃ？」

不寐に警戒の色を隠すことなく、私に疑問を発する。まあ、この格好ではそれも致し方ないか。顔を隠すためとはいえ、あからさまな悪の魔法使いであるからな。実際やっていることは悪の魔法使いだ。

「誰かと言われても、答えるわけにはいかないな。ただこの児のマスターである、ということは明かしておこうか、お祖父さん？」

「——ッッ」

仮契約のカードを見せてやりながら、気取って言うと、目の前の老害の皺が厳しくなった。杖を握る手に力がこもる。

ふむ、杖を持っているところからして、私が止めていなくとも、自殺は止められていたのだろう。

しかし、

「その杖で何をするのだ？」

「別に孫のマスターを悪いようにはせんよ、そちらに後ろめたいことがないのならの。よければその仮面とってもらっても構わぬか？」

ククッ、そういうことを聞いたわけではなかったのだがな、まあ堂々と答えてやろうか。

「無理だな、後ろめたいことなどありすぎる。何せ私は悪の魔法使いなのだからな。立派な魔法使いマギ・ステル・マギ殿？」

老害の顔に痛烈な感情が奔った。どんなことを考えているのだろうか。
な。

「……………何故、孫のマスターが悪の魔法使いなのじゃ」

うめくような言葉に私は平然と答える。

「簡単な話だ。英雄の息子は、英雄と違って、悪に頼ってでもしたいことがあった、ただそれだけのことだ」

「……………ぐっ」

「それで、話は戻るが、お前はこいつをどうするつもりだ。放っておいたらまた死のうとするだろうな」

あくまで、これはマスターとその従者との保護者との話し合いだ、そう割り切ってもらわなければ、話が進まない。幸いこの老人も分をわきまえているのか、私が悪の魔法使いだからといって、すぐに攻撃してこようとはしなかった。

ふん、立派な魔法使いとされているのなんて、大抵腹に一物抱えている奴か、ただの正義バカだけだ。この老人は、立場とそこからの年月が長く、単純な正義バカでいられる時間はとくに終わっているのだろうな。

「……………記憶を消去するしかあるまい。このままにしておけば、精神崩壊するに決まっておる」

そう言ってこちらをうかがってくる。そちらも同じ意見なのだろう、と言うように。確かに現状そうするしかないように思える。私も特別な事情がないかぎり、精神的崩壊を招く要素は排除すべきと、

その案に賛成しただろう。

「阿呆が。そんなことをすれば頭が悪くなる。そいつの能力を落とすような真似をするわけにはいかない」

しかし、今回はその特別な事情があるのだ。老人がこいつに記憶消去を施す場合徹底的に消すだろう。そもそも、石化解呪など思い立ちはしなかった、そこまで改竄しなければ、記憶を弄くる意味がない。そうなってくるとかなり大きく手を加えなければ、思考能力が低下する。それではこいつの価値を削ぐことになってしまふのだ。許容できることではない。

しかし、老人は私の言葉を聞いて憤慨しているようだった。

「あの子は、その賢さ故に苦しんでおるのじゃ！！　こうでもしない限りこの子は一生それに苦しみ続けることになる！！」

「賢さ故に苦しんでいる……………だからといって都合よく記憶改竄をするのか。なんともまあ自分勝手なことだ」

「このことはあの子のためになるのじゃ！」

「ふん、私ならそれ乗り越えさせる、でなければ一生成長しない

だろう」

この老人冷静さを保てていないな、完全に感情で話している。

「しかしまあ、どの口がそんなことをほざくのか」

「なんじゃと!!??」

ふむ、老人ならではの、健忘症にでもかかったのか、それともただ認めたくないだけか。昨今語られる正義など、眉唾物であるとはわかっていたが、なるほど、ここまで腐ればマギステルマギの称号をもらえるのか。大変参考になった。

「お前はこの子供の保護者を名乗る権利などないということだ。石化を解呪したのがこの子であるとわかっていくせに、放置した。この子がどれだけそれを夢見ていたか知っているくせになあ?」

「ち、ちがう、わしは……………」

「祖父なら体張って庇うものじゃないか、普通は。私はそのへんのことはどうでもいいが少なくともお前にとっては、そうあるべきでは?」

しどろもどろになる目の前の老人を嘲笑うように私は愉快げに、事実を突きつける。

「たとえば、メガロメセンブリア元老院から圧力があつたとしても、なあ？」

「な、何故それを……………」

呆然とした様子の老人に私は笑うのみ。

この子はその事実気付いていたかどうかは、わからないが少し考えればわかることではあつただろう。いくらこの英雄の息子が片方に比べて嫌われていたとしても、こいつを擁護する人間はきちんといた。

少なくともこんな勢いで事実が広まるのに、歯止めぐらゐは効いたはずだ。なのに事実として歯止めはかからなかった。

それは何故か？

答えは簡単。メルディアナ魔法学校の上部組織であるメガロメセン
ブリア元老院が圧力をかけたからだ。

メガロメセンブリア元老院は先の大戦の『災厄の皇女』の一件での
英雄の行動から、自分たちに都合のいい英雄を求めていた。そして
それは当然、それは英雄の息子であるネギ・スプリングフィールド
とアリナ・スプリングフィールドにも目星はつけていただろう。

しかしだからといって、彼らは直接その双子を見知っていたわけでは
ない。あくまで魔法学校の成績、彼らの魔力潜在量ぐらいしか知
らないだろう。

そこで彼らは考える。どちらが自分たちにとって都合のいい英雄に
祭り上げられるか。

片や、品行方正、絵にかいたような優等生で、魔力潜在量もかつて
のサウザントマスターを上回るほどの才を持ち、立派な魔法使いを
目指すとして公言して止まないネギ・スプリングフィールド。
マギステルマギ

片や、優秀ではあるようだが、授業にはろくすっぽ出席せず、魔力
潜在量も、英雄たるには物足りない才しか持っていないアリナ・ス
プリングフィールド。

どちらが自分たちにとって都合のいい存在であるか、書類で見る限り一目瞭然だろう。

そして、今回の件。

メガロメセンブリア元老院の下部組織である魔法学校で起きたことだ、すぐさま元老院の耳には届いただろう。しかも、それをやったのが、少なくとも主流ではネギ・スプリングフィールドだとなっている。

もちろん、解呪の方法は全くといっていいほどわかってない。ネギ・スプリングフィールドが石化解呪を願う心が魔力の性質を治療特化へと変えたのだ、巷では言われているが元老院は信じていないだろう。そういう口当たりのいい理由は正義を妄信するある意味純粹な人間にのみ信じられるものだ。場所を隔てれば、現実味のないものとなり、魔法を知らない人間だったら奇跡の二文字で誤魔化せるかもしれないが、魔法使い、しかもアリアドネーのような学者には通用しないし、元老院のように純粹どころかねじれにねじれまくっている人間も信じないだろう。

しかし、彼らにはその辺は些細なことではない。

彼らは才能が確かな人間を、英雄へと祭り上げられれば、それでいいのだ。そしてかなり怪しいものとはいえ祭り上げられる功績があ

る。

彼らは気付いたはずだ。水面下の下火としてある噂。石化解呪を研究していたのは、兄ではなく弟で、実際解呪したのは弟のほうだ、と。彼らからしてみても、そちらのほうが信憑性が高いと感じ取ったはずだ。

しかし、それは彼らにとって邪魔でしかない。英雄として祭り上げるのは兄のほうでいいのだ。そんな噂に英雄としての功績にケチつけられたらたまったものではない。ただでさえ不確かな功績なのだ。彼らは徹底的にそれらの噂を潰そうと動いただろう。そしてそれがメルディアナ魔法学校への圧力となった。

今回の一件彼らが多少のデメリットを背負い込んでまで、積極的に動いたのは、都合のいい英雄を確実に作れるからだ。

簡単な話。英雄の息子として、あるいは英雄として、周りからの賞賛を浴び続ける環境に慣れ、大人になった彼に元老院はこう言つてやればいい。

あの一件、本当にお前が解呪したのか、実は解呪したのは弟のほうじゃないのか。

大人になり、魔法について見識が深まれば、ネギ・スプリングフィ

ールドはこの一件に疑問を持つようになるだろう。そこを責めてやればいい。証拠なんかも偽造して、もし自分たちに不利益な行動を取るなら……………、と脅してやれば、都合のいい英雄の完成だ。

耐えられないだろう、賞賛を浴びてきた光の人生から、弟の手柄を横取りした薄汚い人間としてのレッテルを貼られることに。

これの恐ろしいところは、ここに仕込まれた毒は遅効性であるということだ。

じわじわと、自らの功績に疑念を抱かせ、そこに証拠をもって、脅し、保身に走らせる。必死になるだろう、自らの立場が失われるかもしれない、その恐怖に襲われて。

なんとも、まあ腐った策だ。えげつなさすぎて、私でも少し引くぐらいだ。

しかし、その犠牲者が今ここにいるのだ。このことを知ったらどう思うだろうか。まあ復讐に走るだろうな。だがそれでは少し困る。事実を隠し、復讐に走らせず、この一件で私に救いを見出させ手綱を握る。それが私にとってベストだ。

そのためには、目の前のこの老人は邪魔だな。

「さて、ご老人。一つ提案がある」

「……………」

「簡単なことだ、私がこの子の主人として、この子を従者としてもらいつける。このままにしておくわけにはいかなからな。主人として」

「……………そんなことわしが許すと思っているのか？」

冷えた、こもった声で言う。顔がマギステルマギの顔じゃないぞ。

「そんな権利が貴様にあるとでも？」

「わしはこの子の祖父じゃ」

「……………この後に及んで面白いことを言うな、立派な魔法使い殿」

笑いを漏らしながら、マントを捌き、杖を構える老人と向かい合う。

「立派な魔法使いのやり方も、悪の魔法使いのやり方も決まっている。ただ力で蹂躪するのみ、だ」

「さあ、殺り合おう、立派な魔法使い殿。一人の子供の運命をかけて」

舞台裏の闇（後書き）

はい、わかってますよ、皆さんが言いたいことは。

まあそれは感想で聞きます。頑張って受け止めます。

ただし、僕も言いたいことがあるので、この場をお借りします。

この作品を書くとき僕は決めました。

やりたいことはやりつくす、やり惜しみはしないと！

皆さんを笑わせたいし、皆さんを泣かせたい！

ハーレムもしたい！

チートもしたい！

“泣いて笑って怒って喚いて叫んで狂って愛せるようなそんな物語”

一人の書き手として、またプロの作家になるべくして、掲げる指標とも言つべき、この文言。

この作品はそれを実現すべくする僕の挑戦作であり、実験作であります！

ハーレムもしたいです、チートもしたい、さらにはこの作品では、読者様に推測していただけるような作中では語らない“物語の深み”というやつも用意しました。それについては、自分で読み取りたい、こんなもん言われんでもわかってるよ、深みでも何でもねえ、と言われる方もいると思うので、それについてはこの文とも物語の深みを付け加え、活動報告で語りたいと思っています。まあだからそれは置いておいて。

ハーレムはしたいです！！ けれど好意に理由のないハーレムは嫌だったんです！！ 確かに理由が曖昧な好意もいいですよ？ そういう恋もあると思いますし、作者自身安易なハーレムも好きだったりします、否定はしません！

けど、僕が書く以上それは嫌だった！ ネギまの原作でも主人公は多くのヒロインを魅了していますが、果たして、それはいつまで続くのでしょうか。確かに世界救ったりすれば、そのまま崩壊的にハーレムエンドもあると思いますが、そのエンドの後はどうでしょう？ 本当にそのハーレムを維持できるのでしょうか？ そんなことに触れるのは無粋かとも思いますが、理由のない好意なんかだとその不安定さが透けて見えてしまします。

僕は将来を見据えたうえでの現実的なハーレムを築きたかった！！

ゆえにタグでもメインとした、千雨、刹那、真名に関しては、僕は決して曖昧な立ち位置、曖昧な好意ではなく、きちんとそれぞれ違った立場からの好意をアリナに抱くことができる、そういう物語にこの作品はするつもりです。

また、ハーレムを築く上でもっとも大切なのが、主人公の人間的な魅力です。並大抵のものでは無理です、ハーレムは。今回の結末になった理由のひとつとしてまずはこの要素です。

アリナはこの後二年時間を飛ばして、人間的に成長して帰ってきます。その過程は物語の途中途中、挟んでいきますが、それはおいといて。

アリナは人間的に成長して帰ってきますが、それは決して完成したものではありません。まだまだ弱さを抱えた人間でありますし、過去の歪みを残しています。それにいきなり時間が飛んで帰ってきたら完璧超人でした、みたいなものは到底読者様は納得できないものでありましょう。僕も納得できません。

アリナはまだまだ未熟でこれから悩んでいきます。その途上に彼女らヒロインが関わっていき、アリナは成長していきます。その過程にヒロインがそれぞれの立場で支えていきます。

この作品のハーレム要素としてそんな感じです。

そして、チート……！

これに関しても、僕は一つ意見があります！

まず、チートはチートでいいんです、でもこの作品のチートは、ある意味泥臭く白熱した戦闘をします、そんな中でのこの作品チート要素というのは、「え、あんな子供が〇〇と互角の戦いをしているだー！？」「齡十歳の子供がこの道云十年の奴に勝っただー………！？」つまりそういうことです。チートはチートでも圧倒的ではなく（無論圧倒的な戦闘もありますが）VSチートで打ち負かすようなチートです。もちろんそのチートは戦闘だけでなく頭脳面でもです。これはまあ、単なる知能戦で、主人公が企んだり、する感じですが。

それと、チートについてもう一つ……！

終盤になるにつれラスボス的な雰囲気醸し出す……！ これ嫌です……！！ いやもちろん否定するわけではないですよ？ そういう作品もあって、終わって見たら、そのラスボス感もすんなり呑み込めたりします。

しかし！ その更新途中……！ なんととも言えないこの胸のモヤモヤ感……！ それが嫌なんです……！ 実際今回の話を二話同時投稿した

のもみなさんにこの胸のややもや感を感じさせないためでした！
嫌でしょう！？ 舞台裏の道化で切られて、変な感じにもやややるの！！ そういう、もやもやって期待している作品ほどにもやもやしてしまうんです！！ この作品がどれだけ皆様の期待を受けているかわかりませんでした、自分がやられたくないことはやらない！ それがこの作品です。

この作品でもなんか完全なる世界ルートとかありそうで、なんかラスボスチックになったりしそうですが、完全なる世界ルートとかありません！！

え？ あの終わり方で何言ってるの、こいつ、とか思ってるかもしれませんが、次の話できちんとぶった切りますので、ご安心を！！

だから、この作品の原作前の話で、主人公に漂う狂気とか歪みとかもバツサリ切る必要がありました！！ これからの話の中でもそういった主人公の暗い過去の影は漂いますが、それが原因でラスボスチックになったりはしませんので、了承ください！！ これがあの結末になった要素の一つ！

後は、この物語の深みについてなんですが、それは活動報告で！！

別に気づいている方は、ああ、そういうことね、ご納得できたと思います！

うん、なんか終始変なテンションになりましたが。

とりあえず物語の深み以外の語りたいことは、すべて語り終えました。それについては活動報告を参照していただくとして。

正直、この作品は、ネギま二次創作の中、いやこのにじファンの中でも結構異色の部類に入る、作品だと思っています。

ここまでしっかり話数重ねておいて、一旦であるとはいえ、BAD END迎える作品なんてそうそうないですね。

わかっています。ですが、中途半端に妥協して中途半端なものを作るよりか、最後まで妥協せずに、この作品を作り通したいと思っています。

もしかしたら、このお話、あるいはその前の話を見て、この作品から離れる読者がいるのではないか、そう思うと不安で仕方ありません。

しかしやっぱりこの作品はこうであるべきだと思うのです。

未だ納得できない方もいるかもしれませんが。しかし、僕の作品は良

くも悪くもこうであるべきだとする僕が導いたこれも一つの結末なのです。

どうか、寛容なお心で受け入れてくれるよう、切に作者はお願い申し上げます。

それに受け入れられれば、ハーレムですし……………チートですよ？

最後にそんな誘惑を残しつつ、このお話のあとがきは切らせていた
だきたい、と思います。

二話同時投稿したので、明日は、更新を休みたいところなのですが。

続き、早く読みたいですよ？

まあ、そんな読者の気持ちはさておき（おい）、一度間を開けたほうがいいのかなあ、とちよっと迷っています。なぜなら次は二年、
時間が飛びますから読者様も一日おいて整理をつけたほうがいいのか、と。

まあ、そこらへんは感想の反響で決めることにしますか。

早く読みたいとの声をたくさんいただいた場合は、結構急いでストック書かないといけないですし、その分の皆さんの応援パワーも必要ですから。一日五千字の壁越えなきや、毎日更新間に合わないですよね。

書いてて思いましたがこれ脅ですよね、ある意味。自重ははしませんが

なぜなら作者のハートはガラスです、打ち碎かれる危険性がありますから。

それでは予想外、投稿当初から応援してくれた方々がいるので、たぶん、感想も荒れるかもしれませんが、このお話に対する感想待っています

最後にこの一言を残して、締めとさせていただきます。

「俺たちの戦いはまだまだこれからだぜ!!!」

想いは真実、なれど為すは偽りなり

「懐かしいな……………」

手に持った鞆を肩にかけるようにして下げ、僕は目を細めた。

「ほう、ここがアリナの育った魔法学校かい」

それにしわがれ声で答えたのは、肩に居座る大きなオコジヨだった。片目には大きな斬り傷の痕があり、オコジヨとしては異色の黒の毛並みと相まってやたらと物騒な風貌となっている。オコジヨといえば、そこまで攻撃的な生物ではないが、刑に処された犯罪者の成れの果てでもある。その場合でも多くは白い毛並みのオコジヨになるが、あまりに重犯罪を犯した者だと、要注意オコジヨとして毛並みを黒くされてしまうのだ。そうしたオコジヨは仮契約や助言役としても信用されることが少なく、自然の中で、元人間としてはみじめに小動物として飢えをしのいでいく生活を強いられるそうだと。

しかし、

「そうだよ、親父、嫌な思い出しかないけどね」

少なくとも、僕たちの間には遠慮や気まずさといったものとは無縁

だった。むしろ、この二年間、ともに辛苦を味わったことで、その関係は強固なものになっていた。パートナーとでも言おうか。もちろん実際戦闘になれば、パートナーとして共に戦うことはできないが、このオコジョには、アリナには及ばない年月の積み重ねがある。つまり、このオコジョは、僕が親父と呼んでいるように父と子ぐらゐに歳が離れているのだ。

その経験に助けられたことは一度や二度ではない。

「そう、渋い顔しなさんな。どっちにしろここにとどまるわけでもあるめえし」

「そうだな……………じゃあ行こうか」

「おうよ」

僕はしっかりとした足並みで歩く。

二年前とは違い、その目に胡乱なものはなく、ただただ前を見つめていた。

「うん？ 人の声が一か所から聞こえてくるね」

「だな。こりゃ、今日はなんかのイベントでもやってんじゃねえか？」

途中人に出くわすかと思っていたが、予想外ここに来るまで誰にも会わなかった。窓を開けたところ、体育館のほうで人の声と壮大な音楽が聞こえてきた。どうにも何かの式でもやっているらしい。

主席、ネギ・スプリングフィールド君

そうかすかに聞こえてきたあたりで、僕は顔をしかめた。

「お。おめえのにつくき兄貴の名前じゃねえか」

からかうように言われた言葉に僕は首を振って否定し、表情を引き締めなおす。

「まさか。昔ならまだしも、今はもう何とも思っていないよ」

「へっ。ガキがいつちょまえに強がってらあ」

割とカチンときたが、態度にはおくびにも出さないように努めながら、僕は親父の言を軽くスルーして、話を続ける。

「主席、って言ってたから、今日はもしかしくなくとも、この学校の卒業式かな」

「ま、十中八九そうだろうねえ」

親父もそれ以上は深く触れてこない。一応長く生きている人なのだ。それなりに人の機微に敏感で引くべきところは分をわきまえている。ならなんで、わざわざ僕の禁忌に^{タブー}触れてくるのか、と疑問はあったが、まあ、そういう人なのだ、と納得させた。いや、人じゃないが、まあ飄々としているこのオコジヨは人として、いや人じゃないが、まあオコジヨとして魅力的な部分がある。そうでもなければ、黒オコジヨを傍に置こうとは思わなかっただろう。黒オコジヨと一緒にいること自体不利益は多いが、それでもこの人………の存在はなかなかどうして得難いものがあるのは確かなことだったから。

「まあ、用があるのは校長だけだしね。式が終わって校長室に戻ったあたりで話をつけさせてもらおうか」

「ははっ、驚くだろうぜ、きっと」

「そうだね、鼻くそが飛び出す勢いで驚かしてやろうか」

「……………せめて心臓か、目玉だろう」

「これが世代間の違いってやつだね……………」

「いや、鼻くそが飛び出すものだと思っているのは、世代の中でお前だけだと」

「まあ、長年人と交わずに生きてきたから……………」

「いきなり、いや、うん、なんかすまん」

そんなおかしなやり取りをしながら、僕たちは、式が終わるまでの間の時間を過ごした。

絶対鼻くそを飛び出させてやろうと思っていたながら。

メルディアナ魔法学校長SIDE

今、わしの目の前ではなぜネギの修行が教師をやることなのか、とネカネやアーニヤ、ネギの三人が直談判しにきておる。まあ修行内容としては今まで聞いたことがないようなものじゃからのう。

じゃが、これは仕方のない処置だった。当初の予定としては、メガロメセンブリアのお膝元の魔法学校へと行かせるものじゃったからじゃ。わしはアリナの一件以降、メガロメセンブリア元老院を信用しておらん。もし、この要求に従ってしまえば、十中八九元老院に取り込まれてしまうじやろう。それは何としても避けねばいけない。それゆえの処置。

それすなわち、麻帆良学園での修行じゃ。

あそこの学園長はわしの知り合いでなおかつメガロメセンブリア元老院に逆らえるぐらいの権力を持つておる。旧世界で、元老院の信託の下メガロメセンブリア関連の組織のまとめ役のようなものをしておるそいつは、当然本国からの信頼も厚い。ゆえに元老院の言いなりに、ネギを取り込む可能性もあるが、ナギの知り合いでもある

し、奴自身元老院の命令を素直に聞くようなたまじやない。あれは狸の類じゃ、いやあの頭からしてぬらりひょんという日本の妖怪である可能性も否めないが。

とにかく、そこに送り込むよう、掛け合うぐらいじゃったらわしにもできた。あとはあの狸にネギのことを任せ、そこで稼げる時間の中で元老院の言いなりにならぬ強い自覚と実力を持ってほしい、というのがわしの心づもりじゃ。タカミチ君もいるようじゃし、大丈夫じゃる。

とは言っても、ネカネやアーニヤには納得できるようなものじゃないのだろう。当然じゃ、わしにもネギが教師など勤まるとは思えんのが、あの狸、どういうわけか麻帆良学園で修行できるような根回しを頼んだとき、ネギを教師として赴任させることを約束させられた。

わしにもその意図はわからん、しかしどうせわしが断ったところで奴は勝手に本国にそう取り付けるじゃる。まったく狸め、嫌な予感しかせんわい……………昔から奴の考えることは読めんかったからの……………頭の造形についても理解しがったが。

「課題に書いてあることはもう決まったことじゃ、立派な魔法使いになるにはその修行内容通り励むしかないのう」

マギステルマギ

「そんな、ネギが教師だなんて……………」

ネカネがあまりのことに倒れそうになっておる。ネカネはアリナが行方不明になった後露骨にネギに執着するようになった。今回の事もネギが自分の目の届かないところに行くことに目の前が真っ暗になったのじゃろう。しかしこればかりは仕方がない。

アリナ……………

わしはあの戦いに敗れ、アリナを奪われてしまった。

『私は必ずこいつを立ち直らせてみせよう』

最後にそう言った奴の言葉が耳に残っておる。それはわしへの痛快な皮肉であつたのかもしれん。記憶を改竄するという方法を取ろうとしたわしに対する。

今でもわしは悩んでおる。わしがとうとうとしていた方法は正しかったのか、間違っていたのか。じゃが、わしは確かに間違っていたのだらう。それは方法の有無の問題ではなく単にそんな方法を用いねばならぬほどにアリナを追いつめてしまったことが、じゃ。

わしは石化の解呪という希望を見せ、アリナの精神が壊れぬよう誘導した。そこから間違っていた。その途上でもたくさん間違えた。

元老院の圧力からかばうこともできなかった。

一步。一步アリナに踏み込めば、止めることもできたはずじゃ。じやがわしはできなかった。それはわしのアリナへの負い目のせいでもあるし、職務上孫とはいえあまりに贖するわけにもいかない、ということもあつた。まったくもって中途半端じゃつた。自分が情けなくてたまらなくなる。

アリナ……………あの悪の魔法使いと名乗った男の下、お前は立ち直れているのじゃろうか。結局あの事件は報告せざるを得ず、アリナは悪の魔法使いに浚われたことになった。あながち間違つてもおらんが、もし、あの男が本気でアリナを立ちなおせることができたら、本当にわしは……………どうしようもない。あそこまでアリナを追いつめた挙句、立ち直らせた恩人をも追いつめるのじゃから。

目の前のネギを見る。

修行への意気込みを語っているが、その目には不安がある。今まで慣れた土地を離れ、異郷の地へと赴くのじゃ。そこには親しい人間もいなければ、魔法を知っておる人間も少ない。そこに十歳の子供を放り出すなど保護者のすることじゃない。ネカネの反応も保護者としては的確なものなじゃろう。

せめてアリナがいれば……………、二人兄弟仲良く、異郷の地でも明るくやっていけたのかもしれない……………

どうしようもない、わしには自ら元老院から孫を守る力すらなく、友人を頼る羽目になっておる。自ら守るなどと言って、悲惨な結末になる、そんな愚は犯せん、じゃから友人を頼った。しかし、わし自身の手で守れんこと、どうしようもないこととわかっていながら、わしは自身の無力を呪った。

わしは！！ わしは！！

バーーーーン！！

「……………な、なんじゃあ！？？」

「誰よ！？ 扉蹴り開いたのは！？」

「……………ッッッ！ 飛び出た！！」

「うそつけ！！」

「鼻毛が!!」

「確かに飛び出てるう!!」

………わしは呆然としながらとりあえず鼻毛を抜いた。

メルディアナ魔法学校長 side out

なんだかんだあつて。

僕は鼻毛を抜いた学園長と相對している。

鼻くそではなく、鼻毛が飛び出してきたことに、僕のドツキリ大作戦は成功とは言わないまでも及第点をつけられると満足していたが、親父は鼻毛は元から飛び出していた説を主張し、いまだ両者は合意に達していない。………こんなおふざけにも真面目にノッてくれる親父には感謝感謝だ。まあ、向こうはどうにも本気っぽいけど。

「どうも、お久しぶりです。校長」

おじいちゃん、とは呼ばない。

ちなみにネギ兄さんなどの三人はすでに退席している。三人はいたが、それなりにヤバい話になると校長は踏んだのだろう。早々に校長室から追い出した。

「しかし、ここの警備は大丈夫ですか？」

まずは軽い話題から。

とは言っても、疑問自体はいたって真剣な疑問だ。

今の今まで、全く誰にも見つからなかったのだ。

この学園の警備は大丈夫か、と若干呆れていたが、誰も好き好んで魔法使いの集まるこの場所に襲撃などかけないか、と強引ながらに納得してもいる。学校側もそう思ったからこそ、警備はそこまで厳重ではないのだろう。しかし、それは危機意識の低さを露呈させるもので仮にも生徒を預かる身としてはいささか慢心が過ぎる、と僕

は辛口に評価していた。事実アリナがこの学校を害を為す目的があったのならその遂行は容易かっただろう。もちろん、禁書庫や魔法具の倉庫などには結界や警備用の魔法具があるのかもしれないが、生徒などを人質にとられたらどうするつもりなのか。まさか教師がいるのだから、生徒も魔法が使えるのだからと世迷いごとを吐くようなことはないだろうな、と小一時間ほど詰問したくなってくる。

むろん、いじめ的な意味で。

「アリナ、お前は今までどこにいたのじゃ」

しかし、校長は僕のいじめを受け付ける気がないようにで焦ったように話を進めようとしてくる。

ま、別にいいけどね。

「魔法世界ですよ。主にアリアドネーで魔法などを学んでいました」

これは事実だ。アリアドネーには豊富な蔵書があり、アリアドネーの総長のセラスさんの信用を得て、禁書庫にも入らせてもらった。おかげでアリアドネーではかなり有名になってしまったけど………
…まあ仕方ないだろう。

「そ、そうか……………」

そこから先は沈黙が部屋を包む。どう踏み入っていいかわからないんだろ。な。かといって、話を進めないわけにもいかない。僕だつて目的があつて旧世界に来たのだ。そしてその目的をスムーズに進めるためには校長の協力が必要だ。まあ、校長の罪悪感を利用して、という方法がないわけでもないけど、さすがにそれ以外の選択肢がある状態でそれをするのは気が引けた。

「どうぞ。何でも聞いてください。あなたにはその権利があります」

「あるのかの……………わしにその権利が」

肩を力なくおとし、うつむくその姿から感じられるのは、深い罪悪感だった。後悔しているのか……………肩に乗っている親父がその姿を見て、一瞬身震いした。親父もなんだかんだで黒オコジヨだから、その深い罪の意識に何かおもところがあつたのかもしれない。

権利があるのか、か。正直言つて、この人にはたくさん言いたいことがある。それは決して好意的なものではなく、むしろその逆だった。しかし、この姿を見てなお、何か言えるほど、僕は小奇麗な人間だろうか。たくさん恨み言はある。憎んでいたほうが楽なのだ。でもそんなことを続けていいのだろうか。

黒オコジヨを僕は連れている。そのことを責める人間はたくさんいた。理由はどうあれ、親父は過去に重い罪を犯したのだ。しかし、僕はそれを許容し続けた。この世界のどこかで親父のせいで被害にあい、恨んでいる人がいることを知りながら、僕は僕のそばにいてくれる親父がたくさんの人がいうような悪しざまな人には思えなくて、親父が背負った罪を、他の誰が許さなかったとして、僕はその傍にいて許してきた。

僕が選んだことだ。許したのは、ただ傍にいてくれる誰かが欲しかったから、単なる自己満足。それは許しでもなんでもなかったが、少なくとも周りにとっては、誰かともにいることを許された黒オコジヨは、その罪を贖っていない、と見てしまうのだ。

いい人だった、どんな経緯で犯罪を犯したかは知らないけど、僕にとってはいいい人だった。

そして、僕がこの黒オコジヨをいい人だ、と言うと偏見を持って接する人間はやっぱいたけれど、それでも僕と同じようにいい人だ、と言ってくれる人はいた。

いつの日だったか、親父が言った、感謝の言葉が心地よく僕の耳朶に反響する。

ありがとう、と。

それだけの言葉だった。

許したっていいじゃないか。

この黒オコジヨを恨んでいる人はやっぱりどこかにいるのかもしれない。でも親父はいい人だ。かつて犯罪者であったこの人が、いい人であった、そのことこそが、この黒オコジヨの罪を許してもいい、と周囲に思わせる最大の理由だと僕は思っている。その真心からこめられた言葉が、それを証明している。

刑務所に入った人間はいつかは更正して旅立っていくように。

いつまでもその人を恨んでいたってしょうがないじゃないか、と思う。

「権利はあるよ。だから聞いて。その勇気がなければ、何も始まらないよ」

だから僕は言う。

悔やんでいてばかりでは何も始まらない。当人を前にしてそれでは、何も。

「……………聞こう。アリナ、お前は、……………立ち直れたのか」

そして、おじいちゃんはついに一步を踏み出した。

僕はそれに答えた。

デュナミスSIDE

「彼は旧世界に入ったようだよ」

闇の帳が落ちた一つの部屋で私は腰落ち着けた椅子でわずかに身じろぎをする。

「知っている。本人から聞いた」

にべもなく答えると、わずかに灯した蠟燭の火が揺れた。

闇の中に浮かぶ、フェイト・アーウェルンクス、二番目の人形は無表情の鉄面皮に不満をまぎれこませた。

「何故だい？」

そして、ゆっくりと真意を確かめるように私に問う。

「彼は君の従者だけど、完全なる世界の中でも重要な存在だ。そして僕たちの計画が佳境に入ってる今、なぜ彼を旧世界に放す？」

確かに、フェイトの疑問はもつともなものだろう。しかし、それを私は鼻で笑って答えた。

「お前にも五人ほど従者はいたな。その従者が従者をやめたいと言ったらお前はどする？」

「……………まさかとは思うけど、情にほだされたのかい？」

「……………答える」

「やめさせるよ、もちろん。だけどね、デユナミス、僕の従者は君の従者ほど完全なる世界で重要な存在ではない。確かに君の従者の作った、魔法具のおかげで、僕の従者は強くなった。だけど、それだけだ。代わりなんていくらでもいる」

迷いなく即答したか。こいつは自らの事を人形と偽っているようだが、本当にただの人形なら、戦災孤児など助けたりはしない。もちろんこいつの言ったことは完全なる世界の組織の人間として間違ったことではない。むしろ正しい。だからこそ、そこに紛れ込んでいるお前自身の意思に気づかないのだろうな。

「対して、君の従者の作る魔法具は一級品で下手をすれば、契約魔法によるアーティファクトにその能力が追いつくようなものだ。今まで、タカミチやクルトの完全なる世界の残党狩りにあつてなお、組織として最低限の力を保っていたのは、彼の作った魔法具による、個人の力の底上げ、強化によるところが大きいのは君だって知っているはずだ」

ああ、あの忌々しいタカミチやクルトのおかげで完全なる世界の力が低下した。おそらくアリナの魔法具がなければ、完全に崩壊していただろう。そこまでにこの組織の現状は逼迫していた。さらには魔法具によって急激に力を伸ばしたことで調子に乗った人間の統制にも乱れが生じ、全盛期の完全なる世界に比べたら、もはや見る影もない。

「にもかかわらず、君はいつからか、従者に対して魔法具の作成を命令しなくなった。従者として命令している分には何もなかったのに、君が命令をしないせいで、僕個人として彼に接触を図り、交渉しなくてはならなかった。ただでさえ計画の遅延が予想される中、今度は彼を旧世界に放つ真似までした。君は一体何がしたいんだい？」

「奴に魔法具を作成させている時間がもったいない」

私がテーブルを指でたたきながら返すと、フェイトは眉をひそめた。

「……………本当に情にほだされたのかい？」

「……………かもしれないな」

ククツ、とわずかに笑い声を漏らすと、今度こそフェイトは呆れと軽蔑が混じったような表情で此方を見下していた。

「そうか。君がそういうのならもういい。近々旧世界に行く用事もあるし、そのとき僕個人として交渉する」

「勝手にするといい」

フェイトは最後に苛立たしげな表情を見せると、踵を返して部屋から出て行った。

扉が閉まった反動か、蝋燭の芯が折れ、フツ、と火が消える。

「確かに私は情にほだされたのかもしれない。だがな、私はそれだけで動くほど馬鹿じゃない」

ある意味アリナと同じだろう。理性だけで動くことはあっても感情だけで動くことは決してない。

「奴は確かに完全なる世界の計画においてに重要な存在だ。何故なら」

にやりと仮面の下で私は笑う。

――奴はスペアキーなのだから。

「……………聞こう。アリナ、お前は、……………立ち直れたのか」

そう言うおじいちゃんは、覚悟の定まった表情だった。

だから僕は答えた。

「うん。立ち直ったよ」

さらりと、何の感慨もなく答えた。

「そう、か……………そうか……………」

そしてそれっきり、おじいちゃんは、前を見ることなくうつむいた。

今、おじいちゃんが何を思っているのかはわからない。でも僕は話

すことにした。

「僕ね、魔法世界に行つてたんだ」

「う、む……………」

わずかに相槌を打ってくれるおじいちゃんを横目に、僕はソファに深く寄りかかり、遠く雲の浮かぶ空を窓越しに仰ぎ見る。

「いろんなことを見た、いろんなものを見た」

ゆつくりと過去に思いを馳せながら、僕は目を閉じる。

「魔法世界ってね、あんまり平和じゃないんだよ」

「……………」

「村が焼け落ち、子供が泣き叫ぶ光景を見た」

「……」

「奴隷に身を落とし、馬車馬のようにこき使われる少年を見た」

「ア、リナ……………」

今僕は一体どんな顔をしているんだろうか。表情が不自然に硬直しているのがわかる。

けど、

「そして、僕は笑顔がいつぱいの街を見た」

僕はわずかに口端を歪めた。それが笑みになっていたかどうかかわらない。だけど、心の中ではきちんと微笑めていた。それらの光景を見た目が、声を聴いた耳が、空気を感じ取った肌が、心の表層を覆う感情を表現できていたか判断するのは難しい。それでも、僕は笑っていたかった。

「知ってる？ 悲劇なんてね、目に見えないだけ、世界には腐るほど転がっているんだよ」

それはあまりにも悲しい認識だった。

でも、それでも、と。

僕は笑顔があふれていたあの光景に、混ざりたい、と。かつて願ったことを、そして死ぬほど絶望したあの光景をもう一度この手で作ってみたかった。僕はもう子供じゃない。あのときは褒められたいと思った、愛してほしいと思った。そしてかつて自分が願ったことと違う、と僕は僕に絶望した。

だけど、僕は綺麗な子供じゃない。

もう一度、汚くなった僕は願うんだ。

今度は、褒められたい、愛してほしい、それらの願いを肯定して。

腹の底からそれを叫んで。

もう一度僕はあの光景を自らの周りに作ってみせる、と。

「悲しいものを見た。幸せそうなものを見た。きっと僕はその“悲しいもの”にあたる存在なんだと思う。だけど、僕は見たんだ。幸せそうなものを、光景を。だから僕はどれだけ泥の中這いずりまわったって、血反吐を吐いたって、僕はもう一回幸せになってみせる。

そのために、僕はもう過去にあった“悲しいこと”に囚われたりしない。僕より不幸な人はたくさんいて、僕みたいに決意云々でどうにかならない人もたくさんいるんだから。その人たちのためにも、僕はその人たちを蹴り落としてでも、先に行く」

でも、いつか。

いつか、僕が誰にも負けない力を手に入れたら、誰にも崩せない幸せを手に入れたら。

僕はもう一度あそこに戻ろうと思う。

今度は傲慢なまでに彼らを見下して、手を差し伸べてやろうと思う。

救ってやる、と。

それが彼らを蹴落とし、幸せになろうとする僕から贈れる、彼らへの唯一の手向けだから。

僕はゆっくりと目を開いた。

そこには小さくうずくまったおじいちゃんが居た。僕の目に何を見

たのか、おじいちゃんは呆然と涙を流していた。何を、何を思っているんだろうか。僕は変質した、大きく歪んだ。石化の解呪にただひたすら打ち込んできた、確固たる人格形成、情操教育を行うべき時期に、まるで機械のように一つの願いの成就だけを願っていた僕は確かに人として壊れていた。

そして、今ここにいる僕はバラバラになった人としての残骸を必死により合わせ縫いあわせ作られたつぎはぎだらけの歪な物だった。

それを目の前の人はどう思っているのだろうか。もし、それを自分の責任に思っているというのなら、今ここにいる僕は、間違いなくおじいちゃんにとっての罪の証ではないだろうか。

「すま、ぬ……………アリナ、すまん……………」

うめくように漏れた言葉に僕はそれを確信した。

僕の肩で、親父が小刻みに震え、それが僕にも伝わってくる。

だけど。

僕は微笑んだ。

目の前の人は、涙を流している、決して偽りではない本物の涙を。

だったらいいじゃないか。

紛争地域では世界から忘れ去られたように死んでいく子供がいる。死に行く瞬間も誰にも気にかげられることなく、死んでいく人がいる。

それに比べれば、僕はどれだけ恵まれていることか。

確かにやろうとしたこと、やったことは、ことごとく僕を害するものだった。

デユナミスから、メガロメセンブリア元老院からかばってもらえなかったことも聞いてるし、記憶消去を断行しようとしたことも聞いた。思えば、石化解呪の儚い希望を見せたのだってこの人だし、それに対して何ら思うことがないわけじゃない。事実ここにくるまで、僕はこの人をあまりよく思っていなかった。

だけど、いいじゃないか。

やろうとしたこと、やったことはともかくにしても。

この人が、僕を想ってくれていたことは真実なんだから。

だから。

「おじいちゃん。僕はおじいちゃんみたいな人に、ここまで想ってもらえて、すごい幸せ者だよ」

綺麗な笑顔でそう言うことができた。

嗚呼。この言葉が言えるのに、一体どれだけの月日がかかったか。

理解したらきつと壊れるから、とか、向こうが悪いだとかそんな子供じみた言い訳はきつと必要なかったのだ。

ただ信じるだけでよかった。

おじいちゃんが、僕を真剣に想ってくれていることを信じられれば、

そして、僕がその想いを返してあげられていれば。

きつと、こんなことにはならなかったんじゃないだろうか。

過去を悔やんでも仕方がない。

でも、今の僕なら信じられる。

そして、それが僕の幸せの第一歩。

信じる強さを持つこと。

とっても陳腐な言葉だけど、

獣のように慟哭するおじいちゃんを見て。

それはきつと大切なことだと僕は思った。

想いは真実、なれど為すは偽りなり（後書き）

二次創作の醍醐味は、原作ではあまりスポットライトの当たらなかつた人間を掘り下げることだと思っています。

原作前のお話でも割とキーパーソンだったおじいちゃんのお話はここで一旦幕切れです、いや次のお話でも出てきますよ、おじいちゃん。

ただここでおじいちゃんはENDです

おじいちゃんENDです。

次のお話でもバンバンおじいちゃんは出てきますけど、それはもうアリナENDに向けてのお話です。

次こそアリナが旧世界に訪れた理由について触れます。

アリナは悲劇をたくさん見て、壊れていたのが、さらに壊れて一周回って、歪みすぎてまっすぐになつた感じです。

……………皆様はこのおじいちゃんENDとアリナの成長を垣間見れ

たお話、どう思われたでしょうか？ 感想お待ちしています。

復讐の火種（前書き）

お気に入り、感想評価ありがとうございます！

しかし、ちょっと申し訳ないことにただいま、感想の返信が滞っている状態にあります……………

起きてから地震のニュース見てたりして、いざパソコン立ちあげたら……………あれ、感想が三十件ぐらい増えている……………

ちよつとこの量を一度に返すのはきついです！！ 先日の四十件ぐらいはがんばりましたけど、ちよつとストックが切羽詰っているの
で申し訳ありません！ どうしても暇な今月中までに仕上げたい所
があるので、執筆を優先させてください！

もちろん感想はすべて読ませていただいています！ 大変励みになります！

前回のお話については賛否両論あったようです、アリナの深いところまでは描写しなかったせいか、違和感を覚えた方も少なからずおられたようで！ しかし違和感上等です！！ あの話を成長とるか違和感を感じるか別れましたが、違和感があるならあるで結構です。見事に拭い去って見せましょう！ 後々のお話で！！ たぶん、うーん、七話ぐらい後らへんで！ まだアリナの成長についてはあ

の話ではやりきれないないので。

後の物語の展開として組み込まれているので、その辺よろしく願います！

えっと感想返信できていない件については申し訳ありません！

その分執筆頑張ります！

返信できなくても感想は読ませていただいているので、それでもよければ、ぜひ感想をください。お待ちしております。

それでは本編をどうぞ！

復讐の火種

「落ち着いた？」

「う、うむ、情けないところを見せたの」

「いいよ。それだけ悩んでたってことだし」

自分が年甲斐もなく醜態をさらしてしまったという自覚があるせいか、少し頬を赤くしながら、ティッシュでチーン、と鼻をかみなおす。

「いや、でもありゃあ仕方ないぜ。関係ないのに俺まで泣きそうだった」

ごしごしと荒っぽく顔をこすりながら、親父はおじいちゃんを擁護する。

おじいちゃんは、僕の肩に乗る黒オコジヨに少しでも妙な目を向けた。

「黒オコジヨ、じゃな」

「そうだねえ。過去に重犯罪を犯した黒オコジョだ」

皮肉るように言い挑戦的におじいちゃんを見据える親父。……
親父には全部事情を話してあるから、なまじ当人同士じゃない以上
おじいちゃんを胡散臭く思っているのかもしれない。しかし、僕は
それを諫めるつもりはない。感情だけで解決しないことなんて世の
中いっぱいある。信じた相手に裏切られることも少なくないこのご
時世それが正しいのだ、きつと。

「でもいい人だよ、親父は。たくさんお世話になった」

そんな親父を見て、僕は言った。

親父は、そんな僕に、やれやれ、と仕方なさげに前肢を上げる。す
るとそんな親父に何を思ったかおじいちゃんは姿勢を改め、神妙な
顔をしてこちらに向き直った。

「オコジョ殿、今までアリナの面倒を見てもらい、ありがとうございます
いました。わしらが不甲斐ないばかりに、アリナにはたくさんの迷
惑をかけてしまい、この子もつらい境遇にあったことでしょう。ア
リナのあなたに接する態度から見ても、あなたがアリナの支えにな
ってくれていたことは明らかです。本当にありがとうございます」

そう言つて、おじいちゃんはテーブルに手を付き、頭を下げた。正直言つて僕は目を丸くするほどに驚いていたが、親父は一拍おいて、へッ、と鼻で笑つた。

「俺もアリナに救つてもらつた身だ、あんたが頭下げる必要はねえ。それに、今まで、なんて辛気臭い言い方やめろや。これから、アリナに引つ付いていく気なんだからよ」

「……………そうですね」

「ま、たまに賢すぎて、逆に手えかかることはあるが、俺にとつちやかわいい息子みてえなもんだよ、アリナは。こつちの意図がスケスケなのが気に入らねえが」

最後に茶化すように僕を小突いて親父は笑つた。おじいちゃんもどこか苦笑い気味に微笑んでいる。その光景に僕は未来を見た。誰が僕と一緒に笑つてくれるかはわからないけど、いつか一緒に笑つてくれる人と一緒にこうやつて穏やかに過ごしたいな。そう思うと、少しだけ幸せな気分になれた。

「おっと。話が盛り上がつちまつて本題忘れるところだったじゃねえか、アリナ、おい、アリナ！」

「あ、ああそうだった、目的忘れるところだった」

「目的、かの？」

おじいちゃんは訝しげに首を傾げる。

「うん。旧世界に来たのもちよつとやりたいことがあったからだよ」

そう、僕は別に何もおじいちゃんと仲直りしたくて、旧世界に来たわけではない。おじいちゃんと話したのだって、最初はその目的を果たすための条件をクリアするためだったのだ。まあ、それが予期していない方向に話を進んだのは事実だが………それならそれで都合がいい。僕の目的のためにおじいちゃんにも協力してもらおう。

「ふむ。なんじゃね？ わしにできることならば、協力しよう」

おじいちゃんも、進んで協力してくれるようだし、その好意に甘えさせてもらおう。

「うん。僕が旧世界に来たのは、旧世界の魔法を学びたかったからなんだ」

「旧世界の魔法？」

「うん、具体的に言えば、日本の陰陽道とか神道とか、アフリカのシャーマンに伝わる、歌や音楽を利用した魔法とか。魔法世界にもある程度は流れてきてるんだけど、どうにも断片的でね。部分的にしか学べなかったんだ。まあ旧世界の文化に土着する魔法だから、仕方がないとは思うけど……………なんていうかこう学べたことが中途半端なだけに疼くんだよ。こう、欲求不満というか、なんというか」

話してる途中から、僕の中の溢れ出すエクスタシーが抑えきれなくなつて、もやもやとした苛立ちを表情に出してしまった。その表情にびっくりしている様子のおじいちゃんを尻目に、自分の世界に入っていると、思いつきり、親父にド突かれた。痛い……………

「まあ、見ての通り、こいつ魔法バカになつちまってよ。まあ、最初はそういうものからの逃避だったんだろうけどよ、今じゃすっかりただのバカでな」

「そ、そうなのか……………」

「んで、魔法世界での仕事が一段落したんで、旧世界に行って魔法を学びに来たってわけだ」

僕の代わりに親父が一通り僕の現状を説明してくれる。

おじいちゃんは親父の話に疑問を呈した。

「仕事、じゃと？ …………… まさかとは思うが…………」

どこかばつの悪そうに、先の言葉を濁すおじいちゃんに、僕は何を気にしているのかを悟り苦笑いした。

「大丈夫。犯罪にかかわるようなことはやってないよ。魔法具作ってマホネットで売っぱらったり、賞金首の首とったりして食い扶持稼いでただけ」

「それは…………… お前のマスターは生活の面倒は見てくれなかったのかの？」

「そうだね…………… 僕がある程度立ち直ってからは。大体あの人と主従契約を結んだのも、あの人が僕の石化魔法解呪に協力して、その代わり僕が役に立つ魔法具をあの人に提供するっていう一種の契約関係だったから。もちろん、あの人は僕を従者として面倒見てもいいって感じだったけど、魔法具を売るお金だけで結構な金額になったし、あの人も僕の魔法具にお金出してくれてたしね。さすがにそれ以上は世話になるわけにはいかなかったから、自活してたよ」

おじいちゃんは、僕の話聞いて、何か言いかけたが、自分の立場は、何か言えるようなものではない、という遠慮から結局何も言わなかった。賞金首と闘ったりする生活は確かに普通の子供がおくるようなものじゃない。ましてや、魔法世界。環境も厳しく、お金があるからといって、すべてがどうにかなるわけではなかった。僕の年齢ならなおさらに。

あるいは単純に石化魔法の解呪にあの人が協力していたことに複雑な気持ちを抱いたのかもしれない。心の内では、あの人が協力しなければ、と恨み節を吐いているのかもしれない。しかし、どちらにせよ、おじいちゃんは何も言わなかった。

「……………普通でないことはわかってるよ。でも、いまさらどうにもならないことだし。皮肉なことだけど、そういう生活をおくったせいかおかげか、僕には普通よりも大きな力がある。だから、過去にあった何かに後悔するよりも、僕は今僕が持っている力を最大限利用して、駆使して、貪欲に幸せを求めて生きたい、そう思ってる」

それが、僕が過去から与えられた現在。

過去と現在は密接に繋がっている。在ってしまった過去を一瞬一瞬の現在にどう生かしていくか、それが一瞬後の現在を紡いでいく。僕は何一つ無駄にしたくない。すつごく悲しかったから。すつごく絶望したから。だからこそ何も無駄にしたくない。つらい思い出さずとも大切なものとして胸にしまい、すべてを糧にして僕は幸せを目

指して生きていきたい。

でも、それを、記憶消去しようとしたおじいちゃんの前で言うにはあまりに酷だから。

その決意をそつと胸にしまって、僕はおじいちゃんに自分の心持ちを話した。

「……………アリナ、大きくなったの。本当に、大きくなったの……………」

涙ぐみながら震える声でおじいちゃんは目を細め、嬉しそうに言った。

「うん、まあ、それはそれで置いといてだ。とりあえず旧世界の魔法についてなんだが」

ここで再び話題を逸らしてしまつては、話が進まない、と親父は判断したのだらう。仕切り直し、とばかりに声をあげた。

「お、おお。そうじゃったな。して旧世界の魔法が学びたい、と」

「うん。西洋方面の魔法は魔法世界にも流れているからそれでいいんだけど。とりあえずは日本の陰陽道について学びたいんだ。関西呪術協会の長が、僕の父親の、ナギ・スプリングフィールドの戦友で、紅き翼でサムライ・マスターと呼ばれていたって聞いてね。土着文化に根付く魔法って結構師事するのに手間取りそうだから。とっつきやすそうなそつから攻めようかと思って」

ちなみに、幸せに生きたい、とか言っただけど、旧世界の魔法を学ぶことに関しては、完全な僕自身の欲求だ。まあ、好きなことをやりたいっていう気持ちを優先させることもそれにつながると思っし、現地人との交流で得るものがあるかもしれない。父の名を借りるのがいささか癪と言えば癪だが。

「……………なるほどのお」

おじいちゃんは、僕の頼みたいことの内容がわかったようだった。伊達に歳は取っていないということが。

「つまるところ、アリナは自らの身分を明かしたいのじゃな？　アリナ・スプリングフィールドとしての」

おじいちゃんも、僕がこの二年の間、その名を意図して隠して生きてきた、ということとはなんとなく察しがついているはずだ。それは英雄の息子として厄介ごとを避けたかったというのもあるし、メガロメセンブリアの陰謀にこれ以上巻き込まれたくない、というのも

あつた。

しかし、いい加減、身分がはっきりしない身で活動するのは不自由極まりないのだ。さらには活動する場所が旧世界ともなれば、だ。だから僕は、英雄の息子としての名を自分の欲求に利用できそうな機会をいいことに僕の身分を明かそうと考えていた。

それに、だ。

「もうメガロメセンブリアも僕に対して迂闊に干渉することはできないだろうしね。少なくとも害意をもって僕に干渉するのだとしたら、よっぽど思いきらなきやいけない。そうするにしてもそうする前におそらく僕に何らかの接触をするはずだから、よほど敵対的にならないかぎり、大丈夫だと思う」

「ふむ……………どうしてじゃ？」

おじいちゃんの疑問はもつともだ。メガロメセンブリア元老院は兄さんを“都合のいい英雄”に仕立て上げるために二年前圧力と工作を行った。おかげで兄さんの名は、サウザントマスターの息子として、さらには自らの村の永久石化を解呪した功績をもつ英雄の卵として、その名を魔法世界に知らしめている。そして実際、その解呪が兄さんの手によるものでないことを知っているのは僕だけだ。教師のような端役ならまだいいだろう。発言力もないし、圧力をかければどうとでもなる。しかし、僕は同じ英雄の息子なのだ。兄さん

の名が魔法世界に知れ渡ることと自然と僕の名も魔法世界に知られることとなった。メガロメセンブリア元老院としては隠しておきたかっただろうが、さすがに同じ魔法学校に生徒としていた以上はごまかしきれない。ただでさえ、兄さんの功績についてもあやふやなところが多いのだ。これ以上工作を重ねれば、さすがに不自然さが際立つてくる。さらにはそれと同時期に起こった悪の魔法使いによる誘拐事件。さすがにすべてを隠ぺいするには事が大きすぎた。

しかし、だ。その僕が生きているということになれば、それは魔法世界にも知られる。人々は喜ぶだろう。英雄の息子の弟も生きていた、と。だが、そこで、僕が、解呪したのは僕だと叫べばどうなるか。兄さんの功績について多くの連合外の学者は疑問視している。それらの疑問は再沸し、検証が始まってしまふ可能性も否めない。僕が石化解呪の術式を提出し、兄さんがその解呪方法について具体的な手段を答えられなかった。そうなれば、連合外の魔法研究者はこぞって、学術的見地から僕が正しいという意見を出すだろう。

僕の存在は、“都合のいい英雄”を仕立て上げたいメガロメセンブリア元老院にとって危険すぎるのだ。

今になって思う。もし、僕があのままここに居続ければ、僕は間違はなく何らかの手段によって口封じ、もしくは暗殺されていた。

事実、僕を誘拐した犯人として仮面の男が指名手配され賞金首となったが、その賞金を狙う、一部の元老院の手の入った賞金稼ぎどもは、僕の命を狙っていたようなのだ。さらには、いくら英雄の息子

を誘拐した賞金首とはいえ、動員された立派な魔法使いが多すぎた。マギステルマギおそらくその称号を得た多くは元老院の傀儡で、僕の命を狙っていたのだと思う。

元老院としても、僕が死んでくれたほうが楽なのだ。誘拐されている最中ならたとえ死んでしまったとしても、弁が立ち、その仮面の男に体よく罪を押し付けられたのだから。いや、むしろこの策略は僕の死を持って完結させようと目論んだことも否めないのだ。

しかし、僕はここに生きている。それを知れば元老院はどうするか。間違いなく、僕の命を狙いに来るだろう。

だけど、僕も考えなしに、旧世界まで足を運び、身分を明かそうとしているわけではないのだ。

ちゃんと考えはある。

「簡単な話だよ、おじいちゃん。僕はアリアドネーに身分を保証してもらってから」

「アリアドネーに、かの？」

疑問を口にしながらおじいちゃんの頭の中では、それは、あり、だ

と判断しているはずだ。あそこは学術都市で帝国にも連合にも与しない中立の都市。学術、という面からも、中立、という面からも、僕にこれほど都合のいい場所はない。

「……………仮面の学者騎士って知ってる？」

「うむ？ 確かアリアドネーで最近話題の学者じゃろ？ わずか半年で修士号をとった……………ま、さか！？」

僕はおじいちゃんの驚きに、ニヤリと笑って見せた。

「そう、それ僕。実際はダイオラマ魔法球使って二年かけて高名な学者さんたちに認めてもらったんだけどね？ ほら、僕九歳の割には大きいと思わない？」

「たし、かに……………」

おじいちゃんが呆然と僕の頭からつま先までを眺めてうなづく。

その様子に、カラカラと親父が笑った。

「驚くの無理はないよなあ。ダイオラマ魔法球使ったとはいえ、前

代未聞、アリアドネーの魔法学校にろくに通いもしないで、特別修士号を学長さんからもらっちゃうんだから。しかも、いくつかの論文でアリアドネーの高名な研究者唸らせてやがるしよ。天才としか言いようがねえよな。ましてやそれが自分の孫なんだから驚くのもわけないよな」

「……………いや、驚いたが、しかし納得はできる。アリナは実際誰も解けなかった石化を解呪しとるし……………それにこの驚きも初めてじゃない……………息子が英雄になったと聞いた時も、これと同じくらい驚かされたからの……………」

「ははっ。苦勞の多い爺だな」

遠い目をするおじいちゃんを、親父が笑い飛ばす。苦勞したんだろ
うな、あんまり優等生じゃなかったみたいだし。

「ま、話を進めるとして。おじいちゃんにして欲しいことは、本国に僕が帰ってきたことを知らせるだけでいい。そしたらアリアドネーのセラス総長が、時機を見て、巷を騒がしている仮面の学者騎士の正体がアリナ・スプリングフィールドであることを明かしてくれるから」

「セラス総長は、お前の正体を知っておったんじゃない……………？」

「うん、いろいろあつてね。まあ今回の一件はアリアドネーにとっても悪いことじゃないから喜んで協力してくれるって。ネギ・スプリングフィールドの功績について疑問がある、とそれなりに匂わせれば、アリアドネーは連合に対して優位に立てるしね」

だからといって、中立都市として歴史の長いアリアドネーを連合は攻めることはできない。大分裂戦争の時ですら、戦火を負わなかった場所なのだ。そこを攻撃するということは内部の亀裂を招き、また帝国をも敵に回しかねない。そんな迂闊な真似はできるはずもないから、元老院はアリアドネーにもアリアドネーに身分を保証された僕にも手が出せない。僕に手を出せば、学術都市として名高いアリアドネーが明確にネギ・スプリングフィールドの功績に対して疑問を示し、また身分を保証した僕から受け取った術式を基に連合の権威を貶める可能性があるからだ。

そこまで事態が進めばおそらく兄さんは切り捨てられるだろうが、元老院はそこまで事態を悪化させるようなことはしないだろう。

しかし、

「これで僕の安全と兄さんのある程度の安全は確保された。兄さんはメガロメセンブリア元老院にとってあまり“使い勝手のいい英雄”にはなれなくなった」

僕の安全はアリアドネーという後ろ盾があるから大丈夫だ。

兄さんについては、もう轡を食ませ、手綱をつけられているから、どうにもならないけど、少なくとも兄さんの“英雄”としての使用範囲は狭まった。何故なら、アリアドネーに痛い腹を握られている以上は、アリアドネーの意に決定的に違うようなことはさせられないからだ。まあ、都合よく使いまわして、英雄にして元老院の権威を高めることに使っぐらいにはアリアドネーも文句は言わないから、せいぜいその程度だろう。

兄さんとはそこまで仲が良かったわけでもないし、恨む気持ちはないわけではないので、それ以上は知らない。というか、僕の安全を優先させたら自然とこうなったのだ。別に意図してやったことでもない。兄さんについてはこれ以上手心を加えるつもりはない。

「アリナ……………お前そこまで考えておったのか……………」

おじいちゃんの呆然とした顔に僕は笑って言う。

「僕を逃がしたことが仇となったね、元老院。さて、どう反応してくるんだろうねえ」

今までの表情に亀裂が入るように、アリナは束の間歪んだ表情を見せた。

復讐の火種（後書き）

仮面の学者騎士とアリアドネーに関してはまた後のお話、おそらく学園長SIDEから語られることになると思います。

アリナはおじいちゃんやネギについては、恨むにはどうしようもないものとして理性に理解させられているので、どうにもならないですが、メガロメセンブリア元老院に関しては隙あらばぶっ壊したいぐらいに、恨んでいます。それでも立ち向かうにはあまりに大きな力だから、今はこの程度に留まっています。

さてこの復讐心どこに向かうのでしょうか……………

あるいは、十年越しのプロローグ

「……………まだかな、兄さんは。もう離陸時間近いんだけど」

つい独り言が僕の口から洩れてしまう。そこで肩にいつもの重量感を感じないことを再確認して苦笑いした。僕のそばにいつもいたのは他ならぬ親父だ。目の前に人がいなくとも、肩に乗る親父と話していたため、どうにもその癖がついているらしい。これから向かう場所は一般人の多い場所なので、たとえ黒オコジョを肩に乗せていても安易に親父に話しかけてはいけないだろうし、親父も人のいるところでは答えないだろう。それじゃ、一人でよく喋る痛い人なので、この癖も矯正しなくちゃいけないな、と問題を意識する。

ちなみに親父はペットゲージに入れられて、飛行機の中に荷物よろしく流されていった。ゲージ越しにのぞく目がどこか哀愁に満ちていたのは言うまでもない。うん、あの光景には涙すら覚えた。流されていくのだ。何か言いたげな顔をして、悲しそうな顔で、流され遠のいていくペットゲージ……………無性に僕は切なかった。

「ぶはつつ、くふつぶふ」

やっぱり嘘です。大変面白かったです、はい。

僕は周りに変に思われない程度に思い出し笑いを殺し、時計を再度確認する。まだ大丈夫な時間だけど、あと二十五分して来ないようなら、僕だけでもダッシュで飛行機に乗り込まなければならぬ。兄さんの事をおじいちゃんから何かと頼まれている身としては、できればそれは避けたいが……………

「ってというか兄貴はもっとしっかりするべきじゃないかな？」

空港のロビーでまたしても独り言、というかぼやきながら、兄さんを待つ。

とはいうものの、僕はダイオラマ魔法球で二年余りを過ごしていたので、兄さんより実年齢が上だ。実際、兄さんと話したとき、思いのほか、僕の背が伸びていて、それを見上げる形となった兄さんは若干涙目だった。それに思わずかわいいつ、と思ってしまったのは僕だけの秘密だ。結構頼が緩みそうに隠すのに苦労した。

ネギ兄さんはいなくなった僕の事を心配していたようだった。ちゃんとご飯は食べさせてもらったのか、とかいろいろうるさかった。お前は僕の母親か、と。どうにも兄さんは僕の兄である、という矜持が強いらしく、必死に背伸びする言動は、僕が少なからず持つ、兄さんに対する複雑な気持ちをほぐしてくれた。

まだ、ガキなのだ、兄さんは。

それは兄さんを完全に見下したがゆえの気持ちだったけど、このまま会ったび気まずい関係が続けるよりはましだろう。それに兄さんの今後の境遇を思えば、哀れむ気持ちにこそなれど、蔑む気持ちにはなれない。この先、メガロメセンブリア元老院の言いなりに“英雄”にならなければならぬ兄。正直僕にとってみれば反吐が出る人生だ。元老院の手の平で踊らされていることに気づかなければいいけど、それに気づいてしまったら、あるいは元老院の方針と食い違うような行動をとったりして、脅されれば、待っているのは屈辱的な人生だろう。

それを思えば、兄さんに僕の複雑な心情をぶつけることにも我慢できる。それにいつそ思うのだ。兄さんは裏を疑うことの知らないガキだけど、このまま成長できれば、もしかしたら兄さんは一生何も気づくことのないまま、死ぬるかもしれない。それはそれで幸せな人生だろう。それならせめて、バカでガキなままいられるよう僕が誘導してやろうじゃないか。

それは僕ができる最高の復讐でもあり、また兄さんにとっても幸せな一生だろう。

これほど、ハッピーな結末も珍しいんじゃないだろうか。僕は本気でそう思う。

全て知った身からすれば、歪んだ考えではある。しかし、この考えを僕は変えることはできなかった。僕はおじいちゃんに立ち直った、

とは言ったけど、幼いころに抱いた感情をそうそう解消できるわけじゃない。そこまで深いものではないが、確かにあるのだ。この胸の内に。

ならば、これでいいじゃないか。

僕は兄さんに親切にしつつも、心の中では憐み、嘲笑い、兄さんも僕の助けに感謝する。

「ま、そうそううまくいくとは思えないけど」

せいぜいうまくいけばいいな、程度の思いであり、第一に優先するのは僕の幸せである。そんな利己的な自分に吐き気がしないでもないが、これが自分なんだ、と割り切ってもいる。

こんな僕でも受け入れてくれる人がいればいいんだけどね。

ただ利己的であることに吐き気を覚えているだけ僕の人格はましだろう。最後の一线では僕は僕を優先するが、そこまで行く事態にならないければ、僕は僕であるために、可能な限り、人を助けようと試みるだろう。

僕にも良心というものがある。あの日、僕があそこを去る時、いつ

か救って見せる、と嘯いたように。嘯かなければ自分の心が平静を保っていらなかった、だから今もその幻想は僕の胸にある。嘘はない。本気で救おうと思えなければ、自らの幸せも追い求めることができなかった

だから、覚悟した。

救うことを。

そして、幸せを求める現在の僕がいる。

「そう嘯いてみても、利己的であることは変わらないわけだけど」

そうやって、僕は綺麗な良心で汚い僕を覆い隠そうとする。でも、綺麗な良心を持つのも僕で、利己的で汚い僕も僕だ。

僕は僕で、僕は僕でしかない。

僕は僕に吐き気を覚えるのと同時に、それなりに自信も持っている。自分で蹴落としておいて、救ってやるなんて矛盾したことを言う僕だけ。

……僕は、僕と一緒に生きてくれる人間に対しては、それを隠そうとは思えない。ありのままを受け入れてくれなければ、到底一緒に幸せになれるとは思えないからだ。さらけだすだけの強さが、僕にはあるかどうかなんてわからない、でもその強さがあると僕は信じたい。

しかし、まあその肝心の僕が、利己的な僕を受け入れられないのは問題だと思うけど。

「僕が受け入れられない僕を受け入れてくれる誰か、そんな人がいればいいんだけど、ね」

今から向かう先に、そんな言葉を添えて、

わずかに苦味の帯びた声は誰にも届くことなく。

「アリナッツ！」

一つの声にかき消されることになる。

ネカネ side

私が悪い。

私の心に占めるのは深い罪悪感だった。

村と魔法学校とを行き来する生活。かわいいネギやアリナに会えるのはせいぜい一か月に一回程度だった。それでも時間をやりくりしては、村に戻ってきていたのだ。

私は、英雄と呼ばれるネギとアリナの父親、そして私の叔父でもあるナギ・スプリングフィールドに会ったことがある。物語すらできて、村の人も小さいころの英雄の様子を面白おかしく話してくれ、さらにはそんな人が私の叔父だと言う。そんな環境で英雄について聞かされていた私にとってそれは憧れの邂逅であつたと言ってもいい。

そして、実際、私は英雄にあつた。

容姿端麗、どこか言動に荒っぽさを滲ませる英雄に私は言葉も発せ

られず、スタンおじさんの裾を掴むしかなかった。

「ネギとアリナをよろしくな」

スタンおじさんとの話が終わってふと私に視線を向けた英雄が私の頭をなでながら、言った言葉。私はそれに必死にうなづくことしかできなかった。

私は、憧れの英雄との言を守るために、ネギやアリナの面倒を一生懸命見た。

けど、いかんせん私も子供だったのだ。

……………それもまた、私の未熟さへのいいわけなんだろうけど、と私は自嘲する。

赤子の時は、オムツの面倒見たり、ミルクをあげたりで、それはそれで大変なことだったけど、慣れれば訳ないことだった。

けど二人が成長し、私も魔法学校に通い始めたころ、私は同じように二人の面倒を見ようとした。魔法学校があるうちはなんとか時間をやりくりして、長期休暇のときは付きっきりで。けど、私は根本的に子育ての難しさをわかっていなかった。

ある日、私が二人に父親のことについて話を聞かせた。

そして、次の日から。

ネギは無茶をしはじめた。具体的には真冬の池でおぼれたり、わざと派手に転んだり、犬にいたずらしたり。もう無茶のオンパレードだった。そして自然と私は手のかかるネギへと時間のウェイトを傾けていった。アリナは一人でもできるから、アリナはしっかり者だから、そんな理由をつけ、何かとネギにかまけるようになった。

寂しそうに、一人本を読むアリナのほうを見向きもしないで。

私は当時その寂しさに気づくこともできず、アリナが村の人の家を渡り歩くようになるまで何の自覚もなかった。

そして、それを何も考えずに止めようとして、ようやくアリナの寂しさに気づけた。アリナの本音が聞けた。

私が悪い、私は自分の不甲斐なさに涙した。

でも、それと同時に理不尽に感じた。

だってアリナは今の今まで何も言わなかった、言葉にしないとわからないことだってある、ならせめて言葉にしてほしかった、さみしいと言ってくれば、私だってちゃんとかまってあげられた。そんな自己弁護の聲が私の不甲斐なさを覆い隠すものだ、当時は気づけなかった。そうやって精神的な均衡を保っていたのだとはわからなかった。私は理不尽さと不甲斐なさ、どちらを否定するわけでも肯定するわけでもなく、涙を流したのだ。そういう意味で私は幼かった。

それからまもなくして、あの事件が起こった。

それについては思い出したくもないことだ。

しかし、一番の問題はネギとアリナの明確な変化だった。

ネギは英雄のナギ叔父さんから杖をもらったことであからさまに魔法に傾倒するようになった。私が傍にいなければ、おそらく倒れていたであろう程に。

アリナは逆だった。当初私はアリナとネギ両方の面倒を見るものだ、思っていたけど、実際アリナは寮で寮母さんのお世話になっていた。しかも、礼儀正しく、一人できちんと何事もこなす。アリナが寮母さんにお世話になることはたぶん少なかったんだろうと思う。

ネギが前よりも危うく私のお世話を必要としていたこと。

そしてアリナが前以上に他人に迷惑をかけず、一人で過ごしていたこと。

この二つの事が私に都合のいい状況を作ってくれた。ネギにだけ構っていられるその状況と、私の心を完璧に誤魔化せる都合のいい言い訳も用意され、私は余計なことを考えずに済める環境に気が休まっていた。

そして、私がそんな最低な考えを持っていることに気づいたのは、ネギが石化魔法を解呪し、アリナがいなくなったことだった。

私がアリナが誘拐されたと聞いたとき、

一番最初に浮上した感情が、

安堵だったから、

猛烈な吐き気がした。

もうアリナに関わらなくてもいい、私はそれを聞いたとき、ホッと安堵の息を吐いたのだ。

そしてそのことに気づいたとき、

私は私が大嫌いになった。

ようやく私は自覚した。私はずっとアリナが疎ましかったんだ。あの子の存在はいつも私に重圧をかけてくる。ネギの面倒を見ているときでも、アリナはどうしているんだろう、と余計なことを考えさせられ、悩まされ、そのくせあの子は私を必要としていない。

考える必要なんてない、だってあの子は一人でなんでもできる、そうわかっていのに私はあの子に気を取られる。あの子の存在があるせいで私は精神的な重圧を感じ、苦しめられてきた事実がある。

自覚はしていなかった。けど私は心の奥底のほうでそう思ってきたんだ。

薄汚い、醜い、そんな私がいたことに私は吐き気を覚えた。

私は最低だ。

アリナがいなくなった後、私はベッドにこもるようになっていた。それを周りの人は、アリナが誘拐されたからだ、と勘違いしてたけど実際そんな綺麗なものじゃない。周りの人が私に慰めの言葉をかける度、私は叫びたくなった。私はそんな綺麗な人間じゃない、もっと薄汚い人間なんだって。

でも、そんなこと誰にも言えなかった。

何より私は周りからそういう薄汚い人間なんだって思われなくなかった。この後に及んで何をと思う気持ちはあったけど、それでも私の口が開くことはなく、ただシーツを濡らすだけだった。

私が立ち直れるきっかけになったのは、ネギだった。ネギが毎日舌足らずに私の事を慰めてくれる。そのけなげな姿に私はようやく身を起こした。だってこの子は私の中で唯一誇れる私が育ててきた大事な子だから。たとえアリナに思うことがあり、アリナを無意識のうちに疎ましく思ってきたとしても、私がネギを愛おしく思っていたのは真実だから。

そんなネギにまで私は迷惑をかけるわけにはいかなかった。私の中の本物を、私の薄汚さで汚すわけにはいかなかったから。私はネギのために、どうにか立ち直った。

ネギは喜んでくれた。そんな純真な姿を見て思った。この子だけは汚してはならない。私が肯定できる私でこの子の成長を精一杯応援していきたい、そう思った。私は自分勝手な人間だ。私は薄汚くもアリナを疎ましく思い、私の中のアリナをひどく汚してしまった。アリナを勝手にそういうものだと判断して、近寄ることもせず、あの子がただの子供だという事実をひたすらに泥を塗りつけ誤魔化してきた。

あの子は、何を想っていたんだろうか。

いつも傍に寄る人はおらず、ただただ、孤独に廊下を歩いて。

その心は何を想って生きてきたんだろう。

私はやっぱり私が大嫌いだ。

そんなことも今まで考えられなかったんだから。

私は鬱々と日々そのことに悩まされた。

もうどうにもならないことだとわかっているのに。

でもそうやって悩んでいくことがたぶん私の贖罪なんだと思う。

けど、そうやって日々を過ごす私の前に再び、アリナが帰ってきた。

アリナが……………帰ってきた。

私はただ自分の部屋で頭を抱えていた。

結局私はアリナを避けることしかできなかった。直視できない、今あるアリナを直視することが私のすべきことなのに。私はあのことから何も変わっていない。変わったのはアリナから目を逸らしたことだけ。前は視界にさえいれていなかったから進歩したと言えるのか、いや、そんなことあるわけない、か。

私は痛々しい笑みを浮かべる。結局今日の今日まで私はアリナを避け続けた。ただ部屋にこもって、誰にも会わないようにしただけ。ネギにもあまり顔を合わせていない。ネギもネギで私の様子が気になるみたいだけど、日本語の勉強があるから、私にばかりかまけて

いらなかったようだ。

うん、それでいい。

アリナとネギはこれから、ここイギリスから遠く離れ、誰も知人がいない日本の地で二人過ごすことになるのだ。たまに来るネギの話からもそれほど仲が悪いようには思えないし、こんな私と一緒にいるくらいなら、アリナと一緒に兄弟仲良く過ごさせたほうがいいんだ。

でも、それでいいのか、と心の中でつぶやく私がいる。

このまま、何も話すことなく、アリナとお別れしていいのか。

いや、いいに決まってるんだ。だってアリナは、別れる最後の最後まで私を必要としていなかった、私を頼ろうとしなかった。だから、それでいいのか、と思う私は、ひとえに私を想ったのことなのだ。罪悪感に悩まされるこれから先の日常に終止符を打ちたくて、何らかの変化を求めて、これでいいのか、と思っているだけ。アリナには何の関係もない。

だからそんな自分勝手なことは許されない。

アリナはきつと私に対して何も思っていないだろう。アリナが私に思うところがないのは私が手を伸ばさなかったから。そのことを悲しく思っても、結局は私がそうしなかったのがいけないんだから。

私を戒めるのは私で、罪を問っているのはあくまで私なのだ。

私が悪い。

ただそれだけなんだ。

その事実が私を苦しめる。いつそ前みたいに罵ってくれば楽だった。恨んでくれたら楽だった。けど現実はそうじゃない。村の一件以来、関わることのなかった空白の五年間で私とアリナの関係は極端に薄まった。アリナからしてみれば、昔少しお世話をしてくれた従妹、程度の認識でしかないだろう。そんな相手にアリナが恨みを持つはずがない。

そのことが、無性に悲しかった。

「不公平だなあ、ホント……………」

私ばかりがアリナの事を気にして、アリナは私の事を気にしもしない。

不公平なんかじゃない、それが当然のことなんだとわかってはいても、そうつぶやかざるをえなかった。

……………今日はもう寝よう、もう考えるのも飽きた、明日になればこの思いもどうしようもない物に変わる、そう思って布団を被ろうとした矢先、ドンドンドン、と扉が叩かれた。

「ネカネー！！ わしじゃー！！」

乱暴なノックとともに聞こえてきたのはスタンさんの声だった。さすがに無視するわけにはいかない、そう私が思うくらいに小さいころからお世話になった人だ。私は行動に鈍る体に鞭打って、体を起こし、扉の鍵を開けた。その途端、外側から開かれる扉。

スタンさんは、私の顔を見つめて、一瞬沈黙した。何かを押し量るように、私の目を見てくる。私はぼんやりとスタンさんを見上げた。スタンさんは何も言わない。スタンさんは一体こんな時間に私の部屋に何をしに来たのだろう。もうじきスタンさんがかわいがっていた、アリナが出発する時間じゃないだろうか。

「……………アーニヤの言った通りじゃったな」

どこか苦々しげに漏れた言葉。

次いでスタンさんのとつた行動は迅速だった。

「す、スタンさん!？」

それすなわち、私の手首を掴んで、私を引きずるように部屋から出ることだった。

「お前さんが、何に悩んでいるか、まあ大体わかる」

「わかるって、何がわかるっていうんですか!？」

私は半ばヒステリック気味に叫び、掴まれた手首を振り払おうとする。しかし、そこに込められた力はとても強かった。

「わかるさ……………わしも同じ、想いじゃかな……………」

そこに見たスタンさんの表情に私は呆然と目を見開く。唇を噛みしめ、皺を刻まれた彫像のように深くし、無力感に苛まれるその表情は、感情は、まさに私がいつも鏡で見てきたものではないか。

私を痛いほど掴む手がその感情の真贋を私に教えてくれるようだった。

「とにかく、アリナと話せ。罪悪感を感じるにせよ、何にせよ、当の本人に向き合え。でなければ、その感情には何の意味もない」

話す間もずるずると私は外へと連れ出されていく。

スタンさんは、一つの車の前まで私を連れてくると、そのまま助手席に私を押し込んだ。

「スタンおじさん、早くしないと飛行機の時間間に合わなく——
——ってネカネ姉さん!？」

そして、その車の後ろにはネギが乗っていた。ネギの焦りようからして、時間は結構差し迫っているのだろう。スタンさんはそんなネギに何を言うでもなく、車を発進させる。

ネギが私がいることに何か言おうとしたとき、スタンさんがバックミラー越しにネギをにらんで言った。

「ネギ、空港に着いたら、わしやネカネやアリナに構わず、先に飛

行機に乗れ」

「え？　なんで？」

「……………出発前にアリナとネカネを仲直りさせるからじゃ」

馬鹿な、そんな言葉が私の喉から出そうになった。ネギはスタンさんの都合のいい方便に嬉しくなったのか、何度もうなずいている。

アリナと私が仲直り？　そんなの無理に決まっている。そもそもアリナは私と仲違いしている気すらないのかもしれないのだ。そんな関係の私と一体どうしたら仲直りできるというのか。わかってる。きつとこれはネギに対しての体裁のいい嘘なんだ。でもスタンさんがこちらを力強くにらんでくる目に私は辟易する。

そもそも私はアリナと会ったとして一体何を話せばいいの？

わからない。

どうしていいのかわからない。

けれども、時間の経過は都合のいいことに、来てほしくないときは

かり、その流れを早めるようだ。

空港に着き、私たちは、それぞれ車を降りる。私はスタンさんに連れて行かれ、ネギは自然私たちから離れていった。私の背中を見つめる目が期待に満ちていたことは、私の心を重くした。行きたくない、と思ってもスタンさんがそれを許してくれそうになかった。

ずんずん、とスタンさんは空港の中を抜けていく。

空港のロビーを抜けたところで、唐突にスタンさんが足を止め、

「アリナっ!!」

と呼びかけた。

……… ついにきてしまった。

私は、そちらに突き出されるように、無造作に前に押し出された。私は前を見ることができない。きっと私が顔を上げれば、そこには今まで私が目を背けてきたアリナがいるのだ。それが、それが怖くてたまらない。

「あれ、ネカネ姉さんにスタンさん、見送りに来てくれたの？　っ
ていうか兄さんは？」

放たれた声はあまりにもいつもと変わらないような声だった。何の意識もしていない、平素の声。むしろ親しみさえ感じられる声音に、私は胸がかきむしられるような思いに駆られた。耐え切れず、私は勢いよく顔を上げる。私が最後に見たアリナよりか成長したその姿に感じ入るより先に、私はアリナの体の隅から隅を眺めまわし、そこに恨みや憎悪という感情を粗探しした。どこか、どこかにないのか。私を恨む感情は。私を想ってくれる感情は。

血走った目でそんなものを探そうとした私は、傍から見ても、おかしかっただろう。しかし、私は探すことをやめられなかった。そんなはずはない、と私の胸の中にある感情を否定するように、アリナを見やった。

しかし、残酷にもそんなものはなかった。

「どっ……………して」

私はゆっくりと、視線をあげ、アリナの顔をすぐるように見やる。

改めて見るアリナの姿は、端的に言うのなら、“かっこよかった”

風の波の中をいく跳ね馬のように癖をつけながらも、嫺^{たお}やかにびる金の髪、宝石のようなオッドアイの中に灯る理知的な光、しつかりと地を踏み凜然と佇みながらも、飄々とした雰囲気醸すその立ち姿。

私や他の人間の助けを借りることなく、歪みなく成長しきった、その姿がどうしようもなくかつこよかったのだ。

邪険にした私や、その他の人間の影響など全く感じさせなかったその姿が綺麗だったのだ。

私の中の何かが、その姿に刺激される。私が抱えてきた忸怩たる思いが歪でおぞましいものへと姿を変えていく。その変化の過程に私は吐き気がしたが、止まることはなかった。

「ねえ……………どう、して？」

「え？」

「どうして、私にそういう態度とれるの？」

アリナは、何を言っているかわからない、そういう態度を示す。嘘、

そんなのウソ。アリナは賢いからわかるはずだ。

「私、ずっとアリナの事放っておいたんだよ」

最初に吐き出た言葉はそんな綺麗な言葉。

「私、アリナのこと放っておいて、ネギのことばかり見てたのよ？」

「それは……………」

「なのに、どうしてそんな態度とれるの？」

私は問う。醜悪な感情を言葉の裏に隠しながら。

それに対して、アリナは首を振ってこたえた。

「それは、僕が望んでいたことでもある。ネカネ姉さんが悪いわけじゃない」

その言葉の裏にはきつと真心からこめられた綺麗な感情があるんだろつ。

そのことが、私にはどうしても耐えられなかった。

「違う……………」

「……………違くないよ、姉さんは悪くない」

そして、あくまでも、綺麗なままのアリナに、

「違うのよッッッ！！！！？？？？」

私の感情は爆発した。

「私は、そんな綺麗な人間じゃないの！！ 私はね、アリナ。アリナが誘拐されたって聞いたとき、安心したんだよ！？ ああ、これでアリナに気にする必要なくなるって！？ 私はもっと薄汚い人間なの！！ どうしようもない人間なの！！ 私はアリナのことを心配するふりして疎ましく思ってたの！！！！！」

私は本当にどうしようもない人間だ。私は私に対して何も思っていないアリナを歪ませたいんだ。アリナは私に何も思うことがないから、あんなこと言える。だから少しでもいいから、私はアリナの中

に私の存在を傷という形で刻みつけたかったのだ。

そして、

「こんなのが私なんだよ！！　それでアリナはどう思う！？　私はあなたを想うだけの従妹じゃないの！！　あなたが私に何も思っていないことを知っててもなお、私はあなたに執着して、そのくせ私はあなたのことをよく思っていないの！！　矛盾してるでしょ！？　でもしようがないのよ、これが私なんだから！！　あなたを疎ましく思ってるの、どうしよもなく！！　私の感情に影を落とすあなたがどうしよもなく気に入らないの！！」

私は、アリナに罵ってほしいのだ。

どうしよもなく、罵ってほしい、恨んでほしい、――それで私は許されたいのだ《・・・・・・・・・・・・・・・・》

私を恨む権利のある人が、私を罵る権利のある人が、何も思ってくれない。償うことすらできないのだ、ただどつちつかずの状態で私はただ中途半端な暗さを保った道を歩まなければならぬ。それがどうしても耐えがたかった。そんなのだったら、いつそ真っ暗にしてくれたほうが楽なのに、相手は何も知らないし何も思わない。そして私は私のすべてを知って苦しみ、思い続ける。

そんなジレンマに耐え切れなかった。

私は言葉つくせぬ感情を醜悪で彩り、撒き散らした。そして残ったのは何とも言えない虚脱感。私はただ断罪を待ち、自らの首に迫る断頭台の裁きを待った。

地面を向く私の目に影が映りこむ。

私はキツと瞼を震えるほどに強く閉じた。

その瞼から雫がこぼれ、

「ネカネ姉さん」

ギュツと暖かいぬくもりが私を包んだ。

ネカネ side out

涙を流すネカネ姉さんの体にしがみつき、僕は笑みを浮かべる。

「はは、ホントは抱きしめたかったんだけど、身長足りなかった」

「なん……………で？」

ネカネ姉さんの口から、疑問の声があがった。

「意味が、わからないよ……………？ 私はアリナの事よく思ってたんだよ？ どうして……………なんで……………」

ネカネ姉さんの姿は痛々しかった。そんな真っ赤に目を腫らして、憔悴しきった顔で何を言ってるんだ。

「じゃあ、さ。なんでネカネ姉さんは泣いてるの？」

僕は姉さんの頬を手でなぞる。暖かい肌の温度と姉さんの冷たい涙の温度が一緒になって手から伝わってくる。

「ネカネ姉さんは、さ。ホントに僕に悪く思っただけなの？ 罵ってほしいの？ 僕の事ホントにうざくて、仲良くなかったくない、そう言うの？」

僕はネカネ姉さんのぐちゃぐちゃな顔を上から見上げて問いかける。

「違う。本当にそうなら泣いたりしないはずだ」

そして、力強く断定した。

「ネカネ姉さんは、罵られるような自分が大嫌いなんじゃないの？ 恨まれるような自分が大嫌いなんじゃないの？」

人間なんてそんなものだ。泥にまみれてみんな汚れている。誰だって例外はない。本当に誰にも見せたくなくて、心の奥底に隠しているものがある。あるいは本人さえ気づかないほど深きにて、口を開けて、闇は当人の心さえ飲み干そうとする。

僕でさえ、そうであった、そしてそうである。

「僕もさ、大嫌いな僕がいるんだ。今もそう。こんなひどい言葉ぶつけるネカネ姉さんなんか大嫌いだって言う僕がいる。どうして義理も恩もないネカネ姉さんなんかに構わなきゃいけないんだって言う僕がいる。僕ってさ、自分勝手なんだよ。いつつも自分がこう行動すれば相手はこうするはずとか打算的に考えてさ。うん人の事助けたいとか思っても最後の一線やっぱ自分が大切なそんな人間なんだ。そんな僕が大嫌いなんだ」

けどね、と僕は言う。

「それでもやつぱり人に好かれない、人に愛してほしいんだ。好きになるより、愛するより、好きになってほしい、愛されたいんだよ。卑怯だよ、汚いよ、くそつたれだよ。自分から人を好きになるのが怖いくせに人に好かれない、愛されたいだなんて」

それはどうしようもない本音。自分でいくら着飾ることができても誤魔化しきれない心の奥底から声。

「けどね、どんなに大嫌いでも変わらない、変われないんだ。だから僕は、そんな僕を誰かに知ってもらいたいと思った。誰かに好きになってもらいたいと思った。自分ですら認められない自分を誰かに肯定してほしかった」

それが、どれだけ難しいことか、僕はわかっている。僕は僕の醜悪

な部分を好きになつてもらいたい、なんと傲慢な求愛か。誰かの吐いた吐瀉物を愛せるか、人間の尻の穴から排出される糞を愛せるか。

僕は目の当たりにした。

ネカネ姉さんの汚さを、醜悪さを。

けれども、僕は少なくともそれを拒絶したいとは思わなかったのだ。人間なんてもともと泥被つて生きている。だから人間は、ときに醜悪なものにさえ愛を注げる。いや、醜悪だからこそ愛せるのだ。白すぎる純潔には憧れを抱けども、愛することは僕にはできない。それらは汚れた僕らからしてみれば、ひどく高みにあり、ただただ見上げることしかできずに、結局首が疲れるだけだ。

ネカネ姉さんは一体どんな答えを欲していたのだろうか。

ネカネ姉さんは生来が綺麗な存在だから、きっと僕に罵ってほしかったんだろう。

けど、僕はそんな答えを出したくない。

……………この答えはもしかしたらネカネ姉さんにとって残酷なものかもしれない。それにこれはネカネ姉さんを真に思つての言葉では

なく、ひとえに自分に向ける言葉でもあり、一番の目的は自己満足にあるのだ。

けどそれでいいんだ。

その言葉がどうあろうと、僕の答えは変わらないんだから。

「だからネカネ姉さん、僕はこう言うよ。ネカネ姉さんは悪くないって、どうしようもなくネカネ姉さんを肯定してあげる」

「……………ッッ、そん、な……………！」

「……………」

「そん、なのずるい、よッッ……………！」

僕はその答えを望んだ。僕がこの答えを望んだように、ネカネ姉さんも心の底では同じような答えを望んだのかもしれない。あるいは本当に自分を罵る言葉を期待していたのかもしれない。人の心のかなんてのぞつけこないんだし、真意なんて図れない。

けど、これが僕の満足する答えだ。

それで、いいじゃないか。

「ネカネ姉さん」

それでいいはず、なん、だけど。

ネカネ姉さんは、僕の腕の中で体を震わせ泣いていた。

それが何を意味しているのか、僕にはわからない。わからないから、知りたいと思う、知ろうとする。

僕は背伸びをして、ネカネ姉さんに顔を近づけ、頬に伝う涙をゆつくりと舐めあげた。ほどよく塩辛く、ほどよくほろ苦い涙の味。僕の唐突な行動にネカネ姉さんは体を震えを止め、目を丸くしてこちらを見ていた。その瞳の中に映る、僕の姿を見て、僕はにっこりとほほ笑む。

「傷の舐めあい」

ペロツ、と悪戯っぽく舌をネカネ姉さんに突き出すと、ネカネ姉さんは呆然とした顔つきから徐々に表情を歪めた。唇の端を歪め、苦

笑いめいた表情をネカネ姉さんは必死に浮かべていた。

それがわかってしまうから、僕も懸命に苦笑を浮かべるしかない。

所詮は僕のやっていることも出した答えも全部自己満足に過ぎない。そんなことはわかっているのだ。理性はネカネ姉さんにこれ以上気遣う必要はない、そう判断している。自らも満足し、最大限相手を思いやった言葉を贈れたのだからそれでいい、と。

それでも、僕は、引っかかってしまう。

これ乗り越えられなければ、気持ちよく出発できない。後ろ髪ひかれるような気分で新天地に向かわなければならない。

それは自らへの戒めだった。もはや、この問題にネカネ姉さんは根本的には関係ない。ただ僕が嫌なのだ。そう思うところ、ネカネ姉さんの気持ちへの背信だとわかっているが、それでも嫌だった。

せめて笑顔で送り出してほしい、気持ちよく僕は再出発のテープを切りたい。

「あのさ」

ネカネ姉さんの腰に回していた腕を解き、ネカネ姉さんの両手を包み込むように握る。

「いつてらっしゃい、って言ってくれない？」

だから、僕はネカネ姉さんにすぎるようにそれを求めてしまった。

さっきの答えと違い、真実僕の事しか考えていない言葉。

なんて、醜いのか。

自らの事ばかり考え、笑顔を強要する自分は、どうしてこうも、わがままなのか。

自分を責める声に視線が下がりがけたとき、

「……………うん！」

弾みのつくような声に僕は思わず顔をあげた。

涙を目端に溜めながらも、ネカネ姉さんは綺麗な笑みをたたえていた。

「いつてらっしやい」

そして言ってくれた。

「ああ……………」

僕はようやく理解が及んだ。

この人が求めていたのは、きっと本当の意味でのネカネ姉さんへの感情なのだ。綺麗な言葉ばかり吐いて、結局頼ることもすがることもしない僕が、強い感情を傾けることこそこの人が望んでいたことで、本当に求めていたことなのだ。

僕はわがままで思った、自分の事しか考えていないそれどうしようもなく醜いものだと感じたが、ネカネ姉さんにとってはそうじゃないのだ。さつき自分で、ネカネ姉さんの姿を見て確認したことじゃないか。綺麗すぎるものは愛せない、醜いものを拒絶しようとは思えなかった、その事実を。

僕は馬鹿だ。醜い部分を好きになってほしい、とか言っておきなが

ら、結局行動に移すことに躊躇って、それを晒すことを恐れていた。

ああ、本当に馬鹿だな、僕は。

「うん……………」

けど、それを確認できてよかった。

僕は本当の意味で前に進める。

だから、

「いつてきます」

僕も満面の笑みをネカネ姉さんに向けることができた。

あるいは、十年越しのプロローグ（後書き）

人間って汚いよね……………途中口調崩れたけどネカネちゃんも一人の少女に過ぎないってことです……………なんかかわいくなってきた。やった。

アリナの思惑（前書き）

ちよつと説明パートくさいですかね、今回は。

今回は何故アリナが麻帆良に行くのかその理由と思惑についてです。

アリナの思惑

「むう」

僕は唸りながら、窓の外を眺める。眼下は見渡す限りの雲海で、その上飛ぶ鉄の塊はさながら空を泳ぐ舟のようだった。飛行機に乗るのは初めての経験だったが、予想外興奮する。これだけの高度、魔法で飛ぶとしたら一体どれだけの労力がかかるだろうか。とりあえず、この高度にたどり着くまでにかなりの魔力を消費するだろうし、さらに冷える温度、薄くなる空気、とてもじゃないが魔法でなしえることではない。長距離移動という観点から見ても、ゲート魔法という手段こそあれど、イギリスからはるばる日本までを結ぶような規格外のゲート魔法はない。あるいは魔力だまりの魔力を用いければいけるかもしれないが、飛行機という科学の結晶があるのだ。そこまでの足らないと判断されるだろう。ならば魔法世界に住んでいる騎獣などはいかなものかと検討するが、やはり運べる人数とそれにかかる諸々の費用労力等を考えれば、科学ほど効率を優れているものは他にない、と実感させられる。

魔法と、科学、どちらが優れているかなど一概に比べられるものではない、どちらも一長一短である、とひとまず結論をだし、窓から目を放す。

そしてうんざりした表情で隣をみやった。そこではすやすやと寝息を立てて、眠っている兄さんがいる。いや、それは別にいいんだ。起きるには早すぎる時間だし、まだお日様もおはようしたばかりだ、

問題ない。

しかし、だ。

何故、僕の腕にすぎないようにして寝ているのか。

起きたらすでにこうだった。おそらくネカネ姉さんとの添い寝癖から、ひと肌を求めて、僕の腕に対すがりついたものだと思われるが、正直すでに僕の腕は限界に達している、麻痺している、感覚がない。何しやがるのかこの兄は。

すやすや寝ているのを起こすのも気が引けて、割と放置していたが、腕を揺すっても、一向に起きる気配もなければ、僕の腕を放す気配もない。

……………もう堪忍できる範囲を超えただろう。

今度は思いつきり、兄さんの魔の手から腕を解放しようと、強引に引きはがそうとするが、存外、力が強い。

馬鹿な、このもやしっこに、実地で鍛え上げた僕の腕力が負けるだとう。僕はこの二年間（実質四年間）波乱万丈な生活を送っていたおかげで、大人には負けるが、僕と同世代の人間の中ではかなり腕

力があるほうだ、と自負している。胸筋もムツキムキ、とは言わないが、十歳近くの子供特有の、ストン、とした凹凸のない体ではなく、少なくとも胸に段差ができる程度には胸も盛り上がっている。腹筋も浮き出てるし。大したことないようだが、この年齢ではかなり珍しい発育をしている、と思っていた。将来は理想的な細マッチョになれるだろう、そう期待が持てる仕上がりにつけていけたと思うっていたのに。

しかし、現実どうか。僕のマッチョはどうやら、もやしっ子にも勝てない程度の、ハリボテマッチョだったらしい。

予期せぬマッチョの自信の喪失に、プライドを打ち碎かれたため冷静な判断ができなくなっていた僕であったが、しばらくたって、冷静に兄さんを注意してみれば、こいつ、ドーピング使ってやがった

……………！

……………うんちよつと感情的になりすぎたけど、どうやら兄さんは普段から魔力による肉体強化を行っているらしい。まあ考えてみれば、何でもない話だ。兄さんは二年前の僕と同じくらいもやしっ子で碌に外で運動することもしなかったらしいからな。

しかし、寝ているときにまで作用する肉体強化って……………一体どれだけ普段から常用しているのだろうか、おそらく肉体強化を反復しすぎたせいで、こうなったのだと思うけど、さすがに子供ときからこれじゃ早死にする。まあ魔力がたくさんあるおかげで、それに物言わせて楽しってきたんだろうな。全くだいご身分だ。

僕の腕が麻痺しているのも、このせいだろう。魔力強化する分には別に口を出す気はないけど、それで迷惑を被る僕の身にもなってほしい。痛い、痺れる、もう動かない、後で、そうやって弱気なふりして、さんざん責めてやろう。

しかし、これ以上は僕の力ではどうにもならない。魔力で同じように筋力を強化してもいいけど、さすがにそこまで力比べしたら、周りのお客さんに迷惑だ。身内の犯行でもあるし、ここは甘んじて受け入れるしかないな。

……………そもそも、こんな兄さんのお守りみたいなことをしているのも、僕が望んだからであるからして、もう救いようがない、というか仕方がない。

兄さんが麻帆良学園に教師として赴任する、そのことを聞いたとき、僕は、これは使えるっ、と思った。そしておじいちゃんにお願いして、僕も麻帆良学園の教師として捻じ込んでもらったのだ。具体的な理由としては、メルディアナ魔法学校を誘拐されていたために、同時期に兄と卒業できない、しかし実力的にはそれに相応するものなので、無駄に魔法学校にいさせることは為にならない、とする魔法学校校長の救済措置だ。麻帆良学園にも実地訓練も含めて学べる魔法生徒、という入学方法があったので、魔法生徒の実地訓練で足りない分の単位を稼ぎ、同時に表の仕事として教師をすることで卒業後の課題もこなし、卒業させるといふかなり強引なものだ。

ただおそろくできることなら僕を引き込みたい、というメガロメセンブリアの意向もあったのだろう、すんなりとその救済措置は認可された。

正直、子供が先生をやるってどうなんだ？　ときな臭さを感じないでもなかったが、それ以上のメリットが麻帆良学園にはあった。

一つ目としては麻帆良学園の蔵書の数とその豊富な種類だ。

理由の方はわからないが、どうにも西洋魔法使いが日本の関東に流入する際に西洋のほうから大量に魔法書が運び込まれたそうなのだ。これは、この運搬に際し、盗難未遂事件だの警備の問題だのなんなのあったので、割かし簡単に情報が手に入った。何故日本にそれを運び込んだのかはわからない。旧世界でも有数の霊地、世界樹がある地だからという予想が立たないでもないが、実際のところの理由はわからなかった。しかし、大量の魔法書があることは事実だ。

しかも、その内実はアリアドネーで修められなかった、旧世界の魔法書である可能性が高い。さらに、だ。西洋魔法使いは旧世界の裏において、各地の魔法使いに暴虐を奮っていたのは、表の世界事情から見ても明らかだ。そして麻帆良にある魔法書の中には、そういった有事の際に、各地の文献、貴重資料として接收された魔法書がある可能性が高い、そう僕は踏んでいた。魔法書を日本に運び込んだ理由はわからないが、もし、その主目的に貴重魔法書の保存という名目があったのなら、また世界樹があるという理由とともに日本

に運び込まれた理由が明瞭になるからだ。

日本ほど治安のいい国もない。交戦権を放棄し平和主義を謳い、基本的人権の尊重、国民主権などといった綺麗事を語っている国だ。そして、その綺麗事が実現できるだけの経済力もある国だ。それに日本を歴史という観点からみても、日本人の気質として柔軟な考え方も持っている。おそらく西洋魔法がもっとも広まりやすかったのは日本であつたと言えよう。

西洋魔法に理解があり、治安もよし、相応する力もあり、世界樹もある。これほどいい土地は他にないだろう。保存という名目上の目的があるのならここを選んだとしてもおかしくない。まあ、もちろん全部が全部ここに運び込まれたわけではなく、他の西洋魔法協会の支部にも散っているだろうが、占める割合は以上の点から大きいだろう。

無論、これは推測にすぎないわけだが、保存目的がないのなら、ここに運び込むこと自体おかしい。主目的かどうかはわからないが、少なくとも目的の一つとしては確定的だろう。

つまりは、だ。麻帆良には旧世界の魔法書がたくさんある、その可能性は極めて高い。そして僕の目的は、旧世界の魔法を学ぶこと。師を持つのと、魔法書を通して学ぶことは違うだろうが、僕の知識欲が満たされるのは確実に、僕の旧世界にきた目的も幾分か果たされるのも確実だ。

このメリットがあるだけでも、麻帆良に潜り込む機会を利用したい、と考える。

しかもダメ押しとばかりに、もう一つメリットがあるのだ。

これはあくまで、先の一点と比べたらかなり不確定的な情報だ。しかし、僕の背中を押すには十分な情報だった。

曰く、麻帆良学園にはエヴァンジェリン・A・K・マグダウエル、通称『闇の福音』と呼ばれる真祖の吸血鬼がいる。そしてこの地にて、サウザントマスターと戦い、その身を封印されている、と。

僕の体には致命的な欠陥がある。

それは、あの日あの時この身に刻んだ魔法の術式の弊害だった。そもそも肉体に術式を刻み込む、という行為自体があまりにも狂気に満ちたことだ。俗に言う、魔法具というものは、物体に対して術式を何度も何度も線をなぞるようにして重複、記憶させ、同時一定量の魔力をそこに定着化させることで作るものだ。その理屈で話を進めるのであれば、肉体自体は物体と認識してもおかしいわけではないのだから、その点では“アリ”だ。

しかし、物体は摩耗する。転移魔法を刻んだ魔法具が一回こっきり

で消費するように、大きな効力を有する魔法は物体はその魔法の反^{リタ}動として、物体自体を激しく損傷させる。もちろん、効力の薄い魔法だったり、素材自体の耐久性が優れていたり、芸術の域まで高められた術式で作られた魔法具であつたりした場合はまた別なのだが。

ここで、考えるべきなのは、“肉体”とは端的に言えば物体としてどれだけ耐久性に優れているか、ということだ。

これに対する、僕が出したのは“肉体”は丈夫ではあるが、その内はひどく脆い、という結論だった。

“肉体”はひどく繊細な扱いを要求する物体なのだ。頭の打ちどころが悪ければ、ポックリ、逝ってしまう、かと思えば、階段からまっさかさまに落ちようと無傷だったりする。物体としてこれほど耐久性に不安定なモノは他にないだろう。当然だ、肉体は物体であれど、一つの生命を形作る器であるのだから。

物体という認識を強く持てば、魔法具同様、緻密、繊細に術式を刻めば、大丈夫だという結論を出せるかもしれないが、忘れてはならない、コレはあくまで生命の器なのだ。

しかし。ただでさえ物的に見て大丈夫だという結論を出せれど、繊細さを要求される術式の出力に、僕は文字通り狂気に犯されるがまま、それをしてしまった。

してしまったことは覆せない。石化魔法の解呪時のように、内部干渉により、挿入された術式を解けばいいじゃないか、針の穴に糸を通すように術式を解体すればいいじゃないか、そんな考えがないわけではない。しかし、針の穴すら許してくれないのが、この“肉体”という物体なのだ。

針の穴など通してしまえば、あとは縫うだけだ。しかし、コレは違う。小さい小さい針の穴を通し、さらに間をおかず、針の穴があるのだ。石化解呪の術式も針の穴はいくつもあったが、予め考案し、実験、術式の出力を繰り返した結果の解呪だった。しかし、これには実験ができない。この術式を刻んで実験するには動物実験などでは事足りない。正真正銘人体実験でもしなければならぬ。

悪魔の石化解呪には人体実験は必要なかった。あれはあくまで外部からかけられた魔法だったから、そこまで人体自体に気を使う必要がなかった。

しかし、この術式は、正しく内部から出力した術式だった。肉を抉り、そこから流したのだ。

内部から干渉したのは、この魔法の難易度の高さと、その性質ゆえの処置で、その術式を刻み込む上で正しくはある。しかし要求される繊細な術式を僕は事前の考案もなしに行った、行ってしまった。だから事は大きくこんがらがってしまったのだ。

少なくとも、僕は再びこの術式に手を加えることは不可能だろう、と結論づけた。

この身体に刻みつけられた術式の魔法を使わなければいいではないか、もちろんそういう選択肢もあるだろう。しかし、現実それは叶わなかった。

この術式がどうあれ、僕の体内の魔力は、この術式の維持に強制的に奪られた。そのせいで僕が魔法を行使するにあたり自由にできる魔力は少なくなってしまうた。

魔法世界はそんな現状に適した甘い世界ではない。子供一人生きていくのであれば余計に、だ。何度も何度も、使わないでおこう、と思っけていても危難に追い込まれると、すぐにそれを使ってしまう。さらに、僕の身体からは痛みという感覚が薄れている。その魔法による摩耗の結果が体感できず、出し惜しみはしなかった。

ただ僕の理性は正しく働き、この現状にきちんと危機感を持った。

術式は下手に弄れない、使用を控えるには便利が過ぎる、ならば、どうする、と考え付いた先が、肉体機能を弄ってしまえばいい、というさらなる狂気への追従だった。

このままであれば、肉体は損耗し、いずれ死を迎える。ならばその肉体を、この摩耗激しい術式に合わせる形で、耐久性を高めればいい。この肉体は生命の器だ、ならその概念すら薄れさせるほどに、より物体に、それもより頑丈なモノに近づければいい。

狂気の沙汰ではあったが、理性的にはそれしかないとし、恐怖の感情を無視し、断行した。

その結果として、術式を刻んだ代償に、高位の魔法使いになれるだけの魔力量から平均の魔法使いの魔力量を大きく下回るような魔力しか自由にできなくなっただけ。

さらにそれだけではなく、“肉体”をより物体に近づけたことで、人間としての機能が鈍くなった。

目が悪くなった。

耳が遠くなった。

鼻が利かなくなった。

味覚が薄れた。

消化機能が悪くなった。

それらの点を挙げるだけで気が滅入ってくる。実際それらを補うためにコンタクトを装着し、補聴できる目立たないピアス型の魔法具をつけているし、食事をするときは人より多めに、魔法薬と一緒にカロリーを摂取している。

正直あらゆる意味で僕の身体は欠陥品だった。

魔法使いとしてもかなり致命的だった。ぶっちゃけ魔法の才能などというものは、潜在魔力量によってそのほとんどが決められるのだ。いくら、僕の頭が良かろうと、この身体に特殊な魔法の術式が刻まれていようと、魔力量が乏しくては話にならない。

しかし、この点については、思考によって術式を構築できる僕のアーティファクトと持ち前の桁外れた思考能力をもってしてこそ、使用できる膨大な量の補助術式と魔力増幅定理を挟むことによって、以前と同じとはいかないまでも、それなりに魔法は使えるようになった。

しかし、根本的には現状が変わったわけではない。

その現状を変えるためにも、色々試行錯誤してきた。その過程僕は興味深い事例にたどり着いたのだ。

きっかけはある吸血鬼だった。真祖の吸血鬼ではないが、とある地域で吸血行為をさかんに行っており、僕が討伐に赴いた。そしてその途上知ったのは吸血鬼が元は人間であり、それは術式によって書き換えられる、という事実だった。その吸血鬼は真祖に噛まれて吸血鬼になったそうだが、噛まれたら術式で体を書き換えられていた、

これはどうにもおかしいことだった。

しかしながら、吸血鬼が術式によって変えられたのは事実。そこで行き着いたのは真祖ですら、もしかすると、術式によってその体を変えたのではないか、という推測だった。そう仮定するのならば、善悪は別にしてこれは素晴らしい発見である。何せ、不老不死で、吸血行為を必要とせず、日の光も苦にしない、魔力も底上げされる、いいことづくめしかない。

もし、これが術式でなされたのだとしたら。

僕の体も作り変えられるかもしれない。

この身体は物体に近く、生命維持もほとんど術式によって行っているようなものだ。

別に真祖の吸血鬼になどなる気はないが、それに使われた奇跡とも言える術式を解析してみれば、何か得られるものがあるはずだ、僕はそう確信していた。

そして今から、向かう先にその真祖がいるかもしれない。

もう行かないなどという選択肢はないだろう。

もちろんデメリットもある。

一つは、麻帆良学園のバックの関東魔法協会がメガロメセンブリア元老院の下部組織であることだ。おそらく、元老院もこれをいい機会に僕を引き込みたいと考えているはずだ。アリアドネーの特別修士という称号を持っている以上その才は確かなもので、おまけに引き込めばアリアドネーの内部情報まで手に入る可能性があるのだ。これを放置しておく理由はないだろう。

しかし、同時に不用意な接触はあり得ないだろうと僕は判断する。ただでさえアリアドネーという後ろ盾があつて、なおかつ元老院が僕の功績を潰したんじゃないか、とセラスさんに、ほのめかしてもらっているのだ。しばらくは監視するにとどまるだろう。

それをした上で、引き込みが可能か判断し、あるいは僕を始末しようとしてくるだろう。いずれにせよ“都合のいい英雄”を仕立て上げた彼らにとって僕が邪魔な存在であることに変わりはないのだ。その毒を抱え込んで使用しようとするか、処分するか、どちらかではない。

元老院の接触は関東魔法協会を通じてのことだろうから、本国と関係がそれほど深くなければ、始末、という手段は麻帆良にいる以上は平気だと思う。そこらへんを洗い出した上で警戒ラインを決めよう。後は僕の住む場所に結界でも張つとけば十分だ。そういや住む

場所はどこなんだろう。まあどっちにしても僕がいる限り罨をかけられ、罨に引っかかるということはないな。過信は禁物だが。

後、面倒なのが、麻帆良学園のバツクの関東魔法協会が僕が習いたい陰陽道を取り仕切る関西呪術協会と敵対関係にあることだ。これは痛い。関東魔法協会と関西呪術協会を天秤にかけた結果、僕はこうして麻帆良行き飛行機に乗っている。ある程度は妥協するしかない。完全に望みが絶たれたというわけでもないし。

これに関連して面白い情報がある。関西呪術協会については以前から調べていたが、急遽関東魔法協会に行くことが決まり、調べていた最中に挙がってきた関西呪術協会とも関連する面白い情報だ。

なんでも、関西呪術協会の長であり、サムライマスターの青山詠春の一人娘が麻帆良学園の中等部に在籍しているという噂だ。噂と言ってもかなり信用できるもので、なんでもその娘は敵の陣中にありながら、魔力を垂れ流しにして普通に生活しているらしい。別途からの情報では、関東魔法協会の長である、近衛近左衛門はもともと、関西の名家の人間で西洋魔法に走った裏切り者とされている人物だ。そして詠春の旧姓、というか短い間名乗っていた姓に近衛がある。

どちらも、割と浅い——マホネット一生懸命探れば出てくる程度の——情報なので推測しかできないが、おそらく敵対関係にある二つの組織の長は元は義理の親子。さらに娘を関東に寄越しているということとは、両者それなりに信用していることがうかがえる。加

えてその娘が魔力垂れ流し、ということは素人の可能性が高い。お
おまか娘を魔法や政治に関わらせたくなくて、関西から遠ざけたか。

まあ、大体合つてると思う。おいおい、そんなんで組織の長として
大丈夫か、という意見はこの際どうでもいいので、無視しておく。
とはいえ、これは使える。案外やりようによっては、この娘経由で
陰陽道を習えるかもしれないな。

……………こんなところか。

方針としては、真祖との接触は細心の注意を払って、行つ。安易に
近づいて殺されました、じゃ話にならない。何せ六百年物の真祖だ、
彼我との実力差は大きい。

他はある程度注意を払って先の点を念頭に入れとけばよし、とするか

とにかく後は現地での情報収集だな、使い魔でも仕込んで、麻帆良
に放つか。

ふう、と、僕は息を吐き、窓越しに景色を眺める。

空に浮かぶ船の道のように果てしなくその下に広がるくせ、その底
を決して見せない実体なき雲海。わずかに視線を上げれば明かりと

いつにはささやかすぎる星々。

僕の目に見える限りは道を示さぬ指針なき旅路だというのに、この鉄の塊は迷うことなく、目指すべき場所を目指している。

僕は、それに何を思うわけでもなくただ微笑んだ。

そして、僕の腕にすぎるようにして眠る兄さんにその視線を移し。

腕ごとその頭を座席に叩きつけた。

兄さんの呻き声は、僕の耳を右から左へと通り抜けていく。

兄さんはその地でも、兄さんが標榜するところの“立派な魔法使い”をを目指すだろう。誰その思惑を関係なくして、兄さん自身の意思にてそれを目指していく。こうして目的地を見据えていながら、目的地のはるか上を飛んでいる飛行機のように。

兄さんは何も見えていない。けれどいいじゃないか。この飛行機のように目的地につくことはわかっているのだから。兄さんが見えていない。後ろの座席の人がひどく迷惑そうな顔をしているのを。

兄さんが見えないものは僕が見てあげよう。

その代わり、兄さんにはその場所を目指してもらおう。

見たくないもの、行きたくないところ、それぞれ違う願いをもって
いる僕ら兄弟はきっと仲良くやっていけると思う。

僕はそれを想い、微笑み、もう一度兄さんの頭を座席に叩きつけた。

「いたあ ああ！」

うん、仲良くやっていけると思う。

すごい楽しくなってきた僕だった。

アリナの思惑（後書き）

オチについてはふと思いついてやってしまった………反省はしてない。

いい話風にまとめておいて割と腕にすぐる兄さんにキレてるアリナであった。

麻帆良学園事情（前書き）

うーん、先日の感想から、術式の説明がいい加減すぎないか、というご指摘があり見直したところ、確かに自分でもないなと思い訂正しました。大幅に変わっており、情報を付け加えております。訂正以前（更新直後四時間くらい？）にご覧になった方は、お手数ですが確認したほうがよろしいかなあ、と。あ、でも読まなくても、後々その話題は出てきますので、強いるつもりはないです。

…………… ちょっと粗が目立ってきたような気がします…………… 展開云々は文句を言われてもどうしようもないわけですが、描写に関してはできうる限りこたえたいと思っていますし、作者自身投稿前に見直してはいるんですが、今回は見逃してしまいました、刻まれた魔法の内容を隠しておきたい、という意図のみを優先させてしまいました。

ちよつと、明日以降更新速度を落としたいと思います。二日三日に一回ぐらいの更新速度で、じっくり腰を据えて話を進めていきたいと思っています。ただ次の章は今月中には終わらせたいと思っています。そこが山場ですから。

それでは、明日はたぶん更新できませんが。

本編をどうぞ！！

麻帆良学園事情

学園長SIDE

「仮面の学者騎士、のお」

わしは本国から届いた、アリナ君の資料に今一度目を落とした。とてもじゃないが、九歳の子供にできるとは思えん、いや実際はダイオラマ魔法球を使っておるから十一かの。実質は兄のネギ君より年上……………ネギ君も複雑じゃろうな。

しかし、それにしたって信じられん経歴じゃ。

「まあ、ですが、彼ならばやれたと思いますよ」

目の前で同じように書類を手に取り、メガネを指で押し上げたタカミチ君が、わしにそう言ってくる。書類を眺めるその表情がどこと

なく苦々しいのは、わしの気のせいではあるまい。

今、この場にはわしやタカミチ君を含め、集められる限りの魔法先生を集めた。アリナ君が来ること自体ネギ君よりか後に急遽決まったことじゃし、彼らとて、もう一人の英雄の息子の経歴は知っておいたほうがいいじゃろう、と判断した。

……… 本国より、アリナ君を監視し報告せよ、と命令がきとるしの。

「ふむ。仮面の騎士として、紛争参戦、戦災地を周り救護活動、賞金首の打倒、さらには大規模な賞金首集団をいくつかのパーターをまとめ主導してこれを撃滅。その後、アリアドネーに入り、研究論文を発表、先進的な論文の功績を称え、アリアドネー特別修士に異例の六か月で就任、仮面の学者騎士、と呼ばれるようになる………」

わし自身声に出して言うておいてなんじゃが、これが齡十歳のやったこととは到底思えん。

集まった魔法先生も書類が配られ、目を通して啞然としておる。

しかし真贋を疑うことはできんのじゃ。これは連合が悪の魔法使いによる洗脳を懸念して命を下し受けた魔法使いたちが、直接頭から

調べ上げたことじゃからの。その際はアリアドネーとえらくもめたらしい。なにせ、アリナ君の生存が確認されるのと同時期にアリアドネーがその身分を保証したのじゃからな。最終的に本人が受諾することで解決したらしいが……………

しかし、じゃ、とわしはタカミチ君に視線を送る。すなわち、これをすんなりと信じられるのか、と。

「……………少なくとも彼の執念は普通の子供と比べ、逸脱していると思いますよ」

タカミチ君は、どうにもアリナ君のこととなると歯切れが悪い。一度彼ら二人に会いに行つて、感想を聞いた時も、アリナ君については言葉を濁しておつた。しかし、まあこの書類が上がってきた時点でそれなりに予想がついた。

……………おそらく、アリナ君は……………

「ですが、素晴らしいではありませんか！　これほどの功績を挙げているのなら、立派な魔法使いの称号が与えられるのでは！？」

ガンドルフィー二君が頬を上気させ、興奮したように声を上げる。

そりゃ、確かに素晴らしいことじゃろうて、しかしな、ガンドルフ
イーニ君、事はそう単純ではないのじゃよ。

「しかし、これはおかしくありませんか？」

そう声をあげたのは、シスターシャーケティ。

「この書類にはちょうど彼が誘拐された数か月後からの記録ですが、
何故彼は仮面をつけ、正体を偽るような真似をしたのでしょうか。普
通なら誰かに助けを求め、その身分を明らかとするのが普通の行動
ではありませんか？」

「英雄の息子だから、ではないでしょうか」

静かに言う神多羅木先生に部屋中の視線が集まる。

「英雄と言っても、それを淘汰される悪からしてみればたまたまも
のではありません。彼らの中には英雄を恨む人間もいます。そ
の彼らからしてみれば、英雄の息子なんていうのは、まだ幼く弱い
存在は格好的ですよ。その配慮からか、誘拐した悪の魔法使いの風
体は表に出ましたが、彼の顔は出ていません。その状況では英雄の
息子と言え、保護は受けられるかもしれないが、逆に危険に晒さ
れることになるかもしれません。それに、英雄の息子だと子供が言
ったところで信じてもらえるでしょうか。戦災孤児が庇護を求めた

いがために言っているのだ、と一蹴されてもおかしくありません」

「それもそうだねえ。それにこの功績を見る限り、かなり実力はあったみたいだし、子供特有の背伸びもあつたんじゃないかなあ。自分一人でも生きていけるっ、みたいな。あるいは英雄の息子なんて金看板はいらない、僕一人の力を認めてほしいっ、みたいなさ」

瀬流彦先生もそれに同意する。

「なるほど、信じてもらえなかった可能性と、子供特有の背伸び、………それならば納得がいきますね」

シスターシャークステイもそれに納得し、引き下がる。

しかし、ここで納得されて議論が遅滞するようではのお、わしの思惑とは異なってしまう。

どれ、わしが水を向けてみるか。

「ふむ、ここには先進的な論文と書いてあるだけで詳細は書いておらんが、その辺はどうなのじゃろうか、明石教授」

わしがその分野に明るい明石教授に聞くと、明石教授は、少しだけ苦笑いを浮かべた。

「私は仮面の学者騎士という名をここで聞かされる前より知っていましたが、正直、彼はもつと歳をとった人物だとばかり思っておりまして。おおまか、野で研究し、アリアドネーに出てきた賢者のような類の人物かと」

「なぜ、そう思ったんじゃね」

「仮面の学者騎士というのはアリアドネー外の研究者からは変人、奇人と目されるような人物だからです」

「ほお」

わしでさえ、知らなかった事実にもわしも興味をもって耳を傾ける。

他の魔法先生たちも、英雄の息子が変人、奇人と呼ばれていることに目を丸くしておる。

そんな中ガンドルフィー二君が少しだけ不快げにして、明石教授を疑問を投げかけた。

「それはどういことですかな」

「意味がわからないのです」

「は？」

ガンドルフィーニ君は唐突な言葉におうむ返しに疑問を反芻する。

そこで明石教授はほろ苦い笑みを浮かべた。

「俗にアリアドネーには研究狂いと言われるような研究者がいます。もちろん、その多くが研究に執着していることは事実なのですが……彼らは魔法であるにも関わらず、ときに理解できないような魔法を使うことがあるのです。もちろんその魔法に理論はありません。術式があります。しかし、それが理解できないんです。言っていることはかるうじてわかるんですが、使えないんですよ、それらの魔法は」

「どういことかわからないんですが？」

シスターシャークスティも訳が分からない、と首をかしげる。しかし、わしにはわかる。それこそがまさにアリアドネーが中立を保て

ている理由じゃからじゃ。

「……………一般に普及している魔法というのは多くが術式が洗練され、どんな魔法使いに使えるよう、可能な限り簡単に、効率化されています。しかし研究狂いと呼ばれる研究者が使うのはそういう魔法ではありません。効率化、簡易化を無視し、術式を難解にし、複雑な過程を経ることで、強大な魔法を扱うのです。実際普及している魔法にも上位魔法などがありますが、彼らの扱う魔法は俗に超高等魔法と呼びます。それらを扱う術式は薄い本一冊分を埋め尽くす量だと言われており、よほどに頭のいい人物でなければ、使うこともできません」

周りの魔法先生は軒並み啞然としておる。薄い本一冊分を埋め尽くす量の術式など想像もつかないじゃろう。儀式魔法ならともかく、たかが攻撃魔法一発でそこまでの術式を築くのじゃ、驚いて当然じゃろう。しかも一般に普及している魔法というのは、上位の魔法であつてもそこまで深く知る必要はないのじゃ。少なくとも学術的なレベルまで突き詰めずとも、ある程度知っておれば、あとは魔法的感覚を鍛え、その魔法に鳴らしていけばいい。一般の魔法はある意味、魔法的感覚に頼れるように簡易化、効率化されておるのじゃ。

しかし、そうやって簡易化、効率化したのは誰か。答えるまでもなく、アリアドネーの学者たちじゃろう。学者たちはもちろん、魔法が誰にでも気軽に使えるように、もしくは魔法使いたちから求められてそういった研究を行ったのかもしれない。しかし、それは今の魔法先生たちのように重大な問題を起こしている。

単純な話、バカになっておるのじゃ、魔法使いたちが。

だつてそうじゃろ？ 極限まで効率化、簡易化された魔法は、魔法的感觉に恵まれている人間であれば、勉強せずともできてしまうくらいなのじゃから。それに従い魔法使いたちに求められる知識レベルも下がっていき、学術面での才が非常に残念なことになった。

こんなこと当時でも予想のついたじやろうに。あるいはそれがアリアドネーの学者たちの狙いだったのかもしれない。そうして自らの地位を確固たるものにしたのじゃから。

「仮面の学者騎士というのはですね。それら研究狂いから認められて、アリアドネーの特別修士号を授与されたと聞いています。さらに先ほど学園長が尋ねられた論文についてですが、もちろん我々アリアドネー外でも理解できる論文もあります。しかし、その多くは超高等魔法と呼ばれるような魔法に使用する術式についての論文なんですよ」

そう、それが一番厄介なことじゃった。

「彼が研究した超高等魔法の術式は多くが補助や魔力増幅の術式なんですよ。それらは今まで研究狂いによって研究されていないような分野でした。そしてこの論文はアリアドネーに大きな影響をあたえた」

「ど、どういことですか？」

「わからぬか」

そこでわしが静かに口をはさんだ。その声の重々しさに皆、わしのほうに緊張した顔を向ける。

「わしらには使えぬ強力な魔法があつて、アリアドネーにはそれを行使できる研究狂いと呼ばれる魔法使いがある。強力すぎる魔法は世界のバランスを崩すから、と術式の情報公開を要求してみたところで、連合にも帝国にもそれを使える人物はおらず。儀式魔法的に行使すれば、使えぬことはないが、出力さえ難しい術式で、築くに相当な時間がかかり、築いたとしても虎の子の一発。向こうにはそれを容易く行使する研究狂いがある。アリアドネーが中立を保っていたのは、超高等魔法などという得体のしれない魔法を使える研究狂いがいたからじゃよ」

さらに、とわしは続ける。

「仮面の学者騎士が発表したのは今まで超高等魔法の粗野であつた、補助や、魔力増幅の術式じゃった。この危険性がわかるかの？ 研究狂いと呼ばれるような魔法使いは十人といない。じゃから、わしらはアリアドネーの中立を認めながらも、抱える物量ゆえに、誇り

を保てていたのじゃ。それはいかに研究狂いと言えど、魔力には底があることがわかっていたからじゃ。しかし」

「仮面の学者騎士が発表した論文は超高等魔法の補助、魔力増幅の術式です」

「研究狂いどもは今ごろ嬉々として、自らの超高等魔法の術式にそれを取り入れとるじゃろうな。一番の懸念じゃった魔力の使用量が減るのじゃから」

ここにいる魔法先生もようやく事態の重さに気づいたのじゃろう。顔を青くしていた。何せ、研究狂いの超高等魔法が強化されたおかげで、アリアドネーは、世界に対する影響力が高まったからの。だからといってその力を振りかざすような真似は、アリアドネーの理念から言ってもせぬだろう。しかし、一魔法使いからしてみれば、自らが所属する国家がアリアドネーにイニシアチブをとられていることに危機感を覚えているのかもしれない。研究狂いを紅き翼のような集団と勘違いしてるんじゃないかな。彼らは正しく戦闘集団じゃったが研究狂いどもは、真正正銘“研究狂い”なんじゃがの。彼らは何にも邪魔されずに研究するために、力をつけたことを世界に公表したのは、その姿勢の表れなんじゃ。奴らは、論文の一つも出しやしないのに、そのことだけは公表し、実演したからの。ある意味示威行為じゃが、それだけ邪魔されなくなかったのだろう。

真に大事なのはこの一件で、アリアドネーの権威が高まったことにあつて、実戦闘的な面ではないのじゃが、こういう危機感を實際ア

リアドネーは煽ることこそがアリアドネーの目的であり、それがアリアドネーの権威につながる。懷に銃を隠し持っていれば、誰だつて恐れるものじやろう。

しかし、これくらいのこと、調べればわかることなんじやが。アリアドネーが仕掛けた、魔法使い馬鹿作戦は成功しておるようじや。まったく、最近の魔法使いどもが、英雄に憧れ、正義正義言つのもある意味、思考能力を低下させたアリアドネーのせいじゃないかの？

「し、しかし！ では！！ アリナ君がここに来るのですからその問題は解決されたも同然ではありませんか！！」

何が問題かも正しく理解しておらんくせに何が問題じや。しかし、その流れはわしに好都合じやから黙っておくがの。もっともわしが誘導した結果でもあるわけじやが。

ガンドルフィーニ君のあわてたような声に場の空気が多少なりともほぐれる。いや、むしろ少し高まったかの、何せ超高等魔法などという得体のしれぬ魔法を行使できる魔法使いが英雄の息子なのじやから。

しかし、そこで話は本来の流れに戻るわけじや。

場は落ち着きを取り戻し、皆、改めて書類の内容に目を落とす。

「ちょ、ちよつと待つてください!」

そして、そこにシスターシャークティがあわてたように声をあげた。

「アリアドネーは私たちが彼の存在を確認すると同時に仮面の学者騎士の正体を明かしたんじゃないやありませんでしたか!? となれば彼らは英雄の息子だと知っててそれを受け入れたことになります!」

そこか、そつちか、わしとしては、受け入れた云々の今さらな政治の問題より、一足飛びにその英雄の息子がアリアドネー寄りの人間であることを懸念してほしかったのじゃが……… まあいいわい。

「なんだと!? 我らが英雄の息子の存在を知らせぬとは、アリアドネーの連合に対する背信行為じゃないのか!」

ガンドルフィー二君が吠える。そんなもん、おぬしが口に出す前にとつくに元老院がやっていることじゃわい。愛国心に溢れているのはいいことじゃが、この場合見苦しくて仕方がない。背信行為、責任問題、確かに大きな問題じゃろうて。精神的に未熟な人間ほど、それら大きな問題を矢面に立たせる。そうやって自らを守ろうとする。しかし、そんな大きな問題、わしらには関係ないのじゃ。わしらは一人間であるのだから。そんなことより、何故アリナ君個人がアリアドネーを選んだのか考えるべきじゃ……… 英雄の息子云々

の話よりの。

そこに明石教授が冷静に割って入った。

「彼らの理念として、彼らはどんな生き物でも学問の前ではみな平等だという考えがあります。そしてそれは連合も帝国も認めるところ。アリアドネーはそれを英雄の息子であつても同じだとあてはめたのでは？」

「しかし、あのサウザントマスターの息子だぞ！」

「そうですね。しかし彼らが単純に英雄の息子だというだけで匿ったのではないと思います。おそるべきは、彼がまだ齡十に満たないにも関わらず、長く生きている長命種である研究狂いたちと同じ境地に立てるだけの才があつたことです。彼らからしてみてもその才は惜しく思つたのではないでしょう。英雄の息子などというのは学問を尊ぶアリアドネーの前では付加価値に過ぎなかつたのでは？無論その付加価値のせいでアリアドネーが多少のリスクを負うことは必至でしたが、それも当人が研究した超高等魔法の術式のおかげで、更なる権威を手に入れられたアリアドネーからしてみてもおつりがくる利益でしょう」

「その通りじゃ」

わしは小さく息を吐き、そこでさらに口を開こうとするガンドルフ
イー二君を抑えて、言った。強引であるが仕方がない。政治の問題
云々よりか、アリナ君がアリアドネー寄りの人間であると警戒心を
高めることで、この話に持っていきたかったのじゃが、結果は変わ
らんじやろ。

「この辺で、君らも、この微妙な事態がわかってきたのではないか
？ 具体的に言えば現在アリアドネーと我らが本国である連合の間
でアリナ君の引っ張り合いが起こっているのじゃ。もちろんアリナ
君がアリアドネー寄りであることは、当人がアリアドネーに英雄の
息子だと明かし、アリアドネーが何もせんその状態を甘んじていた
ことで、明らかじゃが、その一方で連合の下部組織であるわしらの
ところに来るぐらいには、帰属意識もあるようじゃ」

政治の問題であることを意識させて、皆の意識を引き締める。本当
はアリナ君がアリアドネーの人間であることは明けて透けているおる
から、こんな嘘っぱちな理由並べたくはないがの。

「そして本国より、迂闊な接触は避け、アリナ君の人柄、行動を監
視し、報告せよ、との命令が関東魔法協会に下ってきておる」

命令、という言葉にその場にいる全員の顔が緊迫したものに変わった。
本国よりの命令など、滅多に下ることはないからの。

「そこでアリナ君が来たら、諸君には監視の職務についてもらっ

とになる。よいか、くれぐれも迂闊な接触は避けるのじゃぞ。今、アリアドネーと連合は緊迫状態にあるんじゃないからの」

「学園長、本国はいずれアリナ君本国に引き入れたいと考えているのでしょつか」

ガンドルフィーニ君がビシツとした顔で問うがわしはきつく睨み返した。

「詮索は無用じゃ」

「はっ」

「君たちには教師の仕事を縫って、監視してもらうことになるじゃろうが、本国に貢献できるまたとない機会じゃ。全員気を引き締めて励むようにの。それでは解散！」

わしがそう言うと、それぞれわしに一礼してから学園長室から出ていく。

最後の魔法先生を見届けると、わしはホッと息をついた。

「お疲れ様でした」

最後まで残っていたタカミチ君がそう声をかけてくれる。

「まあ、こういう細かいことも、組織の運営者としては、必須じゃからのぉ」

こうして皆を集めて、それとなく議論させるような形に持つて行つたのも、先ほどの命令に不和を残さないためじゃ。本国の命令をそのままわしから命令するだけでも事足りたが、それではなぜ英雄の息子を疑つてかかるような命令をするのか、多少なりとも不満が残つただろう。

じゃから、あえて皆を集めアリナ君の情報を配り、それとなく自分たちで考えさせるようにしてから、最後にわしが主導権を握つて、その考えを自然に変えた。その展開がいささか目論見とは違つたが、これならば、彼らもそれなりに緊張して、命令をこなせるじゃろっしの。

小さいことのようにじゃが、こういった小さなことひとつひとつの不満の目を潰していくことが組織の長たるわしの義務なのじゃ。

実際、元老院が考えていることなど目に見えておる。引き込みたい、という考えもあるじゃろっが、どちらかというと、始末したりなん

だりしたいのじゃろ。アリアドネーと緊迫しておるとか言ったが、そんなことは全然ない。本人がアリアドネーに帰属意識を持つておるのじゃからの。

……………わしも同情しておるようじゃな、アリナ君の運命に。

「しかし、まあナギの息子を始末させるわけにもいくまい」

ちらつと意味ありげな視線をタカミチ君に流して、言葉を漏らす。

「……………わかりましたか」

「少し考えればの。今どきの魔法使いは馬鹿じゃから……………の」

わしは視線を窓にやる。

「明日か……………」

そしてポツンとつぶやいた。

麻帆良学園事情（後書き）

学園長はアリナの境遇に同情的です。

麻帆良学園到着、そして……………（前書き）

前書きとあとがきが不評のようなので（言って悲しくなる）、最新話以外のまえがきあとがきは極力消すことにしました。まとめ読みする人にはあんまいらないもんね、前書きとあとがき……………

さて、ようやく麻帆良到着……………

しかし、まあ、この後結構シリアスになるので、この話だけは、テンポよく進めようと思っていたんですが……………麻帆良に到着した喜びからでしょうか、予想以上にコミカルな話になってしまいました。

まあ、この章でのコメディ的なノリはこのお話と、後は学園長の頭についてだけです。あしからず。ただ、この章が終わった後の話（つていうか会話？）のノリとしてはこんな感じです。その辺を念頭にこのお話は割り切って楽しんでいただけたらと、思います。

麻帆良学園到着、そして……………

「人だかりが半端ないんだけど……………」

電車から降りて改札に雪崩こむ、制服を着込んだ人、人、人。

僕はさりげなく、人ごみに巻き込まれないように、端に避けながら肩に乗る親父に呆れ混じりにつぶやく。ちなみ、兄さんのほうはゴミのようにその人ごみに紛れていった。最初は僕の手を引っ張って、人ごみから逃れようとしていたんだけど、その方向がわからさまに巻き込まれるような方向だったため、振り払って、するする一人、人ごみを抜けてきた。っていうかいくら兄さんが魔力強化しているとはいえ、この人の波を押しつけて進むことは無理だと思う。

「なんで、こんなに混んでるだ？」

親父もあきれた様子で僕に同意する。通勤ラッシュというにも、ためらいのあるその光景を作る人たちはどこかその表情その表情に危機感が走っているように見受けられる。この時間帯は電車の本数が少ないのだろうか、というこんなに混むことがわかっていたら、少しは時間や本数も調整できそうな気がするけど。

「案外、皆遅刻しそうで焦ってるだけかもしれないね」

馬鹿げた発想に自分でも失笑しそうになる。いくら学園都市とはいえ、これだけの人間が遅刻しそうになったら、遅刻率が結構な割合を占めるだろう。それでは学園都市としての体裁が保てない。

「しっかしまあ」

僕は人ごみの後尾についてゆっくり歩きながら、苦笑いを浮かべる。

ここの霊地を使った結界はいささかに認識阻害魔法の影響が強すぎる。この強さだと、非常識な出来事に対しても、幾分か受容的になるだろう。確かにそういう面では魔法の隠蔽は楽になるだろうが、この光景を見る限り、認識阻害は、ここに住む人間の常識レベルにも干渉していると見るべきだ。それが非常識な出来事に対する受容性をつけたことからの連鎖反応か、それとも認識阻害魔法自体がそれに干渉しているのかどうかはわからないが。

「なぐに考えてんのかねえ、お偉いさんも」

「さあ？　でもパツと見る限り、この結界、なかなか古いよ。多少弄ってはあるけど、根本的な組成は、変わってない。たぶん昔に強力な認識阻害魔法がこの地に使われ、非常識なことにおおらかになっで以来の変化を好ましくは思えなかったんじゃないかな？」

おそらくこの認識阻害魔法を解いたら、魔力対抗が強い人間と弱い人間の間で常識非常識の観念が混乱する。強い人間は認識阻害の影響を徐々に打ち消し、一般的な常識観念を取り戻していく。そうしたらそうしたで、今まで自分が信じてきた常識について自分の頭を疑うことになるだろう。すなわち何故自分はこんなおかしいことに疑問を持たなかったのか？ と。弱い人間は弱い人間で長く認識阻害魔法の影響下にあったことで、その非常識観を根付かせたまま、生活し、やがて周囲と自分との常識観の違い、溝に混乱することになる。

この混乱はやがてこの麻帆良全体に普及し、いずれは魔法バレをも招くかもしれない。確かにこの認識阻害魔法はかなりの弊害はあるが、逆にそれらのことから迂闊すぎて手が出せないのが現状なのだろう、僕はそう結論付ける。魔女狩りの恐怖が真新しく、必要以上に魔法バレを恐れた魔法使いがやった、あるいは時代の風潮として適切な強さだと判断された、そういうことだろう。徐々に変えていくにしても、やはりどこかで弊害は出るだろうし、ならばいっそ魔法使いにも都合がいいのだし、無用な混乱を招くよりは妙手なのかもしれない。

僕がそう言つと、親父も納得したようにうなずいた。

「なるほどねえ。多少この地で非常識観を育てたとしても、それらを変えようとして、混乱させるよりはマシか」

「まあ、そもそも相当古そうだしね、この結界。それに応じて認識
阻害魔法で育てられた非常識観もかなり歴史がありそうだし。学園
都市っていう特殊な場所だし、そういうおおらかな土地柄、ってこ
とで対外的には誤魔化せるんじゃない？ 実際何も見てない僕が言
うのも難だけど」

「まあ、その辺の常識の図り方も今後の課題だろうな」

「……………動物が話すっていう非常識については」

「無理だろ」

速攻拒否され、僕もぶうたれる。

「さて、駅に迎えの人が来てるらしいけど」

親父も拒否の姿勢を示すため、黙りこくったせいでただのひとり言
になった……………割と悲しいけど、まあ親父以外でも話し相手を見
つけるぐらいの事しなくちゃ、これからの生活寂しい。まさか親父
と一人一匹肩身狭く、研究だけに精を出すわけにもいかないだろう。

そう思い切り、僕は迎えの人の姿を探して右へ左へ視線をめぐらせ

る。というか今さらだけど、僕どんな人が迎えに来るのか知らないんだけど。特徴だけでも聞いときゃよかったなあ、と悔やみながら、迎えの誰かさんに見つけてもらえるよう、駅前の広場を歩きながらキョロキョロして。

「おい、すげえ、嫌そうな顔してんぞ」

「いやだつて」

親父が口を出してきたが、僕はうんざりしていた。

……………なんか兄さんが一般人っぽい人と争ってる。

しかし、その横には魔力を大量に垂れ流している少女がおり、そのことに気を取られたことで、自然兄さんのことはフェードアウトしていった。

……………間違いない、情報にあつた、西の長の娘だ。情報通りの大量の魔力だ。この娘を奪い返すべく西の強硬派がこちらに襲撃をかけているという情報もあったがあれほどの魔力保有者なら納得がいく。多少の犠牲などアレの有益性の前では、小さい物だろう。

しかも、本当に魔法を知らないみたいだ。魔力の制御ができておら

ず、周囲に垂れ流されている。

魔法、もしくは政争の類に巻き込みたくない、そういう考えなんだろうが、器が知れたな、西の長。いくら地位、権威があるうと、アレは嫌が応にも巻き込まれるモノだ。この分だと関西の強硬派が襲撃をかけているという情報も確定的だろうし、アレを巻き込まないために、要らぬ人間が巻き込まれているその迷惑を一体西の長はどう考えているんだろうな。

「やあ、仮面の学者騎士。そんな怖い顔してどうしたんだい？」

……………どうやら西の長の娘に注意を払いすぎて、周囲への注意が疎かになっていたようだ。親父に首を突かれて、直前になってようやく背後の気配に気が付いた。声をかけられる一瞬に表情を温和なものに変える。そして苦笑いを張り付け、後ろを振り向いて、

「どうしたんだい、仮面の学者騎士？」

——その笑みがひきつった。

「いや……………マナちゃんこそ、ここでなにしてんのかな」

それは一年ぶりの再会だった。

「何してるって、見てわからないか？ 中学生だよ」

いや、制服からしてわかっている、そんなことは。

しかし、

「驚くほど似合わねえな、おい」

ボソッと親父がつぶやいた言葉にピキッと、マナちゃんのこめかみに青筋がたった。

「ちょ、まって、あの、いや、親父もほら、マナちゃんは大入っぽくて色気があって胸がでかいって意味で言ったんであって、決して他意はないと思うよ」

「うん、そんなつもりは、つつつか百パーお前の私情じゃねえか！
胸がでかいて、どこをどうとったらそうなるんだよ！」

「親父の視線だよ……！」

「てめえの肩の高さだよ……！ てめえの肩がマナの胸の高さに合わせて成長してるから自然そうなるんだよ、このド変態が……！」

「……………親父が肩の高さで、変態呼ばわりするような人だと思わなかったよ」

「俺もてめえがここまでひねくれているとは思わなかったよ……！」

「僕はそんな風に育てられた覚えはない……！」

「俺こそ、そんな風に育てた覚えはねえよ……！」

「そもそも育てられた覚えがない！ 親父を育てた覚えはあるけど
っ」

「育てっ……………られてやがる、俺！ 親父と呼ばれておきながら、養われてる俺っ……………いやむしろ飼われてるっ」

「あれだよな、無職の親を持つ子の気持ちって、きっとこういう感じなんだろうね……………」

切なそうに僕が親父から視線をそらすと、親父は僕の肩の上でズーン、と両手両足をついてうなだれた。ぶつぶつ呟きながら、指で、の、の字を書いている。そこ僕の肩だからくすぐったいっ。

「……………変わらないな、相変わらずからかってるのかい？」

「いやうまいこと、のせてるだけだけど」

うまいこと日本語で言ってあげたら、マナちゃんから白けた目を向けられた。

「あの、真名はこの人と知り合いなのか？」

遠慮がちに発した声を聴いて、僕はさっきからマナちゃんの隣で警戒心も露わにこちらを睨んでくるくせ、何故か気を散らしている少女に目を向けた。その注意力緩慢な様子からは、なんか素人の感じがするけど、気が散っているのは、向こうの兄さんの騒ぎのせいか

な。なんか失恋の相がどうたらこうたら言ってるし、魔法関係者からしたら冷や冷やしてならないだろう。

「ああ、仕事を何回か、一緒にした仲だ。と言っても仕事をしたのは仮面の学者騎士、とだけどね」

そう言つて、魔眼で、何かを揶揄するようにこちらを見てくる。たぶん、魔眼で身体に刻まれた術式を透かし見てるんだろうな。仮面の学者騎士として正体を偽つてた時も、身体に刻まれている術式までは、マナちゃんの魔眼の前では隠し通せなかったし。

「……………そんな皮肉るように言わないでよ。今となつちやこつちにも事情があつたことはわかるでしょ？」

「……………ああ、あの英雄の息子とだったとは、ね……………」
「はいえこつちだけ“名前”を知られたのは不公平な気がするが」

ちよつとだけ悪戯っぽく口の端で笑うと、僕もニコツと笑つてそれに答えた。

「改めて、初めまして。アリナ・スプリングフィールドです」

気取つてお辞儀して挨拶すると、マナちゃんは面白そうに笑つて、

軽く会釈した。

「これはどうもご丁寧に、龍宮真名だ。今後ともよろしく」

マナちゃんに小突かれて、隣の少女も口を開く。

「……………桜咲刹那です。今後ともよろしくお願いします、アリナ先生」

「うん、よろしく」

先生と呼ばれて、再度実感したことだけど、僕本当に教師やるんだよな……………教育免許もないのに。英語くらいなら母国語だから教えられると思うけど、それ以外は……………まあ、中学レベルの問題なら何とかなる、と思いたい。

「んで、マナちゃんたちが迎えってことでいいんだよね？」

「そうだね、ちなみに向こうの二人もそうだ……………もつとも彼女らは君の兄の迎えなわけだけだ」

マナちゃんの言葉に、わざわざ分ける必要あるんだろうか、と首を

かしげたときだった。

「……………ハクチンッ！」

——視線を向けた先で、一人の少女が下着を残してほぼ全裸にされていた。

「は——！！？？？」

桜咲さんが、僕の横で愕然としている。

きっと、あの驚愕顔で心の内でこう思っているのだろう。

「（……………あのクマパン、私と同じッッ）」

……………うん、ちょっと現実逃避しすぎた。

それはさておき、その驚き、魔法関係者なら誰もが同意するだろう。何せ公然の場で憚りなく武装解除の魔法を発動させた挙句、その対象者の女の子を丸裸にせしめたのだ。犯罪にすれば、魔法使いにとつて、もつとも禁忌とされる魔法バレ、そして一般の刑法にあてがえば、猥褻物陳列罪、っていうか婦女暴行未遂？ 一般の法律のこ

とはよくわからないけど、丸裸にするなんて兄さん犯罪者じゃないかな、と身内が犯罪を犯したことに冷や汗をかいていると、マナちゃん、が僕の肩をたたいて平坦な口調で言った。

「あれ、本当に君の兄かい？」

続く少女の悲鳴を軽く聞き流して、のっぺらな声音で言う。

「うん、朝っぱらから兄さんも何やってるんだろっね……………」
「……発情しちゃっよ」

客観的な事実である。

「へえ、発情できるような歳になったのかい？」

「うん、割とつい最近」

「それはそれは。ご開通おめでとう」

「ありがとう」

「ちょ、な、な、なに言ってるんですか！」

懸命に現実逃避に励む僕らに、顔を真っ赤にしていきり立つ、桜咲さん。

「んあ？ そいつはナニについて言ってるにへぶツツ！！」

突如絶妙なタイミングで復活した親父は、桜咲さんに吹っ飛ばされて星になった。必要な犠牲だったと思う。

「っていつか魔法の秘匿についてはどこにいったんですかツツ！」

こんな状況でも兄さんと違って、ちゃんと声を落としているあたり、この子はその辺の事をわかってるのだろう。マナちゃんがこの子の前で仕事って言ってたあたりからなんとなく勘付いてたけど、この子もやっぱり魔法関係者か。

……………いつまでも現実逃避しているわけにもいかないの、真面目にするか。

「そうだね……………兄さんが生まれて育ったのは魔法使いの隠れ里みたいなところだったし、その後はすぐに魔法学校のほうに入学してそっちのほうにお世話になってたし……………考えてみれば兄さん

って一般の人と関係持ったことってないんだよね」

「か、関係！！？？」

「刹那。さっきの話題を引きずっているのはわかるが、今の、関係の意味は普通に交流がなかったという意味だからな？」

「そ、そそんなのわかってるッッ」

「……………わかってなさそうだから言っただけだね」

顔を真っ赤にして、羞恥をこらえるように唇をかむ姿はなかなかにかわかった。マナちゃんも普通に面白がっているようだし。

「まあ、とにかく、兄さんはそういう環境で育ったから、魔法学校で習ったこと以上の危機感はないだろうね。魔法秘匿の意識についても普通の魔法使いより低いんじゃないかな」

「そ、それにしたって、ひどすぎます……………！！」

まあ、確かにその意見については全面的に賛成だ。いくらなんでもこれはないだろうに。それに、兄さんの様子を遠目から見ても、あ

まり反省の色は見られない。さっきの武装解除はどうもくしゃみによる魔力暴発が原因だったようだが、事故だから、いいとも思っているのだろうか。そもそもくしゃみで武装解除ってどういうことなのか。そんなに女の子を裸にしたいという意味が強いのだろうか。目の前の桜咲さんも焦っているように見える。動きたくても動けない、そんな意思を感じさせるように、足を震わせている。地面から足が離れそうで離れない、そんなもどかしさを感じさせるような焦りと葛藤が垣間見えた。その視線の先にあるのは、脱がされた少女の横で、何が起ったかわからない様子ではてなマークを浮かべている長の娘。

もしかして、桜咲さんは……………

首を振ってひとまず思考をやめる。こんな様子を見せられて黙っているわけにもいかないだろう。身内のやらかしたこともあるし、尻拭いを含めて僕が動くしかないだろう。

「はあ。しょうがないな、ホント」

「……………大変だな」

マナちゃんが同情するような目を僕にあててくる。やめて、脱力するから。

「……………ちょっと尻拭いにいつてくるよ」

「……………がんばれ」

なんか励まされてしまったが、気を取り直して、紛糾している騒ぎの場に向かう。その背中になにやらするような視線を感じていたことには……………何も言うまい。

ギヤーギヤー混乱している声を聴きながら、僕はとりあえず鞆の中から羽織れそうなものを探し——これがまた術式を刻んだマントだったわけだが——引っ張り出して、裸にされた少女に差し出しながら、兄さんの尻を蹴とばした。

「いたっ！！」

「いたっ、じゃないよ、ったく——」

とここでウチの兄が迷惑をかけました、と言おうとしたところで、今さらながらこれ、まずくないか、と思い始め、動揺する。この二人、驚き具合から言っても、絶対魔法を知らない。ここで兄さんのせいにしたら、それこそおかしい話になってしまふ。

結果として、

「……………災難でしたね、まさか鎌鼬が急に吹くなんて……………」

ひどく、論理的ではないことを言った。僕自身として、こんな非論理的なこと言いたくないが、しかし他にどう誤魔化せと。僕は表面、さわやかに笑っているが内心冷や汗だらだらだ。

「鎌鼬？」

長の娘がなんか不思議そうに首をひねっているが、そんな顔で僕を見ないでほしい。きっと兄さんのくしゃみによって旋風でも生じてその気圧差によってこんなことになっちゃったんじゃないかな、無理だっ、説明としてほとんど破綻しているっ。

しかし、僕の動揺など露知らず裸にされていた少女からしてみれば、一刻も早くそれを隠すものが欲しかったらしく、僕の手から奪い取るようにして、マントをひったくった。その瞬間わずかに指先が触れ合う。別に何でもないことだろう、何でもない事のはずだった。

ビキッ、

何かが砕けるような音がした。

それが何かを確認する前に、僕の体に電撃が走った。全身に一瞬の電流が流れ、僕はその意味に顔を青くする。通常僕は痛みを感じることはない。それはあの時の肉体改造から変わっていなかった。しかし、痛みとは肉体の危機を知らせる信号だ。痛みという形こそいただけないが、それが持つ機能を捨てるにはあまりに危険すぎた。

だから、僕は体に何らかの致命的な支障が出た場合いくつかのパターンで、身体に知らせるように術式で細工していた。

そのパターンの中でも、電撃が示す意味は。

僕は走り出した。一刻の猶予すらない。少なくとも、この場で露見させるようなことはしてはならない。突如走り出した僕に、三人があっけにとられる様子が目端に映ったがすぐにそれも後ろへと流れていく。

まずいつ、まずいつ、まずいつ！

誰かにぶつかっても、止まることなく、秘匿云々以前の問題だと判断、走りながらにアダット、と唱え、アーティファクトを呼び出す。ぶつかった相手から、アリナ君っ！？、と聞いたことのあるような声が聞こえたが、そんな場合じゃない！

僕は、人目を避けられるような影を見つけると、そこに滑り込み認識障害魔法を張り。

それと同時にだつた。

ピチャアツツ！

.....僕の顔にピチャ、と粘り気を含んだ何かが付着する。

後ろからけたたましい足音が聞こえてきて、

「アリナ君っ！？ いったいなに.....がツツ!？」

後ろに首を回して、懐かしい顔だ、と苦笑いする。二年前僕に会いにやってきた高畑・T・タカミチ。紅き翼の元メンバーにて父さんの知り合い。その人が目の前の光景に目を見開き、息を呑んでいた。対するぼくは突飛な現状にどこか諦観気味で、力なく笑っている。あるいはタカミチさんはこの凄惨さとは裏腹で泣き叫ぶこともなく笑っている僕とこの光景とのコントラストに恐れ戦いていたのかもしれない。

「あゝあ、なんでこんなことになるかなあ」

目の前の光景を端的に表現するなら。

手がぶっ飛んでいた。

天敵は

「……………では、一体どういことなのか説明してほしいんじやが、」

そう言つて、目の前の学園長を自称する生物は、口火を切った。

兄さんたち五人は学園長室で、一通りのやり取りを済ませると、担当する教室に向かった。僕はこんな状態だから行けるわけもなしに、タカミチさんも元クラス担任として行かなければならなかったらしいが、当然こちらも行けるはずなく、違う先生頼んだようだった。

学園長を自称する生物は、目の前で冷や汗をダラダラ流し、それを拭っている。

僕が存在も、兄さんの存在も関東魔法協会的にはVIPとして扱わなければならない。その存在の片割れである、僕の右手が到着早々、ぶっ飛んだ、千切れたのだ。何をやっているんだ、と学園長の責任問題にまで発展しかねないこの状況では、学園長の動揺も当然と言えよう。

しかし、僕も学園長と同じように冷や汗を流し、動揺していた。

僕の目の前の生物の第一印象を述べさせてもらうなら、生物学的に見てあの頭の造形はおかしい、という驚愕だ。奇形児と言うにもおこがましいアレが外見通りの生物であるならアレは、人間ではない、間違いない。

僕の理性はそう判断した。つまるところ、コレが人間であるのなら、この人物は、何らかの意図をもって、頭の造形を視覚的に歪めるよう、魔法をかけているのだ。しかも、アリアドネーの学者の中でもとりわけ優秀な僕がわからぬほどの精密さで術式を構築し、事実認識を狂わせている。

一体どれだけ実力のある魔法使いなんだ、この人は……………僕は僕以上の実力を持つ関東魔法協会の長に畏怖を覚えた。魔法を魔法として察知できぬほどの、事実上添うようなさりげない術式構成の魔法。そのくせ事実認識の齟齬は著しく、あの頭の造形の歪め様からして、目玉が一つ増えるぐらいの歪め方だろう。

これはまるで、アリアドネーで“研究狂い”と会い、絶対的な実力差に恐怖を覚えたときの状況に似ていた。しかし、目の前の人物と“研究狂い”の実力差の示し方は違う。

研究狂いはただそこに在るだけで、その存在感をあたりに撒き散らしていた。その偉大さが存在からにじみ出ていたのだ。ある意味世間とは馴染めない、馴染もうともしない、己が存在の誇示。しかし

目の前の人物の実力の示し方は違う。この人は積極的に世間と馴染もうとしているのだ、圧倒的な実力を保持していながら、あくまで一人間としての存在感に自らを卑小している。並の人間であれば、何も感じないであろう、あるいは組織の長としては侮られたりもするかもしれない。しかし、実力のある者にとつては違う。この人は一人間として存在しながらも、その実力の一端を頭部の異常によって示すことで常に、実力ある者たちに、彼我との実力差を痛感させ続けるのだ。

なんと恐ろしい……………僕だからここまで読み取れたが、学園長の実力を感じ取れる人間でも、意識をわずかに逸らせば、その実力差を“慣れ”という感情から霞ませ、次第侮ってしまう結果にもなりかねない。しかし、そうなったときこそ、自らの未熟さを痛感させられることになるだろう。他でもない学園長の実力によって。

「アリナ君……………大丈夫かい」

隣のタカミチさんが気遣うように、僕に声をかけてくる。タカミチさんも、この人との実力差を痛感しているのだろう。あるいは、僕が右手を失ったショックを慮っているという可能性もあるが。

「はい、大丈夫です……………」

僕も気を張って、答える。そして、僕もそれに“気づいている”人間だということを示すため、今度は淀みなく、そして学園長を睨み

言った。

「とりあえずは……………関東魔法協会長殿。未熟さを認めるようですが、あなたの實力、この仮面の学者騎士、身に染みいるほどに痛感いたしました。おみそれいたしました……………」

「ふお!?」

学園長がとぼけたような反応を示すが、こちらは騙されない。この発言は、アリアドネーが特別修士と認めたこの僕が、目の前の人物の實力を上に見ているのだという外交的な事実になる。悔しく思わないでもないが、この人物には多少すり寄っておいたほうがいい。この公的な事実は向こうに優位を与えるものでもあるが、同時に敬意を払った僕の地位を保証することにもなるのだ。アリアドネーの仮面の学者騎士という称号も合わせて出すことで、優位への牽制にもなる。

なにより、今学園長は僕の右手を吹っ飛ばした管理責任問題に晒されているのだ。恍けるより、甘んじてそれを受け止めるほうが、学園長のためになるだろう。

「しかし、こちらはまだ未熟な身。このような場にて集中力を乱すのもまたお互いにとって不幸なことでしょう。ですからどうぞ、お戯れはおやめを」

「ふおおお！？ 戯れとはなんのことじゃ？」

まだ惚けるか……………しかしうつすらと警戒の色が浮かんでいるあたり、こちらの實力を示せたのだろ。まだ惚けるといふのは、幻術を解いて話すことに、対等を許すことに躊躇でも感じているのだろうか。だがこちらは、それでも（不本意ながら）英雄の息子であり、アリアドネーの特別修士なのだ。残念ながら公的な立場においては、関東魔法協会長の地位と遜色があるとは思えない。ただでさえこちらにとつては、受け入れられる“客”なのだから、これ以上の優位を許すわけにはいかないだろう。この際はつきり言うておく必要がある。

「ですから、いい加減、その奇妙な頭の造形をおやめください、そう言っているのです」

……………僕は知る由もなかったが、このとき学園長に衝撃が走っていた。

長く生きてきて、今まで頭がおかしいだの、ナスだ、狸だ、ぬらりひょんだ、と言われ続ける人生だった。『やゝい、なすびなすび』『変なあたま』『と小さいころはよく特徴的な頭部を枝で叩かれることも少なくなかった。呪術を司る名家に生まれついたこの頭部は、関西の行く末を暗示するものではないか、と（無論悪い意味で）疑われ、関西呪術協会の呪術師総出で、吉凶を占われたことすらあった。しかし、こんなにも直接的に、心を抉っていくよう

な真面目な顔つきで、その頭やめてください、と言われたことはなかった……と。

「あ、あの、アリナ君？」

「タカミチさんもわかってるでしょう。この人の頭は生物学的に見ても人間ではありえませんしね。だからさっさとその頭をやめてくれと」

いい加減惚ける大人たちに苛立ってきた僕は、口調に不快感を滲ませながら、言うと、肩に乗っていた親父が、不意に肩から落つこちそうになった。なんとか後ろ足で僕の服につかまりながら、親父は仰け反ったまま、笑いを爆発させた。

「ブウツ、ア、クググツアアハハハハハハはっツツツ、確かに
 そうだなあ、おい！！ その頭は人間じゃねえツツ、やめてほしい
 よなあ、マジで！！」

「親父、笑いごとじゃないよ。これは罠なんだ。あの頭部は魔法をかけて、巧妙に事実認識を歪ませているんだ」

「歪ませてどうするってんだよ……クハハ」

「あいさつ代わりのジャブみたいなもんだよ……あれで、僕らにどれほどの力量があるか、試してるんだよ」

僕が真剣にそう言い聞かせる。過信はいつだって自らの仇となるのだ。それが身内なら、こっちにまで火の粉が飛んでくる。真摯に僕が親父と向き合っていると、学園長が椅子を倒して立ち上がり、必死の形相で、叫んだ。

「いやいや！ 別にわし、魔法かけて頭部を歪ませているわけじゃないからね！？ 生まれつきじゃから！」

「嘘つけ！！ それが本当だったらあんた人間じゃないだろ！！」

「ひびっ……！」

学園長は涙を流していた。

「……………まあ、誤解が解けたようで何よりじゃ」

場を仕切りなおすように、学園長が咳払いをするが、僕は未だこの生物が人間であると信用しているわけじゃない。あれはそれくらいあり得ないのだ。しかし、まあグダグダ言っても仕方ないだろう。

「……………あなたが人間である、と信じたわけではありませんが、とりあえずあなたが社会的には“人間である”と認められていることぐらいは信用しましょう」

例えるなら、市の名物的な動物に、プロバカンダとして住民票を作るのの延長線上で少し段階と程度が高いぐらいの認識だ。まあ、本当に人間だという可能性もあるが、その可能性を検証するにはまず頭蓋骨のレントゲンを撮らなければいけないだろう。あるいは人間と何かのハーフという可能性も、いやもしくはクォーター？ なんか間違つて別の種族の血が入ってしまったという可能性もあるか。

「ねえ、ひどくない、わしの扱いひどくない？」

「……………大丈夫です、学園長。私もあなたと会った当初は本当に

人間なのか疑っていました。誰もが通る道です、この子もいずれ、あなたが人間であると理解する日が来るでしょう」

「……………」

学園長の目が潤んでいるのを気持ち悪く思いながら、僕は気分を切り替えた。

「……………そろそろ話を進めましょうか」

僕の改まった声に二人も顔を引き締めなおす。いや、切り替え早くね、という親父のつつこみは無視しつつ。ここにいるのはおふざけと真面目を取り違えるような面子ではない。例え、相手が人間であろうとなかろうと、交渉できるだけの知性を持った生物であるのなら問題ないのだ。僕はそういう割り切り方をしているが、向こうは腐っても、僕の何倍も生きている関東魔法協会長。これまでのやり取りはおふざけだろう。本気であったとしても、今から行われる会話の前ではおふざけと化す。

「……………うむ。では何故このような事態になったのか、説明してもらえるかの？」

そう言って、タカミチさんに視線を送るが、タカミチさんは戸惑った表情を見せるばかりだ。何が起きてこんなことになったのか、わ

かっついていないのだろう。あの現場を見た際、タカミチさんが疑ったのは敵勢力による襲撃だが、その可能性が僕によって否定されたことで、状況は彼にとっても不透明なものになっていた。

「それは僕から説明します」

よって、何故僕の右手が吹っ飛ぶことになったのか、説明できるのは僕だけなのだ。

「まず、前提条件として、僕は魔法世界で二年、実質四年間、過ごしています。その合間賞金首を仕留めたりして、食い扶持を稼いでいました。そのことはお二人ともよくご存知かと」

暗に元老院の強硬な調査を揶揄し皮肉りつつも、反応をうかがえば、二人ともうなずいていた。

「なら、端的に問いますけど。何の戦闘経験もない子供が、魔法世界に放り出されて……………そんなことできると思いますか？」

「それは……………」

「……………厳しいじゃろっな」

「その通りです、厳しかった。どれだけ頭が良くてもどれだけ強い魔法を使えようと、戦闘経験のない子供ができることなんてたかが知れている。だから僕はわかりやすい力を求めた。簡単かつ並の人間には及びもつかない力を手に入れることを望んだ、いえ、強いられました」

「……………それはなんじゃ？」

「……………簡単に言うなら、体を改造しました、魔法によって」

「……………！」

学園長は純粹に驚きを、タカミチさんは苦味を帯びた悔しそうな表情を見せた。

本当は、石化解呪の手柄を横取りされて、兄を殺すために刻んだ術式だったけど、まさかそんな本音をここで言うわけにはいかない。タカミチさんはたぶん予想していると思うけど、まあだからといって馬鹿正直にそれを言うつもりはない。何事にも建前は重要なのだ。それにすべてがすべて嘘というわけでもなく、実際戦闘経験がなかった僕は、当初それに頼りきりだった。

「……………それは、ずいぶん危険なことをしたの」

身体を魔法によって改造する、なんて真似をしないことは魔法使いの間では、暗黙の了解だ。人体を魔法で改造するというのは、人体実験であり、それは法的にも禁止されている。僕の場合は微妙なラインだろう。少なくとも公的には前例がなく、予備知識も仮定知識も役に立たない、魔法による身体改造は、自分の身をもってしても“人体実験”であることに変わりはないからだ。しかし、誰もその人体実験を自分の身で行うなどとは想定していなかっただろう。善悪云々を問うより以前に、人としての不文律を犯すようなものだ。

しかし、僕はそれをした。

法的には屁理屈を捏ねれば、有罪にできる。弱みにもなりかねない情報を開示したのは、話が進まないというのもあるが、ある程度の強みがあったからでもある。これをもって脅そうとしたら、結局こう言ってやればいい。石化解呪……。この四文字と言うだけで向こうは黙る。そもそも、この身体改造は、石化解呪と因果関係があるのだから、それをもってして僕を追いつめようとすれば、連鎖的に石化解呪のことがバレる。どれだけ、向こうが僕の痛い腹を探り、手にしようと、結局は“背に腹は代えられない”のだ。この事実があるかぎり、どう頑張ったって、兄さんを切り捨てない限り、優位には立てない。そして兄さんを切り捨てるということは、優位に立てない以上の権威失墜があるからどうしようもない。

「まあ、危険なのは確かですが、それは置いておきましょう」

言外に、黙つとけと含ませると、わずかに学園長はうなずいた。その首肯がどれほど信用性を持っているかはわからないが。この裏の綱を渡るような感じが、ドロドロした政治の問題に足をつっ込んでいるのだと、僕を認識させる。まったくもって嫌な闇だ。たまに、自分は何やつてるんだろつか、と諦観じみた倦怠感がこみあげてくるが、僕はそれを無視して話を続けた。

「そういう事情から僕の身体には術式が張り巡らされています。そして、今日、その術式が強制的に破綻しました。その結果があれです」

そう言いつつも、僕は学園長とタカミチさんの表情に目を光らせる。案の定と言うべきか、タカミチさんの表情が露骨にひきつった。

「神楽坂明日菜さん、でしたか？ あの人一体何なんですかね、人の術式勝手に破綻させるなんて」

さらに追い打ちをかけると、なぜかいきなりタカミチさんは、メガネを外し、いかにも、目が疲れました、的な感じを装って、目頭を押さえ顔を隠した。この人、地味に腹芸がうまくなってる……………下策だが。

「ふむ？ 何故アリナ君は、明日菜君が術式を解体したのじゃと決めつけるのかね」

大した動揺もなく、さらりと言つてのける学園長に、僕は、ひそかに息をつく。肩の上に居座る親父も胡散臭げに学園長を見やっていた。伊達に一組織の長としてやってきているというわけではないようだ。さりげなくタカミチさんから注意を離させようとする意図も窺えるあたり、油断ならない。

「何故つて？ まあ確かに神楽坂明日菜さんと接触した際に？ たまたまタイミングよく、術式が自然崩壊した可能性はないです。しかしね、学園長。僕がこうである、と断定する以上、こちらには明確な論拠があるんですよ」

まあ、偶然の産物だけど。僕はソファに架けてあったマントを手にする。さっき兄さんたちがこの部屋に来たとき、神楽坂さんが、僕の貸したマントを置いていったのだ。そして、このマントは僕のこしらえた魔法具である。

そこで、僕はおかしなことに気づいた。予想では、僕はこの魔法具は壊れているものだと思っていた。しかし予想外この魔法具は破壊されてはいなかった。箆めていた魔力はなくなっている。しかし術式は破綻していないのだ。一部僕の完璧だった術式が綻んでこそいるが、動作不良を起こす可能性程度、ネジが少し緩んだ程度だ。

「魔力が、ない？」

この魔法具は常時防御力強化の魔法具で、装着者が魔力を籠めて使用するのではない。この魔法具を作った際に籠めた魔力のみで防御強化しており、魔法具と言うよりか、防御力の高い防具とったほうが正しい認識のものである。そういったことから、この魔法具に最初に籠めた魔力が消失した時点で、このマントは絵に書いた餅と一緒に魔法的効果は望めない。その面、この魔法具は壊れていると言ってもいいが、僕には内部干渉できるアーティファクトがあるのでまったく問題にならない。

問題なのは、内部干渉できる僕ならともかく、言わば閉じている状態の術式の中にある魔力だけをこんなに綺麗にどうやって消失させたというのか、ということだ。

綻んだ術式の端緒から……………いや無理だ、ならばどうやって……………いや、そもそも何故僕の身体に刻まれている術式は破綻した？
こっちの魔法具は破綻していないというのに……………

「ふおお、そういえばアリナ君——」

「アリナの邪魔すんな！！　ちょっと黙ってろ！！」

……………学園長が僕の思考の邪魔をしようと声をあげるが親父がそれを阻止する。それが脳の片隅をよぎるが、すぐに思考の外に置かれる。

僕の身体の術式とこの魔法具との術式の違いは？ 一番はその密度と緻密さだろう、それが術式破綻の原因となるか？ いやだがあり得ないでもない。魔力を消失させる、そんな芸当をどうやって為したのかはわからないが、僕の身体に刻まれている術式はこの魔法具と違い、閉じているわけではない。これは魔力を籠めて使う魔法具の術式タイプと似ており、身体に刻まれている魔法の特質上、外に向かって開いている。

外に向かっている術式から、漏れている、というか意図的に開放している魔力を消失させることで、連鎖的に術式を崩壊し、緻密な術式に齟齬が発生し、肉体に影響が出た……………そんなところか。

しかし、魔力だけをどうやって消した？ 結局はその疑問に立ち返ることになる。

……………いや、待て。魔力が消失？ 無効化？ ………………まさか、だけど、それだとすべて辻褃が合う。

……………神楽坂明日菜の傍には、長の娘がいた。大量の魔力を垂れ流していた、直接見て、それは明らかだ。あの量からして、この極東では、一、二を争うほどのものだろう。大量の魔力を保持している、という噂は関西からの情報だ。噂程度の不確かなものではあった。しかし、だからこそ信憑性があつたのだ。あれだけの魔力量が幼い頃より明らかであつたなら、いくら関西呪術協会のお膝元でも狙う輩はいただろう。そしてそれは予見できることだ、当然隠そう

としただろう。それでも漏れてしまうのが、あの娘の莫大な魔力量なのだ。

しかし、不思議なことに関東からは、そういう情報が出たことはない。隠蔽が周到だったから？ 関西にできないことでも西洋魔法の根拠地の関東にはできる……………そう考えるほど僕は呪術を侮っていない。むしろ退魔を根本の目的とした呪術は西洋魔法よりはるかにそう言った面優れているものと思われる。それなのに、関東にはそれができていた？

単純に情報管理がうまくいかなかったかもしれないが……………聞けば、長の娘と神楽坂明日菜は同室だと言うではないか。大量の魔力の垂れ流しがあっても、気づかれなかったのは、あの少女がいたからではないか。

近くで意識する分には知覚できるが、遠くから眺めたり、意識しない分には、そういった気配を感じ取れないのではないか。僕は魔法的感覚に優れていないからかわからないが、今のところあの強烈な魔力は感じないのが現状。

全部推測にすぎない……………だけど、確かな論拠として、僕の術式が破綻したこと、魔法具のこと、傍証として、この推測。

「ウェスペルティア王家の魔力……………」

ビクリ、と学園長と、タカミチさんが体を震わせる。

もう間違いないだろう……………魔力を操ったわけでもなく、ただそこに在るだけで、魔力を無効化する体質。

すなわち、

「魔力完全無効化能力……………黄昏の姫御子か」

呟かれた僕の言葉はどこか憂鬱そうに僕の耳に届いた。

初夜はかくも過ぎていく（前書き）

えっと、一か月ぶりぐらいですね、更新おくれてごめんなさい！！

すみません、どうにも大学入学してそこに慣れるまで時間がかかってしまい、更新がストップしてしまいました。

まあ、大学にもだいぶ慣れGWに突入したということで更新を再開させてもらいます。

リアルも落ち着いたので週一ぐらいで更新できると。

感想返信も放棄してしまったので、これから返信していきます。申し訳ありません。割と前の感想なので十件程度さかのぼって返信させていただきます。返信できなかった方まことに申し訳ありません

えっとあとすみません、前回のお話、ちょっと僕、もう原作の話とか結構薄れてきていて、まあ、この話原作に添うのは主人公の行動ぐらいだし、それすら主人公の介入であんま参考にできないし、設定はネットで見ればいいかと、原作の方を疎かにしてしまった結果、アスナの無効化能力って………幻想殺的な感じだったけと曖昧なまま突き進んでしまいました。

たぶん、後々直します。この章が終わればひとまず原作前から引きずってきたものもひと段落して余裕が出てくると思いますんで。合わせて誤字訂正、表現訂正もそのときします。申し訳ありません。

まあ、言い訳はこのへんにして本編です！

それじゃどうぞー！

初夜はかくも過ぎていく

「えっと、というわけでお世話になります」

「へっ、世話されてやるぜ……………養われてやるぜ……………飼われてやるぜ!!」

予想外の事態に戸惑う僕と、自棄で挨拶する親父。

「……………よろしくお願いします」

「うん、まあお金をもらった分はきちんと面倒をみよう」

僕はひたすら肩身の狭さに体を縮こませてそこに正座していた。なんだろう、このいたたまれない感じは。主に、なんて言うんでしよう、女の子の部屋特有の甘い匂いみたいなものを通して僕の場合いい感をビンビンに責めたてている。兄さんみたいに、本当にお気楽な子供だったら、大した感じないんだろうけど、僕、兄さんより二つ年上だし、割と精神的にも熟達してるし、何より最近開通したし！何が言いたいかというと、女の子二人と同棲なんて環境は僕にとって居心地が悪い以外の何物でもない、ということだ。中途半端に大人になったことが今になって跳ね返ってくるとは思わなかった、と後悔の念までこみあげてくる、アリナ・スプリングフィールド、

絶賛思春期中である。

っていうか、それもそれだけど、この二人の対応もなんとなく冷たい。こないたいけな子供に対して、真っ先にちらつかせたのだが、お金の話って………シビアすぎる、と思うのはきつと僕だけではないと思う。まあ、マナちゃんは、昔からそんな感じだったからいいけど、こっちの桜咲さんも桜咲さんで、かなり無愛想な挨拶だ。この二人は愛想と言うものをきちんと学んだのか。情操教育の過程で何かが捻じ切れたとしか思えない対応だ。実際捻じ切れた本人だからこそ感じる皮肉なのが悲しいと言えば悲しいが。

「おいおい、てめえら愛想悪いぞ。俺たちはペットだ、もうちつと喜んで歓迎しやがれ！」

「よし、待とう。とりあえずその枠組みから僕を除くことから始めよう」

「お前らのペットはお前らのペット、ペットのペットはお前らのペットだ」

「そんな上下構造作られても僕納得しないからね」

親父はどうにも今朝のことが尾に引いている様子だ。

「まあ、私もこんな可愛げのないペットはいらないね」

そこに苦笑いを浮かべて、場を宥めにかかるマナちゃん。この何とも言えない雰囲気を取りなそうとしていることはわかるけど、言っていることは割とひどい。ペットの価値を可愛さだけで判断したら、親父は完全にいらぬ子になっちゃうじゃないか。

「ひでえ、こんなかわいい子捕まえといて、可愛げのない、だってよアリナ」

「親父、現実から目を逸らすのはやめよう。可愛くないのがどちらかなんて目に見えてるよ」

「いや、可愛くないのは両方だから」

「「本気《マジ》かよ!!??」」

「……………別に見た目はいいけど、二人とも考えていることが見た目と合っていないんだよ、腹黒かったり、口悪かったり」

確かにそう言われれば、うなずくしかない。親父もオコジョとしてはごついけど、何ぶんオコジョだから多少見た目が悪そうでもマス

コッソリな感じで受け入れられる。ファンタジーな、小悪党みたいな風に。僕も割と容姿はいい方だと自覚してるけど、どうにも大人びすぎてる分、マイナスらしい。

「うん、まあそれはどうでもいいとして」

サラッと、どうでもよさげにこっちの逡巡を断ち切るあたり、マナちゃんはシビアだと思う。

「いつまで仏頂面しているつもりだい、刹那？ 君がそんな態度だといつまでたっても話が進まないんだが」

若干呆れ混じりにマナちゃんが嘆息すると、桜咲さんが、悶々とした表情で、膝を折って座っている足を苛立たしげに揺らした。日本で言うところの、貧乏ゆすり、だったか。

「えっと、兄さんが何かやらかしましたか」

彼女の苛立っている原因と直結してしまう兄さんは割とどうしようもない人だと思う。年齢からして仕方ないとは思うのだが、いかにせんこうやって彼女の不満の矢面に立たされる僕の立場と言ったらたまったもんじゃない。

「薄々気づいているかもしれないけど、まあ、君の兄のことだ」

桜咲さんが、こらえきれずに不満をぶちまけようと口を開く寸前、マナちゃんが端的に事実を告げることで割り込む。

そして、牽制の意味をこめてか桜咲さんに厳しい視線を飛ばした。

「それと刹那、アリナはネギ先生の弟だが、その場に立ち会ってもないアリナに落ち度はないんだから、ネギ先生の未熟さへの不満をアリナにぶつけるようなことはするなよ」

「くっ、」

桜咲さんは、その言葉にひとまず爆発寸前だった感情をおさめたが、文字通り不完全燃焼で、鬱屈した感情をもてあましているように、唇の端をかむ。

「しかしっ……………あれは」

僕の予想通りだとするのならば、桜咲さんの憤りは、魔法関係者としては当然の感情だ。一般人への魔法秘匿、魔法バレを忌避するのは、魔法使いたちの共通の意識であったりするからして。

しかし、桜咲さんの負の感情の強さは、そういった集団意識への帰属が促すようなものではないと思う。彼女が凝り固まった正義感の持ち主であるというのなら別だが、彼女の態度からはそういった者特有の粘着質な感情は窺えない。魔法バレという実行的な行為に犯される何かから発露した感情。あるいはそれに準ずる危機感。あくまで印象に過ぎない、という言葉がつくが、義憤のような親身なものを感ずるのだ。そのことを、頭の片隅にとどめつつ、僕は洪る口を開いた。

「えっと、具体的には……………」

そして、それが端緒となったのだろう。ここぞとばかりに、勢い込んで桜咲さんはまくしたてる。

「ネギ先生が、教室に入った始めからですっ！ 常時防御結界を外さず出足から、不自然な印象を持たせ、自己紹介では魔法使いと名乗りかけ……………っ、初日からこの調子なんですよっ、このまま放っておけば、いつか一般人への魔法バレを招いてしまいますっ！」

若干声を抑えてはいたものの、途中から自分で言ってる興奮してきたらしく、その努力も芳しくない。事実こっちに唾がとんできた。これはこれで、と一瞬でもそんな考えがかすめた自分に嫌悪感。ちよっと僕は変態らしい、と、現実逃避気味に自己分析を下している合間も、桜咲さんのボルテージはあがっていく。

桜咲さんの主張は全くもって正しい。兄さんを英雄の息子と言う色眼鏡で見えていない意見は僕も素直にうなずけるというものだ。

しかし、

「あの、そのことを学園長には……………？」

「っ、いえ、それは……………」

僕の冷静な意見は、桜咲さんの出鼻をくじくものだったのだろう。急に強い負の感情が霧散し、戸惑ったような声音で口を濁す。彼女だってわかつているのだろう。もし、学園長に報告したところでどうせ大した処分はくだらないし、兄さんの素行を直すだけの強い喚起を呼び起こす注意もされないことに。兄さんは英雄の息子と言う特別な立場で、集団の中では強い立場を持つ。彼女がただ正義感から怒っているのなら、ここまで取り乱さない。現実として魔法バレスることと彼女の不利益があるから、しかし英雄の息子を特別視する集団意識への帰属から逃れられないから、こうしてやり場のない感情を僕にぶつけようとしているだけなのだ。

しかし、ここでただその現実を持ち出して否定するだけでは、彼女は納得しない。直接それとは関わりは持たないにしても、彼女が憤っている当人の弟というわかりやすい、向けやすい、感情の矛先足る相手がいるのだから。しかも、距離をとれる位置ならまだしも、

否応なしに意識せざるを得ない距離に。

ならば、その感情をうまく逃がすしかない。

……………こうやって人間関係をうまく滑らそうと色々考える自分は嫌いだ。会話一つをとってみても、これだけまどろっこしく考える人間はいない。人間関係はもっと気安く構築すべき、それが健全だと思っから、僕は嫌になってくる。

だけど、人に嫌われるのは、もっと嫌いだから、

「じゃあ、その辺は僕から学園長に言っておきます」

卒なく、桜咲さんと付き合つために、僕はさも当然のようなふりをして嘯いた。

「あ、はい。お願いします」

桜咲さんも僕のあっさりとした態度に拍子抜けしたようだったが、安堵のような光もその目にちらつき、ホッと静かに息をついていた。

……………僕から言ったところで、どうせ兄さんには大した処分は下

るまい。しかし、こうしておくのが最善なのだ。例え処分が下らなくてもいい。重要なのはその姿勢^{ポーズ}。桜咲さんの望む結果が得られずとも、いい。さも申し訳なさそうに、自らの力不足を嘆き、兄さんの態度改善が見られず憤懣やるかたない彼女の心情に同調し、一緒に憤ったふりをしてればいい。そうすれば、少なくとも彼女の行き場のない感情が僕に向かうことはないだろう。

このような小細工、一体何のためになるのか、頭の片隅でぼんやりと浮かび上がってきたが、僕は気づかないふりをして、そんな考えを煙に巻く。

そこに触れてはいけない、そこに触れては………だめだ。そう、兄さんに見れないものを僕は見ている。だから、僕はそれを踏み台にするのだ。兄さんの前では出来のいい弟面をし、その裏ではその無知を嘲笑い、時にはこうして踏み台にする。知らなければ、それはないものと同じで、誰も損をしない。

それでいいのだ。

僕の仮面をどう思ったのだろうか。桜咲さんはとりあえず落ち着きを見せた。

「まあ、僕もフォローしますので」

どちらかと言えば、学園長への報告よりか、こっちの方が僕にとつては本音だったりする。学園長には強《したた》かにもかなりの無茶な要求をしているので、秘匿意識がどうか言ったら、お前がフォローしてやれ、と意趣返しの意味も込め、言われそうだ。しかし彼女の恐れるのが、特定人物への魔法バレだとするなら、僕のフォローで彼女の兄さんへの態度も軟化するだろう、と思われる。彼女も公私の内の、私の感情が強いことからある程度言動がお粗末だったとしても、公のほうには目をつむるはずだった。

しかし、ここで大きな問題がひとつ浮上してくる。

可能性の話だが、ひょっとして、桜咲さんが魔法バレを恐れるのは、兄さんの私に密接にかかわる人間ではなかるうかという懸念。

そうだとするなら、僕のフォローも遠く及ばない。その場合兄さんの根本的な態度の改善が要求されるからだ。

頭の痛い問題だ。今のところ、兄さんの私に関わるであろう人物は、僕が知る限りで二人。

神楽坂明日奈と近衛木ノ香の二人だ。どちらも——少なくともこの日本では——英雄の息子に勝るとも劣らん、やんごとない人間だ。そんな重要性の高い二人に加えて、さらに英雄の息子を含めひとまとめにしているのだから、どこことなく恣意的なものを感じないでもない。しかしあの三人をまとめておくのは、僕が想像する

ような後ろ暗い理由ではなく、単に警備上の問題と言う可能性もあるのだ。いずれにせよ、この件に関しては、僕自身客観視できる自信がないので、僕は結論を出すのを諦めた。

というかぶつちゃけ、どうでもいいのだ。僕の知らないところ、関与しないところで、何らかの思惑があったとしても、僕に不利ささえなければどうでも。だから兄さんが裏の関係者でもない、ただの一般人の子供の世話になると聞いた時も、目を瞑った。第一一般人と言えど、その素性は両者ともにのつぴきならないものだ。その素性があるからこそ、裏では陰謀がとぐるを巻いて淀み深沈している。それらの背後関係に手を出したくなかったし、むしろ関わり合いになることで不利益が生じるために、僕は無関心を貫いた、否、貫きたかった。

しかし、どうやらそれも儘ならないようである。僕は頬をひきつらせながら、苦笑いを浮かべる。

「あの、ちょっと聞きたいんだけど……………」

「？ はい、なんですか？」

僕は内心、外れてくれ、と祈りながらも、慎重に言葉を選んで、探りを入れた。

「あの、たくさん魔力持った女の子。桜咲さん、今朝割と気にして
たみたいだけど、何か知ってるの？ 魔力の制御はされてないみた
いだし、魔法の事は知らないんだろうけど、無知でいるには、あ
まりにも大きすぎる魔力だよな？ それを考えると、正直彼女自身
とその周りに降りかかる危険度としては麻帆良学園という特殊な環
境を考慮したとしてもかなり高いと思うんだけど」

単純な興味の勇み足による質問ではなく、しっかりと自らの考察を
含めた実益的な疑問の投げかけ。ただの子供とは思わせない、その
筋の関係者としての立場から、単純彼女自身の価値以外に麻帆良の
環境までを絡めた疑問は、投げかけられる人間に対して鋭さを持た
せる。しかし、同時にそれ自体は麻帆良を慮る内容なので、歳不相
応な賢さに隔意を抱かせることになるかもしれないが、その天稔が
悪い方に向くことは、ないだろう、と思われる。少なくとも桜咲さ
んに、その種は蒔いていることだし。

探りを入れるには、ほどよい鋭さ。

さあ、どう反応してくるか。

そんなことを計算しながら、桜咲さんを窺っていると、案の定と言
うべきか、桜咲さんは動揺した。

「……………それは、ですね……………」

「刹那、アリナは表の役割としては教員としてここに来ているわけだが、その実、裏としては魔法学校を卒業するに足らない単位を修得するためにこの実地訓練を受けにも来ている。まあ、つまりは他の魔法生徒と同じようにこの麻帆良の警備も担当するわけだ。話せる事情は話すべきじゃないかな。これから共同生活をする人間でもあるわけだし」

抜群のタイミングで入れられたマナちゃんのフォローに、僕は目だけで感謝を伝える。彼女なりに、この生活を円滑なものにしようという配慮なのか、ただ単に情報収集の手助けをしようとしたのかわからないが、にやりと、唇の端だけに見せた笑みのかけらはどこか悪戯っぽく、僕は、これは貸し一だなと内心苦笑いを浮かべた。餡蜜でも奢ろうか、旧交を温める意味合いも込めて。

躊躇いを態度の端々に見せていた桜咲さんは、マナちゃんのフォローで振り切りるようにして口を開いた。

「……………アリナ先生、先生が気にいらっしゃる——お嬢様についてお話しするには、この日本の土着文化にまつわる呪術、それを取り仕切る関西呪術協会、そしてこの地にある関東魔法協会の確執からお話しなくはいけません」

桜咲さんは、語る。

この日本には古来よりこの地に土着する関西呪術協会と、明治期日本に流入してきた西洋魔法の根拠地、関東魔法協会が存在し、侵害された利権をめぐって冷戦状態にあった両組織は、魔法世界の大分裂戦争に刺激され、緊張状態に陥る。また、当時の戦況として関東魔法協会の本拠であるメガロメセンブリア連合は、ヘラス帝国の前に敗れかけていた。危機感を煽られた元老院は、当時影響下にあった関東魔法協会を代表する旧世界魔法組織に、敵対的行動をとる魔法団体の攻略を命じ、旧世界に魔法世界で勃発している戦争の後方拠点を作ろうとする。無論影響下にあった、と言っても大なり小なり程度の差はあったので、各地で起きた争いの規模は異なる。しかし、その中でも前々から明確に敵対的だった者たちは、その要請を口実に戦争を引き起こす例が多く、関東魔法協会などはその例に漏れず、既得利権を主張する目の上のたんこぶだった関西呪術協会をここぞとばかりに攻撃した。不意打ちじみた攻撃に関西呪術協会は後手に回らざるをえず、被害は関東と比べてとても大きなものになった。大戦、とは決して魔法世界で行われた戦争を指すだけではない。その煽りを受けて第二次、第三次的に行われた各地紛争の総称が“大戦”なのだ。あるいは“大戦”はグレートブリッジ奪還作戦のような派手なモノでも、あるいは広域殲滅魔法をやたらめったらぶちまけるようなものではない。旧世界では、魔法は“裏”というぐらいいには秘匿主義の世界で、その戦争のやり口は、ゲリラ、市街戦闘のように血みどろで泥臭い。派手な兵力のぶつけ合いができないということは、特化していくのは必然謀はからいの方で練られる陰謀は陰湿極まりない。吐き気がするぐらい泥沼の衝突を繰り返した両組織の傷は容易に癒えるものではなく、既得利権を奪われたあげく一方的に仕掛けられた上、被害も大きく、敗北の色が濃い関西呪術協会の方は特に深い傷を残した。そんな心理状況下、降って現れたのが、魔法世界の戦争をおさめ、英雄として帰ってきた、青山の家の人、青山詠春。こんな状況だからこそ強い指導者を求めたのだろうが、もともと一つの地に根を張り、さらに大戦で陰謀に磨きをかけ

た老害どもの相手になるところではなかった。長として立場もあまり強くなく、魔法の才能豊かな娘が政争に巻き込まれることを恐れた青山詠春は義理の父親でもある関東魔法協会長、近衛近左衛門の下に娘を預けた。その際に護衛につけられたのが、桜咲刹那であった。しかし、関西呪術協会の長の娘、しかも才能に溢れた娘を事実上の敵地で、そのお膝元ともいえる麻帆良学園に送ったことは、長の単なるわがままで押し通すことができるほど、安易な案件ではなく、当然のごとく老害どもの怒りを買ったが、長はここだけは、と無駄なところで、その強権を駆使し、強硬派（桜咲さんはそう言うが、どちらかといえば保守派だろう）を黙らせた。しかし表面上は沈黙を保つても、裏では保守派も黙っていない。事実いかなる大義名分を背負ってか、わりかし短い頻度で関西から、関東の麻帆良学園に対して刺客がおくられてくる。もちろん、そんなことをしていれば術者が不足するので、召還された鬼だけが牽制目的で特攻することの方が多いようだが。そのせいか、警備の人間はさながら実戦の空気で警備に努めているらしい。

桜咲さんはそんな感じの事をソフトに話してくれた。もちろん歴史のことなんかは僕の知識で、後半の内部事情なんか割と推測も交えているのだが、まあ、そうそう間違ったものでもないだろう。

「アリナ先生も警備を務めることになるのでしょうか……その点気を緩めぬよう、こちらの現状を話させていただきました………
…気を付けてください」

最後にそう締めくくり、桜咲さんは一息つくようにホッと息を吐い

た。

「なるほど……じゃあ、えっと、近衛木乃香さん？　は政争に巻き込まれないよう、魔法自体の存在を教えずにこの地にて平穩に過ごしていると」

「そうなりますね。アリナ先生の兄、ネギ先生はどうやらお嬢様のプライベートに密に関わる方であるようで、またその弟であるアリナ先生にもそこらへんをご留意していただけるようお願いします」

最後にとんでもないジャブが来たが、僕は神妙な顔をしてうなずいた、が現状のまずさに内心冷や汗ものだった。視界の端に映るのは竹刀袋の口から出ている桜咲さんの獲物であろう真剣の刀の柄。妙に冷たい汗が背中を伝った。

いやいや、そんな馬鹿なことがあるか、と思えど、冷たい汗が止まらない。嫌な予感がビンビンに僕を責めたててくる。これは本格的にフォローしないとまずいかもしれない、しかし、それに関わるのは厄介ごとの火種であるう少女たちだ。きなくさすぎる裏を思えば、慎重にならなければ、と思ったあたりで僕はひそかにため息をついた。

慣れぬ土地での新生活に新たな不安の芽。ただでさえ一般人の多い土地での生活に魔法秘匿の意識がささくれだっていたというのに、今朝からみょうちきりんな体質の少女に利き手をぶっ飛ばされるわ、

妖怪と渡り合わなければいけないわ、の不幸の歓迎祭。オンパレード 更にそれに加えて、魔法バレ間近の兄さんの尻拭いまでしなくてはならない。唯一の救いは僕の面倒見てくれる人が旧知のマナちゃんであることくらいか。そう思うとマナちゃんが天使に見えてきた。やばい、末期だ。

しかし、マナちゃんの美しさを感じる心に魔を差すのはやっぱり今日の出来事だ、と思い返す僕の表情に苦味が混じったのを見届けたのか、マナちゃんが首を傾げて話題の転換を図る。

「それで、話は変わるわけだが、今朝はいつたいどうしたんだい？」

……………うん、まあそれはそうだろう。マナちゃんたちからしてみれば、いきなり疾走して目の前から消え去ったのだ。学園長がなんか体調不良だとかなんとか言っただけで言い訳していたが結構それも苦しい。疑問を抱くのも当然と言える。

僕は、アレについて話すかどうか迷った。学園長には、悪戯に吹聴するな、とは言われたが、逆手に取れば、悪戯に吹聴するな、という条件こそ付くものの、話すこと自体は禁じられていない。もし、学園長が

なんとしても、秘匿しておきたい、と思うのなら、そこらへんの口止めは徹底するはずだ。それをしないということは逆に怪しい。

しかし、だ。僕が実際誰かにそのことを話すかと言えば、話すわけ

がない。アレは厄介ごとの種だ、しかも個人単位ではなく、下手すれば世界単位での。そんな大きな火種の発信源になんか僕はなりたくない。僕が話すとすれば、アリアドネーの方か、あるいは世話になった、あっちの組織、どっちかだが、その情報を僕経由で流すのはまずい。それらの要因は僕の世界を乱すものでしかないのだ。

少なくとも当面の間は、僕は平穩無事に過ごしたい。僕にとってはそのための旧世界であり、そのための麻帆良であり、そのための“英雄の息子”“学者騎士”であるのだ。

なるほど、そう考えてみると、世界を實際乱すかどうかは置いていても、僕の世界を乱すことは確實のこの情報にかかっている圧力^{プレッシャー}はとんでもないものだ。この情報を使って何かするにしても“賭け金^{BET}が大きすぎるのだ。

そこまで読み切って僕に口止めを徹底させなかったんだとしたら、あの妖怪かなりの食わせ物だ。まあ、ただでさえ、手首を飛ばす、という不祥事が起こっているのに、それにつけてアリアドネーの公的学者である僕に干渉するのはまずい、という背景があるのかもしれないが。

話は逸れたが、これを使って、賭け^{BET}するかはともかくとしても、私的にこうして話すぐらいは許されるはずではある。この麻帆良と言う環境は元老院の影響こそあるが、なかなか（魔法的な）世間に対しては閉鎖的な環境であるようだし、バレて困るのは麻帆良なのだから、問題ないように思える。

懸念があるとすれば、その情報をマナちゃんや、桜咲さんが握ることで晒される潜在的な危険の事だ。よほどのことがない限りは、大丈夫かもしれないが、マナちゃんに至っては職業柄魔法世界で仕事することもあるだろうし、潜在的危険が引き出されることが、ないとは言い切れない。さらに、それを知ってことで麻帆良と言う環境がどう反応してくるかもわからない。私的に話していい、というのはあくまで僕の尺度での判断であり、学園長はともかく、他がどう反応してくるかわからないのだ。

しかしながら、僕、今、利き手がない状態だ。

より具体的にそれにより発生する不利益を挙げるのなら、一人で生活するには支障をきたす、誰かの介助が必要だということだ。

後々魔法具的な義手を装着する予定だが、それに必要となる素材は学園長に要求しており、それが届くまでは片手のない状態で生活しなくてはならないし、装着してからも、何せ人間の身体の一部だ、慣らすまでにそれなりに時間がかかることと思われる。

つまり、一緒に生活をおくるこの二人の協力は必須。

しかし、情報を話すのは気が引ける。

そんな葛藤に気づいたのか、肩に乗る親父が心配そうな顔をして、こちらに視線を送っていた。しかし、何か言う気配はない。魔法世界時代からその助言にはお世話になっており、こういう判断に困るような場面では、いつもの確なアドバイスをくれ、それに任せてきたというのに、今回に限ってはそれはないようだった。桜咲さんについても沈黙を守っていたし、どうにも調子が狂う。

しかし、このまま、不審げにこちらを見ているマナちゃんや桜咲さんを無視するわけにもいかない。

思考の袋小路に追いつめられた僕は、おもむろに、ないはずの右手にかかっている幻術を解いた。

「なっ!!」

「……………っ!」

マナちゃんと桜咲さんの表情が驚愕に歪む。

手首より先についているはずの右手はそこに存在しておらず、その断面は灰色がかっている。後々義手をつけるときのため、長年研究していたときの知識を生かして、傷の断面の鮮度を保つようにして石化魔法で処理していたのだ。

本来ならあったはずの、そこに当たり前のようであった生の感覚。空気を感ずる、熱を感ずる、冷たさを感ずる、その感覚が喪失した寂寥感。幻術で誤魔化しているときは感じなかったものを僕は眼前で認識して初めて味わった。

「あははは、利き手がね、ちょっと、ぶっ飛んじゃって、ね」

それを無視するように、僕は空々しい笑い声をあげた。

「え、そそそれってどういうことですか!？」

「……………何があった？」

桜咲さんの仰天した声と、マナちゃんの何かを押し殺したような声。その眼差しは鋭く、さながら、仕事をしているときの眼だった。詰問するような態度を見せる二人に僕は黙って笑みを浮かべた。

「別に誰かに襲われたとかそういうことじゃないから、その点は気にしないでいいよ。けど事情については詮索しないで」

浮かべた笑みは安堵をもたらすことはできず、中身のないものにな

ってしまったようだが、僕が、厳しい口調で言ったことで二人とも押し黙った。その脳裏では、何があったのか想像しているのか。そういう意味合いをなくすために、浮かべた笑みだったが、どうにも敵対勢力による襲撃の可能性を払拭しきれなかった感が手ごたえとして残る。

「それは……………どうしても言えないことなのか？」

マナちゃんが険の取れない目つきで、こちらを見てくる。

僕は黙って首を振った。

これ以上何か言葉を重ねても、無駄だろうし、と僕は、仕方なく息を吐いて、諦めた。どっちにしても本当のことを言うべきではない。彼女たちにとっては何の価値もない情報なのだから、それが満たすものが興味だけであるなら僕は口を噤んどくべきだ。

どうにも予想以上にマナちゃんは反応したようだけど、まあ、それはそれで、僕を思ってくれているような気がして嬉しいからいいかと僕は事態を看過した。

「まあ、そういうわけだから、義手ができるまで、後義手に慣れるまでいろいろ迷惑かけちゃうと思うけど、これからどうぞよろしく」

ペコリ、と小さく頭を下げ、話を打ち切りになると、桜咲さんは事態についていけなさそうな顔でとりあえず儀礼的にこちらに合わせ、て頭を下げた。

そうして、マナちゃんのどこか厳しい目、親父の妙な視線を無視しつつ、僕は異郷の地での初夜を終えた。

初夜はかくも過ぎていく（後書き）

親父を空気にしないために前半やりとりさせてみたが、微妙……………

… まあ親父が空気なのもちゃんと理由があります。

あと…………… 最近ハイスクールD×Dの妄想が爆発してる。箸休めのな感じで、ちよつと書いてたりもしちゃってます。まあ、それでこつちが遅れることのないようまだ投稿はしませんが、ゼノヴィアは最高だと思う。

他人との違い（前書き）

本当にごめんなさい。

いきなり更新期間ぶち切りです。

しかもちよつと中途半端なところで切ってしまってます。本当この後のアリス side も書いた上で投稿する予定だったんですけど、それだと一話で許容できる文字数が多くなってしまいそうになっていることと洒落にならないくらい更新が遅れてしまったので一回ここで切って更新させてもらいます。

アリス side からの話については今回は本当に！ 今週の末には更新させてもらいます。

もう半分くらいはできあがってるので。次は文字数も多いです。

言い訳ばっかすみません！ それでは本編をどうぞ

他人との違い

長谷川千雨 side

……………教室がうるさい。

始業前だというのに、このクラスの連中はおしゃべりをやめない。まあ、そんなのはいつものことだが、今日はいつもに増してそのざわめきの声が大きいような気がした。

理由はわかっている。

私だって、普通であれば始業前に騒がしいことなんていつものことだ、と気にすることもなかっただろう。しかし、普通ではない事が起こったときに関してはその限りではない。私はそもそもそこらへんには過敏であるからして、始業の時間が近づくにつれ、私は苛立ちと不安が緋い交ぜになっ たような心情で先生を待っている。

「皆さん！ もうすぐ始業の時間ですから静かにしましょう！」

この2 - Aのクラス委員長雪広あやかが勢いよく立ち上がって、机をたたいた。その頬はほんのり朱く上気しており、所作ひとつひとつからも興奮が隠しきれていない。

……机、叩く音がうつせえ。

「もう、いいんちよ、いい子ぶっちゃって」

「いいんちよだつて、楽しみなんでしょ？ 新しい先生」

小学生としか思えない容姿の鳴滝姉妹が冷やかすように茶々を入れる。

新しい先生。

それだけだったら、別にクラスの連中が騒ごうが、私もいつも通り、普通にスルーしていたはずだ。

しかし、その先生が、少なくとも私にとっては問題だった。

「可愛かったよね、ネギ先生」

雪広の隣で椎名桜が思い出したように言う。

ああ、そうだな、確かに可愛かったな……………！

「うん、小っちゃくて可愛かった」

同意するように佐々木が言った。

ああ、そうだな、小さかったっ！

「でも高畑先生の代わりが、なんたってあんなガキなのよ……………」

神楽坂がどこか苦渋に満ちた声をひねり出した。

ああ、そうだな！

なんで、中学校の教師が！ 私のクラスの担任が！

九歳のガキなんだよ……！！

労働基準法とかぶつちぎりで無視してんだろ！ アメリカだかイギリスだかで飛び級したんだか何だか知らねえけど、向こうで教員免許取ったんならこつちくんなよ！！ 向こうで教員やってるよ！

私は三度襲^{みた}ってきたジレンマに頭を抱えそうになる。

「（いや、おかしくなんかない、平常心だ平常心……………）」

私はある種の精神安定作用を含む言葉を心の中で繰り返しながら、理不尽な現状についていけず、覚える怒りを必死になだめすかす。そうやってどうにか自己完結しようとしている最中も、2 - Aの喧騒はやむことを知らない。

「でもいいじゃん、これから楽しくなりそうだし！ それに、あたし情報によれば今日入ってくるネギ先生の弟もかなりイケメンらしいよ？」

クラスの連中が、その耳よりな情報にテンションを上げていく。興奮しながらも委員長としての義務を忘れなかった雪広でさえ、牛のように鼻息を荒くしてる。クラスの、いや学校のパパラッチ朝倉め、またしてもいらぬ情報を私の耳にお届けしてくれる。

一人なら、まだ頑張つてスルーできたさ。けどな、

兄弟そろつて、同じ学校同じクラスに赴任してくるっていったいどういうことだよ……………？

私は思考を現実^に矯正することを諦め、鬱々と自分の世界に閉じ籠る。

それはある意味いつものことだった。ずっと昔。幼い頃から繰り返してきた行為。

私は世界とズレている。

私が肯定する常識は、世界の常識に否定され、世界が肯定する常識は、私の常識が否定する。

そこまで表現すれば大袈裟なものになるかもしれない。私を取り囲む世界の常識はどことなく、私の持つ常識^{ライン}が緩んでいる感じで、私の常識の尺度でも拡大解釈的にはまだ理解できなくもなかった。

しかし違和感が重なれば、過程、それらは私の中で不自然なものになっていくし、それに私の常識ではどうしても許容できない常識^{ライン}もいくつかあった。

世界樹。そう呼称される大木などはそのおかしなものの筆頭だ。そしてそれらを不思議にも思わない世界はもはや“程度の差”では片づけられない私と世界の齟齬だった。

幼い頃はそれらに抵抗を示したもののだが、私の見解はことごとく大きな波のような大衆の価値観に呑み込まれていく。一時期それら世界の常識に順応しようとした時期が私にもあった。しかし、こうして自らの世界に閉じこもる私が今ここにいることが、何より私の辿ってきた道程を示している。

それでも完全には引きこもれず、ネットでカリスマを発揮していたり、未だ世界の常識に私の常識を宛がおうと努力している私はやはり未だ諦めきれず未練がましく、世界を追いかけているのだろう。それでも、私は私も世界もどちらも覆すことができず、今のよう中途半端な立ち位置でもがいているわけだが。

キンコーンカーンコーン。

始業のチャイムが鳴った。

いくら騒がしい2・Aと言えど、机に突っ伏していたら、さすがに目立つ。私は現実逃避から渋々立ち直って前を向いた。普通チャイムが鳴ったら、席に座って静かになるのが、普通のHRの光景だと

思うのだが、このクラスは違う。何より、子供先生1・2が来ることが、もともと騒がしかった喧騒によりいつそう拍車をかけている。私はその声の群れを言葉にして受け取らぬよう、雑音として処理する。何かを聞き取ればどうせ、鬱々と悩む無限ループだ。意識を向けない方精神衛生的にもいい。これもまた私が身につけたある意味悲しい処世術だった。

教室の引き戸が音を立てて開かれ、おはよーと、入ってきた子供先生に挨拶の声が向けられる。その挨拶の声の裏には、隠しきれぬ興奮を孕んでいる。その興奮はこの後入ってくるであろう子供先生2に向けられる期待からくるものなのだろう。

私は改めて新たに担任となった子供先生1を注視する。

赤毛に真面目そうな面構えをした少年。かけている眼鏡などはその生真面目な印象をより一層強く見せる……。のだが、やはりそこは何と言っても子供だ。まだ幼くあどけない顔立ちをした少年にとつて、その生真面目な印象はどこか背伸びをしたような子供っぽい印象へと評価を落とし、最初紹介されたときのクラスメイトの反応と同じように、かわいい、という感想しか思い浮かばない。

鼻根目から見てもせいぜい利発そうな子供という結論しか出せないこんなガキが先生をやるなんて……。とあたしにはこの現実が到底呑み込めそうになかった。

「き、起立——」

日直の宮崎が遠慮がちながらに遅れて号令をかけ、私もその流れに従った。

「礼い——」

「「「「「「「「「「おはようございます」「「「「「「「「「

「お……おはようございます」

「着席——」

子供先生1が戸惑った様子ながらも挨拶を返し、皆が着席する。

さすがに興奮状態のこんなクラスでも朝の号令だけはちゃんとやる。まあ、日直が宮崎だったということもあるだろう。っていうかあそこで小さめ宮崎の号令に従わず、子供先生2はあ？ とか言おうものなら宮崎が泣く。そこらへんはちゃんと空気の読めるクラスである。

「えっと、皆さんおはようございます。朝のHRを始める前に、紹

介しておきたい人がいます」

子供先生1の声に俄かに教室が低いざわめきを下火にボルテージを上げていく。さながら見えない熱気が立ち上っているようだ。まあ、こいつらとしたらネタになることだったらなんでもいいんだろ。お祭り好きの奴らだから、行き過ぎることはあるが悪気はない。その度の越し方が私にはどうしても許容できずついていけないんだがな、と私は傍観者じみた視点から、その模様を横目に頬杖をついていた。私は関係ない、と言わんばかりに。

このクラスの連中は総じてテンションが高いが、きちんとそいつらに歯止めをかける落ち着いた面子もいるのだ。いざとなったらそいつらが止めるだろ。だから私としては、もうどうなってもいいから早く終わってほしい。精神的な意味で。切実に。長丁場になると一日の充電（引きこもり）期間が必要だから。別に私みたいな地味な奴一日欠席したって何の差しさわりもないだろうが、極力普通に生活をおくりたい私からしてみれば、欠席することまで予見する波風立つ生活は好ましくないのだ。

傍目興味なさそうにしてるだけだが、これも、なるべく目の前の事実を意識に入れないようにする、自衛行為なのだ。

子供先生ダブルという事態においては紙ツペラに近いけどな！

「昨日は体調不良で来られませんでしたけど、このクラスの副担任

になる、僕の弟を紹介します。アリナ！！入ってきて！！」

クラスの空気が緊張する。ごくりと誰かが唾を呑みこむ音まで聞こえて、と錯覚したあたり、私自身、ちよつと緊張しているんだろう。主に私の今後の生活を占うことであるのだから。

スタ、とわずかに上履きが床を擦る音が聞こえて、そいつは、教室に入ってきた。

そのまま、ぶれることなく歩き、子供先生Ⅰが立つ教卓の横に立つと、若干挙動不審に視線をふらつかせて、軽く頭を下げた。

「え、あ、そその！ え、英語で教師で副担任になります、あ、アリナ・スプリングフィールドです！！ は、初めまして、よろしく！！」

かなりガツチガチに緊張した自己紹介にようやく教室を支配していた沈黙が解け、

「~~~~~か、かわいい~~~~~」

「~~~~~か、かつこいい~~~~~」

子供先生1の時と違い、揃わぬ音頭でそれぞれの感想が二つに分かれた。

さらにそれを機に殺到する質問。

「ねえ、ホントに九歳!？」

「ネギ君と髪の色違うけど、ホントに双子なの!？」

「はい、はい、彼女はいますかあ!？」

怒涛のごとく押し寄せてくる質問に当の子供先生2は目を白黒させてあわあわ、と意味のない言葉を口から発する。

私はそんな様子を見て息をついた。

子供先生2がこの教室に入ってきて、挨拶し終えるまで、この教室は確かに沈黙に支配されていた。それは、決して期待に胸ふくらませ、とかそういうことではなく、本当の意味でクラスの連中は、一瞬呆気にとられるようにその口を閉じたのだ。

私も傍観者ながらその理由はわかる。

子供先生1とは質の違う、テレビに出てもいいようなトップクラスを走るイケメンだったからだ。

少し癖のある金色の艶のある髪。高い鼻梁にほどよくふつくらと白い肌に朱を引く唇。まだ少しあどけない幼さを残すように中性的な容姿をしているが、全体的な顔立ちとしては凛々しく、切れ長につりあがった瞳にかかる前髪から見え隠れするオッドアイは神秘的なまでに光を放っている。

もう二、三年もすれば間違いなく、理想的な、絵に描いたような王子様のようになること間違いなしだ。

斜に構え、他人事のようにその容姿に見入っていた私でさえ、一瞬目を奪われたぐらいの容姿なのだ。興味を前面に押し出して、子供先生2に食らいついていたクラスメイト達の衝撃は推して図るべしだ。

しかし、完成された容姿を思い浮かべさせる子供先生2が拙い自己紹介をしてようやく、彼女らもその反応を態度に示し始めた。

本来、かつこいい、と満場一致で評価してもよさそうな子供先生2をかわい、と評した奴らがいたのはそのたどたどしい自己紹介が

原因だろう。王子様っぽい美形の子供先生2が如才なく自己紹介をするのならともかく、たどたどしく自己紹介したことで、年相応の子供であることを思い出させたのだろう。そのギャップに愛嬌にも似たものを感じ取った奴らがかわいいと子供先生2を評したのだ。

私には、どうにもその様子が情けなく見えただが………
…それは少し偏見じみた、穿った意見だろうか？

そんなことを考えている間も、子供先生2への訊問は続いている。

それを遠くに、何気なく見ていたら、子供先生2が何かから庇うように右手を喧騒の外に出した。

最初は、怪我でもしてんのか、とぼんやりとした考えが過ぎつつあったのだが、それをなんとはなしに見ているうちに、私は瞬きを繰り返すことになった。

どうにも、子供先生2が庇って出している右手が霞んでいるのだ。

昨日夜更かししてたから、それで目が霞んでるのか？ と何回か目をこすってみたんだが、その霞は取れない。別に霞と言っても大したものではなく、ただ輪郭がぼやけているとか、そういう感じなのだ。どうにもはっきりしない、微細な違和感だ。

私は何回か、目をこすって霞が取れないのかわかると、目をしばしばさせて、再び息をついた。

「（やっべえ、パソコンやりすぎたかなあ。伊達じゃなくて本物の眼鏡かけることになるかも……………少しは自重すっかなあ）」

このときの私はただの視力の問題だと特に何を思っわけでもなかった。

しかし、それが後に間違っていたことを私は知る。

他人との違い（後書き）

軽くちうちゃんの心情に触れました。本当に軽くですけど。

後々、この話と次の話は統合するかもです。

さて、アリス side 早くかきあげよう

前途多難（前書き）

予定通り週末更新！！

文字数とか今まで最大じゃないかと思うくらい長い……………っていうか幻術の描写のくだりがくどかったからなあ？

まあ、色々あるけど本編ですね。

2 - Aの雰囲気はお祭り好きと言う解釈でできるだけ再現したつもりです。そういった面アリナの心理描写とは対照的かもですね。

ここからいよいよシリアスってきます！

それでは本編どうぞ！！

前途多難

アリナ side

僕は教室の前で、今か今かとそのときを待っている。期待と不安が半分半分、なんてよく言うが、今になってみると不安しかない。最初、マナちゃんや桜咲さんと登校しているときなんかは普通に、これから始まる新生活に半分くらいはまだ期待が残っていたのだ。

しかし、だ。目的地が近づくにつれ、徐々に僕は泥沼の思考にはまり始め、悪い方向へと気分は傾いていった。あまり意識したくない事実を目を逸らしていた節があるが、そもそも僕が担当する生徒のほとんどは、いわゆる“裏”と関わりを持たない一般人なのである。その生徒を監督する立場に僕が立つ、その地位は僕にとって荷が重いのではないか、と僕は思い始めた。

一般人の生徒を、一般の教師として監督するということは、それすなわち僕自身も一般人として教師という職務に励まなければいけないということだ。僕の主目的は魔法の研究であり、それは学園長も知っているが、その主目的と教職は分離して当然のもので、間違っても主目的の延長線上に教師としての仕事があつてはいけない。魔法の研究はあくまで僕の個人的あるいは一魔法使いとしての目的であつて、この麻帆良学園という教育機関および関東魔法協会が、機能的に僕に求めている役割はあくまで“教師”でしかないのだ。

組織からあてられた役割に従事することをしなければ、できなければ、それは一社会人として失格だ。もちろん、僕には様々な権力が僕を守る盾としてまわりついているから、普通の一教師としての役割が十分に果たせなくなったとしても、僕自身どうこうなるわけでもないと思う。

だけど、初めから、できないことと決めつけ、権力でどうにかなるなどという考えは、いかに政治事情とか英雄の息子であるとか大きなものが絡む身であったとしても、別だと思うのだ。何より、一度引き受けたことは責任を持ってやり通す、そうすることが、人間としての当たり前であり、またシビアナ言い方をするのなら、ここで魔法を研究するための代価的行為になりうるのだ、と僕は考えた。

しかし、そうなってくると僕の肩にかかった重荷は相当なものだと改めて自覚する。

桜咲さんには、ネギ兄さんが、魔法を知らない一般人とあまり関わりがなかったから、魔法秘匿の意識が薄いのでは、と偉そうな分析を述べたが、よくよく考えたら、僕だって、完全に魔法を知らない人間と関わるのは初めての事なのだ。無論、魔法を“使えない”人とは交流はたくさんあったが、“知らない”人とは一度もない。魔法世界は魔法を前提としている世界なのだからそれも当然と言える。

魔法世界は魔法を常識の土台に置いている。だからひけらかす魔法の実力は、そのままその人間の価値、評価につながるのだ。そういった面が良いのか悪いのかは置いておいても、僕には歳は幼いが圧倒的な知識と実力があり、向こうでは、その魔法を使役する限り高い評価を得られ続けた。ある意味対人関係におけるアドバンテージが常に僕にはついてまわったのだ。そのことに対して、僕は、魔法の実力だけじゃない、本当の僕を見てほしい、とかそんなよく物語にありそうなことを思うわけでもなく、ただただ当たり前のこととしてそれを受け止めていた。ある意味そうだった評価があったからこそ、僕は臆するわけでもなく、対人関係においては不安を差し挟むことなどなかった。むしろ当初人間不信気味になっていた僕からしてみれば、尊敬、という形で勝手に周りが距離をとってくれていたので、必要以上に距離を縮める必要がなく、距離を縮めるにせよ、その速さはゆっくりとしたものであったので、余計な心配などはなかった。向こうの友人には、警戒し、威嚇する獣のような距離の取り方、だと言われた。差し出された餌を片肢でつつについては此方を窺い、距離を取り、近づいては遠ざかり、拳句餌を取ったと思ったらそのまま茂みの方まで離れて食うような奴だ、と。羨けるの苦労する類の獣だ、と言われた。失礼な奴である。

しかし、なんにせよ、これから僕が築く関係において、そんなアドバンテージなどは一切ないのである。

僕が持つ力を振りかざすこともできないから、相手もその力を把握することができない。相手からしてみれば、僕はただの子供に成り果てるのだ。まるで丸裸に剥かれたような気分だった。しかし、それでも教師という職務から逃れるわけでもなしに、僕はここに立っている。

それだけであつたなら、まだ楽であつただろう。これもまた新生活における通過儀礼のようなものだと、割り切ることもできたかもしれない。

しかし、と僕は視線を右手に落とす。

そこには変わらぬ姿である右手。日に眺めてみても、手の甲手の平変わりばんこにひっくり返してみても何の違和感もない右手である。そう、表面的には。

だがその実は、高密度の術式で編まれた幻術であるのだ。触ればきちんと触感はあるし、指も自然と動くようになっている。

しかし、所詮幻術は幻術に過ぎない。

いかに世界を上手く騙せようと、自分を騙すことだけはできず、だからこそ、その実体はなく、それは幻術であるのだ。

幻術とは、そもそも相手に事象を錯覚させたり、フエイント虚を紛れ込ませたりする、いわゆる魔法の中でも詐術に近い技術だ、と思われている。事実幻術を主として使っていない人間の多くが使える幻術はせいぜいその程度のものであるだろうし、多くの人間がそうやって使つて

いるのだから、幻術はそういうものだと思われがちだ。

しかし、幻術とは本来であれば、そのような矮小な使用方法に収束しない。

むしろ、幻術は多く種類を持つ魔法学の中でももっとも優れたものであると言えよう……………そう主張すれば、多くの魔法使いがそんなことはないと反論してくるだろうが、その反応こそが幻術の本懐であるのだ、と僕は面白がっていた。何故なら幻術の真価は、“何か”を騙すことにあり、幻術の深きを知るにはまず、幻術は大したものではない、という大衆の幻術の価値観に騙されていることを見抜かなければいけないからだ。全くもって機知の富んだ学問である。幻術を知るためにまずは幻術自身がかけた“矮小な価値”という仮面という名の幻術を解かなければならない。魔法使いたちとの交流の中で自然と培われた知識をひっくり返さなければいけないのだ。幻術を研究する少数の学者の間では、幻術の真価に気づけるかどうか、幻術を学ぶ者への登竜門であり、幻術という学問がかけた最大の幻術^{トリック}なのである、といわれているのは、ある筋では有名な話だ。

皆が、そこを通って、その境地にまでやってきたのだから。

そして、幻術の最初の関門を通り抜けた者たちは総じて、その幻術の使用方法の幅広さに驚く。いや、気づくと言った方が正確か。幻術の根本定理自体は極めて簡単なのだ。

つまりは“何か”を騙すこと。

幻術の真価に気づく前も後も、それだけは変わらない真理だ。しかし幻術への過大評価を前提として視点を変えてみれば、その真理はまた別の意味合いを持つてくる。

幻術は現実を作り出すのだ。

幻術において、騙す、と言うのは、所詮は巨視的な見方に過ぎないのだ。むしろ微小的に見れば、騙されるということは、イコールで対象に対しての真実、現実であることを示しているのだ。幻術を解けば、それは、騙されていた、という事実認識に変わるだろう。しかしそれすらも巨視的。もっと焦点を絞り、幻術の効果時間内だけに絞れば、幻術がかけられた現在とその認識の関係はその関係においては止揚的な現実を作り出している、という結論を出せるのだ。

ひどく限定的ではあるが、その限定下においては間違いのない真実。

ここから、幻術という学問は拓けていく。

そこから広がる世界は、枝分かれしていくが、まっすぐそれらの結論から進めるのなら、そこにある過程は幻術における現実の疑似創

造の適用範囲の拡大だ。現実の疑似創造などと難しい言葉を使うからわかりづらくなるかもしれないが、要は幻術の対象範囲の拡大である。対象者を一人から二人へ、意味合いとしては変わらず、見識のない魔法使いであれば一笑に付すかもしれない。しかし幻術とはそういった表裏一体の狭間のなかにあるのだ。現実の疑似創造、この言葉を使うだけ変わってくる解釈がある。

幻術は世界を変えることすら可能なのだ。

たとえば。

幻術である一つの物を持ち上げたとする。幻術を解けば持ち上がったではない事実が残る。しかし、現在・未来の場における観測者全員、つまり、全てを対象にその幻術をかければどうなるか。答えは明快だ。観測者が居なければその現実には現実足りえない。逆に言えば、観測者が観測すれば、それらは現実となりえる。巨視的な視野から、後に残る事実をなくしてしまえば、疑似的にあれど、現実を作りえるのだ。

そしてこの手に形作っている幻術も同様。

この手が何かを持ち上げれば、実際持ち上げていなくとも、持ち上げたことになる。実寸的な持ち上げたという行為、その影響すらも伴い、この幻術は見るものすべてを対象に作用するように術式が組み込まれている。今、ここにあるのは右手があるという現実なのだ。

しかし、やっぱりそれでも問題はあるのだ。

最初にもいった、幻術はそれでも所詮は幻術で、作られる現実はやはり疑似的なものでしかない。幻術の決定的な弱点と言うのは、幻術というのは、どこまで極めても行使した術者だけは騙せないのだ。幻術という魔法に術者という媒体が介在する以上それは現実とはない。術者という観測者が存在する以上は、幻術は現実として完結できないのだ。

これが幻術の限界であり、もどかしいところでもある。

一步。あと一步進めれば、疑似的にはなしに現実を創造する魔法が完成するかもしれないのだ。

その一步に狂い、研究狂いと称された魔法使いを知っているだけに、僕はその一步の先にあるのが壁でも闇でもない果てであること学んでいるが。

結論。

幻術の本質である疑似的な現実の創造は、本人には決して作用しない魔法の類である。

そして色々錯綜したが、そこが目下最大の問題なのである。

この幻術の手が例えば名簿を持ち上げられたとしよう。周りにはその効力の通り持ち上げられているように見えるし、横から持ち上げられた名簿を覗き見ることもできる。しかし、術者である自分にはそうは見えないのだ。幻術の手が持ち上げた物が、持ち上げられているように見えない。

わかりやすい例をあげれば、稚拙な幻術にかかり、一人右往左往している人間を、不審そうに見る周りの人間という状況に近いものがある。そういったものは初級魔法の戦闘でもよく見る光景だが、問題なのは、惑わされている人数が逆転しているところにあるのだ。

多くの人間にとって現実であるのだから、幻術に影響のない少数の現実はそのらに否定される。つまり、何が言いたいのかと言うと、これから僕は、義手が用意できるまでの数日とはいえ幻術をかけた多くの人間に合わせて行動しなければならぬのだ。

右手を使わなければいいだけの話なのだが、右手が自分にとっては“ない”現実が変わりなく、相手にとっては右手が“ある”現実に変わりはない。右手が冷たい物に触れれば、熱い物に触れれば、それなりの反応を示さなければならぬのだ。まあそこらへん認識障害魔法と言う保険もあるし、心配はしていないが。

しかし、これから一般人の前で振る舞うことが増え、魔法秘匿の意識という重石を乗せられていたというのに、さらにそんな一般人の前で平然と“魔法”を使わなければならないなどという状況はなおさらに、僕の不安を浮き立たせていた。

さらには僕が担当するクラスにはあの神楽坂明日菜がいるのだ。不安になるなと言う方がおかしい。あの子は僕の存在すらも揺らがす天敵だ。一応対策はしてあるので、即オダブツすることはないが、不安や恐怖心はやはり拭えるものではない。

……………誰だつて拳銃を持った人間を目の前にしたら怖い。

……………本当なら義手ができるまでは、授業など休みたかった。

しかし、義手の材料を要求する上でついた学園長との交渉の席で、今回の一件の完全秘匿を条件に出して要求を呑ませたので、僕にはその方向で鋭意努力し、誠意を見せる選択肢しかない。

今回の一件が露見すると、不利益が生じるのは、明らかに加害者的な立場にある学園側だ。どうにかしてこの一件を揉み消したい、しかし、その被害者たる僕は関東魔法協会の長の権力では及びもつかない立場の人間。そこに、僕から、そんな申し出があったのだ。要求自体は無茶であるが、それを呑むことによって、完全秘匿と言う条件自体が、僕の利益不利益にまで関わってくるのだから、この取

引は確実に順守されるという保証付きだ。学園側はそれを呑み、僕はこうして事態の不自然さをなくすために、こうしてここに立っている。

あのときは単純に利益しか考えていなかったから、授業を欠席せず教師として働き始めることはこちらの誠意という取引のチップに過ぎなかったわけだが。

今になっては少し後悔している。

不安しかない。

できることなら、今すぐ逃げ出したいとすら思った。

ふう、と僕は息を吐いた。

そういう事態になった時の精神的支柱であった親父もここにはいない。そういう事態、とは主に命の危機のことを差すのだが、心理的にはほぼ同じだろう。向こうで裸足で逃げ出したいと思ったのは、敵に自らの力が通用せず、命の（精神的な）危機を感じた時だ。そして僕は今、自らを守る魔法ちからの力を物理的ではないにしろ奪われ、精神的な責め苦を負っている。

他人が聞けば大袈裟に思うかもしれないけど、自分を守る魔法^{たて}がない今の僕はただの子供だ。

力こそが僕のすべてだとまでは言わないが、冷静で大人顔負けの僕を、ただの子供から押し上げ、仕立て上げ、肯定しているのは、紛れもない僕の“力”なのだ。力が、それに付随する矜持^{きんち}がなければ、僕は僕でいられない。力のない僕がそのような言動をしたところで、生意気なガキだと思われるのがせいぜい、それがわかっていいるから、僕は冷静でいられないのだ。

緊張から身体をこわばらせる。不安から唾を嚥下する。恐怖から汗を額に滲ませる。

ここに至って思い浮かんでくるのは、後ろ向きな考えばかりだった。それを理性が情けないと断ずるが、同時に構わない、との判断している。事が流れれば、その経緯に何があるうと関係ない、移りゆく感情など致命的なミスさえしなれば、何の関係もない、と。だからこそというべきか、僕の感情のベクトルは変わるところか、勢いをつけて落ちていく。理性的な思考が構わないという判断を下しているだけに、感情が強制される理由がないからだ。そちらの面での緊張がないだけに余計に歯止めがきかない、ある意味皮肉なことであつた。

「——を紹介します！ アリナ！！ 入ってきてー！」

教室の外からかけられた声に、思わず身をすくめる。

その声に突き動かされるように、僕は教室の扉をくぐった。何の心構えもできていなかった。兄さんが待つ教壇へと歩く。その視界の端に“たくさん”の一般人の女子の姿が映った。頭がくらくらする。緊張が際限なく膨らみ、僕の身体を前後不覚のような、不安定な状態へと陥れた。僕の思考は霞みがかったように働かなくなり、こういったときに用意された問題解決ルーチンに沿って思考を巡らせても、一般の生活とは程遠い環境で整えられた経験則になど何の意味もない。

せいぜい冷静に状況を見据えろ、ぐらいのことを考えただけだった。

その先のロジックが組み立てられない。僕の思考は浅いところをぐるぐると回るだけだ。カラカラと音を立てて空しく回る歯車のような悲壮さが胸を占めている。

そんな状況下、僕はフラフラと視線を彷徨わせ、ふとマナちゃんと視線を結んだ。マナちゃんはどことなく、僕の事を戸惑った様子で見ている。

意外、なのだろう。僕の力を知っている彼女からしてみれば、僕はあの威風堂々とした仮面の学者騎士以外の何物でもないのだから。自嘲するように僕は思った。

見知った顔から見知った世界を垣間見たおかげで、少しだけ冷静さを取り戻せた。しかしそこから広がる視野に僕はやはり冷静を保つことができない。

人。人。人。人。人。人。人。人。人。人。
人。人。人。人。人。人。人。人。人。人。
人。人。人。人。人。人。人。人。

驚いたような、戸惑ったような、熱に浮かされたような、そんな視線の三十余りが束になって僕に直にぶつけられている。

僕は圧倒された。

そしてそこで僕はようやく、僕に求められているところに思い至り、早く視線を逸らしたい、という思いもあって思いっきり頭を下げて言った。

「え、あ、その！ え、英語で教師で副担任になります、あ、アリナ・スプリングフィールドです！！ は、初めまして、よろしく！！」

前もって考えておいた自己紹介も、早くしなければ、という義務感

に駆られ、動揺からかおぼろげにしか思い出せず、文法的にもおかしなことになってしまった。

こんな情けない自己紹介、一体どう思われるのか、僕が顔を上げると、そこには何故か起爆寸前の爆弾のような切迫感をまとい目がキラキラさせた少女たちが。

「「「「「かわいー」」」」」

「「「「「か、かつこいい」」」」」

叫んだ。

重なり合った二つの声は、ハモるように揃って合唱した。

僕が戸惑いを覚えるのも束の間。

「ねえ、ホントに九歳!？」

「ネギ君と髪の色違うけど、ホントに双子なの!？」

「はい、はい、彼女はいますかあ!？」

押し寄せる言葉、極彩色の感情の数々は受け取ることができずに浮かんでは消え、受理し損ねた意思に僕はただただ辟易する。しかも、それらの感情のベクトルが好意的なものであったことも、僕がそれらを肯定できなかった一因だろう。

僕はこんな距離を知らない。

隔意も遠慮もなく、初対面でこんなにも、僕の線の内側に、決りこむようにして、踏み込んでくる存在を僕は正しく認知できなかった。

だって。

いつだってそうだった。

僕と接する誰しも彼しもが、ある程度の距離をもって接していた。ウェールズの村の時だって、歳の差という距離があったし、学校や魔法世界でのことなんて言わずもがなだ。それが僕にとっての当たり前であり、今まで、そのことを意識もしなかった。

だからこそ事ここに至って、受けた衝撃は言い知れない。

興味という対等の位置をもって、多くの人が攻めたててくることもそうだが、何よりこれが一般人の、普通の感性であることに僕は圧倒された。そして同時に彼女たちの態度に、底知れぬ異物を突っ込まれたような排斥的な衝動が湧いてきた。

その事実が僕にとってはショックだったのだ。

認識障害の結界の影響からでは、と僕は疑った。その疑念に冷静な、理性的なおいをかき取り、光明のようなものを感じたが、さらに冷静な僕が指摘する。例え認識障害の結界の影響だったとしても本質的な部分を変えることまではしない。せいぜい影響があるとすればネジが緩む、程度の問題であって、彼女たちが異常と言う証明にはならない。むしろ彼女たちの態度は結界の影響下にあって、感情が発露しやすくなっただけの、至って純粋なモノである、と。

それは、僕が異物であることの証明になる残酷な現実を示していた。それは、僕が異物であることの証明になる残酷な現実を示していた。衝撃から立ち直れず、フラフラする思念に諦観じみた悟りがひらけた。

嗚呼、これが泥にまみれた僕の視界か、と。

汚れた僕は目を刺すほどの眩しさに瞼を狭め、その光を不快に覚え

ただ。その光は僕にしてみれば苛立たしいぐらい清純なもので、しかしそれが俗に言う世間一般の“ふつう”なのだ。

その“ふつう”から離れてしまった自身に哀れさを身に染みて感じた。感じてしまった。そして残り滓として漂ったのは倦怠感のこもる諦観と。

どす黒い思考。

お前たちは何故そうも普通でいられるのか。何故お前たちはそんなにも普通の生活をしているのか。お前たちは過去に何かあったか。お前たちが過去安穏と暮らしていた年頃、僕は血滲ませて歯くいしばって、生きていたのに、どうしてお前たちは。どうしてお前たちは。

そんなにくだらない人生を生きているんだ。

瞬間、僕の思考を這いずりまわった黒の感情に僕は頬をひきつらせた。

心を落ち着けるには、息遣いを早める必要があった。

……………いけない。自らに非がないとき、僕は時たま八つ当たりじ

みた感情を発露させてしまつ。それは人間として正しい逃避行動なのだろう。理性もそうした精神的負担を逃がさなければ生きていけないから肯定している。

でも、僕はダメなのだ。

僕はそんなこと思っちゃいけない。

表面に出す云々の問題ではなく、そんなこと自体絶対に思っちゃいけないことなのだ。

自らを縛る鎖のような戒めをきつく縛り直すと、少しだけ今まで取り乱していた心が落ち着きを取り戻した。そしてハツとなる。目の前には僕の何かしらの反応を求めて身を乗り出してくる生徒の数々。僕はとりあえず口を開くが、何を答えたらいいのか迷って、意味のない声がもれた。

そんな僕の様子に、彼女たちは、かわいい〜、とかしきりに声にしながらますます迫ってくる。

「み、みなさん、落ち着いてください!」

兄さんがその流れを止めようと必死に背伸びしながら、声を張り上

げてくれている。今だけはすつごく感謝したい。しかしそれでも、少女たちは、別にいいじゃん、とか言いながらにじり寄ってくる。

「ち、ちかつ」

右手を庇って、騒ぎの外の方に出した。それはほぼ無意識の行動で、僕の潜在的な危機管理が働いた結果だろう。しかし、その危機管理には迅速な逃避行動というマニュアルしかない。熱に触れたら、反射的にのけぞる行動と一緒に理性が介在していない。何が言いたいかと言えばこんなあからさまに右手を庇ったら目立ってしまう！

しかし、ようやく理性が働きはじめたのか、金髪の一人の女子生徒がハッと正気を取り戻した。

「い、いけませんわ。皆さん！ アリナ先生に迷惑をかけてはいけません！ さあ、席に戻ってください！！」

鶴の一声、とでも言うべきだろうか。兄さんの声でも動じなかった少女たちが、その金髪の女子生徒の声で、不満を漏らしながらも元の席に戻っていく。彼女たちの声を拾う限り、どうやらこの女子生徒はこのクラスでも委員長という責任ある立場についているらしい。

まあ、委員長に劣る担任教師ってどうだろ、とか思わなくもないけど、そこらへん、新任だし、教育実習生だし、子供だし、で仕方が

ないと言えば仕方ないだろう。

………ちなみにその委員長、僕に迫ってきた女子生徒の中で鼻息を荒くして僕ににじり寄ってきた。獲物を見るような目です、はい。彼奴はアブない人だと思います。たぶん、性癖的に歪んでいる方だと思います。

僕が背筋を走り抜ける寒気に怯えていると、トリガーハッピーな髪の子が生徒が手を挙げて立ち上がった。

「はいはい！ それじゃ、私が代表して質問します！」

「あ、それはありがたい……………」

「お、先生自らのご許可ももらったことだし、じゃあ質問するよ！」

思わず本音を漏らすとその少女は自らのお株発揮とばかりに得意げに笑った。

「あ。あたしは新聞部の朝倉和美ね。よろしく！」

結構フレンドリーな人のようだ。きっと陽気な人柄なんだろう。頭

もパイナップルを模しているようだし。

「じゃあ、まず最初に……………」

疑問を切り出そうとしたところでふと、朝倉さんは黙りこみ、ポンと手の平を叩き、

「彼女はいますか!？」

「うえ!？ え、ちょ……………」

あまりに脈絡のない唐突な質問に予防線を張り、予想していた質問の答えは、全く意味のない物になり、予想外の事態に舌が回らなくなる。

「ちょ、ちょっと朝倉さん!？ いきなりすぎませんか!？」

「いやあ、あたしなりに空気読んだっていうか……………っていうかいいinchよも常識人ぶってるけど、質問自体は否定してないよね」

「なっ……………!」

「……………これだからシヨタコンは」

発生源不明のボソツとつぶやかれた言葉に雪広さんは即座に振り返り、にっこりと怖い笑みで浮かべた。

「何か言いました？ 親父趣味のアスナさん？」

「なっ、な何も言ってますんことよ、変態シヨタコンのいんちよさん？」

「……………っ」

「……………っ」

「ふ、ふふっ、お猿さんの言語は私には理解できないようで——
「シヨタコン」親父好きなアスナさんには言われたくありませんわ
！！」

「な、なにがっ！ こっちこそシヨタコンには言われたくないわ！
！」

「証拠のない言いがかりはおやめなさい！」

「だったらそっちこそ言いがかりつけるんじゃないわよ！」

「あなたは事実として高畑先生のことを――」

「ギャーーーー、何度言えば気が済むの！ マジで殺すわよ……！」

突如始まった聞くに堪えない性癖の罵りあいから掴み合いの喧嘩勃発までの一連のやり取りを僕は呆然とした状態で見届けた。女子中学校とか聞いてたからこういうことはないと思ってたんだけど、見当違いだったようだ。しかも周り生徒も、やれやれ、と囁し立てる始末だ。喧嘩を見物するように女子生徒たちは輪を作り、一幕の騒動を演出しているその場はまさに混沌^{カオス}。

輪の外に押し出された僕や兄さんは啞然とするしかない。

ここはどこぞの不良クラスなのか、と。

「あわわ、また……………」

わたわたと、僕の隣でしどろもどろになっている兄さんの呟きを聞

きとがめ、僕は嫌な予感から詰問するように兄さんに問い返した。

「また？」

「あ、えっと、昨日も雪広さんとアスナさん喧嘩してて、昨日はシズナ先生が止めてくれたんだけど………」

「……………っ、とにかく教師としては止めないと」

「そ、そうだよね！ み、みなさんやめてくださーい！」

兄さんは騒ぎを収束させようと、喧嘩を取り囲む輪に向かい、その輪の外から、どうにか割って入ろうと四苦八苦している。

僕はその背中を見つめ、唇をかんだ。まさに苦虫を嚙んだような気分だ。

兄さんは頑張っているが、どうにも教師としては舐められているようで、騒ぎは一向に収束の芽を見ない……………昨日であれば、しずな先生がネギ先生の代わりに事態をおさめていたはずだ。しかし、彼女は今日は何故かいない。彼女が僕たちの指導教員であることは知っている。本来であれば昨日のように、僕らに足りない点はフォローする役目を負っているはずだ。

なのに、彼女は今ここにはいない。

それが、何故なのか、予想がついてしまっただけに、僕は、ほとほと涙を噛みしめている。

これは学園長による手引きだ。

僕ら子供二人が、同じ学校同じクラスに赴任することに何の異議もなかったはずがない。魔法関係者であれば、別だったかもしれないが少なくとも一般の教諭、良識的な魔法先生はあまりいい顔はしなかっただろう。せめて分散すべきとの建設的な意見もあったかもしれない。しかし裏の事情に精通し手管を張り巡らす学園長からしてみればたまったものではない。英雄の息子なんて厄介ごとを分散するなど監視・監督するにも二人の交友範囲・行動範囲が共通のものでなくなる以上、大変な手間になるし、この教育実習という三か月に留まらず、ある程度中・長期的に、この麻帆良に留めたい、というよりか留めなくてはいけない学園長はそれらの手順を潤滑に進めるための工作もしなければいけない。

他にも、パツと見た限りでも異様なこのクラスの面子など、思い当たる節は多々あり、実際複雑な事情があるのだろう。

その複雑な事情を全て掌握しなければならぬ学園長からしてみれば

ば、多少表の事情を蔑ろにしても、裏の事情を優先しなくてはならない。同じクラスに赴任させた理由は、僕たちの行動範囲を少しでも限定させるためだ。

しかし、そこで問題になってくるのが、一般の教諭の反応と良識的な魔法先生の反応。一般の教諭は、当然反発するだろうし、良識的な魔法先生も、事情はわかるけれども、と口で言いながら、すべての事情を知りえない彼らは少なからず反発の芽を残すことになるだろう。

それを解決させるために、あえて学園長はしずな先生という抑えを外したものと思われる。それは反発を招く悪手にしかならないのは、と思うかもしれないが、確かにこれは短期的な献策としては悪手だ。しかし、学園長の期待通りの展開になったのなら、中長期的にはこの策はかなり効いてくる。

要は僕たちに箔をつけさせればいいのだ。

しずな先生という抑えがいたままでは、たとえこのクラスを上手く収めたとして、しずな先生のフォローがあつたからだ、という反発する人間に対し、思考の逃げ道作ってしまうことになり、正しく評価されない可能性がある。いや、むしろ僕たちが子供であることも考えて、常識的にも、しずな先生のおかげだと判断する人間が多いだろう。しかし、そうなってくると、僕たちを正式な教師としたとき、何らかの裏を匂わせてしまうことになる。いや、すでにポンプン匂ってきているだろうが、そこは認識阻害結界があることを鑑み

て、一旦は置いておき。

しかし、このしずな先生を外した状態で、このクラスを上手く収めれば、どうなるか。

学園長の強烈な後押し、そして疑うことのない確かな“教師”としての実績。さすが学園長が無理にでも推薦したことはある、と一般の教諭も僕らを認めることになるし、良識的な魔法先生に対しても、さすがは英雄の息子だと、僕らの権威を喧伝する効果もある。

妬むような功績を挙げて、羨望、嫉妬の類は、“子供”という社会的身分が和らげてくれるだろうから心配はいらない。

しかも、これを踏み台にして、正規の教師への採用へと糸口を掴むことにもなるのだから、学園長も余計な工作をする必要がなくなり一石二鳥だ。

だから例え、今強権をもつてでも捻じ伏せたとしても、後に学園長と僕らの功績につながるのだから問題ない、そう考えたのだろう。

しかし、この策には、僕がしずな先生の代わりにこのクラスの“抑え役”になるという前提があるのだ。

学園長は、交渉の場での強かな弁論、大人相手にも物怖じしない態度から、その前提は十全なものであると判断したのだろう。妥当だ。大人相手にこの態度をとれるのなら、子供相手なら軽くあしらえるだろう、と判断した学園長を狭窄的だとは責められない。

しかし、学園長はこのどこぞの不良学校のごとく突如授業中に喧嘩を始める暴走クラスのことを考慮に入れていたのか………入っていたんだろうな。別に最初からクラスをうまくまとめる必要はない。最初はこんなものだろう、と遠見の魔法で高みの見物を決め込んでいるかもしれない。

要は、このクラスをまとめあげられるだけの素質があればいいのだ。兄さんでは無理だろう。このクラスの雰囲気慣れに慣れていたとしても、どこまでいっても未熟さが目に付き、子ども扱いされる兄さんでは、教師としてはうまくまとめられまい。兄さんだけだったら学園長もこんな策は立てなかっただろう。

しかし、僕は違う、と。少なくとも子供っぽさを払拭するだけの理知的な言動を兼ね備える僕なら、最初は慣れずに、クラスをまとめられなくても、慣れれば、あれだけの立ち回りをしたのだ、多少手間取っても訳ない、とそう結論を出してもまったくもおかしくはない。

しかし、学園長よ、遠見の魔法でこの様子を眺めているのなら声を大にして言ってもやりたい。

無理に決まってんだろ！！！！！！

自らの情けなさを、そんな強気に訴えるのもどうかと思うが、こんな暴走機関車並みのクラスをまとめる自信なんて僕にはない。もうちょっと穏やかなクラスであれば話は別だったろうけど。これはない。とんだ無理難題をふっかけられたような気分だ。

「（あ~~~~~！　なんかイライラしてきた）」

何に対してだろうか。僕に対して過大評価し、策を弄した学園長に？　それとも、目の前で頑張るも全く成果のない兄さんに？　それともこんな状況を仕立て上げた、社会の流れのような漠然なものに対して？

……………わからないけど、すべてに対してな気がする。

さっきのどす黒い思考の残り香も効いた。

さっきまで当てられていた視線が僕に向いていないこともまた理由の一つだろう。今はやーやーやっている人間の個の数に圧倒されることもなく、僕を苛立たせる事象の一つの人の群としてしか見えない。

“裏”について考察したせいか、少しだけ、裏の僕が戻ってきていた。

そして僕は、この苛立ちの原因を処理しようと動いた。

その結果は簡単。

「うるさい!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

教卓をひっくり返して派手な音を立て、大声を張り上げた。

静まり返る教室で一身に視線を受けた僕は再びその多さに圧倒されるが、

「あ、あれはまさか、親父の必殺技ちゃぶ台返しっつ」

無駄に衝撃を受けた、名も知らぬ女子生徒の発言に苛立った僕はその身の火照り冷まさぬままに、勢い込んで喚き散らした。

「せ、性癖の話なんてどうでもいい!! 心底どうでもいい!! 委員長がシヨタコンであろうと、神楽坂明日菜が親父趣味であろう

と、全くもって皆さんには関係ない！！　それを悪戯半分に囁し立てるなんて！！　そもそも性癖なんてものは人それぞれ！！　それに突っ込んでやいシヨタコンだの、やい親父好きだの、あなたたちは馬鹿か！！　彼女らはある種の決意をもってシヨタコンなり親父好きなりの性癖を持っているんです！！　そうでなければ何故こんな公共の面前で、しかも思春期の女性が、性癖の事で取っ組み合いの喧嘩なんてするか！！　それを諫めこそすれど、囁し立てるような真似は彼女たちへの侮辱だ！！」

腹から出た声は心底からの疑問をいつのまにか解決へと導いていた。なんか違う気がするが、今はこの苛立ちを発散することだけに集中する。

「さあ、二人に謝れ！！　そしてこんな公衆の面前で醜聞も気にせず性癖について怒鳴りあった二人も！　皆さん、は不快に思っていないうだから、不快だった僕に謝れ！！」

女子生徒は僕の妙な勢いに押されたのか、周囲で作っていた輪を緩めながら中心にいる二人に謝っていく。

「……………申し訳ないでござる」

「意識はしてへんかったけど、うちも正直、シヨタコン馬鹿にしとったえ。ごめんなあ？」

「私もちよつと親父趣味見くびつてたですよ、ごめんなさいです」

「私もそこまで思い詰めていたなんて思わなくても……………でも言われてみればそうだね……………こんなに堂々と性癖の事で喧嘩するんだもんね」

「……………来週の記事は誇りある2-Aのシヨタコンと親父趣味、について、一面トップ見出し、と」

次々に謝罪を申し込む姿に僕は黙ってその様子を睥睨する。

「ちよ、な、なにこの状況!!??」

「そ、そうですね、皆さん、な、なにか騙されてますわ!？」

謝罪されている当の二人が素直に受け取ろうとしないが、周囲の間は暖かい目でそれを見守っている。なんといおうと理屈的には僕の言ったことが正しいのだから仕方がない。

「ちよ、ちよつと、あんたが変なこと言ったせいで私があらぬ誤解を受けてるじゃない!」

「そ、そうですね！！　アリナ先生、私は決してシヨタコン、というわけではっ！」

二人は周囲の人間が自分の言葉を聞かないと見るや、僕にその矛先を向けてくる。やれやれ八つ当たりとは、まったくもって見苦しい。

「そう？　だったら今の出来事を全て一時の感情に任せた過ちでした、と認めればいいんじゃない？　一時の激情っていうなら皆も納得すると思うし。まあそれにしたって、一時の激情を引き起こすほど、痛いところ（性癖）を突かれたんだなあ、と思われるだけで結果は変わらないと思うけど」

「「うつ」」

いい気味だな、本当に。

「さて、それじゃ。授業時間を妨害したんだから、その担当の兄さんと僕に謝って」

「「……………」めんなさい」

さんざんに心を折られた二人は割かし素直に謝った。ちっ、齒ごた

えのない……………

「はい、それじゃ、皆さん、席に戻ってください」

パンパンと手を叩くと、それを合図に皆も席に戻っていった。

「兄さん、それじゃ、後はよろしくお願いします」

「あ、うん」

兄さんも騒動が収まって一安心したのか、ホッと息をついて教卓に戻っていく。情けない……………

僕は兄さんの教科と一緒に担当することになっている。まあフオロ―しろってことだろう。一緒に教卓に立つこともないので、僕はそのまま後ろに回り、授業を見守ることにした。

……………ある種開き直った僕の行動だったが、後に僕はこの一件を思い返してひどく自己嫌悪することになる。それまでの時間は決して長いものではなかった……………

前途多難（後書き）

はい、黒歴史ですねわかります

今回のアリナの行動は完全に感情の行動で、論点も暴走してますから理知的なアリナからしてみれば……………

というわけで次回更新はきちんと一週間守りたいなあ

受難は続く（前書き）

ちよつと言ひ訳グダグダ並べるのはやめます。

ただ謝る。ホントすいません！！申し訳ない！！

なるべく更新を早める努力をすることで具体的な謝罪の意思とします！！ すいません、なんか公約掲げる政治家みたいですいません！！

…………… まあ、もう少しで夏休み。八月九月はまるまる休みなんで一気に更新できるでしょうね。なんとなく書き溜めて、連続投稿して、もっかい、週間ランキングに載りたいなあ、なんて野望を抱いているわけですが。

定期更新ぶつちぎるような作者にとっては取らぬ狸の皮算用つてやつですね。なんか使い方違うような気がしないでもないですが。

まあ、語ると長くなるんで、適当に切り上げ本編どうぞ！！

受難は続く

「はあ、やつちゃった……………」

僕は給水塔の上でしゃがみ抱えた膝の上で頬杖をつき、呟く。頬にあてられた手は冷たく感じられ、すばめられた口から、ホッと息が吐き出された。

鬱々と思い返すのは、今朝の一限目、自らが副担任をも務めるクラスでの英語の授業のことだ。

初っ端からやらかしてしまった。

いくらストレスが溜まって、目の前でちょうどそれを加速させるような喧嘩が勃発したとしても、そこは大人の対応で事態を俯瞰し、内なる怒りを宥めつつ、穏便に場を収束させるのが教師としての勤めであるのに、僕がしたことと言えば、正面切って相手と同じ土俵に上がり、一方的に打ち負かしたただけ。例えるのなら、張り手の強い横綱が立つ土俵に車で乗りつけ轢きたおすぐらいの大人げのなさである。

それはさすがに大袈裟、彼女ら2 - Aの面子を見くびり過ぎではないか、と思われるかもしれないが、そのぐらいの差が教師と言う立場には求められているのだ。でなければあんなクラスをまとめあげることが不可能だと思う。

しかし、現実、僕も兄さんも彼女たちを見下せるほど、人間的に習熟していない。一人一人相手をするだけなら、大丈夫かもしれないが、あの個性あふれる生徒の“群”と対等にやりあうには、僕たちはあまりにも無力だった。このままでは教師の威厳もへつたくれもなく、いいように弄られて、終ぞ先生として扱われることはないことも考えられる。

……………自分の未熟さが恨めしいが、そこに拘泥するほど、僕は馬鹿でもなかった。できないものは、できない、できるものは、できる、謙遜にも過信にも寄り合ってはいけない、その見極めは自らに結果が返ってくるという意味からも、世渡りする上では習熟を問われる処世術である。

さも訳知り顔でこんなことを並び立ててている僕だが結局のところ。

早々にこのクラスをまとめるといふ教師の仕事は全うできないと判断した。

その言い訳なのだ。

もちろん後腐れは残していない。先並べた処世術が兄さんにないことを知りながらも、僕は責任を全部兄さんに丸投げしたのだ。

これも立派な処世術。恨まないでもらいたい。けどそれでも何も知らない兄さんを騙したような、感じになってしまっているからこんな言い訳を並べているのかもしれない。

僕は、先ほどのやり取り思い返した。

.....

.....

.....

.....

.....

...

「へ、僕、職員室で仕事なくていいの？」

少しの間の抜けた、気合が空回りしたような顔で僕を見つめる兄さん。

それに対して、僕は少しばかりの微笑みを浮かべて、応諾する。

「担任のフォローは副担任の仕事だからね、僕が全部やっとくよ」

「え、でも、それはさすがに悪いよ……………」

僕の答えに対して、兄さんははっきりと否定はしなかった。それが職業意識の薄さからくるものだと思破した僕はさらに畳み掛ける。未だ教師としての実感も伴わないこの時期では、兄さんにとって教師の仕事は、魔法使いの修行の一環、あるいは延長線上に過ぎないのだ。後味は悪いだろうが、今のうちその意識の甘さにつけこませてもらおう。

「兄さん、職員室でする教師の仕事といえ、つまらない事務仕事とかそんな程度なものだよ？ 決して必要のない物とは言えないし、重要なものとも言えるけど、人にものを教えるのが本分である教師の仕事からは少し脇道に逸れるものだ。いわば、人にものを教えるための準備とでもいうべきかな」

「でも、準備ならなおさら」

「兄さん。兄さんがどう思っているかどうかは知らないけど、僕たちは周りの大人の教師に比べれば、その教導能力は決して高いものとは言えない。きっと足を引っ張ることになると思う、それは年齢からも仕方ないことだとも思う。けど僕たち一人ひとりは、足を引っ張る存在かもしれないけど二人で力を合わせれば話は別だ」

自分で並べ立てた言葉ながらうすら寒いものを感じ、それを笑みとして、含ませながらも、表面上のご愛想は消さずに囁く。

「僕は言っちゃなんだけど、机の上の勉強ではだれにも負けないと思っている。それこそ兄さんにも。傍目地味な事務仕事でも、その力は十二分に発揮できる。そう確信してる」

笑みをたたえる姿は、まさに兄に自慢する弟の典型であつたはずだ。事実一瞬兄さんの表情にイラつきにも似た何かが混じつたが、次の僕の言葉でそれも霧散した。

「だけど、実地で教える分には、僕は兄さんには叶わないと思っている。今日の兄さんの教え方を見てればそれは明らかだ、わかりやすい授業だったよ」

嘘だ。あの子の授業で、明日菜さんは英語ができないんですね、とか言い始めたときには、殴り飛ばそうかと思った。苛立ち紛れに、しかし、そんな嘘に気をよくしたのか、兄さんは得意げな顔をして、いた。たぶん、僕の口から出る評価だけじゃなくて、今までのことも照らし合わせてるんだろなあ、と思う。実地で魔法を扱うのがうまいのが兄さん、机の勉強は僕、それとの対比が無意識下で兄さんの中で反応しているんだろ。まあ、こんな嘘に騙されてくれるのならめっけものだった。

「だから、ね。兄さんには授業の事は全部任せたいんだ。本当は僕も補佐として授業やらなきゃいけないんだろうけど、ね。兄さんには及ばないから自重しとく。そのかわりに、僕は僕が役立てそうな面を全部請け負うよ。職員室でやるような仕事は僕の得意中の得意だからさ」

そして、最後の一言。

「二人で力を合わせれば、たとえ歳の至らない子供であっても一人前の教師になれるよ」

兄さんの好きそうな綺麗事を吐けば、見事に兄さんはうなずいてくれた。

.....

.....

.....

.....

.....

要するに僕はあのクラスの取りまとめから降りたがったのだ。

学園長には学園長の思惑があったのだろうが、正直僕にはその期待に応えられそうになかった。学園長も土壇場になって期待外れて、どうしようと慌てふためくよりか、早い段階で諦めがついたほうが手も打てるというものだろう。というかしずな先生とやらをちゃんと僕たちにつけるよ。

それにあまり学園長に弱みを見せたくないというのもある。交渉ごとに関しては一步の譲歩もなく“仮面”を被って取引に臨むこともできるが、その僕自身の対人関係の構築に不安が見られたら、なにがしかの優位を取られることにもなりかねない。それは僕としても避けたかった。

まあ、学園長もこんな形で拒絶されるとは思っていなかっただろうな。あの“仮面の騎士”なら2・Aの連中も訳なくあしらえると思っただけに決まってる。僕も僕にとってそれほどの労力を必要としないことであつたのなら、学園長に貸しを作るという意味合いを含めて、やったかもしれない、学園長もそういう目算があつたのだろう。

だが、今の僕は“アリナ”なのだ。

この状態であの暴走を止めるには四苦八苦するに違いなく、またその労力を費やす価値も見当たらなかった。それなら事務の仕事を一手に受け付けておいた方が楽だ。兄さんを職員室に近づけさせず、僕がすべて代理でこなす。副担任としては完璧な働きだ。副担任の鏡ともいうべき、担任への完全バックアップ体制。学園長も文句は言えまい。

僕も完全にクラスの生徒と交流を絶つつもりはないのだ。あれらを“群”として馴らすのが厄介なだけで。個人個人と接していけば、せいぜいが個性的な人物だろう。まともな関係が結べるのであれば、僕も徐々に交友関係を作っていきたい。

しかし、だ。

僕は脇に伏せてあつた出席簿を掴み、パサリとぶら下げるように見開きを開いた。

「つつこみどころが多すぎる……………」

高畑・Ｔ・タカミチが使っていた名残なのかもしれないが、裏の情報もさらりと走り書きされていたりする。まあそれは許容範囲だ。知らない人間が見たとしても、少し違和感を覚える程度のものである。僕としても、情報が整理しやすいので助かる。

しかし、なんだこの、諮ったように裏の関係者が集められたクラスは。

相坂さよとか、一人だけ制服違うし、１９４０〜てどういうことなのか。留年なんて制度中学生にはない、永遠の中学生とも言えるのか。

その他にもなんかロボットの人とかいるし、魔力百倍な関西の雄青山詠春の娘に、関西出向の護衛、傭兵、忍、学者、技術者、シヨタコン、親父好きまで、バラエティに富みすぎている。ここまで揃えば、意図的に裏の関係者をこのクラスに集めたのだらうと予想がつく。他にも情報がないだけで、裏関係の人間が混ざっているのかもしれない。

このクラスに集めた意図としては、まあ穿った見方をせずに、警備上の問題と言うことにしておこう。

しかし、だ。

E v a n g e l i n e A K M c d o w e l l

困った時に相談しなさい

真祖の吸血鬼出ちゃったよ、おい！ なに？ 困ったときってなに？ 死に場に困ったとき？

「まさか、こんな近くにいるとはね」

内心の困惑を無理矢理押し殺して、僕は喜悦を押し上げ、笑みを浮かべる。心臓は鼓動を早め、心は恐怖に染まる一步手前、しかし、表裏一体、そこには定まらない歓喜があつた。真祖を学術的見地から研究できるという前代未聞、前人未到の領域へ他の学者を差し置いて切り拓くことへの背徳感にも似た何かが僕の背筋を震え上がらせているのだ。

しかし、ここで功に焦ることは自らの首を絞める結果になるだけ。事態がそれほど芳しくないのも事実だ。

世に知られた E v a n g e l i n e A K M c d o w e l l、通

称闇の福音が本名で中学校に通っている、この事実は関東魔法協会が組織の意向として彼女を擁護していることを指し示すに他ならない。さらには困ったときは、と書いてあるぐらいなのだ。彼女は関東魔法協会によって飼い慣らされているとみてもいい。

そうなってくると、僕が彼女を“飼い慣らす”ことにも問題が出てくる。

彼女は悪なのだから、というもつともらしい大義名分が、関東魔法協会が彼女の身柄を確保している以上、使えなくなってしまうのだ。闇の福音の状況があまりわからなかっただけに、研究者が使う“常套手段”を当てにしていたのだが、これについてはうまく立ち回らないといけないようだ。

何にせよ当分は当初の予定どおり情報収集に徹するしかないが、彼女がアクションを起こす可能性もあるから、悠長に構えてはいられない。何せ彼女は関東魔法協会を背景としているのだから、僕との接触は特別咎められたものではないのだ。しかし、情報収集する上で、僕を特別意識されるのはやりづらいことこの上ない。

闇の福音に関しては、このまま関係を膠着させておくのが望ましい。

やはり、事が済むまでは必要以上にあのクラスに関わらない方がいい。

パタン、と出席簿を閉じ、フツと勢いつけて立ち上がり、給水塔の上から弾みをつけて、降りた。

カタンと屋上の地を鳴らす靴の音が重なった。

ギョツとして、僕は足音のした方に顔を向ける。

夕闇を背に靡く金髪から小さくなぞる顔のライン。人形のように統一的に配置された顔のパーツの中で輝く碧眼、その下、唇を象る妖しい笑みが、僕の背中を撫でる。

ぞわぞわと鳥肌がさざ波のように広がっていく。

殺気が向けられているのだ。とはいっても彼女からしてみれば、遊び感覚のようなものなのだろうが、対する僕は普通の人間だ。いくら何回か死線をくぐったことがあるからといって、殺気を向けられれば、過敏にもなる。

しかし、僕は唇の端を吊り上げた。意識した仕草を表情に現れると、それはすぐさま笑みとして顔全体に浸透する。

目の前の少女は少しばかり怪訝そうに笑みを崩した。

「これはこれは、闇の福音、エヴァンゼリー、このような場所で会うとは奇遇ですね」

「……………ゼリーではない」

あくまで不審げな顔つきは変えぬまま、わずかに不快感をにじませ否定する彼女に僕はますます笑みを深めて、うなづく。

「失礼、エヴァンジュエリー」

「貴様、喧嘩売っているのか？ 私はゼリーでも宝石でもないっ」

「別に喧嘩を売ったつもりはありませんね。ただ愛想の足りないあなたを愛らしい名前ですしばかり引き立てようとする僕の心遣いですよ」

「貴様」

余裕綽々の笑みも引き攣るほどの殺気が闇の福音から放たれた。これには僕も両手を挙げて降参する。

「……………嫌ですね、冗談ですよ」

態度こそ殊勝ではあるが、六百年の真祖を前にしてなお、殊勝であるその余裕がかえって慇懃無礼な傲慢さを露出させ、吸血鬼の反感を買う。

相手が無知であるのなら、吸血鬼もその無知を嘲笑い、見下すことで、自らの矜持を守ることでもできただろう。

しかし、僕こと“仮面の学者騎士”はそういった相手とは違う、六百年の真祖の歴史を、実質的な重みをもって、接し、その誉れをひけらかすことができる相手であった。少なくともエヴァンジェリンは内心それを認めており、強者として相手に理解を強いた。

そのための殺気であり、威圧だった。

しかし、投げ返された態度は、児戯のような言葉遊びで飾られた不遜な物言い。

期待していた怯えも、反感も見いだせないそれに、闇の福音はおおいにお気に召さなかったようだった。

「やはり貴様、あの教室での一幕は演技だったか」

だがここで相手を知りたかといふあたり、彼女は老獺だと言えるのかもしれない。闇の福音として六百年、膨大化しているであろう矜持を守ることには執着しない様子に体面にいる僕は素直に感心するよりか、小狡いと思った。

闇の福音自身、矜持云々は意識していないのだ。ただとるべき態度をとっている。律するべくもなく、ただそこに在るように在る闇の福音には、気品さえ感じた。そして彼女が纏う風格はまさしく、六百年の歴史を感じさせるものだった。

おそらく、その矜持を突っ突けば、彼女は激昂する。身に纏うマントに埃が被ったから、怒ることは器が小ささを示すだけだが、身に纏うマントを斬りつけられて、怒らないことは決して器の大きさを示すものではない。

六百余年、彼女は闇の福音としての矜持を保ち生きてきた。そしてその矜持を語り否定することは、彼女が積み重ねてきた人生に対する冒瀆だ。それを否定されては、闇の福音も怒り狂うだろう。しかし、そうやって世界に否定されてなお、矜持を誇ってきたのが、“闇の福音” エヴァンジェリンであり、その誉れなのである。

「……………演技じゃありませんよ？」

だから、僕はそれを嘲笑う。

「……………なんだと？」

「本当に緊張していたんです。なにせ、あんな大勢の人の前ですからね」

「あ、何を馬鹿……………っ」

彼女は、初め、僕の言葉が何を意図したもののかわからなかったようだ。しかし、一旦その意味を咀嚼すると、怒気で頬が紅潮する。

「……………ずいぶんとわかりやすい挑発だ」

「本音ですよ？」

噛みしめた唇が白み、その唇の端から犬歯が覗いた。

闇の福音は、僕の言葉に少なからぬ真実を嗅ぎ取ったのであろう。長年吸血鬼という迫害されやすい存在として、騙し騙されの世界を生きているのだ。真偽を判断する感覚は一際優れているはずだ。そ

して優れているがゆえに、その感覚を無条件に信用する。そうやって闇の福音は生きぬいてきたのであり、その感覚を信用しないことは、自らの矜持を貶めることと同義でもあるのだ。

闇の福音と理解し、その前に立てども、緊張することが様子を見せない僕が、闇の福音に比べ遥かに力劣るクラスメイト達を前にあからさまに緊張している。それが真実であるのなら、自分はどれだけなめられているのかと、闇の福音はそう受け取った。

彼女が僕の裏の心情までも読み取れず、しかしそれが本当だと嗅ぎ取っている中途半端な状態では、こう言った推察になるのは当然だった。

彼女はある意味勘違いしているが、ある意味勘違いしていない。僕は明らかに嘲りの意図が伝わるよう自身の本音を利用したのであり、その侮辱の意思は紛れもない真実だ。

なるほど、彼女は“闇の福音”であり、その歴史、力、生き方に誇りを持っている。

しかし、僕は“仮面の騎士”であるのだ。

本性をその仮面の内に押し込め、自らの歴史、^{すがあ}生き方とことん忌避して、虚飾と欺瞞で自らを偽り、力を振るった。同じ方々向きな

がらも異なる方向に足を進めた僕らは似ているようで対極にある存在だ。

彼女のように気高くもなく、誇りに満ちた矜持があるわけでもない。薄汚れ、泥の被った矜持は決して誇って掲げられるようなものではない。

だからこそなのだ。

目の前の吸血鬼があくまで、“闇の福音”としてその歴史、力を背景とし、僕と接するのであれば、僕はその全てを嘲笑う“仮面の騎士”であろう。

決して誇れない仮面をこの顔に、僕は力を誇示し、見下し憐み、踏みたく。

いつもの僕なら、もう少し冷静であつたかもしれない。しかし、唯一自分の優位であつた“力”が振るえず、無防備とも思える剥きだしの僕のままでいたのだ。そこにかかる不安や負荷は並大抵のものではない。そしてそこにやってきた、僕が“力”を遠慮なく振るえる存在。先ほどの思考など吹っ飛んでいた。

あるいは、これが、彼女と同じ矜持譲れないもののようなものなのかもしれない。

普通の一般の人間の前で“仮面”を被れば、その汚さに僕自身が辟易し、彼女らの清廉さと比べて、引け目を感じてしまうだろう。

しかし“闇の福音”は同じくらいに汚れている。だからこそ、僕は引け目を感じることなく、この力を振るえる。

彼女は吸血鬼の真祖として、六百年という時を邁進し、今ここにあり、わかりやすい悪“闇の福音”エヴァンジェリンという誇りある悪という形を手に入れた。

どんな形であれ、彼女が吸血鬼として、人間に対し害意を働いた事実はそこにあり、にもかかわらず彼女はこんなに気高い。少なくとも僕はそう感じてしまう。

思わず彼女の立ち位置に共感してしまいそうになる。

それは僕にもありえた居場所だったから。

だからこそ、僕はそこに価値を見出してしまう自分が許せないのだ。それはかつて僕が否定した道程であり、その到達点を認めてしまうことは、僕自身の否定と同義なのだから。

自分勝手なものであるとは思うが、譲れるものではない。

でなければ、一体何のためにこの仮面を被ってきたというのか！

“闇の福音”が殺気も露わにこちらを睨み、“仮面の騎士”がふてぶてしい笑みを浮かべる。

一方は剥きだしの感情を表にだし、一方は猛る内心を支えにあくまで穏やかな雰囲気을くずさない。

爆発寸前の感情が飽和量達しようとしたとき、奇しくもその流れを止めたのは先ほど同じように、一つの足音だった。

「あ、アリナ君、こんなところにおったん」

能天気な声が一触即発の空気を波打ち、僕らは否応なしに、そちらに視線を向ける。

その先にいた人物に僕は思わず目を疑い、エヴァンジェリンの顔は苦々しげなものになる。

特徴的な京都弁からも半ば予想は立っていたが、タイミングがあま

りにも良すぎたために、さしも驚きが隠せない。

極東一の魔力量を誇る、関西呪術協会会長、サムライマスターこと
青山詠春の娘、近衛木乃香。

その才ながらに魔法を知らない、言わば、表の人間であるはずだが、
ここまで恣意的だと、彼女の態度は演技ではないだろうか、とさえ
思ってしまう。しかし、そう思うにはあまり彼女の態度は無垢で、
立ってしまった疑問との格差からどことなく彼女の存在が不気味に
思えた。

しかも、この場において、莫大な魔力を持った少女が割って入って
くることは、さながら爆発物を持ち込まれたような気分だった。

不確定要素が入った。出でた疑問の芽ゆえに、彼女を守るべき対象
として見るべきか、断ずるに足りる証拠がない。

ここで、戦闘に入ったら、という最悪の事態を予期して、僕は肝を
冷やした。

「……………ふん」

幸いなことに闇の福音は引くことを選んだようだった。あるいは彼

女の無垢な態度に毒気を抜かれたのか。

「興が削がれた。今日はここまでだ、アリナ先生」

一方的に幕切りを突き付け、踵を返し、入り口に立っている近衛木乃香のほうへ向かう。

「エヴァちゃん？　アリナ君と、こんなとこで何しとったん？」

「……………ふん」

近衛木乃香の横を通り抜けようとして、紡がれた疑問に当人には一瞥のみを返し、僕の方に顔半分を向け、皮肉むように笑った。

「新しい先生と親交を温めるために自己紹介をしてただけだ」

一瞬だけ凄みのある笑みを浮かべ、そのまま近衛木乃香の横を通り抜けた。

「あ、エヴァちゃん！　この後ネギ君とアリナ君の歓迎会あるんやけど……………！」

一瞬キョトンとした近衛木乃香だったが、すぐにハツとなり、その背中を追うように声かけられた。

それにしても、自己紹介、ね。

先ほどまで感情に流されていたが、闇の福音が視界から消えたことで、少しだけ頭が冷えていた。

結局彼女が僕に接触を図ってきた理由さえも聞き出すことを忘れていた。つい、ストレスから少し暴力的になり喧嘩を売ってしまったが、これは失態だ。まあ、単純近衛木乃香介入までの時間が短かったこともあるから、仕方ないと言えば仕方ない。

自己紹介と答えた彼女の言葉には少なからぬ真意が隠れている気がした。

これで終わりではないぞ、という意味を送り水に。

「まあ、エヴァちゃんも付き合い悪いんやから。まあ、気にせんと行こか」

「? どこへですか?」

「歓迎会やえ！ アリナ君とネギ君のな。クラスの皆でやるんや」

「……………はあ」

昨日今日と密度の濃い一日だ、まったく。当分こんな毎日が続くんだとしたら胃に穴が開くな。

それにしても、歓迎会、ね。

……………歓迎会、だとうっっ！！

受難は続く（後書き）

そろそろちつたんを……………

中心にはられない者たちの戦い（前書き）

活動報告で予告していた通り、夏休みスペシャル第一弾です。

ちよつと時間がかかったのは文字数のせいです……………どうしてこ
うなった。

タグに謀略、あるいは頭脳戦入れようかな、と迷つてたりします。

つていうか今回の話どうなんだろう？ 皆さんの感想ご聞かせくださ
い。

あと章タイトル千雨篇から変えました。千雨まったくでできてねー
だろというつつこみをいただく前に。

言わばここまで共通ルートですね。ここから千雨篇に分岐していき
ます。伏線は張り終えた……………ここまで長くする気なかったけど

……………

もついいや！ それでは本編どうぞ！

中心にはいられない者たちの戦い

「……………では、これが君の所望していたものじゃ」

闇夜、わずかながらに明かりのつく部屋の中で、発せられる声は緊張感に気色ばんでいる。ほんのりと霞みがかつたように視界を暗褐色に染め上げ、漂う闇は僕たちの間に奔る緊張感に根ざすように空気を硬直させ、頑健にその帳を下している。

かくいう僕の額にも冷や汗が浮かび、何度も拭う羽目になっていた。しかし、それは純粹に緊張から生じるものだけでなく、興奮の度合いも強い。生々しい表現にはなるかもしれないが、露わになった女体を目の前にし、理性を残しながらも性欲を発露させた男、と言うのが一番近似的に挙げられる例だ。

どうにかなりそうなくらいの興奮とそれに裏打ちされる緊張。

心臓の音が全身に行き渡るような強い脈動感を放ち身体全体に伝播させ、自浄効果のように落ち着けと理性が僕の心に枷を嵌めようとする。

僕は学園長が差し出した箱にゆっくりと手を伸ばし、触れる。その

ままなぞるように、箱に手を滑らせた僕は愉悅の笑みを浮かべた。手にしたものに比べ、僕の顔はまるで新しい玩具を手似れた子供のよう。そのコントラストにより、見ようにはよっては狂気に満ち満ちているその貌は、学園長の顔を歪ませるには十分なモノだったらしい。その感触から言って、学園長が感じ取ったのは、“異質”。マッドサイエンティスト世には狂科学者と呼ばれる人間がいるが、それらの人間がそう呼ばれるのは、多くは普通の人間には持ちえない琴線をもっているからだ。常人には理解できない欲求を露わにする僕たちに理解を求めるには、あまりにそれらは歪すぎた。

だがそれでいい、と僕は思っている。僕は別に“研究狂い”のように己の欲の発露に終始するつもりはない。“研究狂い”にはその素質がある、とは言われたが、何もそれを開花させることはない。何より、それを開花させることが世俗を捨てるということであるのなら、僕にとって“研究狂い”のような人生は忌み嫌うものでこそあれ、受容すべきものではない。

しかし、そんな風に気に留めつつも、笑みがこぼれてしまう僕はやはり“研究狂い”が言っていたように、その素養があるんだろうなあ、と自嘲じみた感想が熱を持った感情を宿める直前、手の中に納まった箱を前にして、再び僕は感情の渦の中へ、理性の言葉は雑音へと下がる。

一見して古ぼけた箱のように見えるそれにはごくわずかにしか感じられない巧妙な認識障害の魔法がかかっている。目的のものが入っているとわかっている僕が絶え間ない強烈な熱意をもってこの箱を認識していなければ、その興味は路傍の石程度まで減衰させられて

いただろう。

そのぐらい、上手い、魔法だ。

この爺、試しやがったな。学園長が顔を歪ませたのも、この箱をきちんと認識できたことに対する驚きが含まれていたのかもしれない。

この期に及んで、取引を無碍にするような真似をするとはどういうことだ、ここまでやらかしてるんだから一蓮托生だろう、と内心文句は噴出していたが、どうせ詰問したところシラをきるに決まっている。言ってしまうはその程度の問題であるし、何より、信用を無くすことをリスクに考えてなお、危機管理にはしるほどの問題なのだ。その胸の内は理解できなくもない。

とはいえ、興奮状態の僕からしてみれば、水を差されたような気分ですら不満だらけではあったが。

しかし、それにしたって気にならない程度の問題であった。

僕は、プレゼント包装をビリビリに破く子供のように、躊躇なく、その箱を開けた。

箱を開けた瞬間、認識障害が解かれ、箱の中身が、その姿を現す。

それは一木の枝だ。木皮の濃淡は鮮やかと言っていい程鮮明で。通常の枝よりもずつしりと、重量感を持つ線の太さ、その断面に刻まれる木目の年輪は、アスファルトの花のように儚くも雄々しい生命力を。

さらに枝分かれし先細った枝の先端に咲く緑は、駆け抜けた一陣の風に葉が揺れすれ合う鳴き声が耳に届くような涼やかさを幻視させる。

摘み取られてなお青々しい輝きを失わない樹木、その名“世界樹”
またの名を神木“蟠桃”

「……………っ、想像以上だ、これなら手首一つ、失っただけの価値があるっ」

その木皮に撫でるような手つきで手を添え、愛でる。そして目を閉じ感じる。

何百年、何千年、と魔力を浸透させ続け、その身に馴染ませ続けて

きた世界樹は魔法発動媒体あるいは魔法具の素材としてはSランク級の逸材と言える。そして発光現象をもって内部の魔力を融和する放出機能もその枝に特性づけられている。それが枝の末端にまで染み込んでいるというのは、“世界樹”の歴史を十分に感じさせるものだ。

ただの機能性接続性に優れた義手を作るだけには有り余る素材の汎用容量の広範さだ。

それを兼ね備える世界樹の一木に僕は熱に駆られるようにして術式を組み上げていく。

完成形はすでに見えていた。

不思議な感覚だった。漠然とした構想はあったものの、実物を見なければわからないとの判断を下し、事前に密に煮詰めることはしないでいた。しかし、実物を前にしてみるとどうか。漠然としたものが霧が晴れるかのように明瞭なものに変わっていき、頭にはすでに完成形のイメージがある。

そして、その完成形に向かって作られる道程をまるで最初から知っていたかのような、そんな錯覚に陥るほどに、足早に頭の中を文字列が駆け去っていくのだ。

術式構成

それに伴う陶醉感は僕を軽い酩酊状態にまで引きずり込んだ。

早い話。

トリップしていたのである。

「アリナ君、アリナ君、聞いとるんか？」

「……………ええ、もちろんですよ、学園長」

それでも、我に戻るやいなや、理性的に反応してみせるあたり、僕のしたたかさが知れるというものだろう。

「……………本当かろう……………まあ、よいわい。とかく、このことが公になれば破滅するのは君も僕も同じなんじゃ。くれぐれもその取扱いには気を付けてくれ」

「言われるまでもなく」

深くうなずき、意識から離すため、世界樹をおさめ、箱の中にしまふ。

一も二もなくうなずいたが、このことが露見する可能性が低いことは双方理解していた。双方がどちらかが暴露しない限り。

何せ、世界樹の実際の性能なんて普通の人間にはわかりはしないのだ。魔法世界が定める「霊地管理法」の第一級地に属するこの世界樹は原則として一切の研究、調査が禁じられている。故にそれに関連する知識は、一般には知られていない。もちろん法の届く範囲には限界があり、裏では第一級霊地の素材が取引されていたりもするのだが、その真贋は怪しいものである。しかし銘打つからにはそれ相当の品であり、大体において、品質の高い素材でもあるのだが。しかし裏でさえ一種の箔づけのようにその名が利用されそうといったものが氾濫している以上、やはりその真贋を見極めることは難しい。

つまり、完成するであろう義手が異常な性能を発揮し、世界樹ではないか、と疑われようと、それを確かめる術がない故にいくらでも言い訳はできてしまうのだ。さらには僕には僕には仮面の学者騎士という魔法具の開発者としての名もあるために、それがカモフラージュにもなる。

だからこそ、僕はこの交渉を持ちかけ、学園長もそれを呑んだ。しかも、それらの交渉はそれ以後の利害関係においても影響を及ぼすことができる。何せお互いがお互いの急所を握りあっているようなものだ。いくら真贋を見極めることが難しいとはいえ不可能ではない。外野がどうこう言っても言い訳できるが、取引した相手のどちらかが暴露すれば、そのどちらもが公的にそれなりに重要な立場にあるのだから、本格的に調査されかねない。相手の破滅は自身の破

滅を意味するのだ。必然的に相手をそれなりに気遣いあわなければならなくなり、その関係はどんな感情を差し挟もうが、膠着的なものになる。

この学園長は間違いなくタヌキだ。この交渉の隠れた真意は、こちらに対して決定的な悪意は向けない、という意思表示だ。もしこのことが元老院に露見した場合、元老院はこれ幸い、と僕を陥れようとするだろう。しかし、そうなった場合、学園長も一緒に切り捨てられるのだ。僕にはまだ、アリアドネーという盾があるために守ってもらえる。どこまで守ってもらえるかがわからないために、最終手段ではあるが、一応の盾はある。

だが学園長にはそれがない。強いて言うのなら、この麻帆良と関東魔法協会二つの地盤が盾となっているが、それだって元老院の意向が強いものであるし、正義の魔法使いどもがどこまで本国の命令を無視して、学園長につき従うかは疑問符がつく。

見たところ、学園長は決して求心力の強いタイプではない。学園長が組織をまとめあげていられるのは、長年の経験の老獪さをもって行う調整力の賜物だろう。人の心を自然と誘導し、操り手繰る。元老院と学園の間に発生する荒波をゆらりゆらりと漂う浮き舟のような、政治感覚を持つ人間だ。ある意味その類まれなるセンスが学園長の武器であり盾なのだ。

しかし、そうやって均衡を保ってきた中で入ってきたのは、英雄の息子——しかも片方は経歴に脛持ち——という大渦潮。学

園長からしてみても、どう対処するか、困った存在だろう。それに、もし、連合に反感を持つ僕を暗殺せよ、などという指示が出てしまえば、さらに危ない。それを実行したとして、最悪学園長より下の魔法使いをきれば済む話だが、学園長にまで類が及ぶ可能性もあるのだ。

学園長は僕から譲歩を引き出すだけの条件を整える必要があった。具体的には、僕が連合に反感を持っていないという証明を、すなわち今後もついて回るであろう監視の目を受け入れるよう、または好意的に映るようになるよう僕の行動を掣肘しなくてはいけなかった。

例え、それを引き出すために学園長自らの弱みを見せることになったとしても、学園長は僕を懐柔しなければならなかった。

もつとも唐突に発生した不慮の事態に対する抑えと言つのもあるだろうが、それがなくても、学園長は何らかの手をつたはずだ。差し当たっては、図書館島の禁書の閲覧とかな。

この交渉で学園長は僕の行動を掣肘できるようになった。相関的^{イーブン}にはあるが僕も弱みを見せてる身。学園長の立場を守る範囲で行動しなければならぬ。でなければ、こっちまで火の粉が降ってくるのだ。

しかし逆に僕も、学園長の行動を読めるようになった。

暗殺の危機もよほど強硬的な命でない限りうまく処理してくれるだろう、との確信も得た。このタヌキは自らの保身に余念がない。僕の暗殺が自らの破滅になると、何より魔法の教育機関の最高峰であるアリアドネーから睨まれることが、どんなに危険であるかも教育機関の長としてわかっている。

だからこそ、僕の無茶な交渉も呑んだ。当初は少しでも僕に対して優位になるよう努力しただろうが、それも不慮の事態でパー。しかしそこに拘泥することなく、膝に脛かかえようと、一蓮托生の身になろうとも、一手打つ必要があつた。全ては将来降りかかる苦難の可能性を減らすため。有りていに言えば保身のため、これからの状況を万全なものにしないでならなつたのだ。

こうして俯瞰すると、いかに学園長がまずい立場にいるかがわかってくる。元老院とアリアドネーとの間で争われる僕が存在が此処にあることは管理する学園長側からしたら厄介ごとの種でしかない。元老院とアリアドネーが学園長の存在などどうでもよく思っているだけ、事態は学園長にとっては深刻だ。良いようにこの二勢力間で振り回される身からしたら、たまつたものではないだろう。

さらに追い打ちをかけるように不慮の事態が発生するのだから、学園長涙目だろう。それは、僕に弱みも見せるはずだ。

僕は心底学園長に憐みを抱きながら、そういえば、と水を向けた。

「そういえば、今日、かの有名な闇の福音に丁寧に自己紹介されたんですが」

ピクリと、学園長の眉が動いた。

「まあ、今さら惚けるような真似はいりませんよ。僕に関わってこなければ、どうこうする気ありませんから」

「それは……………無理じゃの。エヴァンジェリンはおぬし等を……………恨んでおるのじゃから」

沈痛な面持ちを保ったまま重々しく言った。そんな学園長の態度に僕は場違いにも首をかしげざるをえない。今まで何の接点もなかった闇の福音に恨まれる覚えがないのだ。

「どういうことですか？」

「うむ、それはの……………」

そこから始まった闇の福音と僕たちの父、ナギ・スプリングフィールドとの過去の話に僕は思わず拳を握りしめた。

闇の福音に因縁つけられたのは、まあ仕方がない、ご愁傷様としか言いようがない。しかし、その処理の仕方があまりにも杜撰だ。闇の福音に登校地獄なんていうふざけた魔法をかけ、中学校へ入れさせ、三年経ったら戻ってくる、と言っておきながら拳闘十五年放り出すとは何事か。しかも寄りにもよって、僕たちが赴任する学園に縛り付けるなんて……………いや、待て。寄りによって、寄りによってだ？

「……………待ってください。闇の福音がいるというのは、元老院も知っての事ですか？」

半ば確信に至りながらもわざわざ問うのは、わずかな希望に縋ってのことか。

「……………そうじゃ。元老院も、悪行さえ行わなければ事態を看過す、と言ってきておる。我らが英雄がそれに希望を見出したのなら、我らもその有り様見届けるべきだろう、とな」

……………なるほど、大した置き土産だよ父さん。まさかここにも負の財産を築いているとはね……………しかもそれをまんまと元老院にも利用されて……………呆れて言葉も出ない。

「恨んでいるのは、父さんがいつまでたっても解きに来ないからですか」

「……………もう一つある。その登校地獄がの、解けんのじゃよ。あまりに膨大な魔力と無茶苦茶な術式構成に縛られての。見てみればわかるじやろが、あれは登校地獄と言うより、膨大な魔力に任せた時間・土地限定の拘束、いや封印魔法みたいなものじゃ。だからこそ闇の福音は鬱屈した感情を持て余しながらこの十五年間、この女子中学校に通い続けておる」

「そこに現れた、仇ともいうべき男の息子ですか……………なるほど、恨んで当然だ」

あの殺気は、僕を試すというよりか、本気のものであったのかもしれない。

「しかし、恨んではおるが、そこまで過度な心配は必要ないと思うぞ。エヴァは女子供は殺さない主義だからの」

「殺害が勘定に入っているだけ物騒だと思うんですがね……………」

学園長は楽観的にそう言うが、僕は苦々しく思うしかない。それに学園長にとってはどうせ他人事だろう。

「それで？　殺さない主義とはいえ、僕らに害が及ぶ可能性は大な

わけですが、学園長は、闇の福音をどう動かすおつもりで？」

半ば自棄になりながらも直截的な物言いでは学園長に問う。

このタヌキのことだ。この闇の福音を不確定要素のまま放置しておくわけがない。何か腹案がありそれに巻き込まれることは目に見えている。どう巻き込まれるかによって僕の方も自分の目論見を調整する必要があるだろう。

「ふむう……………動かすもなにも、のお。ここに来たばかりのお主にはわからんかもしれんが、エヴァは学園の警備にも積極的ではないとはいえ、協力してくれていることだし、表面上の態度はともあれ、行動自体は悪名知られている闇の福音とは思えぬほど温和なものじゃ。確かにお前さんらに屈折した感情を向けることはあるかもしれん。じゃがそれは本人らの態度次第で変わるものじゃ。敵対的な感情を向けるものに友好的な感情を向けることはきついかもしれぬが、歩み寄ってはくれぬかの？ もちろん万が一の時のため、エヴァにはわしの方から注意を促しておくが、過度なものをすれば反発する恐れがある。もし友好的に接しようという気があるのであればそれらは余計なものにしかならんからな。どうしてもということであれば、わしも手を打つが、ここは一つ、エヴァに付き合ってみてはくれんかの？」

理解ある老人らしく振る舞う姿に嘘は見当たらず、語る長口上にも理があり、思わずうなずきそうになるだけの論理がある。余程闇の福音に敵意をもたない限りは、まあ、少しぐらいなら、と思わせら

れるだろう。しかし、猜疑心に塗れた僕は言葉の裏を探り当てることと執心している。鼻からこういう相手を信用する気がないのだ。真面目に聞く方がばかっている。

「……………その友好のために幾度か杖を交わす羽目になっても、ですか？」

「そうは――」

「いや、もう腹芸はやめましょう。そんなのは、僕とあなた間には不要だ。無駄なやり取りでしかない」

そしてバツサリと切り捨てた僕に学園長は押し黙った。何か言い出さないうちに僕はつらつらと自分なりの見解を述べる。

「あなたが、闇の福音と仲良くさせたい、その意図は窺えました。最初は闇の福音と仲良くさせ、僕を排除する口実でも作ろうとしているのかとも思いました。しかし、僕があなたの弱みも握っている以上その可能性は低い。もちろん、僕の全面的な非を打ち出して、僕の言論を封殺するという手もありますが、僕のバックにアリアドネーがいる以上、それは悪手でしかない。ならば、一体あなたは何がしたいのか？ 元老院が無力化された闇の福音を容認していることがどう絡んでくるのかについてもお話お伺いしたいですね」

学園長はわずかに呻きのような声で喉を鳴らした。

僕はそれを黙って見つめる。

しばらく下を向いていた学園長であったが、やがて観念したのか、表情を引き締めて前を向きなおした。

「……………わかった。これは君にもかかわる問題じゃからの……………できれば無関係でいてもらいたかったが……………そこまで物事が見渡せてしまえるのなら隠していても不快なだけじゃろっ」

「……………」

着飾る言葉に意味などない。この後に及んでいい人ぶろつとする学園長の姿勢がひどく醜く思えた。

表面に出てくる言葉だけ見れば、そこまで醜くは思えない。いや、耳に入る言葉だけ聞けば、ただの善人だろう。だけど、言葉の裏ばかり読み取る僕には歪で醜いと思えない。裏で姦計を巡らしているくせに、今さら何を言っただがる、と。

しかし、何より、そんな風にしか人を見れない自分が、同時にひどく醜く思えた。

人の善意を何故無条件に信じてやれないのか。

それはもしかしたら、人の本質を突いているのかもしれないけど。

そんなところしか見られない自分がひどく汚く思えた。

「どこから切り出したらいいものか………わしらの上部組織、メガロメセンブリア元老院がアリナ君を疎ましく思っていることは？」

「……知ってる」

「その程度をアリナ君はどれぐらいで受け止めておる」

「隙あらば暗殺したい、と思うぐらいには」

即答する僕に何処となく学園長は困惑気味だ。

「………そこまでわかっておって何故、この麻帆良学園に潜り込んできたのか、わたしにはわからないのじゃが………」

「暗殺したい、と思ったからといって、暗殺が実行されるとは限らないでしょう。元老院の意向が直接には届かないところでなら、どんな形であれ、その場所は、元老院による暗殺を留める防波堤になるだろうとは思っていました」

「そうか……………ならば凶らずもわしは、アリナ君の思惑通り動いてるわけじゃ」

諦めたように嘆息する学園長。顔による皺は萎びており、老いを感じさせるには十分で、心なしか学園長を小さく見せた。

……………何故、罪悪感が湧いているんだろうな、同情の余地などないっていうのに。

「わしはの……………アリナ君。アリナ君を暗殺できない状況に持っていきたい、と考えておる。暗殺しない状況、ではなくな」

「……………なるほど。暗殺の指示が下った時点で貴方にとっては受けるにしろ受けないにせよ、あるいは暗殺が成功するにせよ、失敗するにせよ、かなりまずい状況に追い込まれますからね」

「……………なにより、暗殺などさせるわけにはいかん。アリナ君の

ことは、あのたぬ……お前さんの祖父からもよくよく頼まれているからの。君の爺さんからは頭を下げてまで頼まれた。その親友として、そして何より君の様な子供にそのような命の危険に晒しては、一生の恥じゃ」

僕は何も言わずにただ視線を逸らした。

どうせ保身のためだろうな、と腐る自分に嫌気が差す一方で、この期に及んでまだ綺麗ぶろうとする学園長を怒鳴り散らしたくもあり、感情を抑えるので精いっぱいだったのだ。

「……………具体的な方策としては？ 闇の福音をどう絡ませるつもりですか」

どうにかして、感情を宥めすかし、不自然に押し殺した声で尋ねた。

「闇の福音が容認されとるのは、もちろん無力化されているということもあるがの、元老院の目論見としてネギ君に魔法を仕込んでほしい、というのがあるからじゃ。それとなくそう誘導するように言われてもおる。短期で鍛えろ、方法の一切は問わない、とな」

少し意外と言えば意外だったが、元老院の気性からすれば考えられなくもない話だった。元老院としてはなるべく早くに兄さんを英雄に仕立て上げたい、もしくはそのための種を蒔いておきたい、と言

ったところか。そのためなら、誰に師事しても構わない、そういうことか。元老院らしいといえばらしいやり方だ。

しかし、

「元老院からの、兄さんへの干渉は激しいですか？」

「……………うむ」

やはり、か。わかっていただけ、兄さんはもう完全に元老院の手の平で踊っている。魔法世界の学校へ行かなかったことは元老院影響下からの一時的な退避となるかとも思えたが、そうそう現実には甘くなかったようだ。まあ、当然か。畏にかかった獲物を逃がすような馬鹿ではないのだ、元老院は。国元の情勢からして兄さんが魔法世界に行けば当然、英雄の息子としてもてはやされるだろう。そうなってからでは、その称号にふさわしい実力をつけられない、と考慮した元老院の配慮もあるのかもしれない。そのための短期育成でもあるのだろう。

「どうするんですか？」

「ネギ君をエヴァに師事させることは本国の命がなくとも僕は賛成じゃ。来たるべき時のため、ネギ君には確かな実力と覚悟を身につけなければならぬ。それまでの時が短い以上エヴァに師事する以

外に方法はあるまい」

思わず失笑してしまった。確かにこの老人にはそうする以外手が打てないのはわかつている。しかし実際問題、無理だ。元老院は兄さんを精神的に追いつめる材料に事欠くことはない。それこそ、学園長がどのような策をなそうと元老院の掌の上から出ることはない。兄さんが元老院の掌から出る時があるとすれば、それは兄さん自身が破滅する時だ。

微塵も兄さんを顧みない僕の態度に学園長は思うところがあったのか、顔を僅かにしかめたが、何も言わなかった。

「……………それで？ どうやって暗殺できない状況を作り上げるんですか」

失笑の気配が尾を引くように漂った言葉で僕は先を促す。その素っ気なさこそ、まるで兄さんのことを気にしていない、僕の心の内を表わしていたが、学園長はわずかに息を吐いた程度で話を再開した。

「元老院が闇の福音を容認している理由は二つ。一つは闇の福音が無力化されていること。二つ目は、ネギに魔法を師事させることを望んでいるからじゃ……………この一つが崩れたら……………どうかの」

「……………そういうことですか」

ここでもうやく学園長の企図の全貌が見えた僕の声は非常に冷めたものだった。

「つまり、僕に強大な闇の福音の保護下に入れ、と。その上で、闇の福音を兄さんの師とさせることで闇の福音の立場を保障する。力のある闇の福音は恐ろしいが、英雄の息子を指南してくれるなら、と手が出せなくなる、そこに僕も一緒に潜り込めば、と。そういうことですか？」

「そうじゃ」

うなずいた学園長に、僕はこの程度だったか、と失望を禁じ得ない。

「見通しが甘いと言わざるをえません。恐ろしい闇の福音に大事に育ててきた英雄の息子が傷つけられたら、と暴発する可能性があります。まず、そこらへん、どうお考えで？」

半ば嘲るように言うと、神妙な顔をして学園長は首肯した。

「そこも考えた。ただ恐ろしいだけなら、その可能性もあるじゃろうて。彼らはエヴァを知らんわけだから。しかし、その関係を利用するという線で引いてしまえば。彼らの過度の警戒心は捨てられる。何

もわからぬから怖い。ならば彼らの慣れ親しんだ関係で結べば、少なくとも短慮に物理的手段を取らんじやろ」

「熟慮した上で物理的手段を取るということはありえますが」

言葉の揚げ足を取るようだが、それが現実だ。さらに言えば、学園長の謀は相手のアクションを不明確にさせてしまつ点僕にとつても危険なのだ。

「熟慮させぬよう、努力する。儂が責任を取る等言えば、ある程度は鎮められる、それぐらいの影響力はもっておるつもりじゃ」

「それが事実だとして。大体、闇の福音の力をどうやって取り戻させる気です？ 登校地獄を解呪したら、彼女を縛るものはこの地にはありませんよ？ 第一そんな力のある彼女にどうやって兄さんを師事させる気です？ 利害で関係を結ばせると言っていました、力を取り戻せば並大抵のことでは動くようには思えません」

「……………彼女を無力化させているのは、登校地獄ではない」

学園長は能面のような顔で言った。

「彼女が無力化しているのは、この麻帆良に張り巡らされている学

園結界に組み込まれている封印の方じゃ。それで彼女の魔力を吸い取っておる。それを解くことで彼女に魔力だけは取り戻させる。その代わり登校地獄は解かん」

でてきた事実思わず鼻で笑い、呆れてしまった。

「……………その封印結界、元老院の指示でしょう？ 責任問題になります。それに魔力を取り戻せば、彼女自身で登校地獄を解くということもあり得ますが」

「ネギ君が闇の福音に師事する間は責を問われることはないじゃろう。闇の福音とうまく付き合えておる儂を外せばどうなるかわかったもんじゃないからの」

希望的観測ではあるが、まあ、その通りか。闇の福音との折衝を十五年間務めてきたという実績だけでも、闇の福音に師事させたい元老院にとっては十分に価値のある存在だろう。ある意味兄さんを闇の福音へ任せる気になったのもこの老人の存在あつてのことかもしれない。

さらに突き詰めれば、このタヌキは関西の名家出身で、現在敵対状態にある関西呪術協会の長とも義理の親子関係。責を問われたとして、その役から外されることはないだろう。

「無茶しますね」

ほとほとあきれ返る。確かにこの老人を関東魔法協会の長から外すことは難しい。しかし、これから実行するであろう策の中でこの老人は、自らの地位を保ってきたそのアドバンテージを全て投げ出そうとしているのだ。暗殺の命が下るよりか、ましかもれないが、かなり大きな賭けだ。下手を打てば一気に解任にもなりかねない。

しかし、皮肉であるのが、ここまで舞台裏で策を振るつたとして、この老人は決してその策の中心にはいないということだ。これから考えられる事態の中、元老院は、英雄の息子の滞在中に関西呪術協会との仲を拗らせるのはまずい、だからこの老人は外せないと考えらるだろう。しかし、そこで天秤に架けられるのは、この老人を外すことで考えられるメリット、すなわち学園長の後任を本国から送ること、英雄の息子への影響を強めることであるのだ。さすがに後者を選択することは学園の管理問題の面や、旧世界魔法組織による直接介入へのデメリットなどであり得ないが、いつも前提に考えられているのは“英雄の息子”だ。

“英雄の息子がいるから”、彼らはそのこと前提に考えている。決して学園長の権威などを考えずに、だ。

そういう意味、“英雄の息子”の一番の被害者はこの老人なのかもしれない、そんなことをふと思った。

「……………それでアリナ君に頼みたいことがあるんじゃない」

「……………なんですか？」

度重なる不運に同情の気持ちがあつたのだろうか、幾分か口について出た言葉は柔らかいものだった。

「今回の策、やるのなら確実にネギ君をエヴァに師事させなくてはならぬ。そのカードとして、僕は学園結界の魔力封印の解除を切るつもりじゃ」

「策を実行できて、闇の福音の譲歩も引き出せる、悪くはないですね」

「……………じゃが、これはエヴァの背中を後押しさせるものであつて、エヴァに決断を踏み切らせるようなものでもない。第一アレは、利益があるからといって僕の頼みを聞くような女じゃない。ネギ君から頼まなければ、ネギ君を師事させることなどないじゃろう」

「……………まさか意識誘導しろと言つわけではありませんよね？」

いくら向こうにそれなりの配慮をしなくちゃいけないからといってこちらがそんなことにまで協力する謂れなどない。もちろんこうし

て聞かせているということ、僕にも何らかの行動を求めているのはわかっていたが、メリットがない以上は動く気はない。

なまじこの老人に情が湧いていたせいか、言葉には少し陰がこもっていた。

「それは儂の方でやる、いくつか考えもあるしの。じゃから儂がお願いするのは別のことじゃ」

「……………それは？」

「エヴァにかかっている、登校地獄を解くことを約束してやってくれ」

瞬間、学園長のお願ひに対する様々な考えが頭の中を巡った。解くことを約束、とはなんとも曖昧な言い方だ。解け、とは言われていないそこはかとなく含みを感じる。それに、解くことを約束とは……………まるでエヴァにとっては十五年前のナギ・スプリングフィールドの再現ではないか。それを彼女がどう思うのか……………いや、これは邪推のしすぎか。策には関係ないだろう。

「……………このことは儂と君、双方の利益になる。儂はその約束で、きれるカードは増えるわけだし、より確実に暗殺できない状況にもっていきやすくなる。君とて暗殺の危険は減らしたいじゃろう。そ

の点は双方の共通利益じゃと考える。その交渉をすることで、僕はアリナ君が闇の福音の保護下に入ったと本国に報告できるわけじゃない。アリナ君はその交渉の対価に六百年生きた闇の福音に対して、彼女しか持っていないような魔法具を要求すればいい。貸し借りを気にする彼女ならきつと聞いてくれるじゃろう」

こちらのメリットも十分にあるか。難点があるとすれば、その登校地獄がどれだけ強力なものか、ということと、

「……………闇の福音の此方に対する敵対感情はどうします？ それにあなたが言うメリットは彼女が、父親がかけた魔法なら子が解いて当然だ、という見解を取れば成立しなくなりますよ？」
スタンス

学園長の提示するメリットが不確定であるという点だ。まあ、もちろん？ 僕には真祖の研究、と言う目論見があるのだから、それに乗れるような策に賛成することはこちらにメリットになるわけだが。

「エヴァの敵対感情については、ネギ君の意識誘導と併せて行うことを考えておる。彼女が少なからず友好的になれば、彼女の持つ魔法具の研究ぐらいはさせてもらえるじゃろう。六百年生きておるのじゃ、決して狭量な器ではない。それに闇の福音と仲良くなっておくというのも、一つの利益になると思うぞ」

「メリットが少ないですね。暗殺ができない状況と言うのは僕にとっても歓迎すべきですが、あなたから頼んできたのですから、それ

に対するきちんとした報酬を用意すべきだ」

学園長の目に見えるメリットならない以上交渉ごとに置いて、それは取引材料とはなりえない。提案する側、頼んでくる側が下なのだ、ということ忘れてもらっては困るのだ。

「……………世界樹だけでは足りんのか」

「図書館島の禁書の閲覧許可をお願いします」

「わし確信した。アリナ君は羊の皮被った追い剥ぎじゃ」

「滑稽な例えですね。防御力も低そうだ。それで答えは」

「……………許可しようっ！」

ここまで徹底していると気持ちが良いわい、そう言わんばかりに、語尾を勢いよく切り、漢気溢れる英断を下した。若干自棄交じりだったのは気のせいだろう。

「取引成立、ですね」

にやりと笑い、手を差し出す。

学園長の顔はその年齢とは思えないほど爽やかな笑みを浮かべてその手をはたき落した。

さしも僕も、予想だにしない攻撃に思わず、イタツ、と声を漏らす。しかしそこでわずかに違和感を感じた。視線を落とすと、そこには一枚のカードが握られていて、それを裏返すと、『麻帆良学園附属図書館島・深部探索許可証』の文字とともに、僕の名前が刻まれていた。

思わず視線を挙げれば、そこには悪戯に成功したような顔をする学園長の顔が。

ちよつとイラッとした僕は間違っていない。

「取引成立、じゃの」

この爺、これを用意していたということは、元から渡す気だったのか……………だとしたらとんだ食わせものだ……………いやこんな子供みたいなことをする爺がそこまで考えているわけない。おおまか、僕の交渉材料として前に用意したものが残っていたのだろう。

「はあ……………もういいです。それで策の実行はいつごろ？」

場の空気を切り替えるように話に移ると学園長もすぐに表情を切り替えた。

「遠からぬうち、エヴァはお前さんたちに対してアクションを起こすはずじゃ。そのときに同時並行で進めよう。エヴァに動きがあればすぐに知らせる」

知らせがあるのはありがたい。こちらもちちらで自身の目論見のために準備しなくてはいけないからね。元老院の掌の上の学園長の掌の上という狭い舞台ではあるが、せいぜい、僕を逃がさないようにしっかりと掌を開くことだ。もっとも僕はそんな狭い舞台に収まりきるような下手なダンスは踊らないけど。

そうして僕と学園長は連絡先を交換し合って長い夜を終えた。

~~~~~最後に交わされた会話~~~~~

「学園長」

「ん、なんじゃね？」

「……………何故、あなたはそこまでするんですか？ 今回の策、どう考えても、あなたの立場が危うくなる。もちろんある程度は安定するでしょうが、僕たちがここを去った後のことまで視野に入れれば、下策だ。闇の福音を縛り付けるものもなくなり、野に放してしまっわけだから。そのときこそ、あなたは責を問われる。そんなことわかっていてでしょう？」

「それについても儼に考えがある。心配することはない」

「……………」

「……………ん？」

「……………あなたも、そこまで英雄の息子が、大事ですか？」

「大事じゃよ？ 大事に決まっとる。老いぼれとして、子供を気にかけるのは当然じゃからの」

「……………そう、ですか」

## 中心にはられない者たちの戦い（後書き）

明日、っていうか今日から北海道行くのに一体何やってんだろ……  
……次の更新は一週間後くらいです。本当は四日後くらいにしたい  
んですけど北海道行くんでちょっと遅くなります。

今回はここまで長くならないはず………千雨篇の冒頭、たぶん義  
手作り終わって………からの話になります。

彼と彼女と始まりと終わりと（前書き）

意外と早く書けたんで、投稿。

これぐらいの文量なら三日で書けるな……………

さていよいよ千雨篇始動！

っていつてもまだ千雨出てこないわけですが！

本編にGO！

## 彼と彼女と始まりと終わりと

頭が痛い、この状況を端的に表すのなら、その一言に尽きた。

学園長と取引したその後、僕は興奮を自制しながら、取るものも取り敢えず、世界樹製義手の設計図を引いていた。いくら魔法具をつくることに優れた思考型魔法媒体アーティファクトがあろうが、制作する魔法具の設計図が頭に思い浮かんでいようが、これから日常的に付き合っていく魔法具をつくるのだ、そこは横着せずきちんと順序を辿るべき、と興奮に逸る気持ちを自制して万全を期していた。もちろん僕としては天啓のような閃きとそれに準ずる一過性の創作衝動に身を任せた逸品というのまた芸術的でいいとは思うのだが、さすがに自重した。別に日常に芸術はいらないのだ。

しかし、片手での線引きは予想外にきつく、親父が見かねて、紙を押さえてくれたりしていたのだが、思うように進まない作業は僕の衝動を頂に達するギリギリまで押し上げるには十分で、達することができそうできないもどかしさにかなり苛々していた。

結局それらの作業は、夜通し行われ、僕に付き合ってくれていた親父は四肢をテーブルに投げ出し、大の字になっていた。ちなみにその光景に桜咲さんは何を思ったのか、天井に突き出すようにぷつぷつと膨れているお腹を、人差し指でツンツンし、回数、十を超えたあたりで、親父にマジギレされたのは記憶に新しいところである。

しかし、親父は無職であるからして、朝でも寝ていられるけど、僕はそうもいかない。

しかも、朝は兄さんの代わり朝礼に出なければいけない。そのため出勤時間も早く、仮眠をとる時間さえ取れなかった僕は、不景気な顔を無理矢理引き締めて、学校に出てきていた。途中朝礼を仕切る新田先生が、兄さんが朝礼に出ていないことについて、僕に何やら言ってきたが、僕も言うべきことは言って後は適当にはぐらかしておいた。

あれは典型的に融通の利かない人だ。別に新田先生自身悪い人じゃないんだろうけど、正論ばりで僕に対するあてつけのようにぼやく姿はさらに僕の苛々を増長させた。

しかし、それが終われば、後は兄さんに授業を任せ、僕は流れに身を任せてればいい……………だけの話だった。

事が起こったのは、昼食の時間を終えた、昼休みのことだった。

職員室で昼食の時間から爆睡していた僕の耳に届いた、電子音。魔法による簡易の念話信号だ。この番号、というかこの連絡方法を教えている人間は限られる。それこそ昨日教えた学園長か、もしくは、

「（アリナ）」

「（……………マナちゃん？）」

瞼をこすって、眠気を飛ばし、体を起こして思わず身構えた。呼びかけられた声がどこかうんざりしたような響きが含まれていたこともそうだが、この連絡方法を使うこと自体、緊急の意味合いが強いように思われたのだ。ましてやマナちゃんは用もなしに連絡を取るような人じゃないし、そうでなくても寮に帰れば会えるのだ。何か必要に迫られて、としか思えない。

「（……………急いで来てくれ、收拾がつかない）」

「（え、なに？ なにがあつたの？）」

「（……………惚れ薬だ。君の兄が惚れ薬飲んで、今、多数の女子に追いかけられている）」

絶句した。

一気に目が覚めた。

なんで、そんなご禁制の品が、とか、いやそもそも、なんでそんな状況に、とか色々と疑問が噴出したが、とりあえず念話を切った。

ブルルッ。

「（現実逃避は後にしてくれ）」

「（……………それ僕がフォローするの？）」

「（何なら私がフォローしてもいい。殺気立つ刹那のフォローを代わりにしてくれるならな）」

マナちゃんの声は何処か切実だった。それだけで、刹那さん今どれだけアブナイのが窺い知れるようだった。

「（行ってきます……………）」

しかし、それに答える僕の声も切実だ。そんな声の背後にある事情を慮ったのかどうか知らないが、

「（とりあえず近衛のフォローだけしてくれればいい、というか早くしてくれ）」

割とシビアな答えが返ってきた。僕の疲れた声を鑑みてとも、ただ単に早く桜咲さんから解放されたいようにも取れる。おそらく後者なんだろうと、すぐさま結びついてしまふあたり、マナちゃんに対する僕の評価が現れていようというものだ。

「（……………了解）」

僕はどうにも気のない返事を返して。

そして、冒頭に戻るというわけだ。

僕は惚れ薬の効果で2・Aの生徒に追いかけられてる兄さんを見て、心の底からため息をついた。本当に……………頭が痛い。

追いかけている女子の中に桜咲さんご執心の近衛木乃香の姿もあった。

惚れ薬とは認識操作の魔法のかかった比較的手軽な魔法薬であり、作用した本人を好意の呼び起こす認識対象として、周囲に錯覚させる効果を持つものである。

その効果のほどは、もちろん調合技術の善し悪しに関わることであるが、この場合はおそらく、元々兄さんに子供という愛嬌ありき、抱いていた親愛の情が、異性としての好意へ変換・強化された結果であると思われる。

兄さんにそこまで調合技術があるはずがないという確信からその結論に至ったわけだが、そうなってくると厄介になってくるのは、兄さんを追いかけるまでに至っていないだけで、実際兄さんを見た人に対し惚れ薬の効果が拡散している可能性があることだ。

兄さんを追いかけている人は余程近くで惚れ薬の効果の煽りを食らったか、兄さんに対して潜在的な好意が強かったかのどちらかだろう。そうでなければ、ここまで盲目的になるはずがない。

これらの人たちは顕著にその効果が出ているため、その認識を再度操作してやればいいだけだが、その効果が実際に行動にまで出ていない人たちへの対処が難しくなってくる。何せ表面上わからないのだからどうしようもない。普通に考えて、兄さんがつくったと思われる惚れ薬の効果は一時的なものだろうが、不自然であろうと発生した好意はその場限りで終わることなく、連鎖的に次の感情を引き起こす。

その二次的な効果の発生こそが認識操作魔法の中でも一番恐ろしい効果であり、ある意味ではその本塊であるのだ。実際仮面の学者騎士時代には、それら認識操作魔法を巧妙に複数回に分けて行使し、それらの効果のある程度レジストできる魔法使いを、二次的な効果

で操った犯罪者にも会ったことがある。

惚れ薬、と聞けば、大衆が想像できるような効果しかなく、浅く陳腐な魔法薬だと思われがちだが、実際はそんな生優しいものではないのだ。むしろ関係者から見た場合でも表面上の効果が二次的な効果の発生に蓋をしてしまうから、ある意味それを知る者からすればえげつないと言いたいようがない。

とはいえ、そんな考察にふけているばかりでは事態は何の解決にもならない。

とりあえずは、当初の予定通り近衛木乃香の惚れ薬の影響を完璧に除去することを優先し、その上で惚れ薬の拡散を防ぐことにした。兄さんのことは学園長に丸投げしよう。その方が後腐れなくて済む兄さんに直接干渉するのは面倒になるに決まっているからね。もし学園長がこの件で僕と兄さんの仲を取り持とうというのなら、惚れ薬の危険性についてあの老人の耳に懇切丁寧に説明してやろう。

僕はそう自分を納得させると、逃げ回る兄さんの進路を先回りした。

「アスナさん助けてー！ーっ」

情けない悲鳴を上げながら、走り去っていく兄さんを廊下の角に身を潜めながらやり過ごし、それを追いかけてきた2-Aの生徒たち

の中から、近衛木乃香の姿を見定め、去ろうとするその背中に思いっきり抱きついた。

しかし、助走をつけた近衛木乃香の勢いを削ぐことには成功したものの、身長差、あるいは魔力による身体強化をしていないことも相俟って、完全に止めることはできないでいた。むしろドンドン抱きついている僕ごと引きずっていつている。

「う、ちょ、ちょっと止まって、近衛さん」

「ネギく〜ん」

「く、仕方ない、な！」

止まる気配を見せない近衛さんに業を煮やした僕は、その場に留めようとする努力を諦め、逆にそのまま近衛さんが向かおうとしている方向に押し倒した。もちろんその際頭を庇う配慮は忘れない。とはいえ身体を床に強かに打ちつけたのだから、結構痛いと思うが、その方が僕には都合がいい。

うつむけに押し倒した近衛さんを仰向けにひっくり返し、顔を覗き込むと、ポヤツとしているもののその目は正気の色を取り戻していた。

「ふえ……………アリナ君？」

「うん、ちよつとごめんね」

僕は近衛さんの状態を確認すると、一応一言断りを入れ、懷に手を入れた。そして再び翻る手、その人差し指には中央にルビーがあしらわれた銀細工の指輪が嵌まっている。

僕が普段使用している魔法媒体だ。アーティファクトを出す暇もないような継ぎ目のない状況もあるために、仮面の騎士時代から愛用している。さらに言及すれば、あのアーティファクトは形状が物騒すぎる上、性能は如何せん、悪目立ちするのだ。

魔法秘匿の面からも大した不自然に思われないこの指輪は大変役に立っている。間違っても、包みに包くるんでいるとはいえ、性能が良いとはいえ、父の形見とはいえ！ あんなあからさまな杖を持ち歩くほど、分別がないつもりはない。

僕は人差し指を添えながら、嵌まった銀細工の指を近衛さんの額に当てる。金属のひやりとした肌触りに近衛さんはびっくりしたように顔を歪ませた。

そうした近衛さんの反応を意識の片隅で気遣いながらも、僕は術式

構成を頭に思い浮かべることに余念がない。

組み上げた、推敲した魔法に一つうなずき、僕は近衛さんの顔にゆつくりと顔を近づける。

「へ、あ、アリナ君？」

戸惑う彼女の反応に僕の意識はすでになく、瞼の裏には術式が？きつけられており、その蓋は閉じられている。

息を呑むような音がした。

僕はそのまま顔を近づけていき。

頬がすれちがった。

頬と頬が擦れ合うかすかな感触をわずかに照れ臭く思いながら、僕は近衛さんの耳朵にそっと息を落とした。

「導くは優しさへと誘う眠りの調べ、包む羽衣心地良かれど、その実示すは偽りの宴。安息へと貴方を攫う風は、ただただ微かな温もり与えよう。プラクテ・ビギ・ナル、清浄の歌・独唱」

唇から洩れる幽かな吐息に声を息づかせるように、そして言の葉を優しさで包みあげるように密やかに音を紡いだ。

呪文が紡がれるにつれ、近衛さんの目はトロン、と、瞼は重くなり、呪文の終端には意識を失くし、魔法の完成はその内に向かって解き放たれた。

この口語呪文は単純な術式構成の補助だけでなく、対象者への暗示をも兼ね備えている。呪文が暗示になるのは、旧世界の土着魔法に見られる特徴で、今回のものはそれをイメージして創った魔法だった。

ただやはりイメージだけでは補いきれない魔法知識の欠如があるのか、あまり効率の良い魔法ではなく、掛かり方には個人差があるのだが、今回はうまくいったようだった。

何回か指輪で近衛さんの額を弾き、掛かり方に満足した僕はホッと息をつく。うまくかからなかった場合、惚れ薬の影響を完全に除けた自信がなかったが、うまくいってくれて一安心した。

これで後は、自分のクラスの方をどうにかすれば、と体を起こすと。

視線、視線、視線。視線の束が僕と近衛さんに突き刺さっていた。

ここで、僕はようやく自分の状況を自覚した。裏的にも常識外の騒動に巻き込まれたために、つい僕自身を常識側に身を置き考えてしまったが、一般人レベルでは十分僕も非常識な行動をとっているのだ。

いや、むしろ惚れ薬の追いかけっことはおふざけだと解釈することもできる分、女の子にタツクルを仕掛けた僕の方が……………

状況からして仕方がないことだとわかっているのに、一般人の目線を気にしだした途端、無性に自責の念に駆られる。僕は一刻も早くここから逃げだしたい、そんな衝動に囚われた僕はしかし歯噛みする。

目の前には意識を失ったまま床に臥す近衛さんがいるのだ。

しかし、どうしろ、というのか、この状況。あのときは力づく以外で近衛さんを止める方法がなかった。しかし周りに、どう女子にタツクルを仕掛けた理由を述べたところで、裏を知らない人たちからはどうしても不自然なものになる。それに女子を押し倒しとして、注目を集める最中『いやゝ実はゝ』なんて言い訳しようものなら胡散臭い目が一様にして突き刺さってくる、そんな光景が目には浮かぶようだ。どれだけ白々しいのか、と自分でもつつこみを入れない。

くそ、…………… かくなる上は仕方がない。そもそも全部兄さんが原因なのだ。何故僕がそこまでその尻拭いに腐心しなければいけないのか。こちらにきてからストレスが著しい僕はそんな自己弁護をひねり出す。

どうやったところで、不自然さが出てしまふのなら、無理矢理考え出す必要もないだろう。

どうにでもなつてしまえ、と僕は思考を放棄した。

僕は床に横たわる近衛さんの膝の裏と背中に手を差しこむとそのまま持ち上げた。これ一般に言われるお姫様だっこである。

同時に認識障害の魔法をかける。これで僕が近衛さんをお姫様だっこしても周囲は不自然には感じられない。誤魔化す方法としてこれ程最上級のものはないだろう。できれば使いたくない、という忌避感があったのだが、この際は仕方がない、と判断した。そしてこんなことなら先にこうしておけばよかった、と後悔する。実際遠隔から解呪する方法もあっただろう。しかし僕は、惚れ薬影響を完全に除去するために万全を期するという理由もあったが、何より魔法バレを恐れて手段を選んではまった。その結果今まさに手段を選ばない状況に追い詰められているのだ。

しかし、もう過去のことを振り返ってばかりいても仕方がない。覆水、盆に返らず、だ。

勢いよく駆けだした。

目指すは自身が担当する2 - Aの教室。

もう八割がた自棄とその場の勢いで突っ切ってしまったているが、今の僕はそんなことを気にしている余裕はなかった。頭にあったのは、速やかな目標達成と、即時撤退の二つのみ。辻褃合わせは全部認識阻害魔法に頼る。ストレス加速中の僕に死角はなかった。

2 - Aのクラス表記が見えてくる。僕はブレーキでもかけるように足底を滑らせ、扉の前に止まると、これでもかというぐらいの勢いで扉を開け放った。

ダアアアンツ、という派手な音ともに登場した僕に、教室内の生徒たちの注意が一気に集まる。その中には何やら教室の隅の方で何やら肩を寄せ合っているマナちゃんと桜咲さんの姿もあったのだけけれど、その二人でさえ、口をうつすらと開けてポカン顔だ。もつともその反応の前に、こちらを警戒する表情が挟まれていたのだが、このときの僕はそれほど注意していなかった。ちなみに音がした途端、真っ先にこちらを注視したのが桜咲さんで陽動かと疑い、意識を散らせたのがマナちゃんだった。どうでもいいけど、二人の性格がよくあらわれていると思う。

しかし、なにはともあれ、僕の期待通り、皆の注目を集められたこ

とで、こちらもやりやすくなった。

近衛さんを抱く腕を抜き、僕は指輪を嵌めた左手を宙に差し出す。

当然、注目を集めていた僕の唐突な行動に自然と意識は左手に誘導された。

瞬間、にやりと笑い、僕は魔法を発動させる。

もちろん、こんな大人数の人の前で呪文を長々唱えているわけにもいけないので、無詠唱である。

魔法の効果自体は複雑なものでなく一種の鎮静剤のようなものである。惚れ薬により乱れた感情の波長を元のものに戻す。乱れていなければそれでよし、乱れていればそれはそれ、二次的な感情の発生もある程度は抑制してくれる。

これだけでは完全に惚れ薬の効果を除けたとは言い難いだろうが、元々強くは影響されていないはずなので、多分これで大丈夫だろう。

もちろん、一連の行動には認識阻害魔法をかけてあるのでその点は問題ない。

魔法をかけ終わると、自分の果たすべき責任は一応果たせた、ようやく一息つけるとばかりに壁に背を預けた。

そこで止まっていた教室の時間が動き出した。

「え、え……と？」

当然いきなりけたたましい音を立て現れた僕に疑問と戸惑いの雰囲気漂い始めるのだが、一仕事終えた後の何とも言えない倦怠感と状況へ諦観が混じった僕は意外にもすらすらと言葉が出た。

「ああ……………近衛さんとちょっと衝突してしまって……………それで気絶してしまったものですから、とりあえず急いでここに連れてきたんですが……………保健室に行くべきでしたね」

そこで近衛さん重さに堪えかねたとばかりにふらつく僕に桜咲さんがすっ飛んできた。

「お、お嬢様！？ アリナ先生、これはいったいどういう……………つ！？」

「ごめんなさい、としか言いようがないです。保健室に連れて行っ

てあげてくれませんか（惚れ薬の効果を完全に除去するための処置で意識を失わせる必要がありました。ですが後遺症その他諸々は何の支障もないことを保証します。昼休みが終わるころには意識も戻ると思いますよ？）」

表面上は取り繕い、念話で事情を説明する。いきなり頭に響いてきた声に桜咲さんは説明が終わった後も驚いたようだが、僕が首で促すと、「わ、わかりました」と軽く僕に頭を下げて、一瞬躊躇うような素振りを見せた後、僕から近衛さんを受け取り、教室を出て行った。

徹夜の疲れと事態の收拾の苦勞に今日何度目かのため息をつく。

クラスを見渡すと、未だ突然の事態についていけないのか、不自然に沈黙を保っていた。どうにもこのクラスには似合わないな、と思いかけ、すぐに自分のかけた沈静魔法が効いていることを思い出した。

まあ、認識阻害魔法も併せて使用していたので、大丈夫だとは思いますが、どうにも頭痛がひどくなってきた僕は早めに退去することに決めた。

「それじゃ、あの、僕も保健室に行ってきますんで、皆さんは次の授業の準備をして待っていてください」

そう、一言声をかけ、僕は教室を後にした。

僕はこのとき気づかなかった。

一人の少女がひどく堪えかねた表情をしていたことに。

そして後になって僕は思うのだ。

ああ、気付かなくてよかった、と。

彼と彼女と始まりと終わりと（後書き）

なんか前も言っただけがしますが、LOVE・辻斬り的にはオリ主よりネギ坊主だと思っただけですね。まあ得体のしれない力を持ったオリ主ならネギ坊主と見比べて純朴そうなネギ坊主を看過するかもしれないが・

そうして日は沈む（前書き）

スランプ……………です。

どうにも千雨への魔法バレまでの流れが自然にかけず、何回も頭ひねって構想を固めました。

元々一話のつもりで書いた話を長すぎるという理由で分割したので、後編については近いうちにUPします。

後編の最後千雨とようやく接触ですね……………

それでは本編どうぞ

そうして日は沈む

瞼を開ければ暗闇の底。

視界を彩るのは光に塗りつぶされた黒。何も見えないはずの色彩の中で踊ったのは残像のように存在感なく尾を引いた灰色の影だった。はつきりと視界の中心で捉えられずその端で人を茶化すようにまわりつく鬱陶しさに気をひかれ、奇妙な脱力感の中視線を巡らせば、その影は人の形をつくり、癪に障る動作で上下に伸び縮みさせながら、僕に言葉を送りこんだ。

「——お前、気持ち悪いな」

頭に直接雪崩れ込んでくるような感情・意思・言葉。吐き気に襲われたような嫌悪感が胸を詰まらせ、しかし動くこともできず僕は身を縮こませる。

キモチワルイナキモチワルイナキモチワルイナキモチワルイナキモ

チワルイナ

今まで視界の端で動くだけだった影たちが一斉に上下にその身を伸び縮みさせながら、輪唱のようにその声をリピートする。耳の穴をかつぱじって鼓膜に食い込んでくる音の鋭さに僕は声にもならない悲鳴をあげた。

それを楽しむかのように、影たちは歌う。

キモチワルイナキモチワルイナキモチワルイナキモチワルイナキモチワルイナ

「やだやだやだやだやだあ!!」

僕は拒絶の意思を言葉に乗せて、その歌声をかき消す様に、喚く、喚きたてる。

すると上下に伸び縮みして影たちは歌声の余韻を残してその動作をやめた。

しかし、ホッと息を吐く隙すら与えず、今度はより一段と弾みをつけて上下に蠢きだす。

ヤダ！ ヤダ！ ヤダ！ ヤダ！ ヤダ！ ヤダ！ ヤダ！  
！ ヤダ！

今度は僕の声のリピートし、そのリピートに感情を吹き込む。その感情は物を出した口に再び物を詰め込むような嘔吐感を催させた。

うずくまり、えづく僕に影は次第にその包囲を狭め、伸びる影は次第大きくなり、威圧感を増す。僕はただただその場に身を伏せた。

そして、その影が僕を囲む円を閉じようとした瞬間、

「！」

「っはあっ！」

僕は目を覚ました。

動悸が激しく息も切れ切れ。じつとりと体全体を這うようにして汗が伝い、身体を起こした拍子にはがれた掛布団にも汗を吸い取った後がある。背にしていた布団も同じように湿っているのだから、どれだけ僕が寝苦しい睡眠をとっていたか目に見えてわかった。

ちくちくするような頭痛にあてられて、思わず、と言った感じで僕は額に手をやる。寝起きで機嫌の悪い僕は鬱陶しく肌に絡む毛先に言い知れぬ苛立ちを覚えた。指先が湿りうねった前髪をかすめ、汗で額にしつこく張り付く髪を払いのける。そのまま消えない微妙な痛みを和らげるように指先で額をさするが、あまり効果はなかった。

夢見が悪かった、その名残なのか胸に何とも言えないもやもやが取り残されている。

キモチワルイ。今の状態を表すなら総じてこの一言に尽きた。

頭痛が脳天を刺し貫くような鋭いものに変わり、顔をしかめたが、徐々におさまりを見せ、息を整えていくうちに痛みも鈍くなっていた。

ホッと荒れた呼吸を一区切りするように大きく息を吐いた。

無造作にベッド周りで閉じられたカーテンを開け放つ。ローラーがカーテンレールを走る音が響くように鳴り、茜色に照らされた光が瞬間、視界を覆い潰し、きつく瞼が閉じられる。瞼の裏に刺す光が弱まるにつれ、和らぐ刺激を手をかざしながら、浮かびあったのは夕暮れの空を枠に収める窓を背にポカン、とこちらを眺めている少女の姿だった。

「あ、アリナ君、起きたん？」

硬直は一瞬、にぱっ、と人当たりのいい笑みを浮かべる近衛木乃香。

それに対して僕はただ瞼を瞬<sup>しばた</sup>かせるばかりだった。

「えっと、おはよう？ 近衛さん」

「おはようさん、アリナ君」

状況把握に手間取った僕が要領を得ない挨拶を返すも、近衛さんは特に気にした様子なくこちらに歩み寄りながら僕に合わせて挨拶してくれる。

「えっと、近衛さんはどうして……………あ」

質問しようとして、ようやく思い返し、状況が呑み込めてきたが、近衛さんは僕の逡巡に大した気に留めた様子なく、うゝん、と顎に指をあて首を傾げる。

「私もよう覚えてないんよ。気づいたら、保健室に寝かされとって起きて、保健室の先生おらんし、アリナ君隣で寝てたからほんとくのもなあ思てここで待ったんやけど、誰もこおへんし」

事件前後の記憶がないのか、真剣な様子で首を捻っている。今にも一回転ぐらいしそうな感じで。

まあ、僕としては好都合か。多少不自然に思われるかもしれないけど、下手に覚えていられるよりはいい。

しかし、そこに近衛さんがポンと手の平をグーで打って、納得したような表情を見せるから焦る。

「そういえば、なんかアリナ君の顔が近くにあって……………あつ、て……………ような気がするんよ!!」

何か思い出したのか急に顔を真っ赤にしてしまう。それを振り切るように首を振り掌を打った拳を握りしめ、勢いよく語尾を切る。

……………結構、近衛さんは初心なようだった。ある意味微笑ましさすら感じる子供っぽい仕草に僕は思わず笑みをこぼした。

「……………ふふん、近衛さん、顔が真っ赤だよ？　どうしたの、熱でもあるのかな？」

半ば確信しながらの僕の行動をなかなか悪辣。近衛さんの手を右手で引いてわずかに前のめりになったところ、身を乗り出して、近衛さんの顔に自分の顔を近づける。

あわあわと慌てる近衛さんの顔が大きくなっていく。僕はますます笑みを深めた。

額と額がコツン、と触れ合う、その手前近衛さんに軽く身体を押され、触れ合うはずだった額にデコピンを叩き込まれた。

「痛っ！」

大きく近くなっていた近衛さんの顔はデコピンされる前、ムツとした顔に変わっていた、それを直前視界に収め。

「まあ、だめやえ、お姉さんからかったら」

次に在ったのは、わずかに頬を上気させながらも、口をすぼめむくれた近衛さんだった。

「……………ばれた？」

「そんな得意げな顔されたらなあ」

若干トゲトゲしているのは、子供にからかわれて、恥ずかしかったことへの裏返しか。そんな彼女の妙なかわいらしさに、僕は子供っぽい稚氣を刺激されプンスカしてる近衛さんに悪戯っぽく舌をべー、と出して、応えた。

「……………ふふふ、アリナ君、懲りとらんみたいやえ」

しかしそんなちよつとした稚氣が身を滅ぼすこともある。

近衛さんは妖しい笑みを浮かべ、手をワキワキさせながらこちらとの距離を詰めてきた。

周りに纏う雰囲気は殺氣や威圧感とはまた違った重圧をともなっており、僕の背筋に寒氣が走った。

「ちよ、ちよつと待って、落ち着こう、一旦落ち着こうか」

若干調子に乗っていた僕は、その笑みに本能的な危険を嗅ぎ取り、冷静さを取り戻し、対象と距離をとりはじめる。しかし、いと悲しきかな。僕が座っていたのはベッドの上。退路はすでに断たれていた。

「待とう、もうちょっと広い視野で物事を見るのも大切だよ」

こんなとき頼れるのは、おのずと限られ、僕は、口八丁、勝手に回りだす口に任せて近衛さんを説得しようと試みる。

「へえ、広い視野で？」

一応答えてくれながら、近衛さんは距離を詰めることをやめない。なんて油断ならない奴だ。

「僕に触れようとしているのなら、やめたほうがいいってことだよ。見ての通り僕すっごい汗かいてるしさ！」

「ふふっ、大丈夫やえ、汗かいとらんとこる触るから」

「アブノーマルっっ!!」

僕の悲鳴とともに近衛さんは一気に距離を詰め、僕の足首を掴みあげ。

「それ、こちょこちょこちょっ」

僕の足裏に指を這わせてきたっ。五本の指はそれぞれ別に生き物であるかのように蠢き、僕の足裏を絶妙なさわり加減で撫でていく。その触感が五つも存在するのだ。まさかこんないたいたいけな少女がこんな拷問方法を持ち出してくるとは思ってもみなかった僕は、その場でのたくり身もだえした。

「ひ、ちょ、やめへえっえっは、ひゃひゃ、ひゃっつ」

声を漏らさんとする僕に対してますます攻勢を強める近衛さん。どうにか上半身を捻ってその猛攻から逃れようとするが、僕のささやかな反抗を嘲笑うかのように、ニッコニコしながら指を巧みに動かし、僕を弄んでいく。小指に対する集中砲火はないと思った。

「ふふふっ、反省したかえ？」

「はひっ、反省しました、だから、ちょほ！ やめ！」

「はいはい、じゃあ、おしまいっ」

そう言って、僕の足を離す近衛さん。

ようやく魔の手から逃れた僕は、ひっく、ひっく、と頬をひきつらせ、力なくベッドに横たわった。

気怠さが残る体にさらに追い打ちをかけられた僕は疲労を誤魔化すようにミノムシのようにベッドの上で丸まる。ちよつとしたからかいが発端で変に疲れた。まあ、向こうもからかい半分だったんだろうけど、物理的手段に訴えるのはずるいと思う。

「ふうあゝゝ、アリナ君いっぱい汗かいたる。ほら体こっちむけて」

「……………」

誰のせいだ、こんにやろう、と思ったが、素直に僕は体を近衛さんの方に向けた。寝そべった僕の額に近衛さんの手が伸び、近衛さんのものと思われるハンカチが汗を拭っていく。気休めではあったが、肌を伝う汗が拭われ、少なからず、気持ち悪さが消えた。

「うゝん、これは一回着替えんといかなあ」

多量に汗を含んだハンカチを保健室取りつきの洗面所で洗い流しながら、近衛さんは言った。

「ん？　そういえばアリナ君はなんで保健室で寝てたん？　もしかして私が何でここに寝かされとったのかも知ってる？」

ふと、思いついたように疑問を呈する近衛さん。

そういえばここに至って全く近衛さんに事情を説明していないことに気づいた僕は気を引き締めなおして、口を開いた。

「僕が寝ていたのは、単純に体調不良、みたいなものかな。最初は近衛さんに付き添って保健室に付き添ってただけなんだけどね、ちよつと具合悪くなつてきちゃつて」

実際の事情を不自然な内容にならぬよう整合してから、急場で取り繕った嘘八百を並び立てる。

「うーん、私が保健室に、運び込まれた？　のはなんでなん？　アリナ君の顔が近くにあつたんはなんとなく………夢かもしれへんけど覚えとる、でもそれだけや」

こちらに窺いたてるような表情に僕は惚れ薬の効果のあつた時間は記憶にないのだと察する。逆にそれがわずかにでも薄れた頭を打つた後のことは覚えているというわけだ。

「…………ごめんなさい。実は廊下で近衛さんと僕が衝突しちゃって。その拍子に近衛さん結構強く頭ぶつけちゃったんだ…………たぶん記憶があやふやなのはそのせいだと思う。僕の顔が近くにあったのは、そんな近衛さんの様子を見ようとしたときのことかな、たぶん。とにかくごめんなさい」

殊勝な態度で反省を見せつつも、近衛さんの様子をうかがう眼は光らせている。事情はあのとときクラスで話したものと大まか同じだ。

近衛さんは僕の言葉をそのまま鵜呑みにしたようで慌てて首を振った。

「いや、ええよ、ええよ。ぶつかったってことは私も注意してなかったってことやし。私も謝るえ。ホンマごめんなあ？」

「うーん、まあお互い様ってことにしよう。僕がここで寝てたのはそもそも、近衛さんとぶつかったのと関係ないしね。むしろそんなに強く頭ぶつけちゃったことの方が心配だよ……………まあ、保険医が付き添ってないってことは、そこまで大したことじゃないんだろうけど」

実際気絶するほどの勢いでぶつけた挙句記憶失ってたりなんたりしたら、即病院行くレベルの重傷だと思っただけ、近衛さんはそこらへん大らかなのか、そうやねえ、と相槌を打っただけだった。まあ、魔法で気を失っただけなので、それでも何の影響もないわけだが。

「……………それよか、アリナ君は大丈夫なん？ 具合悪くて寝とったって話やったけど、汗もえらいかいてるし、熱とかもあったりするんかなあ」

既視感覚える展開に僕はすぐさま訴えるように額を突き出したが、無情にも差し出されたのはパチン、と僕の額で快音響かせる手だった。特に気にした様子もなく、自分の額にもう片方の手をあて熱を比べる近衛さん。あれ、なんか僕の扱いぞんざいじゃない？

「熱はないみたいやなあ、でもアリナ君、まだ小さいし免疫力も弱いやろうから早く休んだ方がええと思う」

けれども心配するその顔は真剣そのもので。なんとなく、彼女を騙していることに罪悪感のような申し訳なさかが立った。

「ん。そういえばアリナ君はどこに住んどるん？ 私や明日菜がネギ君世話しとるみたいに、誰か2・Aの子の部屋にお世話になってるん？」

「あ、うん。マナちゃんと桜咲さんのところに住んでるよ」

別に問題ないか、と反射的に答えた当たり障りのないであろう回答

に近衛さんは虚を突かれたようだった。

「あ、せ、せつちゃんのところでお世話になつとるんやあ……………」  
ふん

そして、内心の動揺を覆い隠すように言葉を重ねるが、悩むような迷うような葛藤するような感情が表情に見え隠れしており、駆け引き、騙しあいに関しては百戦錬磨な僕には手に取るようにわかった。

「……………どしたの？」

「う、ううん。なんでもあれへんよ……………」

何かを言いかけ、ちよつと元気をなくしたかのように肩を落とす姿はあからさまに、何かあります、と言っているようなものだ。これは聞いた方が、踏み込んだ方がいいのか、と悩み、少し水を向けてみようか、と決心する最中、近衛さんも近衛さんで何やら、決意したような顔になり。

「も、もうすぐ暗くなるし、今日は帰るか。熱ないとはいえ、アリナ君の体調も心配やし……………せ、せつかくやから、せつちゃんの部屋まで送っていくえ！」

その迷いを振り切り決心した顔とはひどく不釣り合いな、傍からすれば、気軽な誘いを受けた。デートもかくや、という顔つきに僕は一瞬身構えたが、文脈のアクセントからして、意図が透けて見え、何より快気溢れるその純真な表情に、警戒するのも馬鹿馬鹿しい、と思った僕はひそかにため息をつき、かすかに感じる外からの視線のその先を仰ぎ見て、さらに深くため息をついた。

夕暮れの帰り道。長く伸びる影は二つ。足取り弾ませる度、揺れる影。足跡の縁取り方もまちまち、一つは小気味よく、一つ淡々と影は標<sup>しん</sup>をつけていく。

どうにも落ち着かないのか、さつきから近衛さんは拳動不審にせくせく体を揺らしている。隣で歩く僕は幾分か寛容な気持ちで、水を向けた。

「そっぴえば近衛さん、桜咲さんのこと、せつちゃんって呼んでたけどもしかして結構親しかったりするの？」

「……………うん、ちっちゃいころはよう遊んどってなあ……………幼馴染なんよ。こっち来てからは、あんまり仲良うはできてないから、私としては昔みたいになりたいんやけど」

何処か寂しそうに物憂げな横顔を夕日で紅く染めながら僕に見せる近衛さん。図らずも情緒感たっぷりに助長されたその横顔にさしも僕も目を引かれた。切なそうな表情は桜咲さんを思いやる思慮に溢れていた。

それだけに僕は解せない。桜咲さんも無碍にしているように思えなかったからだ。本人は近衛さん自身のことについては護衛を任されたとしか言及していなかったが、そのことを話す桜咲さんからは単にその職業意識に留まらない深い情念を感じていた。

だからこそ近衛さんと桜咲さんはそれなりに親しい関係なのだろう、と思って水を向けたわけだが、話を聞く限りどうにも井戸端話にとどまらない事情があるようだ。

ここで相談に乗ってズバツと解決できれば、それはそれで教師の鑑なのだろうが、いくらか余裕はできたとはいえ、未だ自分のことで精いっぱいな自分にそんな問題抱え込めるのか、甚だ疑問だ。それにこうして、僕を送ると言っているのは近衛さん自身、これをながしかのきっかけにしたいという前向きな一歩なのだろう。ならばその歩みに水を差すような真似はせず、ここは近衛さんを温かく見守るべきだろう。言い訳がましいようだが余計な首を突っ込んで変

に拗れさせたりでもしたら大変だ。

チラッと近衛さんを盗み見ても、聞いてほしそうな顔をしているわけではないので、余計な口をはさむのはよそう、そう判断した。

「ん、それはそうと、近衛さんなんて他人行儀な呼び方せんでもええよ。名前でごんでーな」

近衛さんもそれっきり話題を打ち切ったので、僕もそれに答えることにした。

「……………木乃香、さん？」

「うん、呼び捨てでもいいんやけど、まあそこらへんはええか」

とはいえ、いきなり下の名前で呼んでいいと言われ、戸惑ったのも事実だ。人と人の距離感の取り方についてはあんまりよくわかっていない僕には会って間もない人のファーストネームを呼ぶことに抵抗を感じたのだ。

しかし、と僕は認識を改める。先ほどの保健室でのやりとりから考えても近衛さん、いや木乃香さんはかなりフレンドリーな性格をしている。そういった対人関係に関してもかなり気軽な人物なのだろう。

う。もちろん、先ほどの保健室での一幕は少なからず、僕が打ち解けた態度を取ったことにも起因するのだろうが、そういう態度をとれた、引き出せた理由に木乃香さんのもつ温和な雰囲気があるのだろう。

人の残酷さを知らないからこそ持ちえる資質だ。何かに裏切られたことがないから、そうも容易く人を信じ、懐に入れることができる。そんな考えに直結する僕はひどく一般の価値観とのズレがあるのだろう。それを矯正しよう、とは思わない。しかし、それに合わせるぐらいの努力はしたほうがいいのかもしれない。

彼女がやんごとない背景を持っている以上、いつまで純真なままでいられるのかについては疑問符が残る。しかし、それはもしかしたら麻帆良の様な環境では過ぎたるが心配なのだろう。そのための麻帆良であり、そのための彼女であるのだから。

できることなら、彼女にはこのままできてほしいものだ。自分にはないものを持ち続ける彼女に羨望のようなものを感じながら、心の中でひとりごちた。

「それにしても安心したわあ」

そんな僕の内心はさておき、木乃香さんは少しだけ嬉しそうな笑みを垣間見せた。

「なにが？」

「いや、だってなあ、アリナ君初日体調崩して休んでたし、皆の自己紹介の時もめっちゃテンパってたし。今日の朝礼も表情硬かったもん。那波さんとかいいんちよとかと話してたんやえ？ ちゃんと馴染めるかなあ、って」

想像の埒外だった。まさか自分にとっては知り合いもないこの異郷の地で自分のことを気にかけてくれている人がいるなんて思いもいたらなかったのだ。

「そう、なんだ……………」

「うん、心配しとったんやけどな。今日のアリナ君見て安心したわ」

驚き抜けきらない僕の顔を覗き込んでにぱっ、と笑った。

「すっごいマセとるもん」

うつうつり、と僕の額を人差し指でグリグリし、その手が下りたかと思えば、どれどれ、と僕の頬をふにふにと引っ張り始める。

「あほぶな！……………まっはく」

「あははは、アリナ君は、ネギ君とは違った意味で大人っぽいんや。なんていうんやろ、ネギ君が背伸びした子供なら、アリナ君は自然な大人っていうんかなあ……………不自然じゃないんよ。子供であることが自然な大人、みたいなの？　よう言っていることわからなってきたけど」

ニコニコ、楽しそうに笑う様子からは嘘は見受けられない。

「アリナ君も変に緊張せんで、ウチ相手した時みたいにしてみたらええんよ。みんなもそんなアリナ君歓迎してくれると思うで」

なんだか不思議な気分だった。

自分は一人ではない。そんな気がして、ポツと胸が温かくなった。

「……………そうかな」

なんだか前向きになれた。もちろん、緊張せずクラスの人たちと接することができるわけないだとか、現時点ではあまり親密に付き合わない方がいいとか打算的な考えも働いてたりしたが、今はそうい

うものに目を瞑っていたい気分だった。

はにかんだような照れ笑いが僕の頬に浮かぶ。

そやえ、と答える近衛さん。

二人の間で交わされた笑みは温かいもので。

やっぱり無理してでも義手を完成させてよかったなあ、と思った。



そうして日は沈む（後書き）

後夏休みは一月あるさあ……………

## 動き始める物語（前書き）

長い！！　とにかく長い！！

更新半月もしなかったのはエクシリアやってたからです、申し訳ないです。活動報告にエクシリアプレイの感想とプレイ中していた妄想をまとめましたのでよかったです。読んでやってください。ただしエクシリア終わった人だけで。妄想についてはあれですがネタバレがすごいことになってますので。タイトルで注意してるので大丈夫だと思いますが。

ようやく動き始めた…………… 今回の話の長さに途中何度か投げた…………… 最長です。一万七千文字くらい。

頑張って読んでください。それではほんぺんどうぞ

## 動き始める物語

あの惚れ薬騒動の後、僕は学園長に適当に部屋を都合してもらい、予定を押して義手を制作することにした。

あの騒動を通じて僕は危機感を覚えたのだ。来て三日と立たぬうちに、魔法バレ寸前、桜咲さんマジ斬<sup>キ</sup>れ寸前の騒動。普通は赴任早々だからこそ、僕のように裏の那辺の隠匿に対する備えや異郷の地であることの不安が表面に出て、より自重に自重を重ねた行動を取るはずなのだ。

ところが一転して、兄さんにはその自重の色が全く見受けられない。そういった配慮が抜け落ちているかのように、惚れ薬なんて使って騒動を起こしている。

確かに僕は桜咲さんに兄さんは魔法の秘匿意識が薄いかもしれない、と言ったし、結論、そう分析している。

だからと言って何故惚れ薬。

どこをどう間違ったら、そういう行動に移れるのだろうか。モテたかったのか？ やはりくしゃみで武装解除強制脱衣を発動させるのはそうい

うことなのか？ …………… 冷静に考えるのなら、なかなか馴染めないクラスに対して少しでも馴染めるよう好意をすり増したかったから、というのが妥当な動機だが、どうにも腑に落ちない。

まあ、百歩譲って経緯はいい。今後そういうことがないようにしてくれれば、それでいい。

しかし、それでも不安は尽きない。

この地に来てから、精神的に追いつめられることが多いせいか、どうにも居ても立つてもいられないような焦燥感にいつも背中を押されているような気分だった。さながら猛獣に追われているように。

右手がないという事実が、あの騒動（で生じた不安）を通して重く押し掛かってきた。

…………… 本来であるならこんな短絡的なことはしない。しかし、どうにも我慢できなかった。初日の自己紹介の締めや今日の騒動の後始末などで情緒不安定の気も出てきている。この不安を今逃がさなければ、という思いが先行し、結局僕は義手の制作を選んだのだった。

それに義手の制作と言っても、術式挿入のアーティファクトがある自分には、他の魔法具職人などと比べて、通す工程が格段に少なく、

手間もあまりかからない。極論、設計図さえ作ってしまえば、後は対象に術式を流せばいいだけなのだ。しかも、その術式出力すら、思考によって行われるものなので、繊細な魔法的感觉を前提とした職人技（術式出力）さえ必要ない。

世の魔法具職人が聞いたら泣きそうな話だ。そもそも設計図を引く学者、熟達した魔法感觉を駆使して職人、と大抵はこの二つの作業はその性質からして分業で行われるもののだが、僕のアーティファクトはそれら常識を覆す。全く学者が聞いても泣きそうな話だ。

細かな気配りさえもいらない。僕は右手の形をトレースした世界樹にアーティファクトの刃先を差し込み、設計図を思い浮かべるだけ。

そして、それと同調させるように、右手首の石化を解き、鮮度の保った傷断面に、義手と同調する術式を挿入していけば、それで完成だ。

驚くほど呆気ない作業。まあ、設計図が完成した時点で僕にとって義手はもうほとんど完成しているも同然だったのだ。安易に作ることを考えたのも、それに対する抵抗がなかったのも、そのことに絶対の確信があったからである。

とはいえ、義手を接続させた時点で、自分の身体に刻まれた術式の恒常的消費魔力量に加え、更に跳ね上がり、前日までの疲労も祟って、卒倒するように保健室で眠りに落ちたのはいささか不本意なこ

とはあった。義手の調子確かめるべくもなく、また自室に戻れもしなかったからである。ついでに保健室で眠ったのは、わずかながらに残っていた理性が、寝ても不自然ではない場所に足を誘導したからであり、決してベッドの柔らかさに誘惑されたわけではないことも追述しておく。

しかし、結果として僕はそれが正解だったと思っている。

自由に動く義手の存在は僕に途方もない安心感、充足感を与え、精神的にも余裕が持てるようになったのだ。

それが、起きた後の木乃香さんのやり取りに影響を与えることになったのだ、と思う。

そしてそのせいか僕は上機嫌だった。

クラス内に素を出せる相手が出来たというのがまず大きく、自分の素が認められたというのも小さくはない。“仮面の学者騎士”時代も十二分に個性を発揮してきたつもりだが、いかんせん仮面越しのコミュニケーションである。それが仮面を脱いだ後も受け入れられるかどうかの確証などあるはずもなしに。

色々な意味で木乃香さんの存在は大きかった。その相手が関西呪術協会長の娘だということに引く掛かりを覚えなくてもなかったが、

それ……ただであつた。

当初の思考、目算などは既に頭の外に追いやられてしまつていて。

だからこそ。

木乃香さんと桜咲さんの仲立ちをしたいと思つてしまったのは。

僕にとって大きな失敗だつたのかもしれない――

僕は女子寮の部屋が近づくにつれ、失望の色が這い寄ってくるのを感じた。それは期待に胸躍らせる木乃香さんが近く目的を果たせず抱くであろう失望を自己投影したものと、そんな木乃香さんの期待を裏切る桜咲さんへの失望が澱み混ぜりあつた複雑なモノだった。

今現在女子寮の部屋には桜咲さんはいない。

桜咲さんは今、僕ら二人が歩く位置より後方に護衛のつもりなのか尾行し続けているからだ。

おそらく、木乃香さんへの魔法バレを考慮しつつ、その脅威から守るため、それらの筋を通す裏の関係者としての影からの護衛ということになるのだろうが、それは護衛単体としての立場であって、桜咲さん自身の、すなわち木乃香さんの友人の立場としては、むしろ近くにおいて自然だ。関西の長も、二人の交友関係を知ってここに派遣したというのなら、友人として近くに寄り添いながら、護衛も兼ねるという期待もあつたはずだ。

それができていないのは、その友人関係において何らかの確執があるからなのか。

木乃香さんに自覚がないところを見るに、桜咲さんからの一方的なものともみるべきか。

護衛という職務を疎かにするぐらいなのだ、どうにも根が深そうだと歩みを進めるかたわら黙考に耽る僕は気づかなかった。近く浮かべるであろう木乃香さんの落胆の表情ばかり目先に浮かび、それを解決したい、と思う僕の感情が、冷静な思考を曇らせ、客観的に物事を見る視点を失わせていることに。

なまじ、その思考の鋭さだけは失われていなかっただけにたちが悪い。

僕の思考は邪推を重ねて、切れ味を増し、ズイズイ、と木乃香さんと桜咲さんの関係について斬りこみはじめたのだ。

それが間違っただけで、性急であったことになど気にも留めず。

物事が少しだけ上手く回り始めた分僕自身の気も焦っていたのかもしれなかった。

「あ、ここやよね、せっちゃんの部屋」

そうこう思考を巡らせているうちに、僕が居候している部屋の前まで来たようだった。木乃香さんが扉の前で立ち止まって、吐息の音が大袈裟にならない程度に小さく深呼吸している。緊張、しているのだろうか。部屋の中に、桜咲さんはいないというのに。

僕はついつい昏い目を後ろに向けてしまう。

自分にはどうにもできない、しかしどうにかできてしまう人間に、この様子を見てどう思うんだ、そう言わんばかりの眼差しを投げかけた。もちろん答えは返ってこなかったが。

「アリナ君？」

「あ、うつん、なんでもない」

木乃香さんの呼びかけに気を取り直し、僕は一応ピンポンをする。住んで二日三日と立たない居候の分際で、いきなり扉を開けるような真似は出来なかった。

「……………誰だい？」

ピンポンにこたえる、マナちゃんの声がして、僕は、

「アリナ。ちょっと連れがいるんだけど今、大丈夫？」

扉に寄って、確認する。この部屋に住まう二人は両方裏関係者で、部屋の中では表に対してさぞ秘匿意識が緩んでいるだろう。表の友達が頻繁に訪れるなら別だが、二人ともそんなに社交的には見えな  
いし。部屋の中ではそういったものに対し無防備である可能性が高い。

そのための確認。

つまり、表の人いるけど、大丈夫？ と暗に伝えているわけだ。

「ああ、別に立て込んでいるわけでもない大丈夫だ」

そう言ってガチャリ、とドアノブが回され、内側から扉が開く。そして当然開いたのはマナちゃん。寮だからかブレザーを脱ぎYシャツのボタンもいくつか外してラフな格好をしている。胸元から覗く谷間に一瞬戦慄したが、よくよく考えれば自分も同じような格好をしていることに気づき、閉口した。

木乃香さんは、あ、こんばんわと愛想よく振る舞いながらも、どこか取り乱した様子でマナちゃん越しに部屋を覗き見、桜咲さんが部屋にいないか確認しようとしている。

マナちゃんもそれを察したのか、

「ああ、刹那なら、まだ帰ってきてないぞ」

と肩をすくめて答えてあげていた。

「そうなん？　もう日も沈んでるっていうのに、心配やなあ……」

木乃香さんは桜咲さんを心配しながらも、がっかりしたような、ほつとしたような、複雑な表情を見せた。どうにも木乃香さん自身、桜咲さんとの間に気まずさを感じているみたいだ。それでも昔のように戻りたいという気持ちが強いからか、その表情は桜咲さん慮る心で飾られていたが。

「ふむ、そうだね。私からも注意しておこう。それより近衛は何の用で来たんだい？　桜咲に会いに来ただけか？」

「ん、そやそや。実はなアリナ君ちよつと体調悪いみたいで保健室で寝とつたん。熱はないようなんやけど、ほら初日も体調崩してたみたいだし、心配なつて一応付き添いで来たんよ」

「……………それはそれは」

真偽判断しかねると言った様子で反応するマナちゃんは事実どう反応していいかわからないのだろう。初日にしたってあれだし、徹夜してたことはマナちゃんも桜咲さんも知ってるからね。

「だから龍宮さんもそこらへん気イ遣ってあげたってなあ」

「ああ、わかった。昨夜は結構夜更かししてたみたいだしね。今日は早めに寝かせることにするよ」

「そうなん！？ もうアリナ君もまだ子供なんやから夜更かしなんてしたらいけんよ？」

薄々気づいてはいたが、木乃香さんは結構世話好きな人みただった。徹夜することが自分の子供の身体に負担をかけていることわかっていたから、それを改めて人に注意されるのは、理解しているだけに煩わしいとしか以前の僕なら思えなかっただろうが、今の僕は何故だか、反感もなく素直にその注意を聞いている。自分の非を認めている、というわけじゃなくて、もちろんそれもあるのだろうが、お姉さんぶろうとする木乃香さんの言うことを素直に聞いていると、居心地の良い気分になるからであった。仮面の下にすべて押し隠し独立独歩してきた僕が他人の指図を受けるとするのは、今までになかったことだが、そうしていると温かいものの膝の傍にいますように落ち着けた。

「うん、わかってる」

比較的柔らかな表情で頷いた僕に、木乃香さんは満足そうに、ん、とうなずくと、

「それじゃ、せっちゃんによろしくな」

と言い残して自分の部屋へと帰っていった。

その後ろ姿を見送って、僕は、姉がいたらああいう感じなのか、と思った。その刹那ネカネ姉さんのことを思い出し、兄さんがネカネ姉さんに抱く気持ちはあんなだったのか、と思いいたり、今さらどうしようもないことだが、気分が害された。

急に眉をひそめた僕に視界の端に映るマナちゃんはわずかに訝しげに首をかしげていた。

「……………どうしたんだい？」

「ううん、なんでも」

「？　そうか、まあ、早く入ろう。他の、騒がしい連中に見つかれば、めんどくさいからな」

扉を背にしながら、マナちゃんは、部屋に入るよう促す。まあ、あのシヨタの気がある人なんかに見つかったらめんどくさそうだなあ、と思いながら部屋の中に入った。

入るたび、毎度毎度、女の子特有の甘い臭気をするのはもはやご愛嬌というやつだ。

「おーう、アリナ、遅かったじゃねえか」

部屋に入った僕を迎えたのは、親父の気だるげ声だった。床に目を落とせばプランプラン、と前足を動かしながら、グツタリと横たわりくつろぐ黒オコジョの姿が。言っちゃなんだが、その体勢で動かなければ、死体がぬいぐるみにしか見えないシユールな光景だ。

「ああ、どうにも保健室でノックダウンしてたらしいね。まあ徹夜ずくであの騒動じゃ、同情するが」

マナちゃんが肩をすくめ、ベッドに腰をかける。

「騒動って……もしかしてあの糞ガキ関連か？」

ゴロン、と仰向けのまま、胡乱げな目を眇め、険悪な雰囲気醸し出しはじめる親父の空気の重さにわずかにマナちゃんが目を見張る。

「まあね。惚れ薬使ってなんか、一般人巻き込んで一騒動ってところ」

一瞬、親父と視線が交錯する。

その一瞬の内にあつた意思疎通は、視線を交わした二人以外の知るところではなく、唐突に重い空気を霧散させ瞼を閉じた親父に、流れについていけず、その推移を見守るだけだったマナちゃんは戸惑い、そして、その一瞬に在ったであろうことを察して、やれやれと嘆息した。

「……………どうやったらその短い時間でお互いわかりあえるのやら。実はこっそり念話でもしてるんじゃないだろうね」

「まさか。マナちゃんが僕ともっと親しくなればわかると思うよ?」

「フ、遠慮しとこう」

即答で鼻で笑って切り捨てられた。

「そりや残念」

別段も僕も気にすることなく、笑って受け流す。くだらない冗談にも似た戯言だ。戯言と言えど、少なからぬ本心を含んだものではあったが、大して気持ちを傾けたものではなかった。

部屋の隅から座布団を引っ張ってきて、親父の横つちよに置き、そこに腰を落着けたあたり、僕は義手の事を口に出そうとする。言葉にしようとする、湧き上がる歓喜にもいた興奮を抑えつけながら、僕はごくりと唾を嚥下し、知らず知らずのうちに身を乗り出していた。

「あ、それよりさ、実は――」

それは優れた魔法具が完成したことへの喜びであり、自由に動く義手が出来たことへの安心感もあった。

そして、これで迷惑をかけずに済むという安堵もあった。利き手がないというのは生活上大変なハンデを意味することを昨日今日と実感させられた。特に昨日の夕食なんかは箸も使えなければスプーンもフォークも使えず、桜咲さんやマナちゃんなどに一食事介助（あゝん）してもらっていたのだ。

しかも、この身体、術式処理の分、身体機能が劣化しており、消化

効率が非常に悪い。常用の魔法薬を料理に投与し、この年齢が食べるであろう食事量の倍を摂ってようやく、満足できるレベルなのだ。その量を他人に食べさせてもらうというのは、自分にとっても相手にとっても、相当な労苦であった。

実のところ、兄さんが起こす騒動だけでなく、この件も僕の義手制作を後押ししている。食事も満足できないというのは、正直かなりこたえた。気心知れているマナちゃんなら、まだあれだが、桜咲さんにも手伝わってもらってしまったのだ。マナちゃんなら、餡蜜でも奢れば十分だと割り切ることもできるが、桜咲さんは、別にそれほどの事、と謙遜し、引き下がってしまう分、何をして折り合いをつけていいかわからず、必要以上に申し訳なさがたってしまった。一方的に迷惑をかけてしまっている、という罪悪感が強く、そのことに急かされるようにして、完徹するほどの意欲をそそったのだ。

だから、義手が完成した以上、迷惑をかけることもない。

そのことを伝えることに安堵にも似たものを見出していた。

そして、そのことを言葉にして伝えようとした矢先、バン、と少し荒々しい音とともに扉が開け放たれた。

僕たちは、予兆もなく突然人が入ってきたことよりも、その音のけたたましさに驚き、扉の方に目を向けた。

「……………ずいぶん機嫌悪そうだな、刹那」

肩をそびやかし、荒い足取りで入ってきたのは桜咲さん。傍から見ても苛々しているのがわかる。

「……………別にそんなことはない」

ボソツと通りざまに呟き、携えていた真剣の入ったケースを立て掛け、不貞腐れた態度でベッドに膝を折り曲げ身体を倒し、目を細めて天井を見る。時折口惜しげに唇を噛みしめ立てた膝を揺すつているところを見るに、相当機嫌が悪いようだった。

一気に緊張した空気に、僕は助けを求めるように、マナちゃんに視線をやるが、マナちゃんはただ肩をすくめるだけで、何か動こうとする様子はない。

喜び勇んだ気持ちに釘を刺されるような形になって、僕は内心焦っていたのかもしれない。桜咲さんが不機嫌な理由を考えるまでもなく、困惑した感情が紡ぐままに言葉を発してしまっていた。

「えっと……………どしたの？」

「……………どうしたこうしたも」

バンと、地に着いた足で床を叩き、生じた勢いをバネにして起き上がった桜咲さんの顔は険しく、寄った皺の影が強い負の感情を印象づけており、心なしか床を鳴らした音も妙に体の芯に響いてくる。そんな錯覚に囚われたのは、こうも明け透けに正面から負の感情を叩きつけられたからか。僕は桜咲さんの剣幕に思わずたじろいでしまった。

「大体なんなんですか、あの騒動は！？ 惚れ薬なんてご禁制の品を用いて、かくも堂々とあのような騒ぎを！！ あまつさえ魔法バレご法度のお嬢様まで巻き込んでアリナ先生の兄は一体何を考えているんですか！ 子供のいたずらで済まされるようなものじゃないっ、秘匿意識云々以前の問題だっっ！」

そうして発露したのは、烈火のごとく燃え盛る激情だった。触れるもの皆、灰蓋にせんと息巻き立ち上がる焰は近づくことを拒むくせして、こちらとの距離を焼き奪っていく。

「っ、そ、そうだね、本当に何を考えているのやら……………」

思わず下手に出てしまったのは、条件反射に近いものだった。

それを知ってか知らずか、桜咲さんはさらに言い募ってくる。

「そういう問題ではありません！！　そもそもあのような行為を平気でやる魔法関係者が一般人に対し教鞭を振るうなど言語道断！　惚れ薬騒動の後、先生を監視していましたが、反省の色に深刻さが見られないし、その自覚もないようだった！　正直言っており得ません！　あの子供先生はお嬢様と同室の部屋にいるんですよ！　いつ魔法バレを起こしてもおかしくないこの状況、私は長より賜っている任より、お嬢様の魔法バレを防がなくてはいけないというのにっ！」

「あ、でも学園長には報告しといたから何らかの処分は下ると思うけど……………」

唯々諾々とただ押し込まれ勢い負けしそうになりながらも、僕はおべっかを使うように桜咲さんに同調し、その矛先をかわそうとした。

「……………それで、お嬢様との同居を取り消せますか？」

雨粒落ちる、波紋幾多に広げる水面が途端打って変わったように静まりかえるような突然の転化。しかし静かな語勢とは裏腹、殺気だった空気だけが其処に残る場の不自然さは、嵐の前の静けさとも言おうか。爆発寸前まで高まった緊張の糸がピクピクと震えながら切れそうになっていた。

「それは………難しいかと」

そしてその糸が切って落とされたが最後、桜咲さんが秘める諸々の鬱屈した感情がパンドラの箱のように噴出する。

そんな予感があったものの、僕の頭は極めて現実的だった。

各個人の事情を知っている人間からすれば、どう見たって厄介の種を集めたようにしか思えない、悪手にしか思えないようなこの場合でもあの狸のことだ、何か期するところがあるに違いない。その狙いが何なのかは見えないが、この一件で揺らぐほどのものではないだろう。何も考えずしてあの二人の部屋に放り込んだというなら別かもしれないが、それはない、と断言できるくらいにはあのぬらりひょんは黒いと判別している。

そもそも処分ですら、兄さんの立場からして下るかどうか微妙なのだ。本人に反省の色がないというのならより一層に。

だが、さすがにそれを許容しては、桜咲さんと同居する僕にまで火の粉が飛んできかねないし、何よりさきほど少しだけ親しくなれた木乃香さんのためにも、という理由も付随してそこらへんは尽力する所存つもりだった。

とはいえ、その成果を保証できるべくもないから、今は何を言って

も気休めにしかないだろう。しかしどう見たって機嫌がいいとは言えない桜咲さんを前にしては、そんな気休めも口について出ようというものだ。

「僕もなるべくフォローするから、さ」

桜咲さんのふしくれたった感情を少しでもなだめられるよう、誠意を込めた言葉を口にする。言葉にする以上はその努力はきちんとするつもりだ。先あった木乃香さんのためにという理由もあり、すくなくともこの言葉には打算は働いておらず、交じり気のない純粹な思いやりに満ちた言葉だった。

そのはずだった。

桜咲さんは眉尻を吊り上げ、決して善いとは言えない感情がそこには刻まれていた。

「フォロー？」

うすら寒い静かな言葉に、僕は眉を顰め、訝しく思いながらも肯定の意を込め、首を縦に振る。

「……………フォローですか？　いくら魔法薬の効果を打ち消すため

とはいえ、認識阻害していたとはいえ！ あんな大勢の前で魔法を使うことが、フォローですか！？ 魔法秘匿上、あなたの言う『フォロー』はどう考えたっていい方法とは言えない……………！ もつとやりようは他にもあったはずでしょう！」

振り叫ぶ声は大義を叫ぶも、目は私憤の光に燃えている。

奇しくも何の打算もなかった僕の言葉は桜咲さんの激情の撃鉄となった。

「そんなアリナ先生が、フォローするから、などと言ったところで、どうにも……………っ、むしろ迷惑だ！」

そして、冷静な僕は理解している。感情の行き場をもてあました桜咲さんが正論にかこつけて、僕に八つ当たりじみた幼稚な方法でそれを発散していることに。

こういうとき、“大人”ならば、むらむらとこの心に沸き立つものを抑えつけ、それを甘んじて受け入れるのだろうか。そんな他愛もないことを考えて、僕は苦笑する。どの道、僕は反論する気がないのだ。反論したとして、真面目に説教する気もなく、ただガス抜きしているだけの桜咲さんを論破したところで何の解決にもならないむしろますますヒートアップするだろう。

割り切るしかない、そう思いはするが、内心では理不尽な怒りに駆られてもいた。せめてもとそれを悟らせないため顔をうつむかせながらも視線を桜咲さんから離さないのは、僕の冷静すぎる理性に対するささやかな反抗なのかもしれない。

だって、こんなの理不尽すぎる。

そもそも、僕は失態を犯した兄の弟ではあるが、だからといって進んでその尻拭いをする義理などはないのだ。同じ課題を抱えている者同士、競争心をもてども、相手を気遣う以上の配慮など望むべくもなく、必要以上の手伝いはその試験の適正を問うものであり、そこで生じたトラブルの後始末などは課題を出している関東魔法協会がするべきだ。それが政治的事情などでうまく機能していないにして、兄と同じ課題に、実地訓練まで課せられている僕にその余裕を求めるのはいくらなんでも酷だ。

それをわざわざフォローしよう、と譲歩してやったのだ。

心ばかりのものではなく、実際にそのように働きかけようと。

しかも、そこに見出す利益もなく、善意で、何の見返りも必要とせず。

それを真っ向から拒絶された。しかも、憎らしいことに理屈を通し

た上で。こつちがまともに反論できないようにして、あてつけられる感情は理不尽の感が拭えず、またこれは八つ当たりだと理解するにたやすい桜咲さんの態度も、余計に反感を覚えた。

理屈で理性が抑えつけられている分、それでも芽吹く反感に僕は自らに潜む幼稚な心情に逃げていく。

どのような行動にも冷静な思考がついて回り、いつもどこかしら打算が影差す僕が真心から言えた言葉。どのような理由があろうとそれを否定されたことは大きく、僕の醜い面が噴出する。褒められたっていいはずだ、認められたっていいはずだ、打算の影がなかっただけ。言葉が僕の中ではさも偉いことのように感じられ、それを否定した桜咲さんへの恨みつらみが増す。

褒められたい、せめて僕を肯定する何かが欲しい、理解など求めぬ周囲の価値観に整合しない忌憚のない意思が膨れ上がっていく。

拙く自分を擁護する言葉が次々と溢れ出し、理性の歯止めを決壊させていく。別にそういうことを期待したんじゃないはずなのに、純粹な気持ちで放たれた言葉は、後から滲みだしてくる卑屈な思いに汚されいく。無垢な言葉は後から噴き出す思いに裏付けされて、汚い言葉へと変わった。

それでも口を開かなかったのは、理性で行動することが体に染みついていていたから。僕をある一定の枠内で律する何かはそれを表に出す

ことを嫌い、あくまで鋼鉄の規律を僕に守らせる。

徐々に徐々に高まる不満を努めて無視し、振り切れそうになる負の想念を必死に押さえつけていると、何が気に入らないのか癩癩起こした桜咲さんはますます言い募る。

「さもさからしげにネギ先生が魔法秘匿の意識が低いなどと言っていました。それはアリナ先生も同じだ！ さすがは兄弟ですね！」

しかし、放たれた言葉が悪かった。

一瞬で僕は沸騰せんばかりの怒りに頭に血がのぼり、それにあてられたように熱のこもった呼気が口から洩れる。本人からしてみればただの皮肉に過ぎなかったのだろうが、それは致命的なまでに僕の琴線に触れた。ぶち破った。

僕はキレた。

「へえ、それは、それは」

それでも唇が笑みを形作るのは、怒りを素直に表現しない屈折した僕の感情表現によるもの。その笑みは相手を叩き潰す悦楽に染まり

かけた狂気の一端を垣間見せているが、それは本人以外の知るところではない。しかし、不穏当なものを感じ取ることはできたのか、マナちゃんが目端で桜咲さんを諫めようと動くが、それよりも僕の口が開く方が一步早かった。

「うん、素直に僕の非を認めるよ、悪かった、ごめんなさい」

ペコリと軽く頭を下げる僕に自分が理不尽なことを言っているぐらの自覚はあったのか、当惑した様子の桜咲さん。しかし同時に妙な凄みを発している僕にすぐに反応できずに黙したまま。

でもさあ、と続ける僕の笑顔は確実に皮肉に歪んでいた。

「桜咲さんって木乃香さんの護衛だよね……………確かにあれは兄さんの責任だけど、そういうのから守るために護衛っているんじゃないの？」

「っ……………それは、」

「そもそも僕が木乃香さんと歩いているとき、後ろからなんかついてきてたけど、あれって護衛？ ああ、うん、そうだよ、あんなストーカー紛いのこと桜咲さんがするわけじゃないから護衛に決まっているよね。うんうん、そうだよ、納得。あんなに距離開いたらあの騒動から守ることもできなくて当然だよ、仕方ない仕方ない」

「っ、くっ」

自らの不甲斐なさを恥じてか、それを他人に指摘される情けなさからか、桜咲さんの顔は真っ赤に染まっている。しかしキツ、とこちらを睨みつける眼光は依然として鋭いままだ。むしろどんどん陰悪なものになっている気がする。

が、キレている僕はそんなこと気にするはずもなく。

「でもでも、護衛ってあんなに遠くからやってて、できるもんなの？　つーか普通もつと近くでやるよね。あ、そういえば、桜咲さんと木乃香さんと幼馴染だったんだって？　結構親しかったみたいじゃない。友達だったら近くにすることも不自然じゃないんだから、そうやって護衛すればいいんじゃない？　遠くでやるのもいいかもしれないけど、近くでやるに越したことはないでしょ」

囁く僕は最高の笑顔で桜咲さんに接しているはずだ。こめかみをピクピクさせながら。

そして次の瞬間には落胆したように肩を落とす。こめかみをピクピクさせながら。

「ああ、でも無理か。なんかこつち来てから、あんまり仲良くできてないって、悲しそうな顔で木乃香さん言ってたしなあ。ねえねえ、なんで仲違いしてるの?」

最高の笑顔は無神経な言葉を最低に演出してくれる。

桜咲さんの怒髪天もかくやと言ったご様子で拳をプルプルと握りしめている。

「っていうかさ、木乃香さん仲直りしたがってんだから仲直りしてあげれば?」

普段の僕ならもう少し思慮深い対応をしたらだろう。

木乃香さんと桜咲さんとの間を仲立ちしたいと考えていたのは真実だ。しかし、それらの考えを僕は怒りから、意趣返し of 意で使ってしまった。仲直りしてほしいと思う本音を覗かせつつも、それを嘲笑うかのように何のためらいもなく言った。

桜咲さんが胸の内に秘めているであろう葛藤を踏み躪るようにいとも簡単に切り捨てた。

「――ざける、な」

「あ？」

「…………ふざけるな！！！ 貴様に一体何がわかるというんだ！  
！」

刃の切っ先をこちらに向けるような殺気を散らせ、鬼気迫る表情で――眉を寄せ、目を細め、唇を噛み、拳を引き絞り、様々な想いの欠片を滲ませ、振り絞り、叩きつける。

それに呼応するかのように僕のボルテージも上がり、さながら向けられた刃と打ち合わせるように、殺気をぶちまけた。

「…………わかるわけない！ そんな贅<sup>ズ</sup>沢な悩みが！！」

喉元につつかえていた本音<sup>ホネ</sup>が吐き出されるように音になった言葉はまさしく僕の心の底からの叫びだった。

わかるはずがない、理解できるはずがない。

必死になって前を向いて、重い足を引きずってようやく此処にたど

りついた僕が、何の努力もせず、後ろ向いているだけなのに人から歩み寄ってもらえるお前の贅沢な身の上なんて理解できるはずがない！

「桜咲さんがどんな悩み抱えてるか知らないけど！ それって木乃香さんを悲しませてまで悩むものなのか！！ 仲直りしたがつているんだから仲直りすればいいだろ！！」

先ほどの嘲りを含んだ軽薄な言葉はある意味、僕の心意をそのまま映すものであったのだ。

仲直りしたがつている、親しくなりたがつている。だったら仲直りすればいい、親しくなればいい。その難しさを知っている僕は、だからこそ簡単にそう思ったのだ。僕からすればそれだけのことなのだ。自分から求めたつて仲直りできるとは限らない、親しくなれるとは限らない。求めてたつてそれを表に出すことができないこともあるし、出したとしても親しくなることができないこともある。仮面を被る僕はいつだつてそれらに対して能動的だった。仮面を被るような奴と親しくしようという人間はいず、ある意味他のアプローチを拒んだその姿は僕の人間不信が招いた結果だったが、他人の僕には、ちょうどいい壁だった。その壁は僕の本心のコミュニケーションを妨げるものでもあったが、それでも自動的に調整してくれるその距離に満足していた。現在に至るまでのマナちゃんとの関係性などはその限りなのだろう。そんなことばかり続けてきた僕には、だからこそそれらに対して受動的に対応する側の人間の気持ちがないのだ。

ましてや、あどけなく純粹に仲直りしようとする健気な木乃香さんの本心など、僕から見たところで疑いようがないというのに。

それを前にした懸念など僕には些細なものにしか思えない。

それなのに、

「……………っ、わかった風な口を聞くな！」

桜咲さんは苦悶を滲ませながらも、聞く耳を持たない。

齒がゆくもどかしい思いが、怒りや憤りに転化していく。

「……………わかった風な口を聞くなとは……………」

しかし、まろび出たのは、失笑に近い何かだった。

よりもよって僕に向かってそんな口を叩くとは思ってもみなかったのだ。

「くだらない、くだらないな、本当に。何抱えてるんだか知らないけど、ホント、贅沢な悩みだよな」

だからだろうか、過去の経験による自負ともいすべき自意識が浮上した。苦い自嘲が声に帯び、顔がゆがむ。それはおおそ、子供の顔つきには似合わない深みを持つていたのだろう。舌鋒鋭く口に出そうとした桜咲さんすら束の間憤りを忘れさせ息を吞ませた。

僕はお前よりもつと苦渋を舐めてきているんだ、と歪んだ優越感に唇を曲げると、桜咲さんは詰めていた息を吐き、頬を紅潮させる。わかったような表情をみせつつも、口では容易く否定されるのだ。なおのこと癪に障ったのだろう。

「くだらない、だとつ、——」

しかし、彼女がその怒りに端を発する前に、僕の激情が炸裂した。

「くだらない、くだらないだろ！！ 人が、声かけてくれてんだよ！？ 何か知らんが負い目のあるあんたに！！ 自分から歩み寄らなくても、相手が歩み寄ってくれる、それが許されてるんだよ！？ それがどれだけ贅沢なことかわからないあんたはやっぱり恵まれてるんだよ！！」

「な、」

「恵まれてるやつの気持ちなんて知るか！ 恵まれてるやつが、恵まれてないやつ of 気持ちのことなんか知れるか！ くだらないことに囚われたままでも悩む自由、時間があるやつのことなんてわかるかよ、この贅沢ものが！！」

そうだ、僕は一步すら立ち止まることを許されなかった。ずっとずっと歩き続けてきたんだ。歩かなくても差し伸べられる手があるこいつの気持ちなんてわかるはずがない、そんなもの理解する必要すらない、僕にはそんなもの無価値としか思えない。

憎悪が全身から発散される。今まで背負ってきたもの、その歴史のすべてをここに開帳せんとばかりに放たれた感情の渦には、濃密な腐臭をかぐわせる生臭さと尖鋭的な敵愾心がそこに在った。

そのあまりの圧迫感に桜咲さんは圧倒され口を噤んだ。

僕は今にも食らいつきそう勢いでそれを睨みつけるだけだ。場には硬直した空気が残った。

ホッと誰かがつく吐息の音にその空気が緩む。発信源はマナちゃんだった。

「おい、アリナ」

ただそれに続く声は親父のもの。渋みのかかった声色はいつもより一層低く磨きがかかり、重くその場に押し掛かる。

そんな声響かせる親父に稚氣じみた反感から反射的に厳しい視線を向けるが、その直後浴びせかけられたのは、言葉ではなく――  
――冷たい水だった。

「ちよつと、頭冷やせ」

パシャツ、と液体が顔表面を撫ぜ、血が上り高まった熱を相殺するように冷たさが伝っていく。水の入り込んだ視界には、コップを持った親父の姿が確認できた。

「……………頭が冷えたところで聞きてえんだが……………お前、一体ここに何しに来た？」

言葉はかけられた水よりもはるかに冷たく、僕の頭に直撃する。茹だっていた熱が急速に冷める感覚と同時に血の気が引くような思いが胸中を駆け巡った。

「……………悪いのは誰だかわかってるよな」

「っ、親父が、そ、れを言うの？」

理性がその色を取り戻し、冷静な思考がよみがえり、誰に非があったのか、あくまで冷徹に断罪する。ただその結論を受け入れるかどうかは、僕の感情如何であり、せせこましい自己弁護が押さえつけられた理性の下から這い出すように噴出する。

納得なんてできるわけがない。言動が子供じみていて、稚拙だったのは認めるが、僕は悪くない。悪いのは大人げなく八つ当たりした桜咲さんだ。理性でもかろうじて納得できるそれに僕はさすがにするも、続く親父の言葉がそれを許さない。厳しく細められた親父の視線が僕の拙い言い訳を突き刺した。

「誰だか、わかってるよな？」

その一言で僕の言い訳は呆気なく崩れた。歯を食いしばり、ボソッとつぶやいた。

「ごめん……………なさい」

酷く不本意そうなそれと、思わぬ展開から自分に向けられた謝罪に

桜咲さんは戸惑いの色を隠せない。満足な返事も返すことができずただ視線を泳がせるだけだ。一瞬で場の中心に移った僕と親父の険悪なやり取りに巻き込まれたような印象を受けたのだろう。そもそも桜咲さんに向けられたとは思えない不誠実な謝り方だ。

返事に困っている桜咲さんに、親父は一言、場を切り替えるように言った。

「飯にするぞ、桜咲、マナが買ってきた惣菜が台所にあるからとって来い」

逃げるな、と暗に言われているようなものだった。事実、僕はその一言がなければ、すぐにでもこの部屋から出ていっただろう。釘を刺された僕は底知れぬ反感を抱きながらも歯噛みし、座り込むしかなかった。

何故親父がこんなことをするのか。思えば麻帆良に来てから親父は変だ。今まではこちらが鬱陶しいと思うくらいに、僕の行動をアドバイスもとい指図してきたというのに、ここにきてからすっかりそのなりを潜めている。今までのことを考えれば不思議なほどに干渉なのだ。僕が本当に困っているときは、何もしない、それどころか今のように突き放したりする。意味が分からなかった。

後になって僕はただ子供の様な我が儘で理解を拒んでいたことに気づく。せめて親父には自分を全肯定してほしい、そういう思いがあ

ったからなのだろう。そうしてはくれなかったから僕はこのとき親父を単純悪として決めつけた。

ただ理解を拒み、意味のわからないものと答えを出すことを諦めた僕は親父を敵視することで拳を膝に当て握りしめこのいたたまれない空気の中を耐え忍んだ。

カチャカチャ、と食器の擦過音やテーブルを引き出す音などが合唱する中僕は、何もせずに待った。食事が終わったらすぐにでも部屋を出ていくつもりだった。

「おい、アリナさつさと席つけ」

いつの間にか準備が終わっていたのだろう。視線すらあげずにいた僕にはわからなかったが、声につられて顔をあげるとすでに二人と一匹は席についてこちらを窺っていた。マナちゃんはその顔にいかなる感情も窺わせない仏頂面で、桜咲さんはどこかうしろめたそうにこちらを見ていた。

僕はのっそりと中腰で席の前まで移動する。

その間際桜咲さんが遠慮がちに口を開いた。

「あの……………食事手伝いましょうか」

「いい……………義手できたから」

お前なんぞに頼る必要はない、言外にそう言い捨てた僕はわずかに驚きを見せた親父やマナちゃんの反応にそういえば義手作ったこと言ってなかったな、と思い出す。まあ、どうでもいいか、と不貞腐れた僕は、皿の前に並べられた箸を手に取り黙って栄養補給を開始しようとする。

が。

箸を手にとった僕はポロリと一本テーブルの上に落つこととしてしまった。

……………箸はこっちに来る前にさんざん練習したはずだ。

箸に不慣れで、というのが原因ではない。

どこか焦りながらも結論を出した僕はもう一度箸を掴みなおす。が、  
またしても箸を開こうとしたところで指の間が箸が滑り落ちる。

「っ」

..... 義手の動作不良。今まですっかり忘れていたが、この義手の試験的運用はまだすませていなかった。帰りの道すがら、グーパーしてそこに感触があり、自由に動かせることに満足してそれを怠っていたのだ。

物を単純に掴むだけなら問題ない。だけど、指をそれぞれ別の方向に動かそうとすると動作がぎこちなく、力が上手く入らない。

術式上の問題はないだろう。とする接続した神経節が未だ義手との馴染みを見せていないことが原因か。しばらく動かせば問題はなくなると思うが.....

「あ、ス、スプーンとかフォークもつてきます」

そう言っただけで席を立つとする桜咲さんの態度に僕は泣きそうになった。

情けなかった。

どうしようもなく情けなくなったのだ。

僕は無言で席を立ち、踵を返し部屋から飛び出す。

背中にかけられる声を無視しながら僕はひた走った。

もう何を考えるのも面倒くさかった。

新月の儚い光がさながら舞台照明のように僕の周りを照らしたし、場を演出する。闇夜に浮かぶ光の中、舞うはわずかな塵埃。澄み切った空気の中に浮かび上がるそれはひどく僕の気に障り、光の中から追い出すように手を振るう。塵埃はその手を嘲笑うかのようにいなし、手からすり抜けていく。

女子寮中庭に生える木に背中をもたれさせ、年甲斐もなく憔悴した様子を見せる少年。その目充血しきっており、ひつくひくと時々鳴らすしゃっくりのような音は少年が先ほどまでしていた行為の名残だった。

少年は黒ずんだ手の甲で目元をぬぐう。汚くなったことにも気づかないその手で拭われた肌は同様に黒ずんでいく。

ただ一人つきり幕の上があったその舞台は寂寥感が漂うのみだった。

少年はふと自らの手に視線を向ける。

僅かにその瞼を伏せると、少年の手は樹でできた精巧な芸術品に変わった。ただそれが芸術品でないとするなら、その手が動いていることだろう。

少年はその手を拳を開き閉じを繰り返し、やがて顔を歪めてその手をもたれかかった樹に叩きつける。

こんな手壊れてしまえばかりに何度も何度も樹を地を空気を叩き、それでもその手は壊れない。

はあ、はあ、と荒い息をつくそんな少年に歩み寄る影が一つ。

それは一人の少女だった。

その少女はその顔を恐怖を浮かべながらも、隠しようのない猜疑心をもってその少年に近づいた。

少女はその行為の意味を聞き、直後自らの目で見たものが疑いようないものであると確認するなり、その恐怖の色を一層強めた。

それでも逃げなかったのは、少女の心の底に根付く諦めのせいだ。

こうして一人の少年と少女はその心を触れ合わせることになるのだった。

## 動き始める物語（後書き）

俺のせつちゃんがこんなに辻斬りなわけがない！　というわけぢやんとせつちゃんは反省してますよ。仲直りはこの章終わったら。仲直りも重要なフラグの一つです。後親父の態度については次の話せつちゃんside入れるんでそのときにも。

ではでは！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2831r/>

---

魔力の兄と術式の弟

2011年9月17日05時34分発行